

島本町文化財調査報告書 第43集

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第316集

三島郡島本町

# 尾山遺跡・御所池瓦窯跡

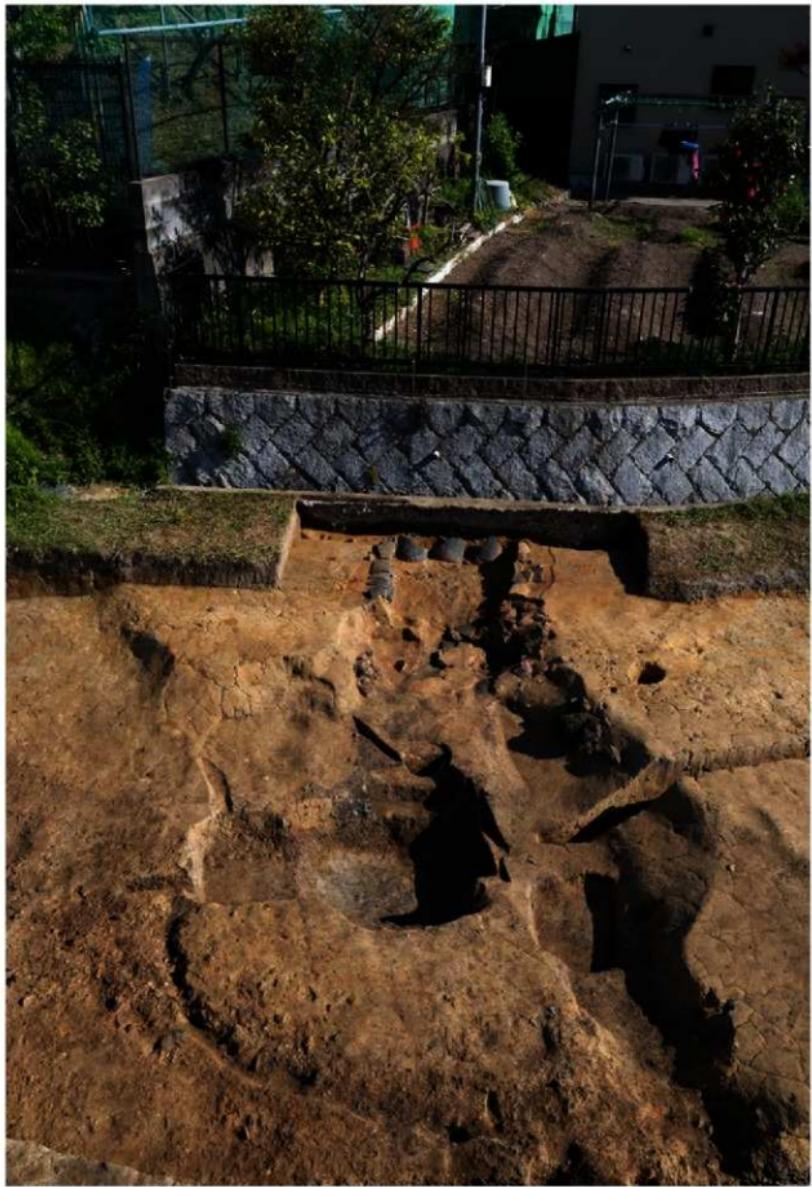
北部大阪都市計画事業 JR島本駅西土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

島本町教育委員会  
公益財団法人 大阪府文化財センター





1.2区 167 池泉第1面検出状況（南西から）



1. 11 区第 1 号窯第 2 面検出状況（南から）

# 序 文

本報告書は、令和2年度に実施した尾山遺跡・御所池瓦窯跡の埋蔵文化財調査成果をまとめたものです。

この埋蔵文化財調査は、約13haと広大な土地区画整理事業に伴うものであり発掘調査の面積も、約7,535m<sup>2</sup>と本町で実施した発掘調査の中でも最大のものとなりました。今回、埋蔵文化財調査を実施した範囲は、平成28年度以前は、埋蔵文化財包蔵地外でしたが、この土地区画整理事業に伴う平成29年度の試掘調査の成果によって、埋蔵文化財包蔵地「尾山遺跡」として新たに登録されたものです。発掘調査は、令和2年6月から令和3年4月まで約11か月間実施し、この調査の結果、多種多様な遺構・遺物が見つかりました。これらの様々な時代、種類の遺構・遺物を分析していくことにより、本町の歴史を多方面から解明することができる資料となるものと考えます。

また、当初は、尾山遺跡の発掘調査として開始しましたが、調査地西側において、飛鳥時代後期から奈良時代前期の瓦窯跡を発見しました。瓦窯跡を発見した場所の近くには、奈良時代の生産遺跡である埋蔵文化財包蔵地「御所池瓦窯跡」が存在し、今回発見した瓦窯跡も御所池瓦窯跡の一部の可能性が高いものと考えられます。そのため、調査後、大阪府教育委員会と協議し、発見した瓦窯跡周辺まで御所池瓦窯跡の範囲が拡張されることとなりました。そのため、本報告書は、尾山遺跡及び御所池瓦窯跡の発掘調査報告書として、その成果を報告するものです。

このような成果を得られましたのも、工事事業者、土地所有者の方々、そして調査地近隣及び関係諸機関の皆様の御理解と御協力をいただいたからこそ成し得たものです。改めてここに深く感謝しお礼を申し上げますとともに、本町の文化財保護行政に対し、今後とも、変わらぬ御支援を賜りますようお願い申し上げます。

令和4年5月31日

島本町教育委員会  
教育長 中村りか



## はしがき

遺跡が位置する三島郡島本町桜井は、京都と大阪を結ぶ旧山陽道沿いにあり、古くから交通の要衝でした。島本町では、旧石器時代から中世に至るまでさまざまな遺跡がみつかっており、桜井周辺の北摺山地の麓には古墳時代の群集墳が多数築造されています。

島本町桜井は、これまで水田や畠として長らく土地利用されてきましたが、このたび土地区画整理事業が計画され、当センターは島本町教育委員会と合同で発掘調査を実施しました。

尾山遺跡の発掘調査では、島本町では初めてとなる弥生時代や古墳時代の水田や、鎌倉時代から室町時代にかけての池泉・井戸・水田等が確認されました。また、御所池瓦窯跡の発掘調査では、飛鳥時代後期から奈良時代前期にかけて操業した瓦窯跡が1基検出されています。

今回の発掘調査では、当地における人々の生活や生産活動の歴史的変遷を考える上で多大な調査成果が得られており、島本町の歴史を繙く一助となれば幸いです。

最後になりましたが、JR島本駅西土地区画整理組合をはじめ、御指導と御協力を賜った大阪府教育庁、島本町教育委員会、並びに地元関係各位に深く感謝するとともに、今後とも当センターの事業につきまして、より一層の御理解と御支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

令和4年5月31日

公益財団法人 大阪府文化財センター

理事長 坂井秀弥



# 例　　言

1. 本書は三島郡島本町桜井二・三丁目に所在する尾山遺跡及び御所池瓦窯跡の発掘調査報告書である。島本町教育委員会の調査名は「O Y 20-1 尾山」、公益財団法人大阪府文化財センターの調査名は「尾山遺跡 20-1」である。
2. 調査は株式会社島田組の委託を受けた公益財団法人大阪府文化財センターが島本町教育委員会と合同で実施した。遺物整理作業及び本書の編集は公益財団法人大阪府文化財センターが行い、令和4年5月31日の本書の刊行をもって一連の事業を完了した。

【委託事業名称】北部大阪都市計画事業 J R 島本駅西土地区画整理事業に伴う尾山遺跡発掘調査

【委託契約期間】令和2年6月1日～令和4年5月31日

【現地調査期間】令和2年6月1日～令和3年4月16日

【遺物整理期間】令和3年4月19日～令和4年2月28日

【印刷製本期間】令和4年3月1日～令和4年5月31日

3. 現地調査及び遺物整理作業は以下の体制で実施した。

【島本町教育委員会】

〔令和2年度〕島本町教育委員会事務局 教育こども部 生涯学習課課長 奥野大介  
主査 木村友紀、久保直子、能勢麻由佳

〔令和3年度〕島本町教育委員会事務局 教育こども部 生涯学習課課長 安藤鎌吾 奥野大介  
主査 木村友紀、久保直子、賀納章雄

【公益財団法人大阪府文化財センター】

〔令和2年度〕事務局次長兼調整課長 岡本茂史、調査課長 岡戸哲紀  
調査課長補佐 佐伯博光、副主査 後川恵太郎

〔令和3年度〕事務局次長 市本芳三、調査課長 岡戸哲紀  
調査課長補佐 佐伯博光、副主査 後川恵太郎

4. 本書で使用した写真の内、遺物写真は中部調査事務所写真室が撮影した。
5. 本書の執筆・編集は後川が行った。
6. 現地調査・遺物整理に際し、以下の機関・個人より御協力・御指導・御教示をいただいた。

心から感謝を表したい（50音順、敬称略）

網仲也、諫早直人、石田由紀子、一瀬和夫、稻本悠一、井上謙郎、岩戸晶子、岩永玲、上村和直、上原真人、植山茂、梅本康広、大田祐貴、大野薫、大脇潔、桑原久男、木立雅朗、古閑正浩、小森俊寛、坂本俊、清水昭博、新尺雅弘、菅森義見、杉本裕、鈴木久史、田中龍一、田邊征夫、谷崎仁美、塚本敏夫、飛田範夫、中畔明日香、仲隆裕、中原計、西村恵洋、西山良平、花谷浩、浜中邦弘、浜中有紀、早川圭、林正憲、原祥子、原田憲二郎、原田早季子、原田昌浩、菱田哲郎、藤原学、光本大助、南孝雄、宮崎康雄、三好美穂、三好裕太郎、村野正景、森川実、矢野昌史、吉川純子、李銀眞、若杉智宏、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所

7. 大型植物遺体同定分析は古代の森研究会、花粉分析は文化財調査コンサルタント株式会社にそれぞれ委託し、第5章第2節・第3節に成果を掲載した。
8. 167 泉の樹木の樹種については鳥取大学地域学部地域学科中原計氏に御教示いただいた。
9. 石材については、鳥取大学農学部生命環境農学科菅森義見氏に御教示いただいた。
10. 本調査の記録及び出土遺物は島本町教育委員会に保管している。広く活用されることを希望する。

## 凡　　例

1. 基準高は、東京湾平均海面（T.P.）を使用する。使用単位はmを基準とする。図中の標高は、すべて東京湾平均海面（T.P.）からのプラス値で、T.P. 十は省略する。
2. 平面図の使用測地系は、世界測地系(測地成果2000)に準拠する平面直角座標系の第VI系を使用する。単位はすべてm（メートル）であり、図中の表記は省略する。
3. 遺構図の方針は、全て平面直角座標系に基づく座標北とする。
4. 発掘調査及び整理作業は、財團法人大阪府文化財センター 2010『遺跡調査基本マニュアル』に準拠して実施した。
5. 本書の土色表記は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2007 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所（現一般財團法人日本色彩研究所）色表監修に基づく。
6. 遺構名は、遺跡毎にアラビア数字の通し番号を付け、遺構の種類を加えた（例：1 土坑、2 溝）。平面図・遺構図では、アラビア数字の通し番号のみを表記し、遺構の種類は省略した。
7. 遺構図縮尺は、40分の1・80分の1を基本とし、紙面に合わせて適宜変更した。
8. 遺構図における断面図の計測位置は、平面図上に矢印で示した。
9. 遺物実測図の縮尺は4分の1を基本とする。実測図の断面は須恵器・陶磁器を黒塗りした。土師器皿の内、灯明皿は煤付着範囲をアミフェで表現した。また、遺物番号の横に白色土器は「白」、胎土が白色を呈すものには「白か」、黒色土器には「黒」、緑釉陶器には「緑」の文字を入れた。
10. 本書を作成するにあたって使用した土器編年は、以下の文献を引用及び参照した。  
大川清・鈴木公雄・工業善通編 1996『日本土器事典』  
大阪府立近つ飛鳥博物館 2006『年代のものさし—陶邑の須恵器一』  
川西宏幸 1978『円筒埴輪総論』『考古学雑誌』第64巻2号  
古代の土器研究会 1992『都城の土器集成』  
古代の土器研究会 1993『都城の土器集成II』  
古代の土器研究会 1994『都城の土器集成III』  
小森俊寛・上村憲章 1996『京都の都市遺跡から出土する土器の編年の研究』『研究紀要』第3号  
小森俊寛 2005『京から出土する土器の編年の研究』  
吹田直子 2006『山城地域』『古式土師器の年代学』  
田辺昭三 1981『須恵器大成』  
中世土器研究会編 1995『概説中世の土器・陶磁器』  
寺澤薰・森井直雄 1989『河内地域』『弥生土器の様式と編年近畿編I』  
森田克行 1990『摂津地域』『弥生土器の様式と編年近畿編II』  
森岡秀人 1990『山城地域』『弥生土器の様式と編年近畿編II』  
森岡秀人・武村忠洋 2006『摂津地域』『古式土師器の年代学』  
橋本久和 2018『概論瓦器検と中世社会』  
平尾政幸 2019『土師器再考』『洛史 研究紀要』第12号  
平安学園考古学クラブ 1966『陶邑古窯址群I』

# 目 次

巻頭図版

序文

はしがき

例言

凡例

目次

第1章 調査の経緯と経過 .....	1
第1節 調査に至る経緯 .....	1
第2節 現地調査の経過 .....	2
第2章 遺跡周辺の環境 .....	3
第1節 地理的環境 .....	3
第2節 歴史的環境 .....	3
第3章 調査・整理の方法 .....	7
第4章 調査成果 .....	9
第1節 基本層序 .....	9
第2節 遺構・遺物 .....	15
第5章 自然科学分析 .....	123
第1節 各種分析の概要と目的 .....	123
第2節 尾山遺跡における大型植物遺体同定分析 .....	123
第3節 尾山遺跡における花粉分析 .....	126
第6章 総括 .....	129
尾山遺跡・御所池瓦窯跡遺物観察表 .....	141
原色図版	
写真図版	
報告書抄録	
奥付	

## 挿図目次

図 1 調査位置	1	図 52 469 溝出土遺物 (6)	62
図 2 周辺地形	3	図 53 469 溝出土遺物 (7)	63
図 3 遺跡分布	5	図 54 469 溝出土遺物 (8)	64
図 4 地区割	8	図 55 469 溝出土遺物 (9)	65
図 5 柱状断面 (1)	10	図 56 11 区地層出土遺物	66
図 6 柱状断面 (2)	11	図 57 91 土坑他出土遺物	67
図 7 柱状断面 (3)	12	図 58 第3-2 b面平面、488 ピット他断面、出土遺物	68
図 8 1区4トレンチ断面	13	図 59 500 土坑出土遺物	69
図 9 第3-1 b面平面	15	図 60 御所池瓦窯跡第1号窯平面、模式、立地	71
図 10 第3-1 b面平面 (南側)	16	図 61 御所池瓦窯跡第1号窯第1面平面	72
図 11 1・2・6区第3-1 b面平面	17	図 62 御所池瓦窯跡第1号窯第2面平面	74
図 12 167 池泉平面、模式、立地	18	図 63 御所池瓦窯跡第1号窯第3面平面	76
図 13 167 池泉第1面平・断面	19	図 64 御所池瓦窯跡第1号窯断面 (1)	77
図 14 167 池泉内第1面遭構平・断・立面	21	図 65 御所池瓦窯跡第1号窯断面 (2)	79
図 15 167 池泉第2面平面	23	図 66 御所池瓦窯跡第1号窯第4面平面	80
図 16 167 池泉内第2面遭構平・断・立面	24	図 67 御所池瓦窯跡第1号窯燃焼部平・立面	81
図 17 167 池泉第3面平面	25	図 68 御所池瓦窯跡第1号窯断面 (3)	82
図 18 167 池泉湧水地点平・断面	26	図 69 御所池瓦窯跡第1号窯第5面平面	83
図 19 167 池泉出土遺物	27	図 70 御所池瓦窯跡第1号窯出土遺物 (1)	84
図 20 190 土坑他平・断面	29	図 71 御所池瓦窯跡第1号窯出土遺物 (2)	85
図 21 211 平坦面他出土遺物 (1)	31	図 72 御所池瓦窯跡第1号窯出土遺物 (3)	86
図 22 211 平坦面他出土遺物 (2)	32	図 73 御所池瓦窯跡第1号窯出土遺物 (4)	88
図 23 211 平坦面他出土遺物 (3)	33	図 74 御所池瓦窯跡第1号窯出土遺物 (5)	89
図 24 211 平坦面他出土遺物 (4)	34	図 75 2区第3-2 b面平面	90
図 25 211 平坦面他出土遺物 (5)	35	図 76 241 井戸平・断面	91
図 26 131 井戸平・立面	36	図 77 242 土坑他断面	92
図 27 131 井戸出土遺物	37	図 78 242 土坑他出土遺物	93
図 28 132 井戸平・立面、出土遺物	38	図 79 243 土坑他出土遺物	94
図 29 150 溝他平・断面、出土遺物	39	図 80 獣立柱建物3平・断面、出土遺物	95
図 30 掘立柱建物1平・断面	40	図 81 246 ピット他出土遺物	96
図 31 7区第3-2 b面平面、375溝・378土坑断面、出土遺物	41	図 82 第4-1 a面平面	97
図 32 465溝・446落込み平・断面、出土遺物	42	図 83 第4-1 a面平面 (南側)	98
図 33 333 井戸他平・立面、出土遺物	43	図 84 164 土坑平・断面、出土遺物	99
図 34 357 井戸平・立面、出土遺物	44	図 85 206 流路他平・断面、206 流路他出土遺物	100
図 35 9 土坑他出土遺物	45	図 86 127 溝他平・断面、出土遺物	101
図 36 第3-1 b面平面 (北側)	46	図 87 205 土坑他出土遺物	102
図 37 271 土坑他平・断面、出土遺物	47	図 88 7区第4-1 a面平面、474 土坑他断面、出土遺物	103
図 38 271 土坑出土遺物 (1)	48	図 89 1区第4-1 a面平面、28 土坑他断面	104
図 39 271 土坑・272 溝出土遺物	49	図 90 10区第4-1 a面平面、43 トレンチ断面、出土遺物	104
図 40 第3-1 b面平面 (西側)、出土遺物	50	図 91 第4-1 a面平面 (北側)	105
図 41 第3-1 b層出土遺物	50	図 92 4・14区第4-1 a面平面、25 清断面、杭列4・5 立面、出土遺物	106
図 42 第3-2 a面平面	51	図 93 5区第4-1面平面、22 トレンチ断面	106
図 43 第3-2 a面平面 (南側)	52	図 94 第4-1 a面平面 (西側)、484 溝他出土遺物	107
図 44 第3-2 a面平面 (北側)、出土遺物	53	図 95 第4-2 a面平面	108
図 45 第3-2 b面平面	54	図 96 第4-2 a面平面 (北側)	108
図 46 第3-2 b面平面 (西側)、49・51 トレンチ断面	55	図 97 4区第4-2 a面平面、26 トレンチ断面、杭列1・3 立面	109
図 47 469 溝出土遺物 (1)	57	図 98 4区第4-1 a面・第4-2 a面平面、29 トレンチ断面、杭列6 立面	110
図 48 469 溝出土遺物 (2)	58		
図 49 469 溝出土遺物 (3)	59		
図 50 469 溝出土遺物 (4)	60		
図 51 469 溝出土遺物 (5)	61		

図 99 第 5 a 面平面（南側）	111	図 110 71 土坑他平・断面、出土遺物	121
図 100 第 5 a 面平面	112	図 111 分析試料採取位置	123
図 101 1 区第 5 a 面平面、44 溝他断面、出土遺物	113	図 112 試料採取地点断面	126
図 102 8 区第 5 a 面平面、363 石平・断面	113	図 113 167 池泉花粉ダイアグラム	127
図 103 第 5 a 面平面（北側）、287 鮎畔他断面、 出土遺物	114	図 114 271 土坑花粉ダイアグラム	127
図 104 7 区第 5 b 面平面、392 土坑他断面、出土遺物	115	図 115 446 落ち込み花粉ダイアグラム	127
図 105 11 区第 5 b 面平面、出土遺物	116	図 116 167 池泉・211 平坦面出土器割合、土器法量	130
図 106 第 6 a 面平面	117	図 117 167 池泉・118 中世の遺構変遷	131
図 107 1・2 区第 6 a 面平面、59 土坑平・断面、 出土遺物	118	図 118 御所池瓦窯跡 1 号窯の軒丸瓦と同范瓦	134
図 108 7・8 区第 6 a 層他出土遺物	119	図 119 御所池瓦窯跡 1 号窯	135
図 109 第 7 b 面（調査最終面）平面	120	図 120 御所池瓦窯跡 1 号窯と他の関連遺跡消長・出土遺物 属性の比較	136

## 表目次

表 1 調査面積・現地調査期間・町教委立会	2	表 5 尾山遺跡出土種実	125
表 2 各調査区の地層対比	9	表 6 木製品使用樹種まとめ	125
表 3 尾山遺跡出土炭化材の樹種	124	表 7 御所池瓦窯跡第 1 号窯他の瓦集計	132
表 4 尾山遺跡出土木製品の樹種	124		

## 写真目次

写真 1 町教委試掘調査 11 区断面（南から）	2	写真 3 第 1 面直下の縁検出状況（南東から）	22
写真 2 センター試掘調査 1 区断面（北から）	2		

## 巻頭図版目次

巻頭図版 1		巻頭図版 2	
1. 2 区 167 池泉第 1 面検出状況（南西から）		1. 11 区第 1 号窯第 2 面検出状況（南から）	

## 原色図版目次

原色図版 1 遺構		3. 2 区 167 池泉第 2 面石垣断面（北東から）	
1. 2 区 167 池泉第 1 面検出状況（北西から）		4. 2 区 167 池泉断面（南東から）	
2. 2 区 167 池泉第 1 面検出状況（南西から）		5. 2 区 167 池泉断面（南東から）	
原色図版 2 遺構		6. 2 区 167 池泉底面検出状況（南西から）	
1. 2 区 167 池泉検出状況（南東から）		7. 2 区 167 池泉断面（南西から）	
2. 2 区 167 池泉第 2 面直上砂礫堆積状況（北西から）		8. 2 区 167 池泉完壁状況（南西から）	
3. 2 区 167 池泉土留め用の板材検出状況（南から）		原色図版 6 遺構	
4. 2 区 167 池泉土留め用の板材検出状況（南西から）		1. 11 区 498 ~ 500 土坑検出状況（南東から）	
5. 2 区 167 池泉の段断面（南東から）		2. 11 区 498 ~ 500 土坑検出状況（南から）	
6. 2 区 167 池泉湧水地点検出状況（南東から）		原色図版 7 遺構	
7. 2 区 167 池泉湧水地点検出状況（南東から）		1. 11 区 498 土坑断面（南から）	
8. 2 区 167 池泉湧水地点断面（南西から）		2. 11 区 500 土坑断面（南から）	
原色図版 3 遺構		3. 11 区 498 ~ 500 土坑検出状況（南西から）	
1. 2 区 190 土坑検出状況（北東から）		4. 11 区 51 ドレンチ断面（南東から）	
2. 2 区 167 池泉第 2 面検出状況（北から）		5. 11 区 469 溝検出状況（南から）	
原色図版 4 遺構		原色図版 8 遺構	
1. 2 区 167 池泉第 2 面検出状況（南東から）		1. 11 区第 1 号窯第 1 面検出状況（南西から）	
原色図版 5 遺構		2. 11 区第 1 号窯断面（西から）	
1. 2 区 167 池泉 260 土坑検出状況（南西から）		3. 11 区 522 溝断面（西から）	
2. 2 区 167 池泉第 2 面石垣検出状況（南西から）		4. 11 区軒丸瓦出土状況（南西から）	

5. 11 区 522 溝断面（北東から）  
 原色図版9 遺構  
 1. 11 区第1号窯断面（西から）  
 2. 11 区第1号窯断面（南から）  
 3. 11 区第1号窯断面（東から）  
 4. 11 区第1号窯 530 土坑周辺検出状況（南から）  
 5. 11 区第1号窯前庭部土坑断面（西から）  
 原色図版10 遺構  
 1. 11 区第1号窯燃焼部検出状況（南から）  
 2. 11 区第1号窯燃焼部検出状況（南西から）  
 3. 11 区第1号窯前庭部土坑検出状況（北東から）  
 4. 11 区第1号窯右袖断面（南西から）  
 5. 11 区第1号窯左袖検出状況（南西から）  
 6. 11 区第1号窯左袖軒平瓦検出状況（南から）  
 7. 11 区第1号窯左袖断面（南から）  
 8. 11 区第1号窯焚口床面断面（南から）  
 原色図版11 遺構  
 1. 11 区第1号窯第3面検出状況（南から）  
 2. 11 区第1号窯第3面焚口検出状況（南西から）

- 図版1 遺構  
 1. 2区第3-1b面検出状況（南東から）  
 2. 2区211平坦面遺物出土状況（南西から）  
 3. 2区211平坦面遺物出土状況（南西から）  
 4. 2区150溝他検出状況（北から）  
 5. 3区271土坑検出状況（南西から）  
 図版2 遺構  
 1. 2区131井戸検出状況（北西から）  
 2. 2区131井戸遺物出土状況（西から）  
 3. 2区131井戸断面（西から）  
 4. 2区132井戸検出状況（西から）  
 5. 2区132井戸検出状況（西から）  
 6. 2区132井戸底部検出状況（南西から）

- 図版3 遺構  
 1. 2区掘立柱建物1検出状況（北東から）  
 2. 7区453溝検出状況（南から）  
 3. 8区357井戸断面（南東から）  
 4. 7区446落ち込み検出状況（南東から）  
 5. 7区446落ち込み検出状況（南西から）  
 6. 7区446落ち込み遺物出土状況（北東から）  
 7. 7区第3-2a面水田検出状況（北東から）  
 図版4 遺構  
 1. 2区241土坑検出状況（北西から）  
 2. 2区掘立柱建物3検出状況（北西から）  
 3. 2区187柱穴断面（南から）  
 4. 2区242土坑他検出状況（北東から）  
 5. 2区242・259土坑検出状況（南西から）  
 図版5 遺構  
 1. 1区第4-1a面畦畔検出状況（南から）  
 2. 3区第4-1a面畦畔検出状況（南西から）  
 3. 4区295流路検出状況（南西から）  
 4. 4区295流路検出状況（南西から）  
 5. 4区303窓まり検出状況（南東から）

3. 11 区第1号窯燃焼部右側壁検出状況（東から）  
 4. 11 区第1号窯燃焼部奥壁検出状況（南から）  
 5. 11 区第1号窯燃焼部右側壁検出状況（西から）  
 原色図版12 遺構  
 1. 11 区第1号窯第4面焚口検出状況（西から）  
 2. 11 区第1号窯焚口544土坑検出状況（南西から）  
 3. 11 区第1号窯544土坑直上の泥層断面（南西から）  
 4. 11 区第1号窯550石検出状況（南から）  
 5. 11 区第1号窯第4面検出状況（南から）  
 原色図版13 遺構  
 1. 11 区焚口周辺第4面検出状況（東から）  
 2. 544土坑断面（南西から）  
 3. 11 区燃焼部断面（南から）  
 4. 11 区燃焼部奥壁断面（西から）  
 5. 11 区第1号窯地盤断面（南から）  
 6. 11 区焚口・焼成室完掘状況（南東から）  
 7. 11 区第1号窯第5面（南から）  
 8. 11 区第1号窯基盤断面（南西から）  
 原色図版14 遺物

## 図版目次

6. 4区307流路断面（南西から）  
 7. 5区第4-1a面水田検出状況（南西から）  
 8. 10区412溝検出状況（南西から）

- 図版6 遺構  
 1. 2区127溝検出状況（北東から）  
 2. 6区322溝検出状況（北東から）  
 3. 6区311溝検出状況（南西から）  
 4. 6区164土坑遺物出土状況（南東から）  
 5. 7区479土坑直線検出状況（南西から）

- 図版7 遺構  
 1. 5区第5a面畦畔検出状況（北西から）  
 2. 5区第5a面全景（南西から）  
 3. 4区第5a面水田検出状況（南東から）  
 4. 8区第5a面水田検出状況（北から）  
 5. 8区第5a面水田検出状況（東から）  
 6. 1区44溝検出状況（東から）  
 7. 11区第5b面検出状況（北西から）  
 8. 7区第5b面検出状況（北西から）

- 図版8 遺構  
 1. 1区59土坑検出状況（南から）  
 2. 1区60溝検出状況（北から）  
 3. 2区第6a面検出状況（北東から）  
 4. 2区第6a面遺物出土状況（真上から）  
 5. 11区51トレンチ断面（南東から）  
 6. 1区71土坑断面（北西から）  
 7. 1区71土坑完掘状況（南西から）  
 8. 7区464谷地形検出状況（北西から）

- 図版9 遺物  
 図版10 遺物  
 図版11 遺物  
 図版12 遺物  
 図版13 遺物  
 図版14 遺物

# 第1章 調査の経緯と経過

## 第1節 調査に至る経緯（図1、写真1・2）

大阪府三島郡島本町桜井二～五丁目では、JR島本駅西土地区画整理組合（業務代行者：株式会社フジタ、以下、事業者）によって、土地区画整理事業が計画された。土地区画整理事業に先立ち、事業者は島本町教育委員会（以下、町教委）に土木工事計画届出書を提出し、町教委は事業地内で試掘調査を実施した。町教委の試掘調査は、平成30年2月13日から3月9日に21か所の調査区で実施し、この内7か所で埋蔵文化財を確認した。町教委は試掘調査成果をまとめ、大阪府教育委員会教育長（以下、府教育長）に「埋蔵文化財包蔵地取扱い変更協議書」を提出した。大阪府教育庁文化財保護課（以下、府文化財保護課）は、遺跡台帳及び遺跡地図を変更し、事業地内に新たに発見された遺跡を尾山遺跡とした。試掘調査を実施できなかった範囲については事業者が再度、土木工事計画届出書を提出した。町教委は府文化財保護課に調査協力を依頼し、府文化財保護課は公益財団法人大阪府文化財センター（以下、センター）が協力する旨、町教委へ回答し、あわせて、センターに対し町教委と協議の上発掘調査を実施するよう指示した。町教委とセンター合同の試掘調査は、令和元年11月18日から11月26日の間に5か所の調査区で実施し、この内2か所で埋蔵文化財を確認した。町教委は府教育長に「埋蔵文

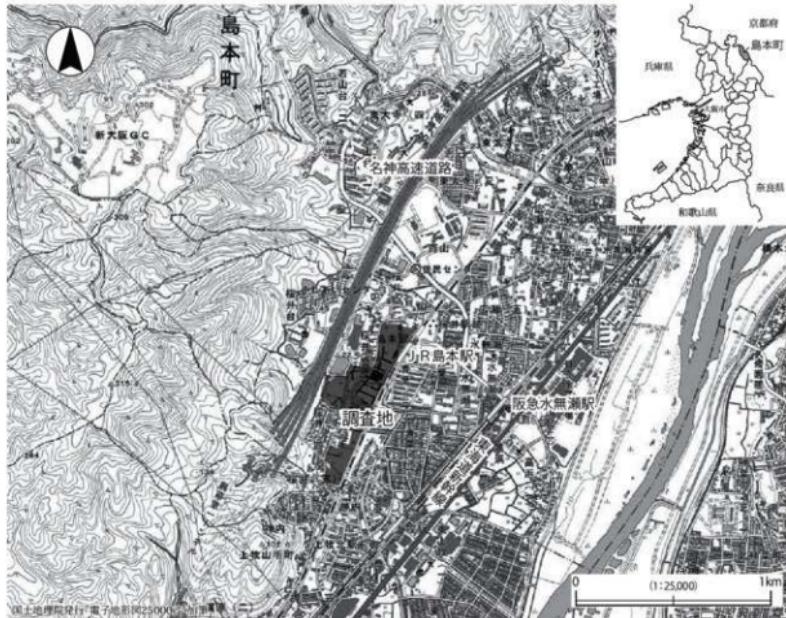


図1 調査位置

化財包蔵地の取扱い変更協議書」を提出し、府文化財保護課は遺跡台帳及び遺跡地図を変更して、尾山遺跡の範囲が拡大された。なお、平成30年及び令和元年の試掘調査については、町教委が文化財保護法第108条に基づき大阪府高槻警察署に埋蔵物発見届を提出した。区画整理事業に先立ち、事業者は文化財保護法第93条に基づく埋蔵文化財発掘届出を町教委に改めて提出し、町教委は発掘調査を実施する旨を回答した。この調査に当たり、町教委は府文化財保護課に調査協力を依頼した。府文化財保護課はセンターに調査協力を指示して、町教委とセンター合同で発掘調査が行われることになった。文化財保護法第99条に基づく発掘調査は令和2年6月1日から実施した。令和3年3月には古代の瓦窯を確認したため、町教委と事業者で協議した結果、調査区拡張と工期延長を行い、瓦窯の調査を実施した後、発掘調査を終了した。同瓦窯は、周知の遺跡であった御所池瓦窯跡の一部と考えられ、町教委と府文化財保護課で協議した結果、令和3年に御所池瓦窯跡の遺跡範囲が変更された。

## 第2節 現地調査の経過（表1）

各調査区の面積、機械・人力掘削期間、各調査区の最終立会日等は一覧表のとおりである。なお、令和3年10月3日には2区で検出した167池泉を対象に現地説明会を実施した。参加者は251名である。令和3年12月16日から令和4年2月6日には、町教委とセンターの共催で町内発掘調査成果速報展を開催した。参加者は1155名である。

表1 調査面積・現地調査期間・町教委立会

調査面積	調査区名	調査期間	町教委最終立会
922 m <sup>2</sup>	1区	令和2年6月1日～令和2年8月4日	令和2年8月3日
1926 m <sup>2</sup>	2区	令和2年8月7日～令和2年11月18日	令和2年11月17日
565 m <sup>2</sup>	3-1区 3-2区	令和2年11月9日～令和2年11月18日 令和2年10月6日～令和2年10月20日	令和2年11月17日
810 m <sup>2</sup>	4-1区 4-2区	令和2年11月26日～令和2年12月11日 令和2年12月11日～令和2年12月22日	令和2年12月14日
394 m <sup>2</sup>	5区	令和2年11月5日～令和2年12月1日	令和2年12月4日
263 m <sup>2</sup>	6-1区 6-2区	令和3年1月5日～令和3年1月7日 令和2年12月23日～令和3年1月5日	令和3年1月14日
934 m <sup>2</sup>	7-1区(北)・7-2区 7-1区(南)・7-3区	令和3年1月20日～令和3年1月29日 令和3年2月16日～令和3年3月17日	令和3年2月3日
525 m <sup>2</sup>	8-1区・8-2区	令和3年1月8日～令和3年1月26日	令和3年1月27日
334 m <sup>2</sup>	9区	令和3年2月1日～令和3年2月5日	令和3年2月9日
226 m <sup>2</sup>	10区	令和3年2月5日～令和3年2月16日	令和3年2月17日
240 m <sup>2</sup>	11-1区・11-2区	令和3年3月4日～令和3年4月16日	令和3年4月16日
344 m <sup>2</sup>	12区	令和3年3月9日～令和3年3月25日	令和3年3月29日
52 m <sup>2</sup>	14区	令和2年6月15日～令和2年6月16日	令和2年6月16日

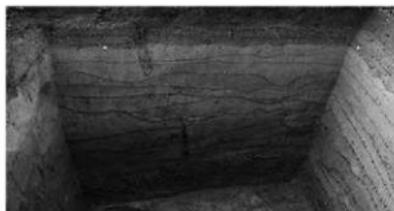


写真1 町教委試掘調査11区断面（南から）



写真2 センター試掘調査1区断面（北から）

## 第2章 遺跡周辺の環境

### 第1節 地理的環境 (図2)

尾山遺跡・御所池瓦窯跡の位置する島本町桜井周辺には、北摂山地の東麓から淀川流域に向かって丘陵地と扇状地が広がっている。島本町の北側では、本町の主要な河川である水無瀬川が東方向に流れ、淀川に合流する。

扇状地は、水無瀬川の支流ないし北摂山地の谷地形を流れ出た小河川によって運ばれた土砂によって形成されており、南方向に緩やかに低くなる地形である。

一方、丘陵地は、京都府大山崎町から島本町桜井にかけて北摂山地の一角を占める丹波山地、天王山地の麓の狭い範囲に分布し、主として大阪層群によって形成される。今回の調査では、御所池瓦窯跡が低位の段丘面に立地し、丘陵地の末端に位置している。

古代から島本町は陸路と水路の重要なルート上にあった。陸路としては旧山陽道（現・西国街道）が平野部を通り、水路としては平野部東側を流れる淀川が、京と大阪を結ぶ水運上の重要なルートであった。島本町南側に位置する尾山遺跡・御所池瓦窯跡は、陸路と水路の交通上の要衝に近在する。

### 第2節 歴史的環境 (図3)

#### 旧石器時代

島本町の人間活動の痕跡はこの時代にまで遡る。山崎西遺跡では、サヌカイト製のナイフ形石器やチャート製剥片が採取されている。

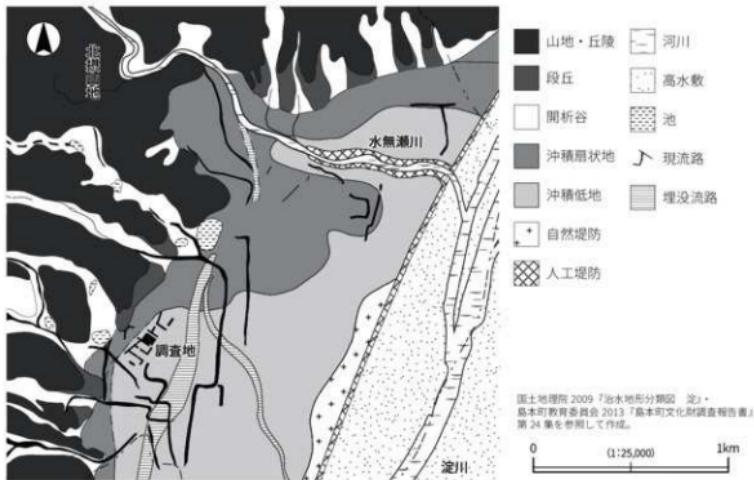


図2 周辺地形

### 縄文時代

北摂山地の東麓の段丘面に立地する越谷遺跡では、縄文時代後期前葉から中葉の土器がまとめて出土している。一方、扇状地に立地する広瀬遺跡では、縄文時代晚期の遺構・遺物が確認されており、堅穴建物が検出されていることが特筆される。

### 弥生時代

弥生時代前期は桜井駅跡で弥生土器が出土している。島本町では弥生時代中期以降に遺構・遺物が増加し、平野部での土地利用が積極的になる。青葉遺跡A・B地点では、弥生時代中期中葉の堅穴建物が検出された。桜井駅跡・広瀬遺跡・広瀬溝田遺跡では、弥生時代中期中葉から後葉にかけての遺構・遺物が検出された。遺物量が多く、主要な集落の一部となる可能性が高い。また、越谷遺跡では弥生時代後期から古墳時代前期初頭、伝待宵小侍從墓では弥生時代後期の遺物がまとめて出土している。

### 古墳時代

古墳時代前期初頭から後期にかけては遺物が散見されるものの、島本町での古墳時代の動態は不明確な点が多い。

水無瀬莊跡では古墳時代前期初頭、桜井駅跡では古墳時代前期初頭から古墳時代前期、越谷遺跡は古墳時代の遺物が少量ながら出土している。

広瀬遺跡・越谷遺跡・水無瀬莊跡では古墳時代中期から後期にかけての遺物が表採や発掘調査によって確認されている。古墳時代後期以降には、北摂山地から派生する尾根や丘陵部に群集墳が築造される。越谷遺跡では、古墳の副葬品の一部と考えられる須恵器、鉄製品等が名神高速道路建設工事の際に見つかっている。源吾山遺跡でも、副葬品と考えられる須恵器が出土しており、古墳の存在が想定されている。神内古墳群は高槻市に遺跡範囲が広がる古墳群で、高槻市側の発掘調査で横穴式石室が確認されている。

### 飛鳥時代から奈良時代

鈴谷瓦窯跡では2基の瓦窯が確認されており、飛鳥時代後期から奈良時代初頭の瓦が出土した。鈴谷瓦窯跡の南西に隣接する御所ノ平遺跡では、鈴谷瓦窯跡と同時期の堅穴建物が検出された。堅穴建物では鈴谷瓦窯跡の瓦と同様の瓦と共に、粘土塊が出土したことから、鈴谷瓦窯跡の工房跡と想定されている。

また、文献史として、正倉院御物には、水無瀬川右岸に存在した東大寺水無瀬莊を記した『撰津職上郡水無瀬莊図』が伝わる。また、『続日本紀』和銅4（711）年正月丁未条には、駅伝制の駅を主要な道路に置いたとされ、島本町内では大原駅が設置されたと考えられている。大原駅は桜井駅跡周辺がその推定地になっているが、駅跡は現在まで発掘調査で確認されていない。

### 平安時代

平安時代以降、京の皇族・貴族は大山崎町から島本町の風光明媚な景色を好み、この地を訪れるようになり、日記や紀行文にその足跡が伝えられる。

広瀬遺跡では、西国街道に近い発掘調査で中世の道（路面）が検出されており、出土遺物に平安時代のものが含まれることから、道（路面）が平安時代に遡ることが指摘されている。また、広瀬遺跡では、平安時代前期の掘立柱建物が検出されており、文徳天皇の子である惟高親王の離宮である可能性が想定されている。

広瀬南遺跡では、淀川の川床から平安時代の須恵器大甕の完形に近いものが出土しており、京城との

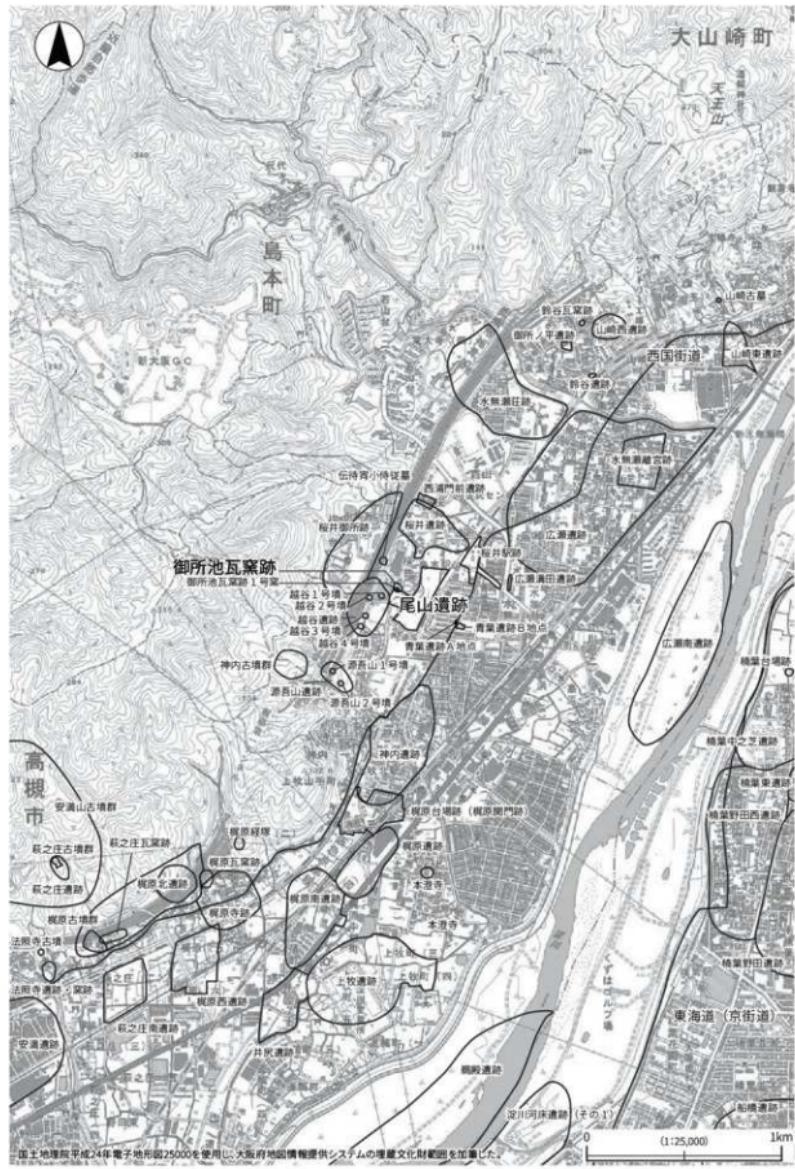


図3 遺跡分布

物資の往来を裏付ける資料とされている。

#### 鎌倉時代から室町時代

藤原定家が記した『明月記』等によれば、後鳥羽上皇は正治元（1199）年頃、水無瀬離宮を造営する。『明月記』には、後鳥羽上皇が頻繁にこの地を訪れ、歌会・饗宴に興じたことが記される。広瀬遺跡では鎌倉時代前期の掘立柱建物が検出されており、水無瀬離宮に関係する施設と想定されている。

『明月記』等によれば、水無瀬離宮は建保4（1216）年の洪水で建物が倒壊し、翌年地形の高い場所に再建される。西浦門前遺跡では鎌倉時代前期以降の池や築地塀が検出されており、再建した施設の一部と想定されている。

なお、室町時代に成立した『太平記』には、新田義貞に従って湊川の戦いに向かう過程で、楠木正成が嫡男の正行と別れた桜井宿が記載されている。桜井宿の推定地は、現在、桜井駅跡として国史跡に指定されており、大原駅と同様に遺構の存在は確かめられていないが、平野部中央に位置しており、交通上の重要な場所が今回の調査区に近在している可能性が想定できる。

#### 参考文献

国土地理院 2009『治水地形分類図説』

島本町町史編さん委員会編 1976『島本町史』

島本町教育委員会 1991～2021『島本町文化財調査報告書』第1集～第35集

名神高速道路内遺跡調査会 1996『水無瀬住跡発掘調査報告書』

名神高速道路内遺跡調査会 1997『越谷遺跡他発掘調査報告書』

## 第3章 調査・整理の方法

発掘調査は、JR島本駅西土地区画整理事業予定地に対し、主として街路、調整池等の建設予定地で実施した。発掘調査及び整理作業は、町教委と協議の上、財団法人大阪府文化財センター 2010『遺跡調査基本マニュアル』に準拠した。なお、本調査に関わる工事並びに測量は、株式会社島田組が行った。

**調査名・調査区名** 調査名は、町教委とセンターで協議の上、町教委の調査名「OY 20-1 尾山」を主として使用した。調査区名はアラビア数字の通し番号を用いて表記し、分割して調査を行った場合は枝番号を付けた。なお、本文中では、調査名は省略し、調査区名のみを使用した。調査区に付けた枝番号については基本的には省略したが、必要に応じて適宜使用した。

**地区割（図4）** 世界測地系（測地成果 2011）の平面直角座標系第VI系を、第I～IV区画に区画した。第I区画は「L7」、第II区画は「5」、第III区画は100m、第IV区画は第III区画を10m単位に区画した。遺物の取り上げは、第IV区画を基準として行った。

**遺構名** 通し番号を使用し、属性は遺構番号の後ろに付けた（例：3土坑）。掘立柱建物・柱穴列・杭列・景石は、遺構番号とは別の通し番号を使用し、属性は遺構番号の前に付けた（例：掘立柱建物1）。

**掘削方法** 町教委とセンターの試掘調査の結果を踏まえて、現代作土から近世の作土を重機によって掘削した。その後は、人力によって包含層の掘削作業及び遺構・遺物の検出作業を行った。また、必要に応じて、町教委の現地会を受けた。

**遺構面と地層** 遺構面の呼称は、各地層の上面と地層名を対応させた。例：第1a層の上面=第1a面。地層名は、時代的なまとまりや土質等から7層に大別し、上から順番に通し番号を付けた。また、自然堆積層とその上部に形成された土壤に土壤学的な関係性が認められた場合には、自然堆積層とその上部に形成された土壤の層名を可能な限り一致させ、土壤層・作土には「a」、自然堆積層には「b」を付けて区別した。

**遺構図** 平面図は、トータルステーションを用いた電子平板測量を実施して作成した。遺構図は、縮尺10分の1・20分の1を基準に、トータルステーションを用いた測量やオルソ画像を用いた測量により作成した。調査区の壁断面は、調査区毎に縮尺20分の1で作成した。報告書用挿図は、Adobe社製Illustratorを用いて、挿図用に加工を施した。

**写真撮影** 現場の写真撮影は、6×7フィルムカメラ（白黒・カラーリバーサル）、デジタル一眼レフカメラを用いた。デジタル一眼レフカメラの画像データは、JPEGとRAWの2種類を同時に作成した。写真的フィルム及びデータは、現場作業と併行して、収納・台帳の作成を行った。

**整理作業と報告書作成** 出土遺物は、遺物登録を行って台帳を作成し、洗浄・注記の基礎整理を行った。注記の記載内容は町教委とセンターで協議した上「OY 20-1-登録番号」を記した。整理作業は、出土遺物の抽出作業を行い実測・拓本作業等を実施した。報告書用の遺物挿図は、遺物実測図のデジタルトレースを行って、スキャニングした拓本と合わせて作成した。整理作業を終了した後、出土遺物は掲載遺物と報告対象外の遺物に分けて収納を行った。

**出土遺物及び成果品** 整理作業終了後、出土遺物や図面・写真・台帳等の成果品は、センターから町教委に移管し、町教委が保管している。

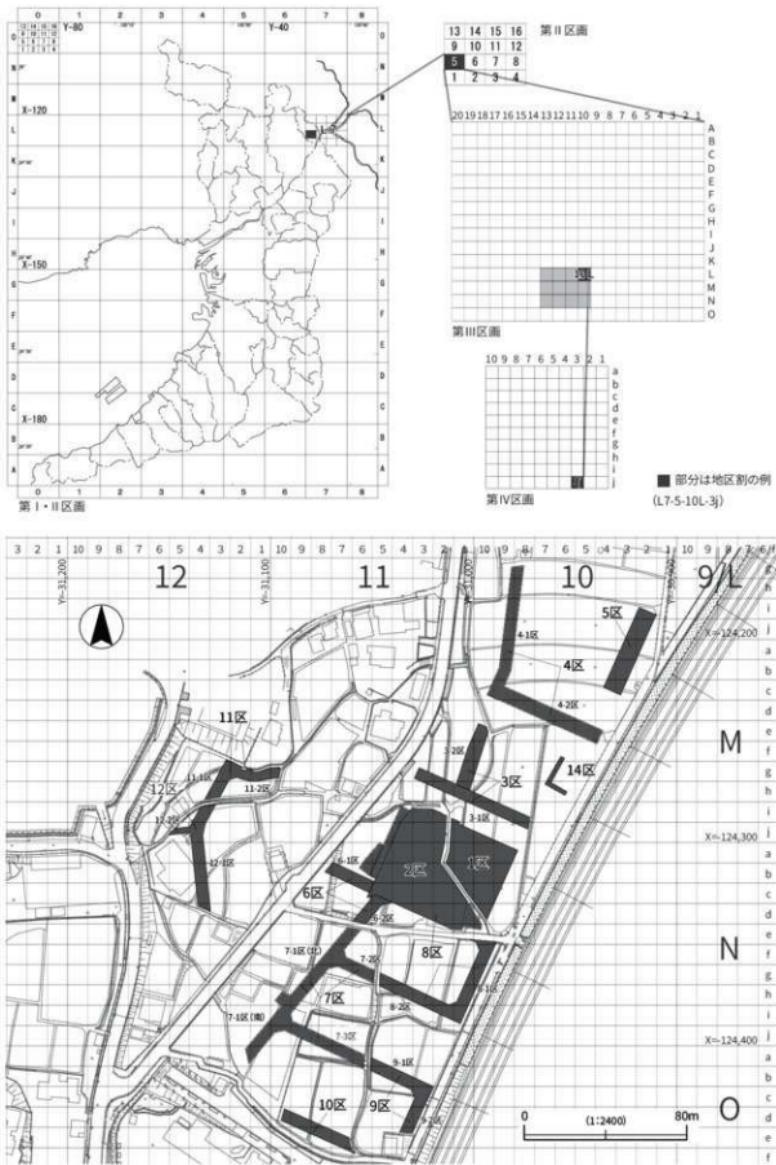


図4 地区割

# 第4章 調査成果

## 第1節 基本層序（図5～8、表2）

地層は大別7層に分けた。各調査区の地層名は、調査区毎に付けており、地層の対応関係は表2のとおりである。整理作業の過程で、自然堆積層や土壤層及び作土の連続性や各地層から出土した遺物を再検討し、本報告では地層名を統一する。土壤層及び作土にはアルファベット小文字の「a」、自然堆積層には「b」を末尾に付けて地層の区別を行っている。なお、各調査区の柱状図は調査区壁断面で作成した図面を抜粋して作成した。

### 第1層

黒褐色から灰色を呈する粗粒砂質シルトで、現代作土を第1a層とした。今回の調査区周辺は発掘調査前まで水田ないし畑として土地利用されており、現代作土は調査範囲全体に堆積する。明治18（1885）年に作成された大日本帝国陸地測量部仮製地形測量図では、調査区周辺は水田として表現されおり、近代から景観に変化はなかったと考えられる。

### 第2層

灰白色を呈する粘土質シルトで、近世作土を第2a層とした。2区西側・6区を除き、調査範囲全体に堆積する。2・6区は現代の削平が著しく、現代作土を除去した段階で第4-2b層が露出しており、第2a層は2区東側を除いて確認することはできなかった。

表2 各調査区の地層対比

本報告の地層名	1区	2区	3区	4区	5区	6区	7区	8区	9区	10区	11区	12区	14区
第1a層	第1a層	第1a層	第1a層	第1a層	第1a層	第1a層	第1a層	第1a層	第1a層	第1a層	第1a層	第1a層	第1a層
第2a層	第2a層	第2a層	第2a層	第2a層	第2a層	第2a層	第2a層	第2a層	第2a層	第2a層	第2a層	第2a層	第2a層
第3-1a層	第3a層	第3a層	第3a層	第3a層	第3a層	第3a層							
第3-1b層	第3b層	第3b層	第3b層			第3b層							
第3-2a層			第4-1a層	第4-1a層			第4-1層			第4-1a層+第4-2a層		第4-1a層	第4-1a層
第3-2b層	第3-2b層	第3-2b層	第3-2b層	第3-2b層	第3-2b層	第3-2b層	第3-2b層	第3-2b層	第3-2b層	第3-2b層	第3-2b層	第3-2b層	
第4-1a層	第4-1a層	第4-1a層	第4-1a層	第4-1a層	第4-1a層	第4-1a層	第4-1a層	第4-1a層	第4-1a層	第4-1a層	第4-1a層	第4-1a層	第4-1a層
第4-1b層			第4b層										
第4-2a層	第4-2a層			第4-3a層						第4-3a層			
第4-2b層									第4b層	第4b層	第4b層	第4b層	第4-2b層
第5a層	第5a層		第5a層	第5a層				(第4-4a層+第5a層)	第4a層				
第5b層	第5b層							第5b層					第5b層
第6a層	第6a層	第6a層		第6a層		第6a層	第6a層	第6a層		第6a層	第6a層		
第6b層	第6b層			第6b層			第6b層						
第7a層	第7a層	第7a層		第7a層	第7a層	第7a層	第7a層	第7a層	第7a層	第7a層	第7a層		
第7b層	第7b層	第7b層		第7b層	第7b層	第7b層	第7b層	第7b層	第7b層	第7b層	第7b層		

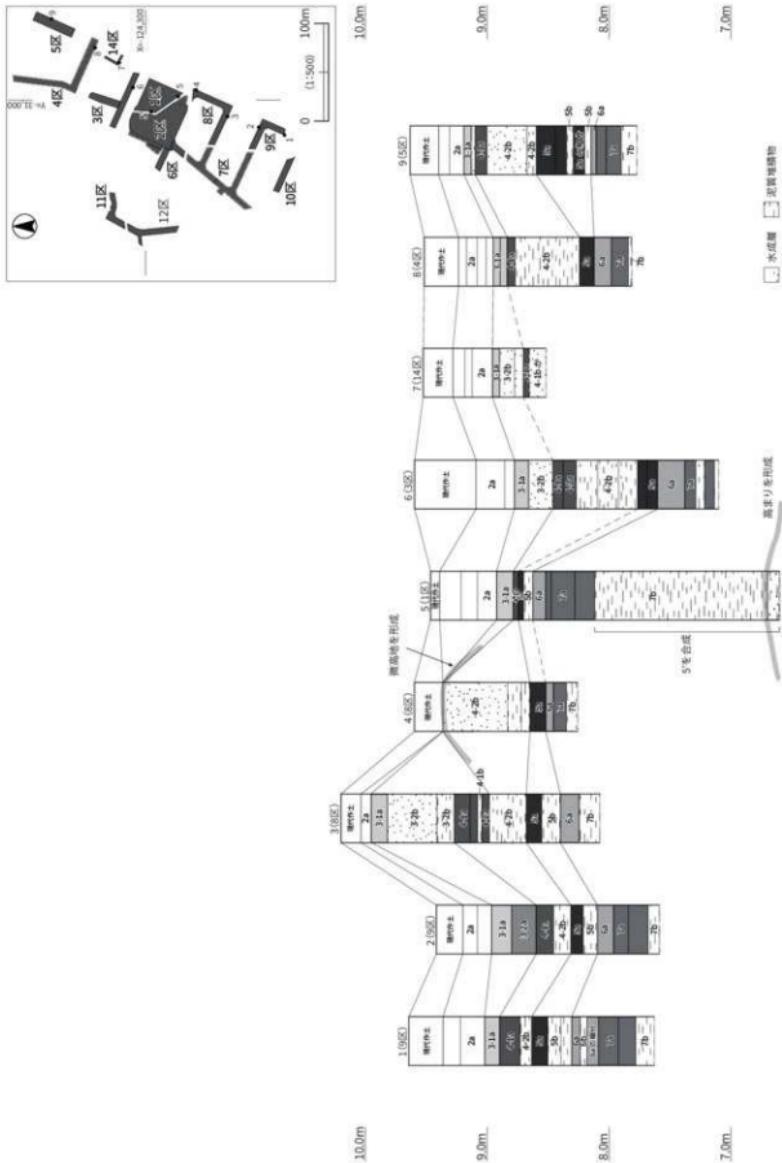


図5 柱状断面(1)

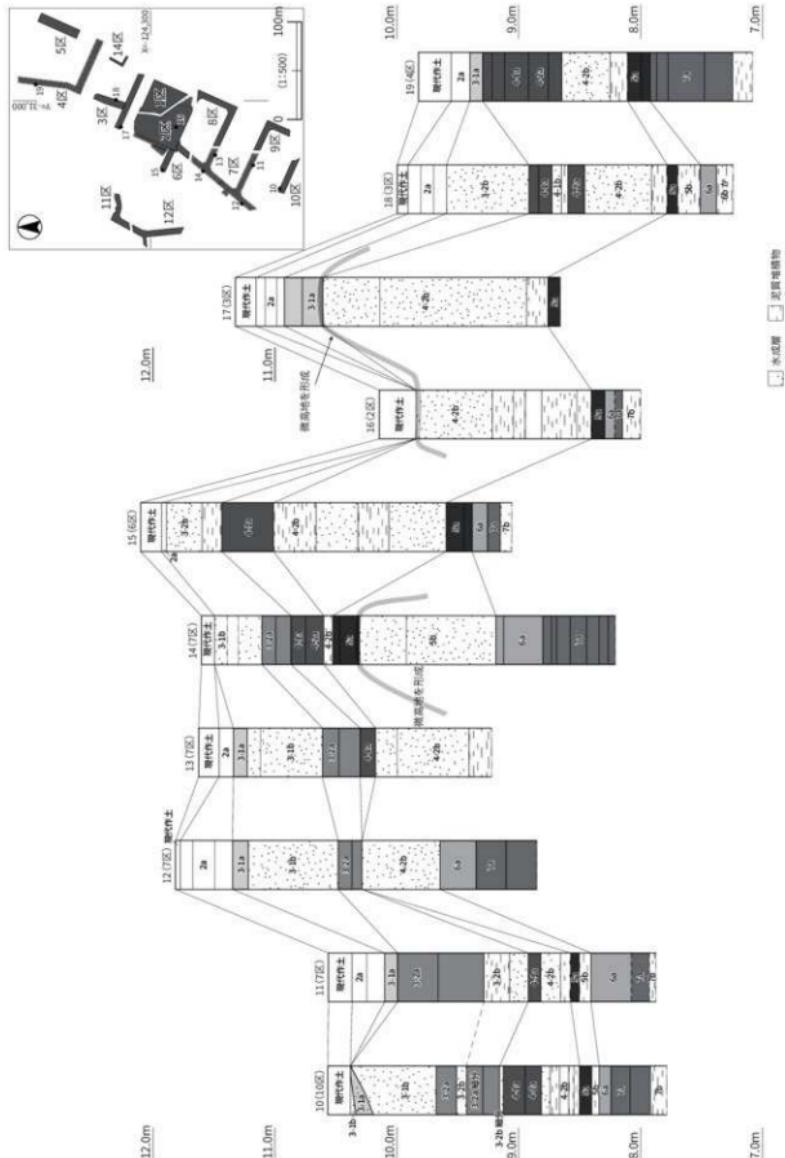


図6 柱状断面(2)

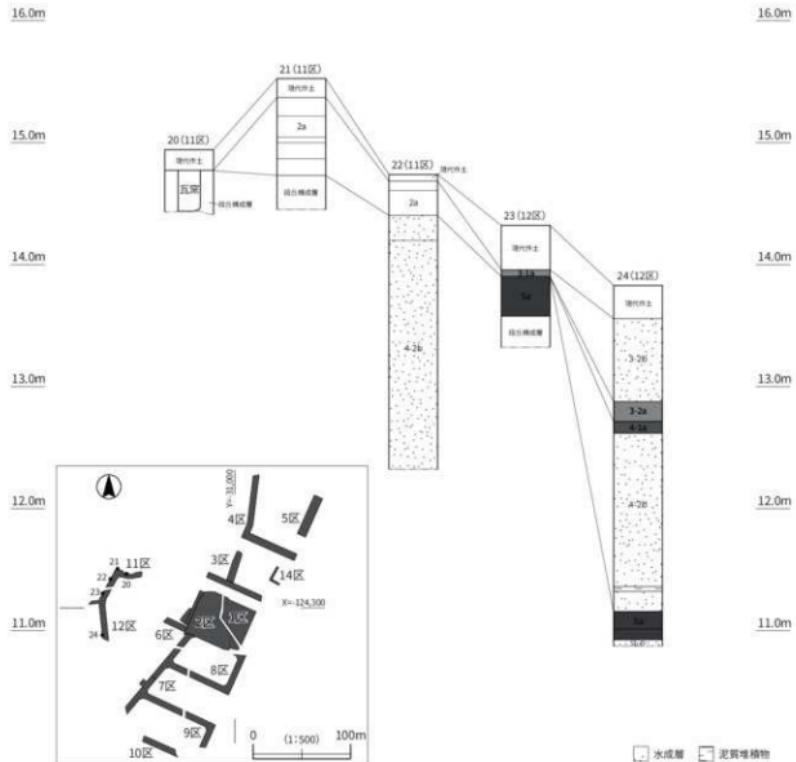


図7 柱状断面(3)

### 第3層

低地に堆積する作土は、第3-1a層、第3-2a層の2層に分けて調査を行った。10区は地形的に低所に当たるため堆積が分厚く、3層以上に分けることができる。

第3-1a層は、灰色を呈する粘土質シルトである。時期は14世紀以降。2区西側・6区では、第3-1a層は近世以降に削平されている状況を確認した。

第3-1b層は灰白色を呈する粗粒砂～極粗粒砂で、水成層である。時期は13世紀後葉から14世紀前葉。7・10区では層厚0.1～0.2m以上(柱状図作成地点では0.7m以上)で堆積しており、第3-1b層を除去した第3-2a面では水田畦畔が良好に遺存している状況を検出した。第3-1b層は、1・2区より北側の調査区では低所ないし造構内のみに堆積する。

第3-2a層は、褐灰色を呈する粘土質シルトである。時期は13世紀後葉以前。1・2・11・12区の高所を除いて調査区全体に堆積する。3・4・5区では、第3-1b層の堆積が希薄で第3-1a層と明確な層境が抑えられない場合があった。

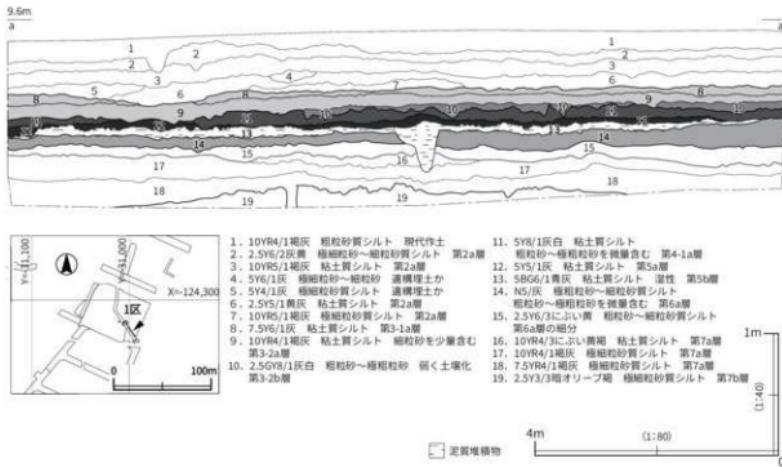


図8 1区4トレンチ断面

第3-2b層は、灰白色を呈する粗粒砂から極粗粒砂主体の砂礫で、水成層である。出土遺物には土師器の細片が含まれるが、時期を明確に特定できる遺物が無く、詳細な時期は不明である。ただし、第3-2b面で古墳時代中期の遺構を検出していることや須恵器が出土していないことから、古墳時代前期以前に形成されたと考えている。第3-2b層は、1・2・3・4・5・10区で良好に遺存しており、第3-2b層を除去した第4-1a面では水田跡を検出した。

#### 第4層

低地に堆積する作土は、第4-1a層、第4-2a層の2層に分けて調査した。

第4-1a層は、灰白極粗粒砂質シルトないし粘土質シルトである。1・2・11・12区の高所を除いて調査区全体に堆積する。水田の時期は、弥生時代後期から古墳時代前期初頭で、古墳時代前期（布留式期）に下る可能性がある。

第4-1b層は、灰白色粗粒砂～極粗粒砂主体の砂礫で、水成層である。遺構内や低所の一部で堆積が認められた。時期は、遺物が出土していないため不明。第4-1a層と第4-2a層から出土した遺物から古墳時代前期初頭以前と考えている。

第4-2a層は、灰白色～灰色粘土質シルトである。第4-1層とほぼ同じ範囲の低所に堆積する。時期は弥生時代後期以降を想定している。第4-1b層から遺物が出土しておらず、明確に時期が押えられないため、古墳時代前期初頭まで時期が下る可能性がある。

第4-2b層は、灰白色極粗粒砂～細粒砂ないし灰白色粗粒砂～極粗粒砂主体の砂礫と灰色粘土質シルトである。2・6・7・11・12区の高所を除いて調査範囲全体に堆積し、層厚は1mを超える場所もある。砂礫は水成層、粘土質シルトは湿地性の堆積物である。砂礫は複数回に渡って供給された洪水堆積物で、1・2・6区では微高地（沖積リッジ）を形成する。微高地では、古墳時代から中世にかけての遺構を検出した。第4-2b層の上部に堆積した砂礫・泥層から弥生時代後期の遺物が出土した

他、上位から下位の砂礫と泥層から出土した遺物は、6区の弥生土器蓋のみで、時期の上限は抑えられていない。

#### 第5層

第5a層は灰色粘土質シルトの土壤層である。低所では自然堆積層を挟んで細分が可能である。7・11・12区の高所を除いて調査区全体に堆積する。4・5・8区では、第5a面で水田が良好に遺存している状況を検出した。7・9区では、砂礫（第5b層）が堆積することによって形成された微高地を検出した。水田作土から出土した遺物は少量で細片が多く、時期を明確にすることはできなかった。ただし、微高地に形成された第5a層（土壤層）と第5b層で検出した遺構から弥生時代中期前葉の遺物が出土しており、時期の上限は弥生時代中期前葉と想定している。また、1区で第5a層の堆積を切る溝から弥生時代中期後葉から弥生時代後期初頭の遺物が出土しており、水田の時期は、弥生時代中期におさまるものと考えられる。

第5b層は、7・8・9区周辺は灰白色粗粒砂～極粗粒砂、それ以外の調査区は、灰色粘土質シルトである。粗粒砂～極粗粒砂は水成層、粘土質シルトは湿地性の堆積物である。多くの調査区では第5b層の堆積が認められず、第5a層と第6a層が自然堆積層を挟在せずに堆積している状況を確認している。

#### 第6層

第6a層は、灰色粘土質シルトで、土壤層である。11・12区の高所を除いて調査範囲全体に堆積する。出土遺物から、時期は縄文時代晚期から弥生時代前期。作土になる可能性を考慮して第6a面で水田遺構の検出を試みたが、1区で溝を検出した以外、耕作痕跡等は確認できなかった。

第6b層は、暗灰色～灰白色粘土質シルトないし灰白色粗粒砂～極粗粒砂主体の砂礫である。砂礫は水成層、粘土質シルトは湿地性の堆積物である。砂礫は7区の一部、粘土質シルトは谷地形を中心に堆積していたが、第6b層は全体として希薄である。1区で縄文時代晚期以前の粗製土器の破片が出土したが、詳細な時期は不明である。

#### 第7層

第7a層は、褐色～にぶい黄褐色粘土質シルトで、土壤層である。調査区全体に堆積する。7区では第7a層除去面で検出した谷地形から縄文時代後期中葉の土器が出土した。第6a層と層相が似ており、第6b層が挟在されない場合、層境が不明瞭である。

第7b層は、上位が灰色～暗灰色粘土質シルト、下位は灰白色粗粒砂～極粗粒砂主体の砂礫である。粘土質シルトは湿地性の堆積物、砂礫は水成層である。下位の砂礫は3m以上の層厚で、地表面から8m以上の掘削深度で基底には達していない。砂礫の堆積によって形成された高まりは古墳時代まで平坦化せずに残存し、周辺の土地利用に影響を及ぼしている。

## 第2節 遺構・遺物

### 1. 概要

尾山遺跡に設けた今回の調査区は11・12区を除いて低地に立地し、地層の堆積が進行しやすい場所であったため、各時代の遺構面を複数検出した。一方、地形的に高い場所（11・12区）や洪水で運ばれた土砂で形成された微高地上は、同一の遺構面で各時代の生活痕跡が重複して検出されており、検出した遺構には、遺構面の帰属先を特定することが困難な場合もあった。

主要な遺構面として、第3-1 b面（鎌倉時代後期から室町時代）、第3-2 a面（鎌倉時代後期）、第3-2 b面（古墳時代中期から奈良時代）、第4-1 a面（弥生時代後期から古墳時代前期）、第4-2 a面・第4-2 b面（弥生時代中期後葉から弥生時代後期）、第5 a面・第5 b面（弥生時代中期前葉から後葉以前）、第6 a面（縄文時代晚期から弥生時代前期）、第7 a面・第7 b面（調査終了面、縄文時代後期以前）の調査を行った。発掘調査を開始した遺構面は第3-1 b面からである。第3-1 a面は、直上に堆積する第2 a層とした近世作土の下面遺構、耕作痕を部分的に検出したのみであった。

主要な遺構としては、第3-1 b面で池泉・井戸・掘立柱建物等、第3-2 a面で水田等、第3-2 b面で御所池瓦窯跡第1号窯等、第4-1 a面で溝・土坑・水田等、第4-2 a面では水田等、第6 a面で水田等、第6 b面で溝・土坑等、第7 b面で土坑等を検出した。なお、各遺構の調査成果は、1・2・8~10区は南側、3~5・14区は北側、11・12区は西側として便宜的に分けて報告する。なお、11区で検出した469溝は瓦が大量に出土した溝で、御所池瓦窯跡第1号窯との関係性から、第3-2 b面で報告する。

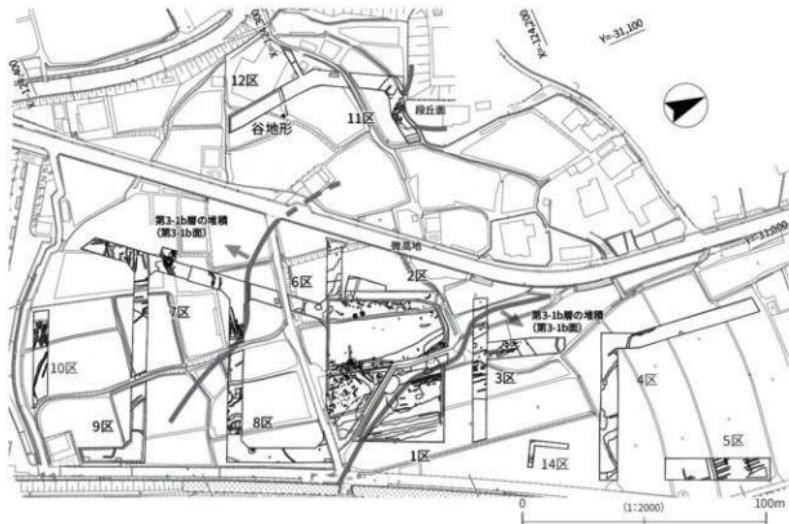


図9 第3-1 b面平面

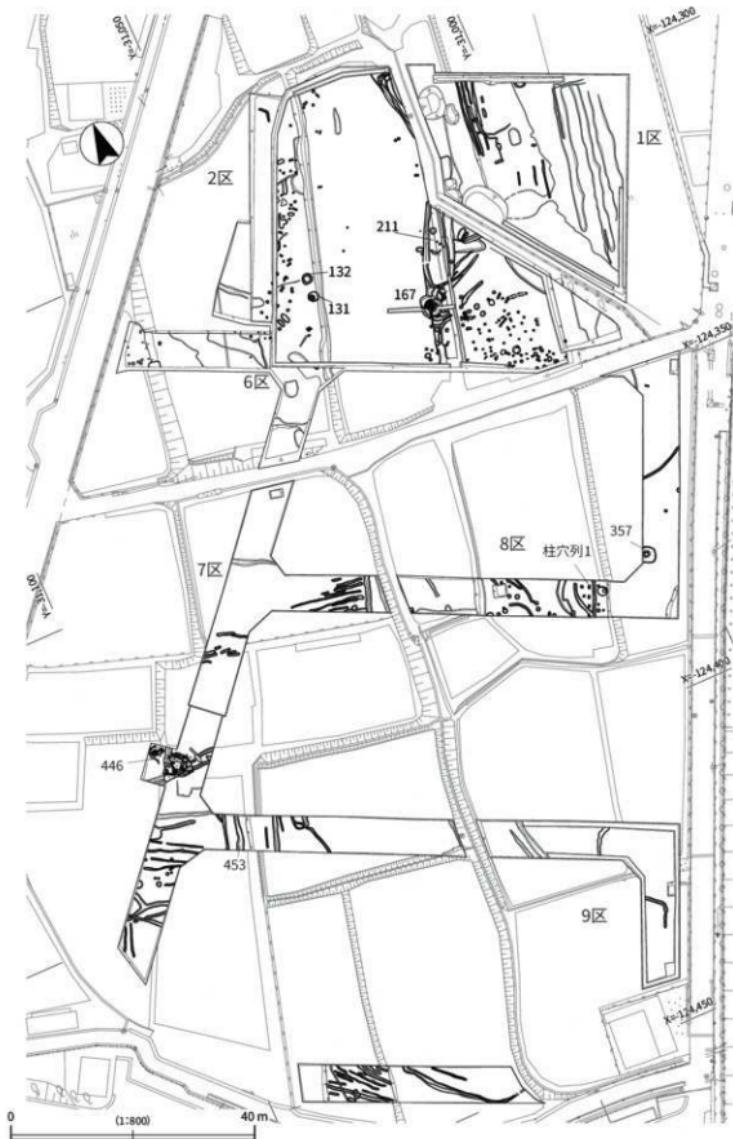


図10 第3-1 b面平面（南側）

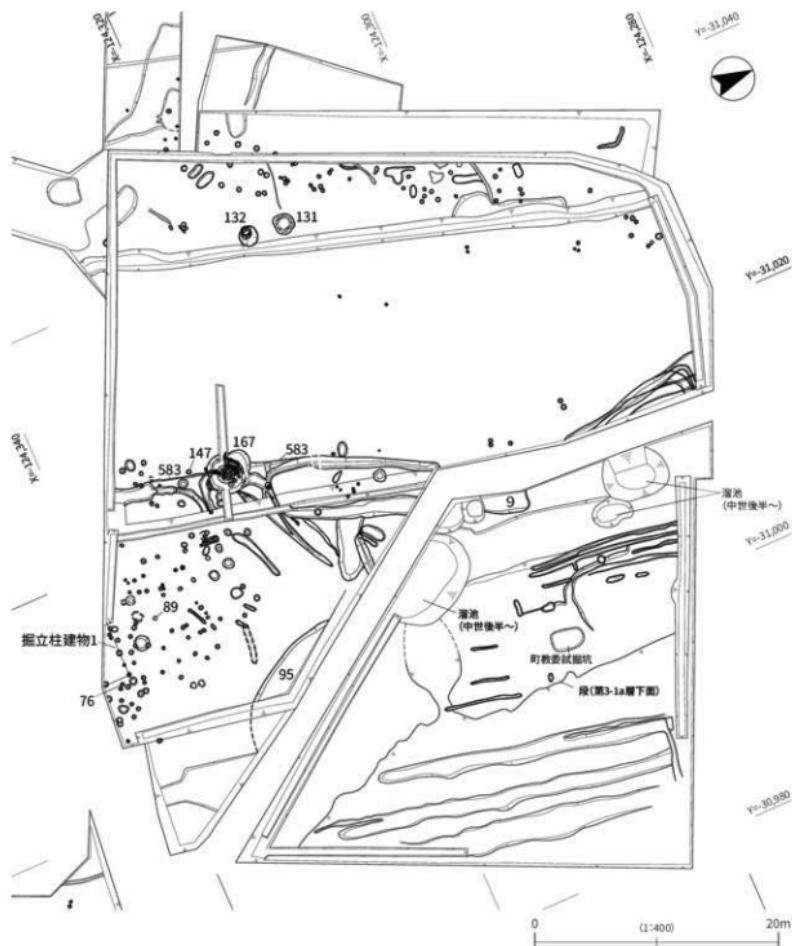


図11 1・2・6区第3-1b面平面

## 2. 第3-1b面の調査成果 (巻頭図版1、図9~41、原色図版1~5、図版1~3・9・10・14)

第3-1b面では、池泉・井戸・掘立柱建物・溝・土坑・ピットを検出した。1・2・6・8区・3区東側では北東-南西方向にかけて第4-2b層が堆積することによって形成された微高地を検出しており、微高地上に池泉・井戸・掘立柱建物等が立地する。微高地の南北に当たる3・4・5・7・9・10区では、第3-1b層が堆積しており、第3-1b面では主として耕作関連の溝・土坑を検出した。11・12区は現代作土・近世作土を除去した段階で、段丘構成層の粘土質シルトが一部露出する。12区南側の谷地形では第3-2b層の堆積があり、第3-2b面では近世の溝・耕作痕を検出した。

1・2区の微高地上は、第3-1a層～第3-2a層が堆積していないため、検出した遺構はそれぞれが帰属する遺構面を分けることができないため、第3-1b面でまとめて報告する。

#### 167池泉（巻頭図版1、図12～19、原色図版1～5・14、図版9・14）

2区で検出した。掘削から埋没に至るまで2回改築しており、遺構面を計3面検出した。167池泉は、①石組と礫敷をもつ構造（第1面、第2面が砂礫と泥質堆積物で埋没した後改築）、②石垣と礫敷をもつ構造（第2面、第3面が泥質堆積物で一定程度埋没した後改築）、③素掘りの状態（第3面）をそれぞれ検出した（新→古、①→②→③）。第1面で景石を用いていることや第3面が埋没した後には側方の基盤層（第4-2b層）から湧水を溜める施設であったと考えられることから、池泉とした。167池泉の南北には溝が接続しており、溝を介して北側では、190土坑・211平坦面、南側では、217・

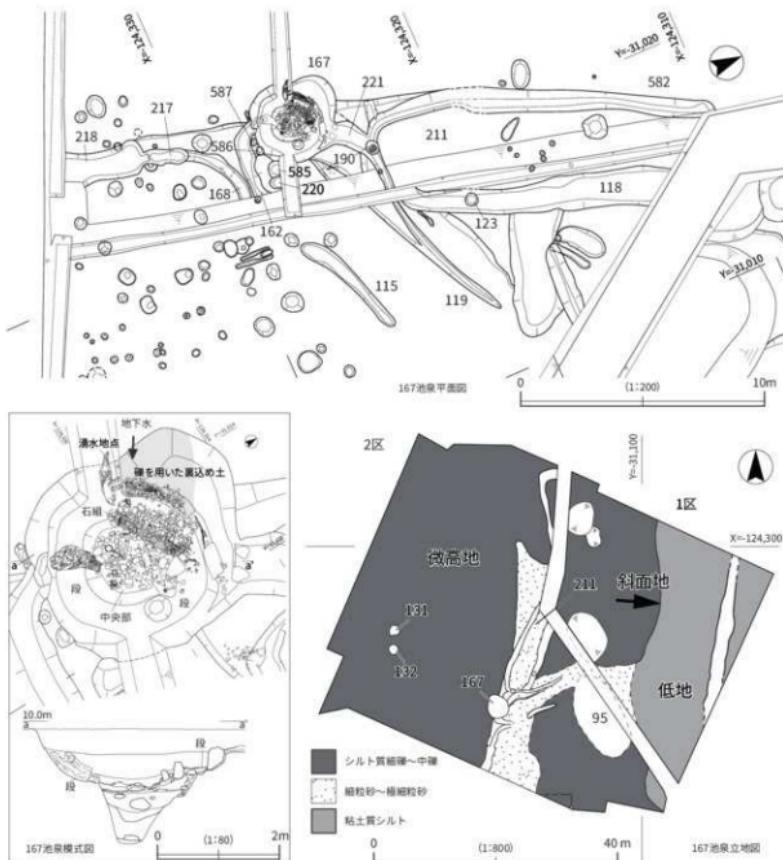


図12 167池泉平面、模式、立地

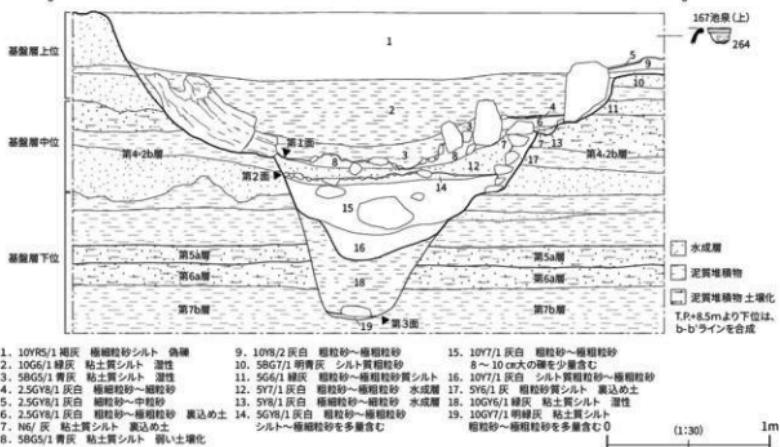


図 13 167 泉第1面平・断面

218土坑とつながっており、同時期のこれらの遺構が一体となって機能している状況を検出した。以下の報告では、167池泉を立地、第1面から第3面の調査成果、湧水地点、出土遺物の順に報告する。

a. 167池泉の検出状況と立地（図12）

167池泉周辺は現代作土による削平が顕著で、現代作土を除去した段階で、弥生時代後期以前に堆積した砂礫が露出する。167池泉は、後述する211平坦面等周辺の遺構と埋め戻しが同時に行われていたため当初溝状に検出しておらず（図20）、全体を掘り下げた段階で167池泉の掘形を検出した。

167池泉は、1区から2区にかけて検出した微高地の縁辺部に立地し、基盤層の極細粒砂～細粒砂が堆積する範囲に掘削する。極細粒砂～細粒砂は弥生時代後期以前に堆積した水成層である。極細粒砂～細粒砂の東西は礫層、1区東側は泥質堆積物が堆積し、東方向に緩やかな斜面地を形成する。167池泉機能時の地表面は現代に削平されているため本来の地形は不明であるが、中世に167池泉の立地する微高地は平坦化していなかったと考えられ（図12基盤層平面図の低地に区分した範囲に第3層と第4層が堆積する）、地形の特性を利用して、167池泉を構築している。

167池泉を掘削した基盤層の断面は土質で大きく3つに区分できる（図13）。上位の基盤層は167池泉の段より上で粗粒砂から板粗粒砂主体の砂礫、中位の基盤層は段上面から0.4～0.5m下まで粗粒砂質の泥質堆積物、下位の基盤層は泥質堆積物である。下位の泥質堆積物までの掘削は、後述する131・132井戸と同じである。

第1面と第2面機能時の167池泉の水の供給源は、上位・中位の基盤層を流れる浸透水が北西側から北側の池泉内の段を浸食している状況を検出していることや後述する湧水地点の加工から、北西側から北側上位・中位の基盤層を想定している。第3面埋没後に機能した面であるため、下位の基盤層からの湧水は想定できない。また、167池泉周辺では水を供給した可能性のある水利施設は一切確認されておらず、溝等の外部施設から水を引き込んだ可能性は極めて低いと考えられる。第3面の水の供給源は、下位の基盤層と、第1面と第2面と同様に上位・中位の基盤層も想定している。

b. 167池泉第1面（巻頭図版1、図13、原色図版1・2）

廃絶後の埋め戻し土と泥質堆積物を除去して検出した面を第1面とした。平面形は不整な円形、規模は直径3.4～3.5m、深さ0.9mである。検出面から深さ0.6mで、中央部が一段低く凹む。中央部の平面形は不整な円形、直径1.5m、段からの深さ0.3mである。段は幅0.4～0.5mの平坦面を形成し、北側から北西側にかけて礫が置かれている。段中央部側の法面では石組、中央部底面では礫敷をそれぞれ検出した。北側から北西側の掘形法面では裏込めに礫を充填しており、内側からの外観は石組の様相を呈する。また、段の南側平坦部では樹木を検出した。樹木は根株ないし根株に近い部分で、樹種はケヤキである。

167池泉では、礫の石組や礫敷とともに景石を検出した。景石は、167池泉と221溝の接点で1基（景石1）、中央部北側と段の境界で1基（景石2）を検出した。

景石1は221溝に直交して横向きに配置した景石である。平坦な面を上向きにして据える。長さ58.0cm、幅23.5cm、高さ32.0cm、岩質は砂岩である。景石2は景石1の南側に立てて配置した景石である。長さ28.0cm、幅26.0cm、高さ27.0cm、岩質は砂岩である。景石2周辺では、石組や礫敷に使用した礫よりも大きいものが置かれている状況を検出している。

なお、南側の溝内の礫（砂岩）を景石3として調査したが、景石と規模が異なるもので、最終的に景石から除外して欠番としている。

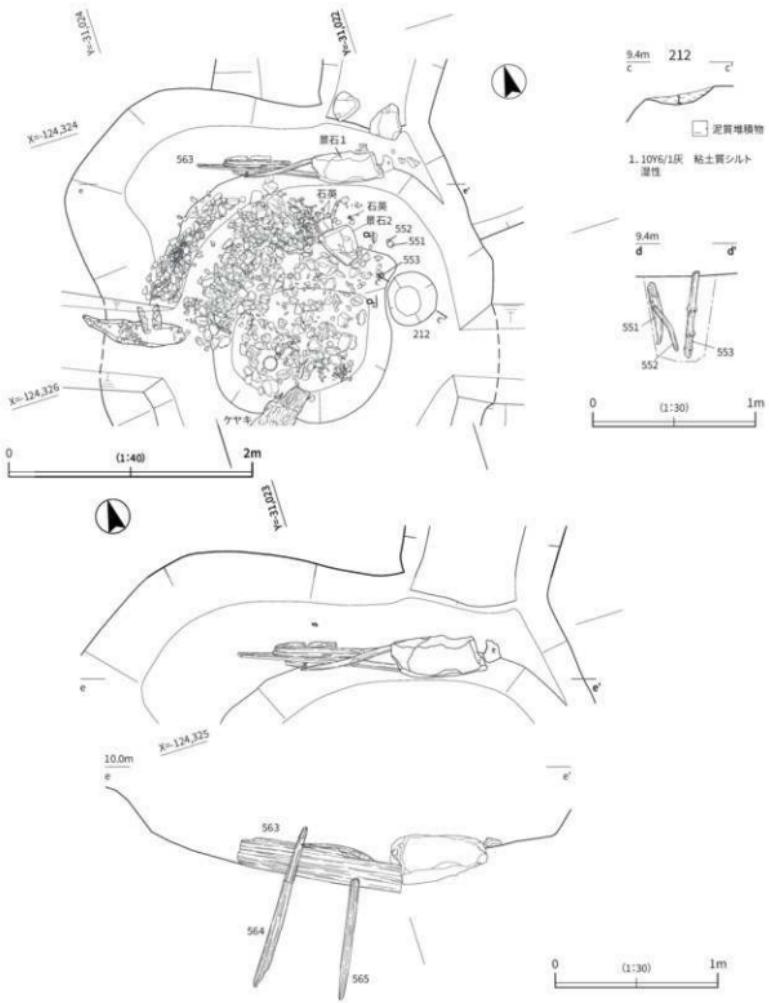


図14 167 池泉内第1面遺構平・断・立面

景石2西側の段では、1.5~3.0cm大の円礫（石英）を3点検出した（図14）。基盤層に含まれる礫は主として砂岩で、石英は人為的に置かれたものである可能性が高いと考えられる。

中央部の礫敷は1~20cm大の礫で構成される。岩質は主として砂岩を用いており、チャートが1点含まれる。中央部南側に比較的大きい10cm大の礫が集中する。西側の湧水地点に近い部分は、礫の上面高度が低くなっている。段に近い部分では下方への浸食痕が認められた。

中央部では、埋め戻し土を除去して検出した粘土質シルト（礫敷が埋没した段階、図13-3層）上面で、イネ科タケア科に属すると考えられる根株（竹か竿）を検出した。根株は側面の石組や礫敷に貫入している状況であり、また、枝や茎部分も確認できていない。自然に生えたものか、植えたものか判断できなかった。

中央部底面は、礫敷直下に堆積する泥質堆積物が植物の擾乱を受けていたことや堆積が薄いこと（図13-8層）もあり、整地されていたかどうか明確にすることはできなかった。遺物は、礫敷の直上から完形の土師器皿4が出土した。

段中央部北側から北西側の石組は、崩落により原位置を留めないものが含まれるもの、景石2の位置に合わせて北東一南西方向に構築する。その上部に当たる段の平坦部の礫と、掘形裏込めに礫が用いられた範囲とも一致している（図12・13）。

167池泉の北側では、第1面構築時に景石2に接して後述する土留め用の563板材を検出しており、基盤層上位・中位から湧出した浸透水の影響を受けやすい部分に護岸用の礫や土留め用の板材を用いたものと考えている。なお、掘形裏込めに用いられた礫は2~10cm大で、基盤層上位から中位の浸透水による壁面崩落を防止する機能を有したと考えられる。

段南側では、ケヤキを検出した。樹根に近い部分で、残存長1.67mである。直径0.30m~0.48m、外周は0.89~1.30mである。年輪数を断面で数えた結果、112本であった。掘形など植栽を行った痕跡は検出されておらず、167池泉構築時から当地に生えていた樹木であったと想定している。ケヤキは上部と下部に切断面を確認しており、上部の切断面は埋め戻し土が直上に堆積するため、廃絶時には伐採されていたと考えられる。ケヤキ上部の延長上では、断面形が円形の凹みを検出しており、ケヤキを伐採した後の抜き取り痕の可能性がある。下部の切断面は中央部の泥質堆積物が周囲に堆積するため、第1面の構築時か機能時に切断されたものと想定される。

段東側では212土坑や551~553杭を検出した。212土坑は、平面形は円形を呈し、直径0.4m、深さ0.05m、埋土は泥質堆積物である。機能は不明であるが、景石2との位置関係から、礫・景石の抜き取り穴であった可能性も想定している。

551~553杭は景石2と212土坑の間で検出した。景石2の北側から北西側は、北側から湧き出た地下水の浸食を強く受けた範囲に当たっており、杭は土留めのために打設したと考えられる。杭周辺は上面が浸食によって抉れていたため、167池泉第1面構築時に打設したものか、機能時に補強のために打設したものか判断することはできなかった。

167池泉第2面廃絶から第1面構築までの過程は、①第2面の砂礫による埋没、②泥質堆積物による埋没、③段の造成と石組・礫敷の構築、に復元できる。

①の砂礫は間層として泥質堆積物が部分的に入ることを確認しており、一度に埋没したのではなく、砂礫で埋没する過程で一度全体が水没するような状況があったと考えている。②の泥質堆積物は、石組・礫敷構築時の裏込めと明確に区別できなかったが、植物による擾乱や層厚が薄かったこと以外に、含水率が高い状態の泥質堆積物に礫を置いたことも原因ではないかと考えている。



写真3 第1面直下の礫接出状況（南東から）

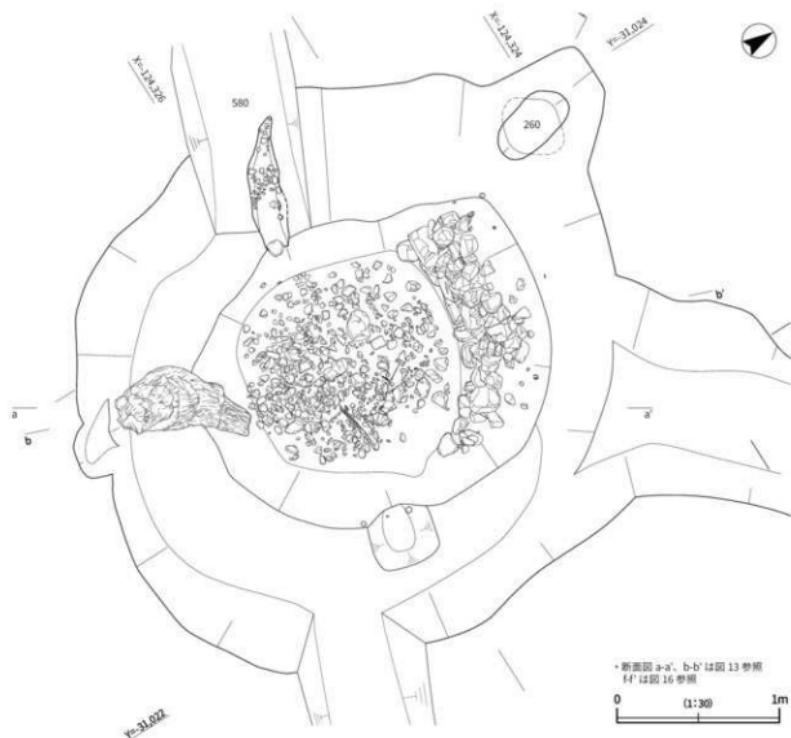


図 15 167 池泉第2面平面

景石2の北西側の造成では、563板材と板材を支える564・565杭を検出した（図14）。563板材は長さ104cm、幅19cm、厚み1.4cm、樹種はヒノキ。564杭は167池泉で確認した杭と異なり、板材（角杭）として加工したものを杭に転用したものである。長さ98cm、幅4.5cm、厚み3.5cm、樹種はヒノキである。565杭は74cm、直径6cmである。樹皮が遺存しており、先端のみ加工して尖らせる。563板材は、壁面の倒壊防止と補強目的として設置したと考えられる。167池泉第1面検出時には、土砂の流出により563板材の上部が露出した状態で検出した。また、563板材西側の造成土から曲物が出土した。遺存状態が不良で図示しえなかたが、直径約11cm、高さ3.6cm、厚さ0.02～0.03cmである。

後述する第2面石垣の北西隅では、礫がまとまって出土した。礫の帰属する層位は図13～8層の泥質堆積物である。人為的に置かれたものか、崩落によるものか判別できなかったが、第1面の段造成時の内部構造の可能性もあり、写真3に示した。

#### C. 167池泉第2面（図15・16、原色図版3～5）

水成層の砂礫（粗粒砂～極粗粒砂主体）を除去して検出した面を第2面とした。規模は、中央部の深さを除き、第1面と同じである。中央部の深さは0.95mである。第2面では、中央部北側から北西側で

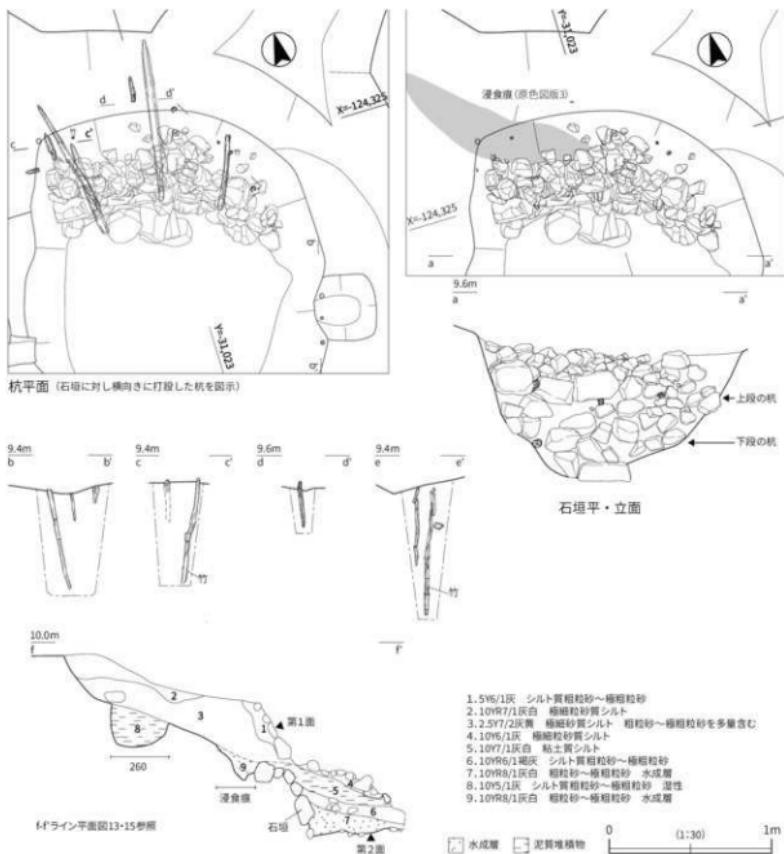


図 16 167 池泉内第2面構造平・断・立面

石垣、中央部底面で礫敷、北西側で260土坑、中央部北側から東側で杭を検出した。

石垣は幅1.4m、礫敷からの高さ（機能時）0.3m、基底石からの高さ（構築時）0.8mである。10～30cm大の礫を用いて構築し、補強のための杭を横向きに4本打設する。横向きに打設した杭は上段が3本、下段が1本である。下段の杭は断面円形、芯持材で樹皮が付き、先端のみ加工したものである。上段3本は断面方形ないし長方形、棒状あるいは板状に加工しており、転用材の可能性が高い。石垣の背面（北側）では、水成層の粗粒砂～極粗粒砂が堆積する浸食痕（凹み）を検出した。浸食痕は北側の460土坑周辺からの水流や北側から北西側にかけての基盤層から湧出した浸透水によって形成されたと考えられる。

中央部の礫敷は、2～20cm大の礫で構築し、主として砂岩を用いる。礫敷の上面の高さは、第1面

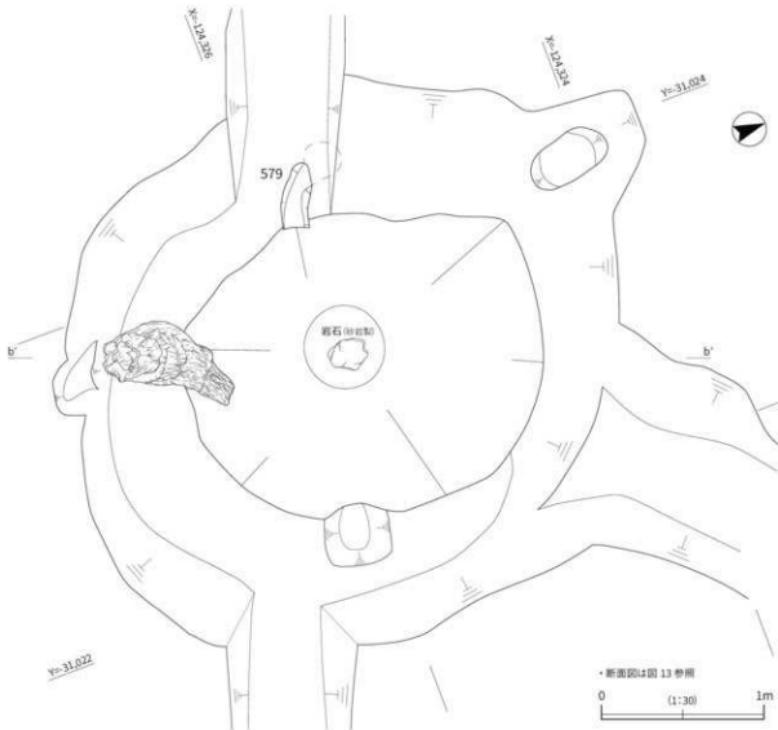


図17 167池泉第3面平面

と同じく西側が低い。礫敷直上からは白磁四耳壺が出土している。

260土坑は、167池泉北西に位置し、平面形は梢円形、長軸0.5m、短軸0.25m、深さ0.2m、埋土は泥質堆積物のシルト質粗粒砂～極粗粒砂である。西側と東側では、側方への浸食痕が認められた。260土坑から石垣背面にかけて浸食痕を検出しており、260土坑については、外部から167池泉内への水が直接流入するのを防ぎ、水流を緩衝する機能があったと想定している。

中央部北側から東側の杭は167池泉の内側掘形に近接する位置で合計9本検出した。長さは10cmから80cmのものまであった。9本の杭の内、2本は竹杭である。木杭は樹皮が付着するものが多く、先端のみ加工して尖らせている。掘形に近接する位置に打設されていることから、肩部の補強を目的として打設したと想定している。

167池泉第3面廃絶時から第2面構築までの過程は、①第3面が泥質堆積物で底面から0.4m程度埋没する、②中央部底面の整地と北側石垣の構築、③礫を含む粗粒砂～極粗粒砂で整地、④礫敷の構築、に復元できる。③の整地土には、砂岩製の礫・木葉が多数含まれる。木葉は樹種同定の結果、落葉広葉樹であるという結果を得ている。

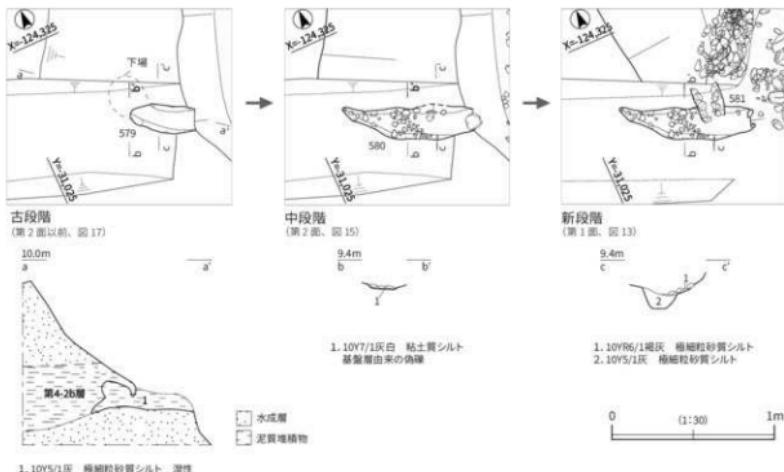


図18 167池泉湧水地点平・断面

d. 167池泉第3面(図17、原色図版5)

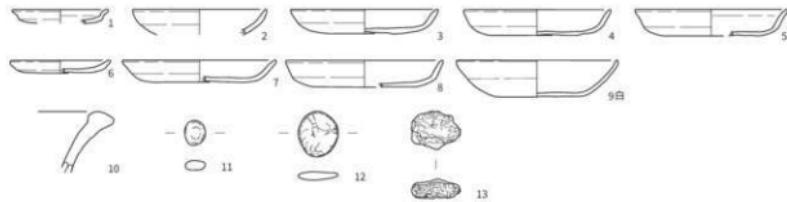
泥質堆積物を除去して検出した面を第3面とした。第1面・第2面の構築時に上部構造は失われ、当初の形状は不明である。検出面から底面までの深さは1.8mである。第1面・第2面で機能した段は、埋土の状況から、第3面で機能したかどうか検証することはできなかった。底面では、砂岩製の岩石を検出した。岩石は、底面が泥質堆積物によって埋没したところで確認しており、平坦な面を上向きにした状態で出土した。意図して置かれたものか、不明である。

底面は第7b層とした粘土質シルトを基盤層とし、発掘調査時には粘土質シルトからの湧水は皆無であった。後述する奈良時代の241井戸は検出面から2.8m下の砂礫(第7b層)を湧水層としており、167池泉が機能した段階の地下水位は奈良時代より高かったと考えられる。第3面の機能時から上位から中位の基盤層の湧水を主たる水の供給源とし、167池泉の底面の基盤層である粘土質シルトを不透水層として利用したことも想定している。

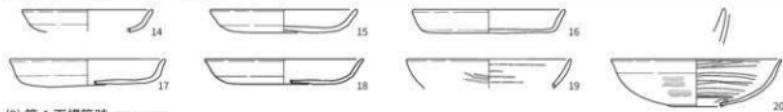
なお、第1面で記載したケヤキについては、167池泉埋土の堆積状況から第3面に伴うものか検証できなかったが、年輪数は112本あり、第3面機能時からあった可能性が高いと考えている。

e. 湧水地点(図18、原色図版2)

第1面・第2面で検出した段西側の湧水地点の改築は、2回行っている状況を確認しており、変遷過程を古・中・新段階に分けた。トレーンチを設定した場所に当たるため、直上の構造は不明である。なお、中段階は167池泉第2面、新段階は167池泉第1面にそれぞれ対応し、古段階は第3面に帰属させているが、167池泉埋土の堆積から第3面で機能したか検証できておらず、第2面で機能した可能性がある。新段階は、580溝に直交する581溝が機能する。581溝は幅0.18m、深さ0.03m、埋土は泥質堆積物である。第1面の北側から北西側の掘形に用いた礫が581溝直上まであった可能性が高く(図12模式図参照)、581溝は掘形に用いられた礫の下部構造として機能した可能性がある。中段階は、580溝が



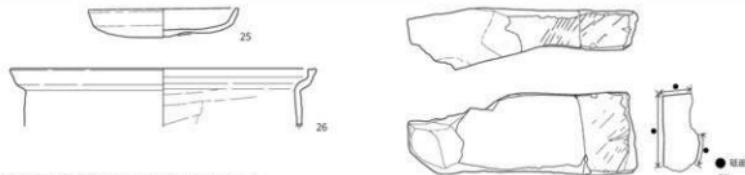
(1) 第1面機能時に堆積した泥層 (図13-2・3層)



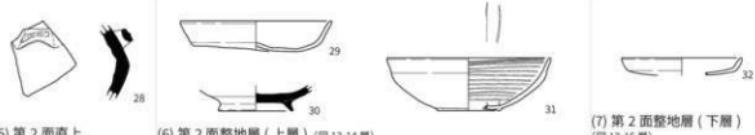
(2) 第1面構築時 (図13-6層)



(3) 第2面廃絶後に堆積した泥層 (図13-8層)



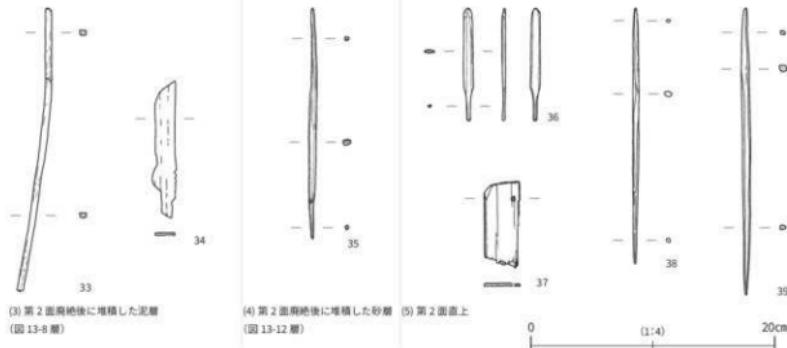
(4) 第2面廃絶後に堆積した砂層 (図13-12層)



(5) 第2面直上

(6) 第2面整地層(上層) (図13-14層)

(7) 第2面整地層(下層) (図13-16層)



(3) 第2面廃絶後に堆積した泥層 (図13-8層)

(4) 第2面廃絶後に堆積した砂層 (図13-12層)

(5) 第2面直上

図19 167池泉出土遺物

機能する。580溝は、幅0.2m、深さ0.02m、埋土は基盤層由来の粘土質シルトの偽礫である。580溝の検出面では、2～5cm大の礫が集石している状況を確認した。礫は平坦な面が上向きになっているものが多く、基盤層中に含まれない大きさのもので、人為的に置かれたものと考えている。古段階の579溝状の凹みは、幅0.18m、深さ0.1m、埋土は泥質堆積物である。北西に向かって横穴状に浸食されている。湧水地点の先端（北西端）は粗粒砂質シルト（中位の基盤層）に挟在する泥質堆積物の薄層に接しているところまでを確認した。579溝状の凹みは、人為的に加工されたか不明。

#### f. 167池泉の出土遺物（図19、図版9・14）

遺物は、土師器皿、白色土器皿、瓦質土器羽釜・鍋・盤、灰釉陶器碗、白磁四耳壺、木製品、石製品、鉛滓、動物骨、巻貝が出土した。土師器皿は法量に大きな差はない。瓦器椀は、外面はハケメが残るものもあるがミガキは施されず、内面ミガキは粗略である。木製品は、鐵形木製品、曲物、底板、箸が出土した。箸は合計15点出土し、このうち両口箸は5点で、遺存した箸の中では両口箸の割合が高い。底板は折敷底板と区別できるものも含まれ、合計14点出土した。石製品は、11が碁石、12が円形の礫である。円形の礫は薄く平らなもので、おはじき等の玩具の可能性がある。13は鉛滓の椀形滓で、滓質は緻密である。動物骨と巻貝は第2面より下位の整地層（埋め戻し土）から出土した。第1面から第3面まで出土遺物に明確な時期差はなく、時期は13世紀後葉から14世紀前葉を想定している。

123・190土坑、211平坦面、118・119・221溝・582溝（図12・20～25、図版1・9・10、原色図版3）

167池泉や211平坦面等の遺構は図20に示したとおり、当初、現代の段に沿って東西に溝状の遺構として検出した。切り合い関係を平面的に確認することはできず、掘り下げを行って各遺構を認識した。211平坦面直上の硬化面以外に機能面は確認されておらず、埋め戻しは短期間に集中して行われたものと考えられる。調査では、埋め戻し土から出土した遺物を211平坦面周辺〔以下、211平坦面（上）〕、167池泉内〔以下、167池泉（上）〕、218土坑〔以下、218土坑（上）〕に分けた。

167池泉の北側では、167池泉に接続する221溝、118・582溝と両溝に挟まれた211平坦面、221溝と582溝の接続部で190土坑を検出した（原色図版3）。平面形は不整な円形、直径0.65m、211平坦面からの深さ0.4m、埋土下位は泥質堆積物である。中央に曲物を据え、底面には2～5cm大の礫を置く。礫は砂岩製で、167池泉で主として用いられた礫の岩質と同じである。南側の肩部では、景石6・7を検出した。景石6は角柱状を呈し、長辺を横向きに据える。長さ12cm、幅7cm、高さ7.5cmである。景石7は不整な直方体を呈し、長辺を横向きに据える。長さ21.5cm、幅13cm、高さ13cmである。景石6・7の岩質はチャート。190土坑は埋土の状況から水溜として機能したと想定しているが、190土坑の機能時に167池泉の調査成果から地下水位が高かったと考えられることから、221溝と582溝を通して外部から水を溜める機能だけではなく、湧水を溜めていた可能性がある。

211平坦面は、118溝と582溝に囲まれた範囲で、検出長12.5m、幅2.1～3.2mである。掘り込みを行って整地しており、上面には硬化面が形成される。平坦面は、深さ0.45mの掘削を行った後、粗粒砂～極粗粒砂で地均しした後、シルト質粗粒砂～極粗粒砂で整地して形成される。整地層上層に含まれるシルト偽礫は、黄褐色を呈し、周辺の基盤層ではなく、11・12区で検出した段丘を構成する地層に由来すると考えられる。シルト偽礫は横方向に細長い形状を示しており、シルト質粗粒砂～極粗粒砂と互層状に整地されている部分もあった。

遺物は平坦面直上から主として土師器皿がまとめて出土しており、211平坦面（上）とした埋め戻

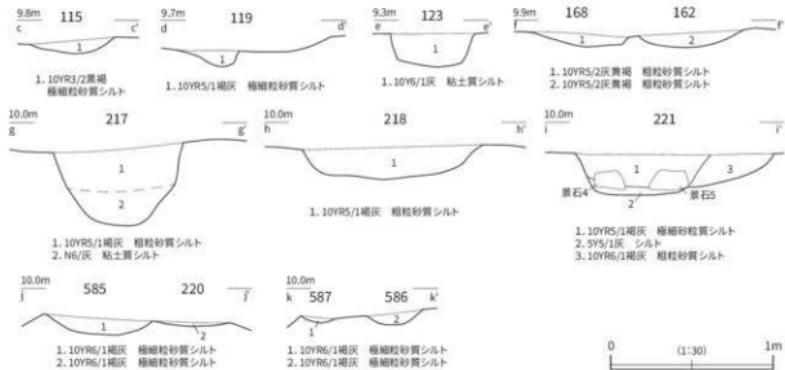
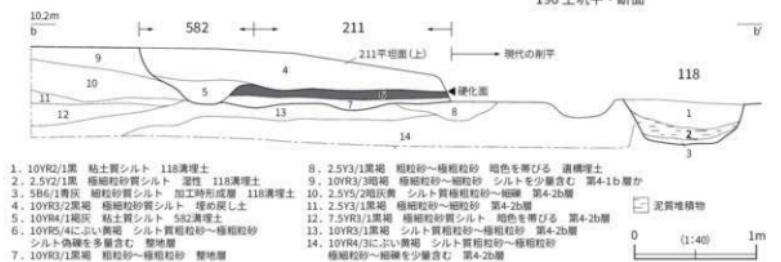
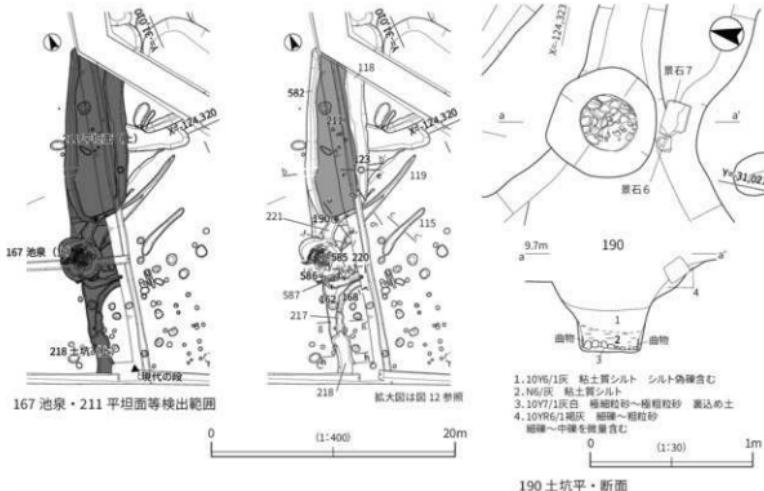


図 20 190 土坑他平・断面

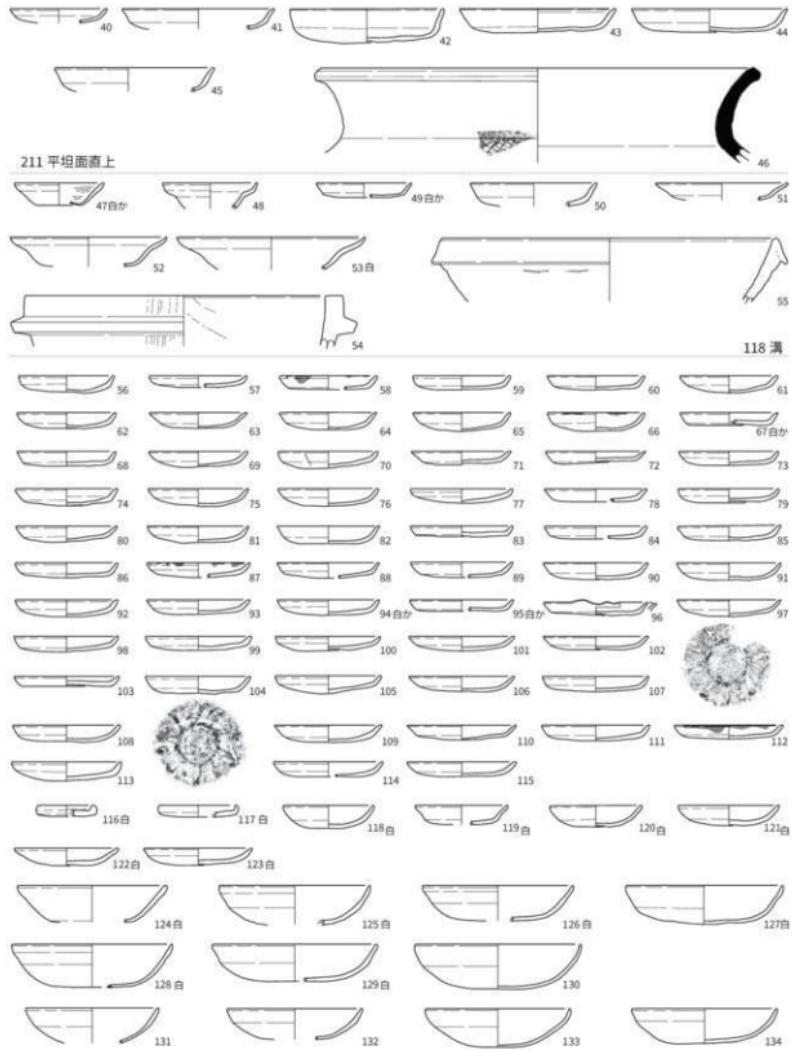
し土からは大量の土器が出土した（図版1）。211平坦面の埋め戻しについては、211平坦面直上以外の機能面の有無について検討を行ったが確認されなかった。211平坦面直上と211平坦面（上）からは、土師器小皿・皿、白色土器皿、須恵器甕・鉢、瓦器椀・羽釜・鍋・壺・鉢・盤・甕、白磁碗、青磁碗・皿、黄釉褐彩陶器盤・鉢、灰釉陶器皿・鉢、緑釉陶器・瓦、鉄製品、馬齒が出土した。

土師器小皿は口縁部を一段ナデし、上方に短く立ち上がるものが大半を占めるが、底面から湾曲しながら口縁部が立ち上がる66・108や、口縁部と底面境界部の屈曲が明瞭で口縁部の立ち上がりが短い77・83・103等がある。97・104は底面に右回りの断続的なナデを施す。218にもあり、131井戸中層から出土した白色土器皿（底部のみで、図化せず）にも同様の調整痕が残る。瓦器椀222～233は、内面ミガキの間隔が広く、見込み暗文は粗雑である。瓦器片口鉢241は胎土が今回出土した白色土器の粗い砂粒を含んだものに類似する。248は焼成不良の瓦質甕で、211平坦面周辺で1～2個体分の破片が出土している。瓦器羽釜242・盤249は精良な胎土で焼成は軟質、製作地が同じと考えられる。249は底面全体に粗粒圧痕が付く。須恵器鉢254・255は東幡系、254は重ね焼きの痕跡が残る。須恵器甕46・256は瀬戸内東部地域（亀山周辺か）の搬入品である。白磁碗257、皿258、青磁は碗262、皿259・261、杯260が少量出土した。図化した以外に白磁四耳壺・白磁碗IV類の細片が含まれる。263は黄釉褐彩陶器盤で、赤彩を施す。267・268は須恵器皿と鉢である。陶器は、細片のため、図化していないが、常滑焼すり鉢が1点出土している。251～253は摺津型羽釜、265はいわゆる「て」の字形皿、266は黒色土器B類椀ないし鉢の底部、269は山城産の緑釉陶器碗である。270～272は鉄釘で、211平坦面周辺から合計11点出土した。273は玄武岩製の石錘である。また、軒瓦274～276が出土した。軒丸瓦274は、珠文と外縁のみが遺存する。軒平瓦275は、文様は唐草文である。段頸。軒平瓦276は、文様は唐草文。唐草文に接して横方向の範傷がある。曲線頸。軒瓦は11世紀後半から12世紀代のものと考えられる。この他、167池泉（上）からは黄釉褐彩陶器264が出土した。赤彩があり、器種は鉢か。167池泉内の埋め戻しから出土した土器は264のみであった。

218土坑（上）からは、瓦器椀、土師器羽釜250、丸瓦277が出土した。土師器羽釜は190溝でも出土しているが、同時代の遺構を含めて総じて少ない。煮沸具としては瓦器羽釜・鍋が出土しており、割合は鍋が多い。丸瓦は玉縁式で凸面に網目タキの痕跡を残す。軒瓦と同時期のものと考えられる。

118溝は、幅1.0m、深さ0.35mである。埋土下位の機能時堆積物には、泥質堆積物が認められる。溝底面は北方向に低く、傾斜角は3.7°。遺物は、土師器皿・鉢、白色土器皿、瓦器皿・鍋、白磁碗、青磁碗、石鍋が出土した。47は土師器皿、いわゆるヘソ皿で、48も形状からヘソ皿になる可能性がある。51～53は口縁部が外反し、端部が上方向に立ち上がるもので、この形状のものは118溝のみから出土している。211平坦面（上）から出土した遺物にも含まれていない。土師器鉢55は焼成不良の瓦器の可能性がある。123土坑は118溝底面で検出した。平面形は円形、直径0.5m、深さ0.2mである。センダンの種実が出土した。190土坑のように曲物を据えていないが、水溜施設であった可能性がある。

119溝は、幅0.2～0.4m、深さ0.1m、埋土は極細粒砂質シルトである。221・582溝の合流地点から北東側部分を119溝としている。遺物は土師器皿、瓦器椀、須恵器甕が出土した。221溝は、167池泉と北側で接続する溝である。第1面構築時に掘り直しを行っている（以下、古・新段階として報告する）。新段階は幅0.8m、深さ0.25m、埋土は極細粒砂質シルトである。167池泉との接続部では、溝内で景石4と景石5を検出した。景石4は節理が溝に平行するように、長辺を南北方向に据える。長さ28cm、幅26cm、高さ17.8cm、岩質は緑色岩である。景石5は平坦面（長辺）が南向きになるように据



211 平坦面 (上)

0 (1:4) 20cm

图 21 211 平坦面他出土遗物 (1)

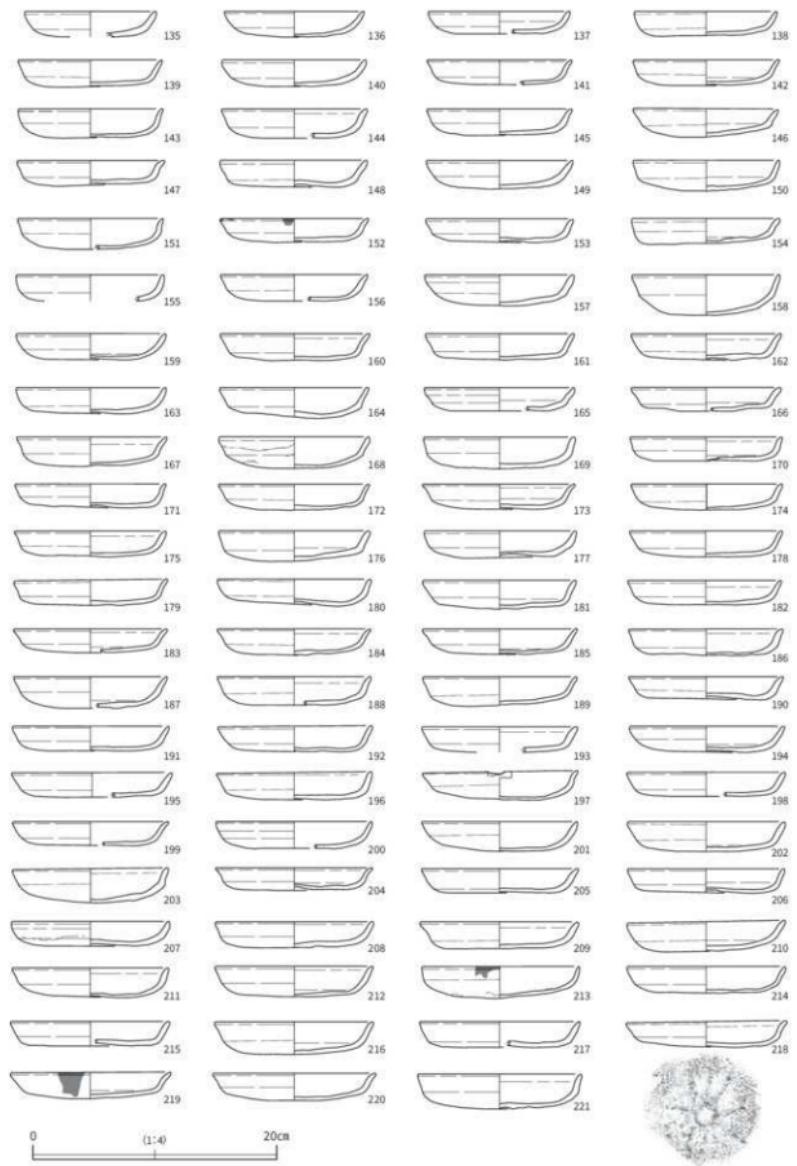


图 22 211 平坦面他出土遗物 (2)

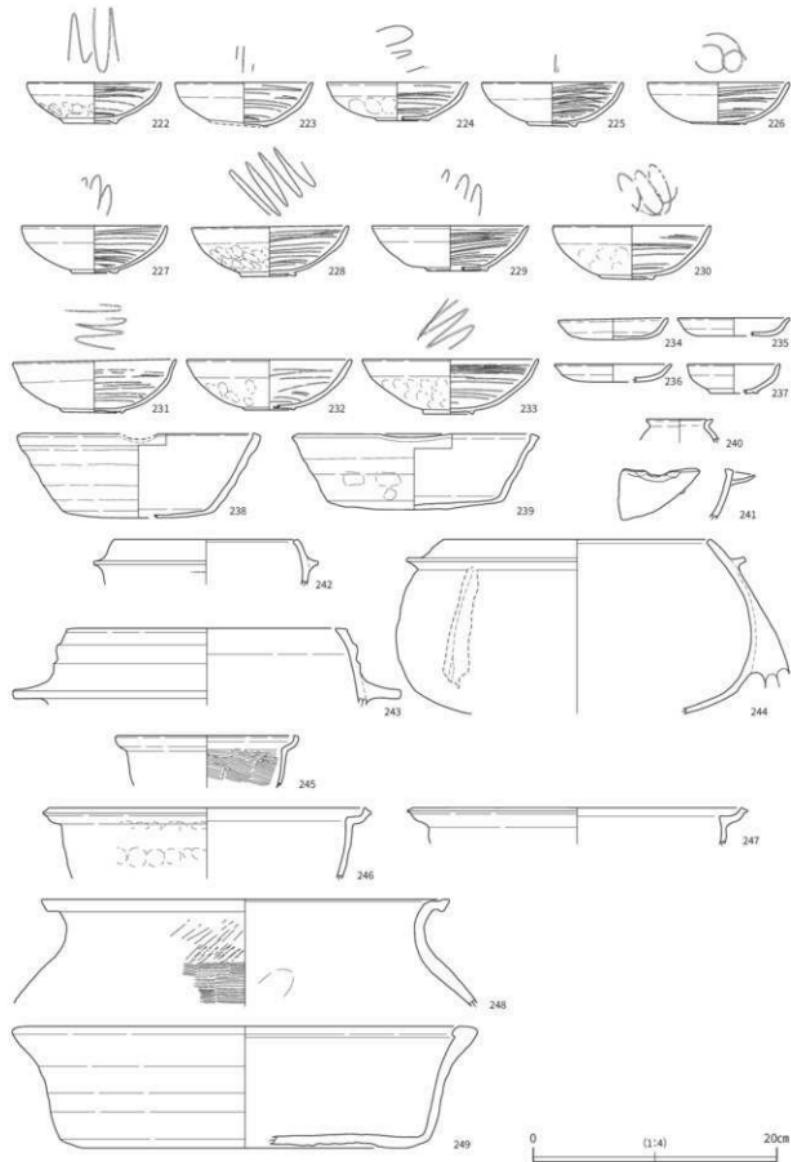


图 23 211 平坦面他出土遗物 (3)

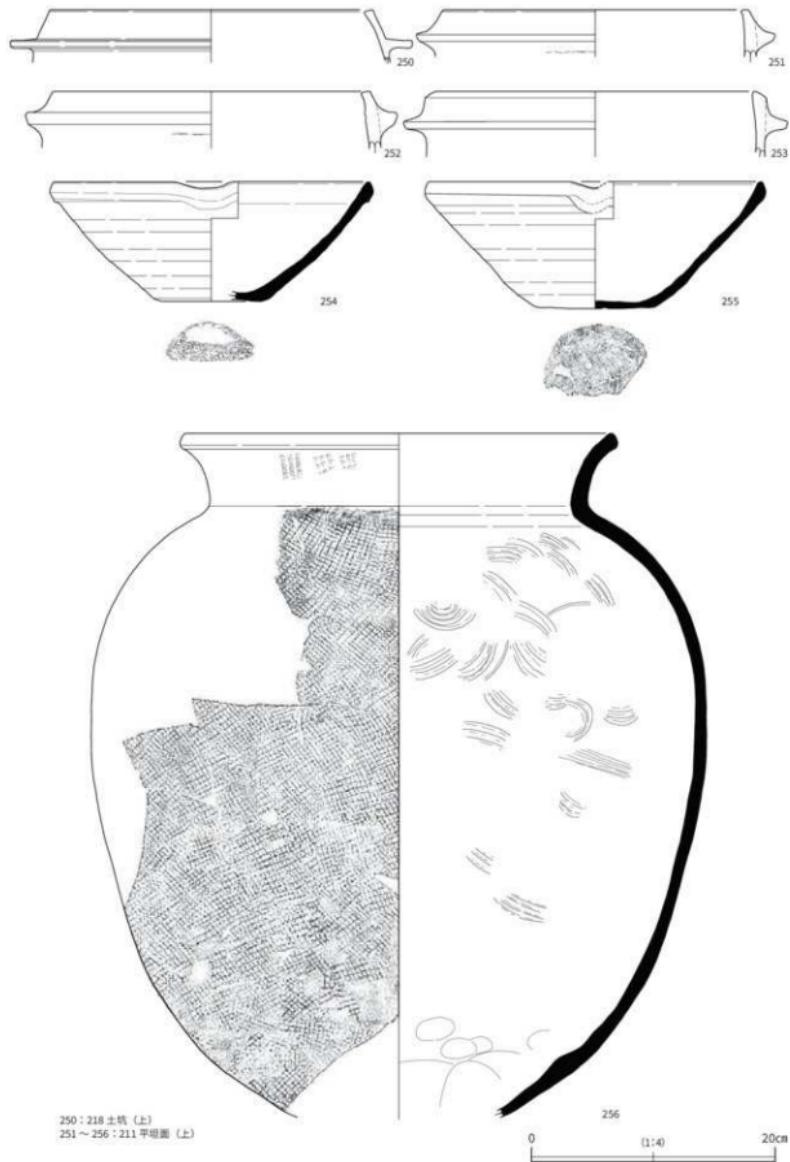


图 24 211 平坦面出土遗物 (4)

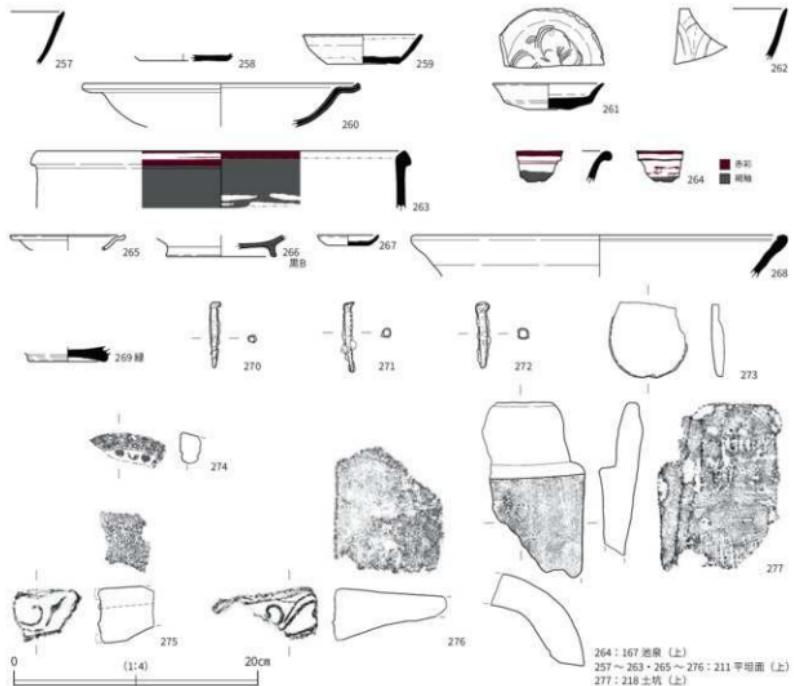


図25 211平坦面出土遺物(5)

える。長さ22cm、幅17cm、高さ15cm、岩質は砂岩である。溝底面は北東方向に低く、傾斜角は6.3°である。167池泉が湛水した際に外側に水が流れるように加工する。新段階の遺物には古墳時代以前の土師器が混入するが、167池泉と同様、廃絶時の埋め戻しにおいても、土器等は投棄されていない。古段階は、幅0.4m以上、深さ0.2m、埋土は粗粒砂質シルトである。遺物は土師器、瓦器椀が出土した。

582溝(図20)は幅0.5~1.0m、深さ0.5m、埋土は泥質堆積物である。溝底面は北方に低く、傾斜角は0.22°である。遺物は出土しなかった。

#### 115・162・168溝、217・218・220・585~587土坑(図12・20)

167池泉の南側では、167池泉に接続する162溝、168溝と168溝に連続する217・218土坑、168・162溝の北東側の延長部と考えられる115溝を検出した。162溝は、幅0.7m、深さ0.1m、埋土は粗粒砂質シルトである。溝底面は北東方向に低く、傾斜角は1.5°である。221溝と同様、167池泉から湧出した溝が東方向に流れるように加工されている。115溝は幅0.5m、深さ0.08m、埋土は極細粒砂質シルトである。位置関係から162溝と本来連続していたものと考えられる。溝底面は北東方向に低く、傾斜角は中央まで平坦に近く、北東側で15°である。遺物は土師器皿、須恵器甕、瓦器椀・羽釜・鍋が出土した。量的に他の溝より多いが、大半は細片である。168溝、217・218土坑は同時期に連続して機能した遺構で、水流が南方向になるように加工されている。168溝は幅0.6m、深さ0.07m、埋土は粗粒砂質シルトである。

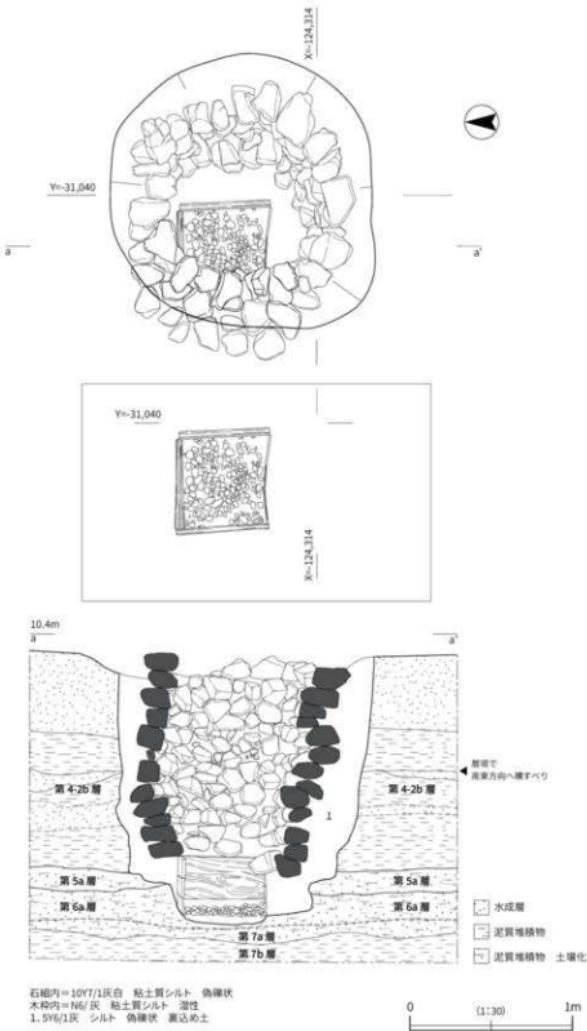


図26 131井戸平・立面

トである。遺物は土師器皿が出土した。217土坑は、幅0.8m、深さ0.45m、埋土は泥質堆積物である。遺物は、土師器細片が少量出土した。218土坑は幅1.1m、深さ0.2m、埋土は泥質堆積物である。遺物は土師器皿、瓦器楕・羽釜・鍋が出土した。217・218土坑は、埋土の状況から水溜と考えられるが、190土坑と同様に、湧水を溜める施設として機能した可能性もある。220・585土坑の平面形は北側にト

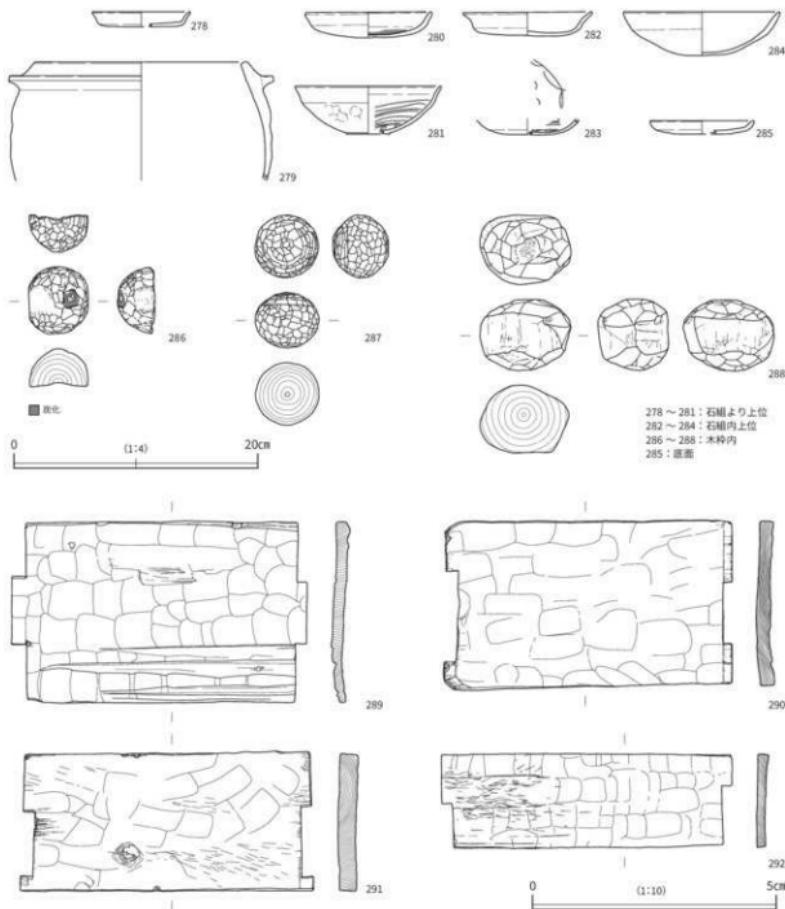


図27 131井戸出土遺物

レンチを設定したため、全体の形状は不明である。220・585土坑は、検出した範囲で梢円形状を呈する。220土坑は南北0.5m以上、東西0.5m、深さ0.02m、埋土は極細粒砂質シルトである。土師器皿が出土した。585土坑は南北0.4m以上、東西0.6m、深さ0.1m、埋土は極細粒砂質シルトである。586土坑は平面円形、直径0.3m、深さ0.07m、埋土は極細粒砂質シルトである。587土坑は平面円形、直径0.2m、深さ0.03m、埋土は極細粒砂質シルトである。585～587土坑から遺物は出土しなかった。

#### 131井戸（図26・27、図版2・14）

2区で検出した。平面形は不整な円形、直径1.7m、深さ1.6mである。井戸枠は、上部が石組、下部が方形横板組である。石組内の埋土は偽礫状の粘土質シルト、木枠内埋土は泥質堆積物である。基盤

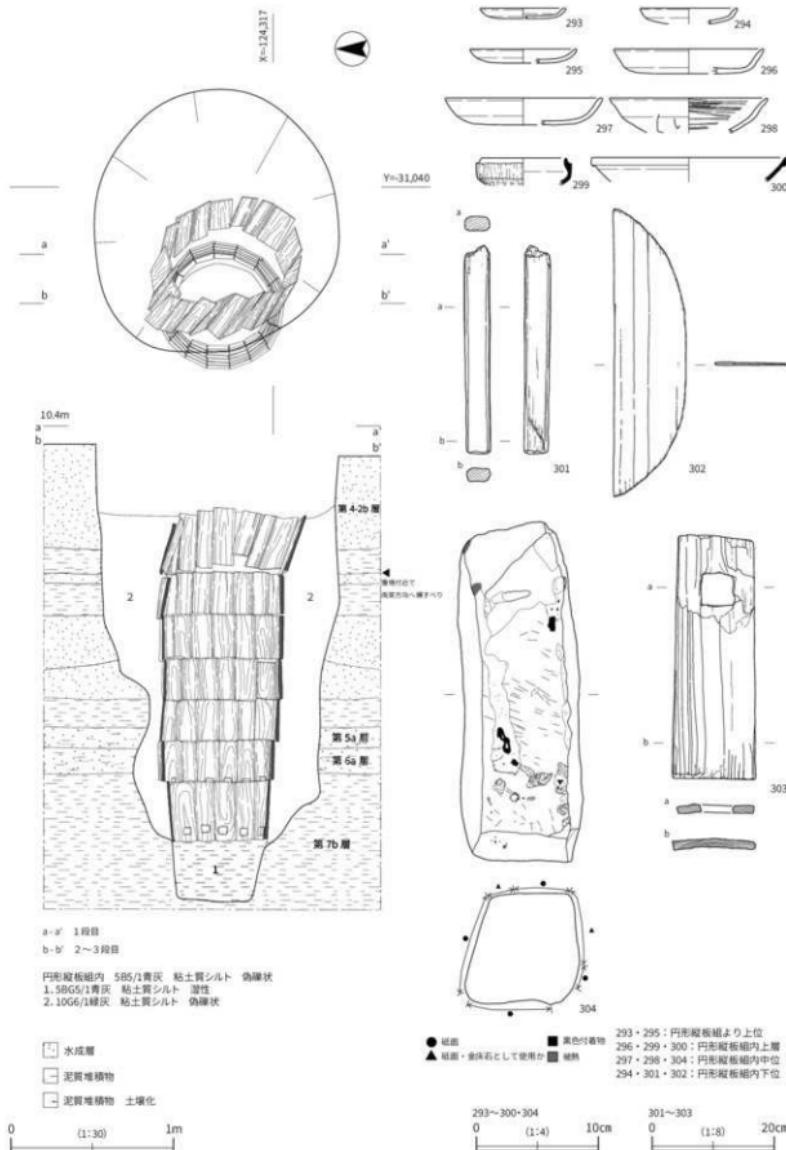


図28 132 井戸平・立面、出土遺物

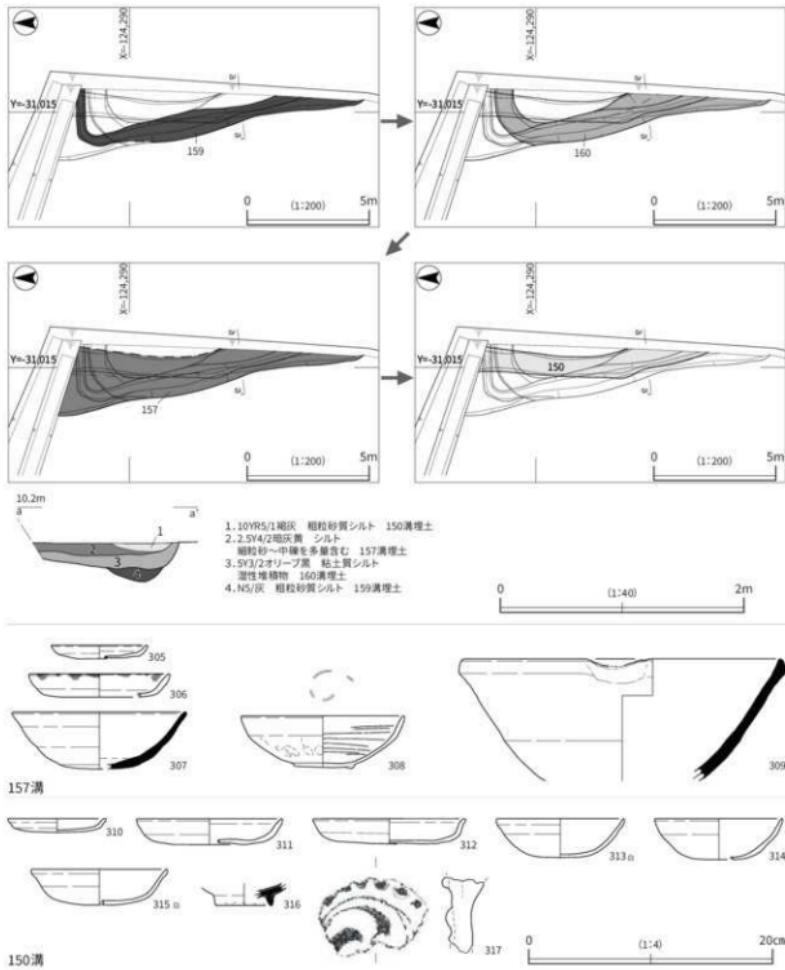


図29 150溝他平・断面、出土遺物

層の粗粒砂～極粗粒砂の層境付近で東方向に横すべりを確認しており、上部の掘形と石組がずれている（図版2-1）。横すべりは、132井戸でも確認しているが、調査区壁断面や他の遺構では確認されなかった。石組は10～30cm大の礫を用いて構築する。礫の岩質は砂岩である。下部構造の方形横板組は、板材に切り欠きを加工して方形に組んだものである。厚みが薄い板材を用いた南側は土圧により内側に変形している状況を検出した。木枠内の底面では礫敷を検出した。礫は1～5cm大で、岩質は砂岩である。底面は泥層（第6a層～第7b層）に達する。

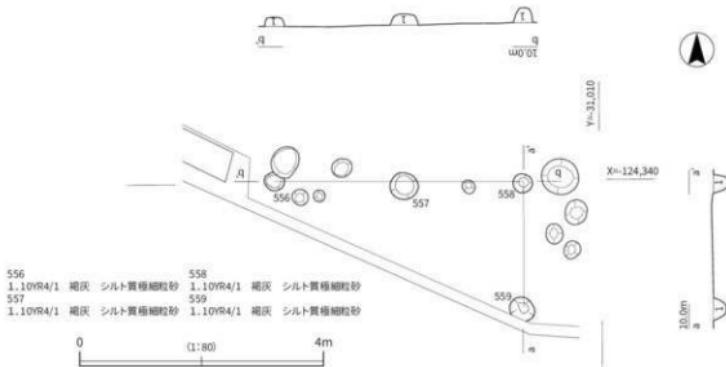


図 30 掘立柱建物 1 平・断面

遺物は、土師器皿、須恵器壺・鉢、瓦器椀・皿、羽釜・鍋、常滑焼甕、木製品、滑石製石鍋、爬虫類カメ目に属すると考えられる動物骨が出土した。木製品は、球状木製品（毬杖）が 3 点出土した。井戸枠の下部構造に用いられた枠板は樹種スギ、建築部材等の転用材の可能性がある。

### 132井戸（図28、図版2）

2 区で検出した。井戸枠に 7 段に組み合わせた円形縦板組を用いる。基盤層の粗粒砂～極粗粒砂の上面付近で、南東方向に上部の地層が横すべりしており、掘形と 1 段目の縦板が下位の構造とずれる。平面形は梢円形、長軸 1.6m、短軸 1.5m、深さ 2.8m である。円形縦板組に用いられた板材は長さ 25～39 cm、幅 9～28cm、厚み 0.8～3.7cm である。板材には方形の孔を穿つものがあり（図28—板材303）、建築部材等を転用したと考えている。円形縦板組のタガは板材外側の上下 2 段で検出しており、複数の竹を束ねて燃りを加えたものを用いる。薄い板材（断面三角形）をタガと板材の間に打ち込んで、円形縦板組を締めているものもあった。井戸底は泥層（第 6 a 層～第 7 b 層）に達する。

遺物は、土師器皿、須恵器壺、瓦器椀・鍋・壺、白磁碗、青白磁合子、木製品が出土した。木製品は、棒状木製品（柄か）301、曲物底板302、井戸枠に用いられた板材303が出土した。円形縦板組に用いられた板材には方形の穴を加工したものが 9 点出土した。

### 150・157・159・160溝（図29、図版4・10）

2 区で検出した。159溝→160溝→157溝→150溝の順に掘り直しが行われている。159溝は幅 0.3～1.1m、深さ 0.3m、埋土は粗粒砂質シルトである。遺物は、土師器皿、瓦器羽釜か鍋の体部片が出土した。160溝は幅 1.4m、深さ 0.8m、埋土は泥質堆積物である。遺物には古墳時代以前のものが混入する。157溝は幅 1.4～2.8m、深さ 0.1m、埋土はシルトである。遺物は土師器皿、須恵器鉢、瓦器椀が出土した。150溝は幅 0.8m、深さ 0.07m、埋土は粗粒砂質シルトである。

遺物は土師器皿、白色土器皿、瓦器羽釜・鍋・盤、青磁碗、軒丸瓦が出土した。軒丸瓦は文様が巴文、頭部が先細りし、尾部は圓錐状に接している。時期は、167池泉や211平坦部と同時期の13世紀後葉から14世紀前葉と考えられる。

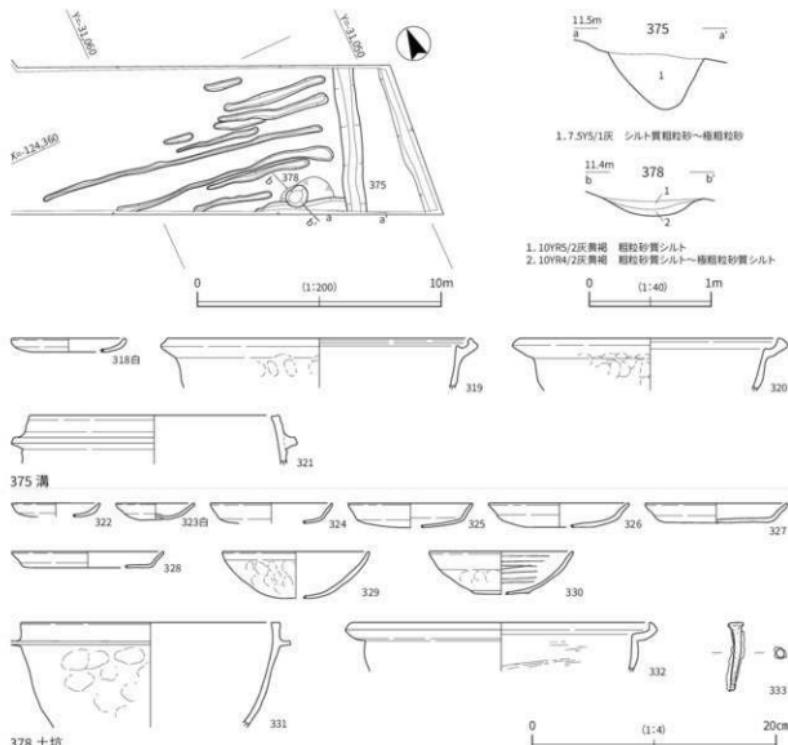


図31 7区第3-2b面平面、375溝・378土坑断面、出土遺物

#### 掘立柱建物1(図30、図版3)

2区で検出した。南側は調査区外のため、全容は不明である。建物構造は東西2間以上、南北1間以上に復元できる。遺物が出土していないため、時期は不明である。ただし、周辺で検出した同じ規模・埋土のピットは出土遺物から大半が13世紀後葉から14世紀に位置付けられるもので、掘立柱建物1についても同じ時期を想定している。

#### 375溝・378土坑(図31)

7区で検出した。375溝は幅0.8m、深さ0.45mである。埋土はシルト質粗粒砂～極粗粒砂で、下位は泥質である。遺物は土師器皿・羽釜・白色土器・須恵器鉢・瓦器椀・鍋・火鉢が出土した。375溝西側では耕作に関係する溝を検出しておらず、375溝は灌漑及び地割に関係する水路と考えられる。378土坑は、平面形は不整形、長軸0.9m、短軸0.8m、深さ0.5m、埋土は粗粒砂質シルト主体である。遺物は、土師器皿・白色土器皿・須恵器鉢・瓦器椀・羽釜・鍋・盤・鉄釘が出土した。375溝・378土坑の時期は、13世紀末葉から14世紀中葉を想定している。白色土器皿323はいわゆるヘソ皿で、底部の押し

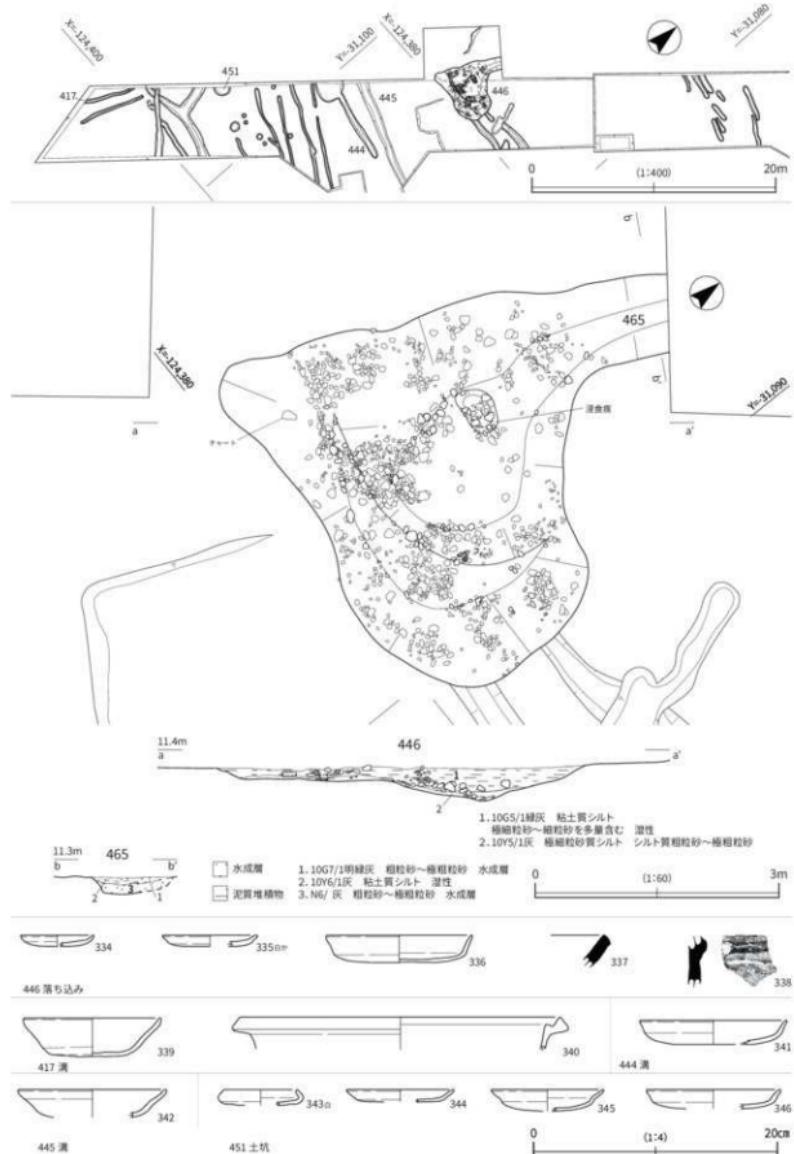


図 32 465 溝・446 落ち込み平・断面、出土遺物



図33 332井戸他平・立面、出土遺物

上げが進行したものであり、2区で検出した中世遺構より後出する可能性がある。

#### 465溝・446落ち込み（図32、図版3）

7区で検出した。465溝は幅1.0m、深さ0.2m、埋土は上層と下層が粗粒砂～極粗粒砂、中層が泥質堆積物である。446落ち込みと北側で接続し、水を流し込んでいたと考えられる。遺物は、土師器皿、瓦器鉢・羽釜と白色土器の可能性がある破片が出土した。

446落ち込みは、平面形は不整形、長軸4.6m、短軸3.0m、深さ0.4mである。埋土は上層が泥質堆積物、下層が粗粒砂～極粗粒砂である。底面では465溝からの流水が形成した浸食痕を検出した。また粗粒砂～極粗粒砂の直上では、礫の集石を検出した。礫は2～10cm大、岩質は砂岩主体である。礫の内1点は法量が大きく、岩質はチャートである。チャート製の礫は長さ18cm、幅10cm、厚み0.6cmである。集石を構成する大きさの礫は基盤層には含まれないもので、砂岩の産出地である北摂山地や水無瀬川上流部から運ばれてきた可能性が高い。なお、446落ち込み周辺は現代や中世に削平を受けており、排水を行った溝等の遺構は確認されなかった。遺物は土師器皿、瓦器羽釜か鍋の体部片、常滑焼鉢が出土した。他に、円筒埴輪の破片が9点出土している。土師器皿336は、埋土下層から出土し、完形に近い。時期は、13世紀末から14世紀中葉頃を想定している。

#### 417・444溝、451土坑（図32）

7区では耕作に関係する溝・土坑から中世の遺物が出土した。417溝は幅0.3m、深さ0.04m、埋土はシルトである。土師器皿、瓦器鍋が出土した。444溝は幅0.6m、深さ0.05m、埋土はシルトである。

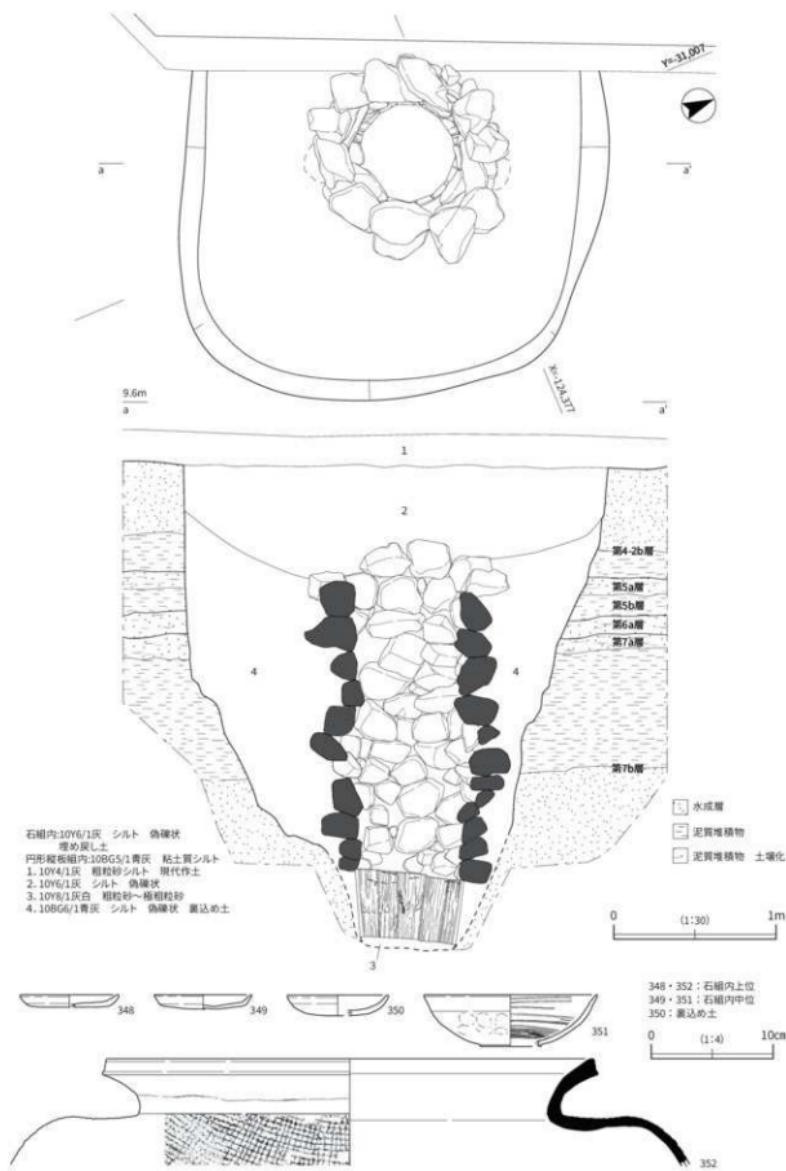


図34 357 井戸平・立面、出土遺物

451土坑は北西側が調査地外にあるため全容は不明である。検出した範囲で平面形は半円形状を呈し、最大長1.2m、深さ0.2m、埋土は泥質堆積物である。遺物は、土師器皿、瓦器羽釜か鍋体部片が出土した。土師器皿には、コースター状の343が含まれる。なお、土師器皿342は445溝（近世以降）から出土したものである。

### 332井戸（図33）

8区で検出した。平面形は不整な楕円形、長軸1.65m、短軸1.45m、深さ1.3mである。埋土上層は偽縫状の粘土質シルト、下層は泥質堆積物である。上層は埋め戻し土と考えられ、上層を除去した段階で平面形が方形に加工されている状況を検出した。廃絶時に井戸枠が抜き取られた可能性を想定している。遺物は土師器、瓦器椀が出土しているが、細片のため図化していない。時期は13世紀から14世紀を想定している。

### 柱穴列1・336溝（図33）

8区で検出した。柱穴列1は北・南側は調査区外になるため、全容は不明である。柵列ないし塀の一部を想定しており、柱穴には切り合い関係があることから建て替えがあったと考えられる。柱痕は確認されなかった。柱穴間の距離は0.74mである。柱穴から遺物は出土しなかった。336溝は幅0.58m、深さ0.18m、埋土はシルト質粗粒砂である。遺物は土師器皿、瓦器椀が出土した。瓦器椀は細片であったため図化していないが、高台の付いた底部が出土している。336溝の時期は13世紀後葉から14世紀前葉頃を想定している。

### 357井戸（図34、図版3）

8区で検出した。西側は調査区外に当たるため、全容は不明である。井戸枠は上部が石組、下部が円形縦板組である。検出した範囲で、平面形は隅丸方形形状を呈し、東西2.0m以上、南北2.6m、深さ2.97mである。埋土は石組内が偽縫状のシルト（埋め戻し土）、円形縦板組内が泥質堆積物である。石組は、10~40cm大の礫を使用し、埋め戻し時に上部の礫は一部抜き取られている。礫の岩質は砂岩主

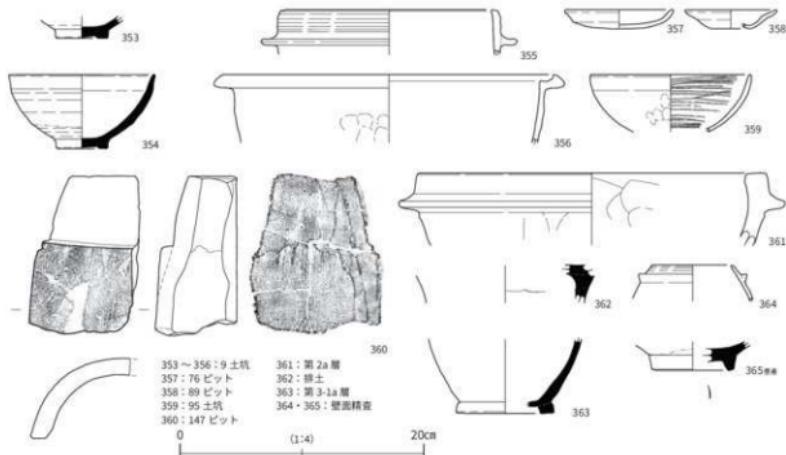


図35 9土坑他出土遺物

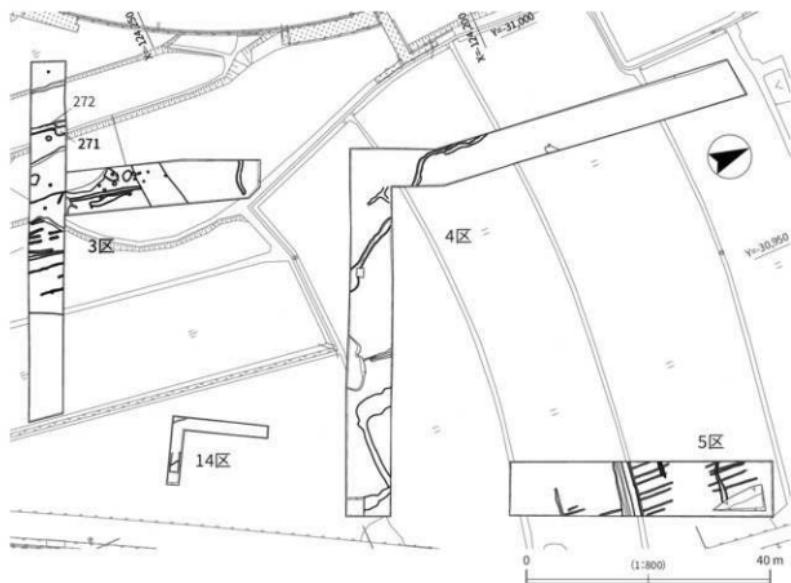


図36 第3-1b面平面(北側)

体。下部の円形縦板組は直径0.7mである。円形縦板組に用いられた板材は長さ39.8~40.0cm、幅18.0cm、厚み2.0~2.3cmである。円形縦板組に嵌められたタガは上段・中段・下段の3段分検出しており、竹を割ったものを使用している。底面は第7b層とした粗粒砂~極粗粒砂に達する。遺物は、土師器皿、須恵器壺、瓦器椀が出土した。

#### 9・95土坑、76・89・147ピット、第2a層他出土遺物(図11・35)

1・2・7~10区で、遺物掲載した遺構と、第2a層出土遺物を以下にまとめる。9・95土坑、76・89・147ピットは2区で検出した(図11)。9土坑は、検出した範囲で平面形は不整形、長軸3.6m以上、短軸1.5m以上、深さ0.15m、埋土は粘土質シルトである。遺物は、土師器皿、瓦器椀・火鉢、常滑焼、美濃天目碗が出土した。天目碗353・354は14世紀末から15世紀頃のものと考えられる。95土坑は、平面形は不整形、長軸7.0m以上、深さ0.2m、埋土は泥質堆積物である。遺物は瓦器椀359が出土した。13世紀代のものと考えられる。76ピットは、平面形は円形、直径0.3m、深さ0.2m、埋土は砂質シルトである。土師器皿357が出土しており、時期は13世紀後半から14世紀前葉頃のものと考えられる。89ピットは、平面形は円形、直径0.3m、深さは0.2m以下、埋土は砂質シルトである。土師器皿358が出土しており、時期は13世紀後葉から14世紀前葉のものと考えられる。147ピットは、平面形は円形、直径0.3m、深さは0.2m以下、埋土はシルトである。丸瓦360が出土しており、118土坑周辺の埋め戻し土から出土した丸瓦277と同じ時期のものと考えられる。石鍋361は150溝周辺の第2a層、陶器盤362は排土、須恵器壺363は第3-1a層、瓦器羽釜364は7区壁面、白磁碗365は9区壁面から出土した。362は華南産綠釉陶器である。後述する7区第3-1b層(図41)から皿か鉢の体部片がも

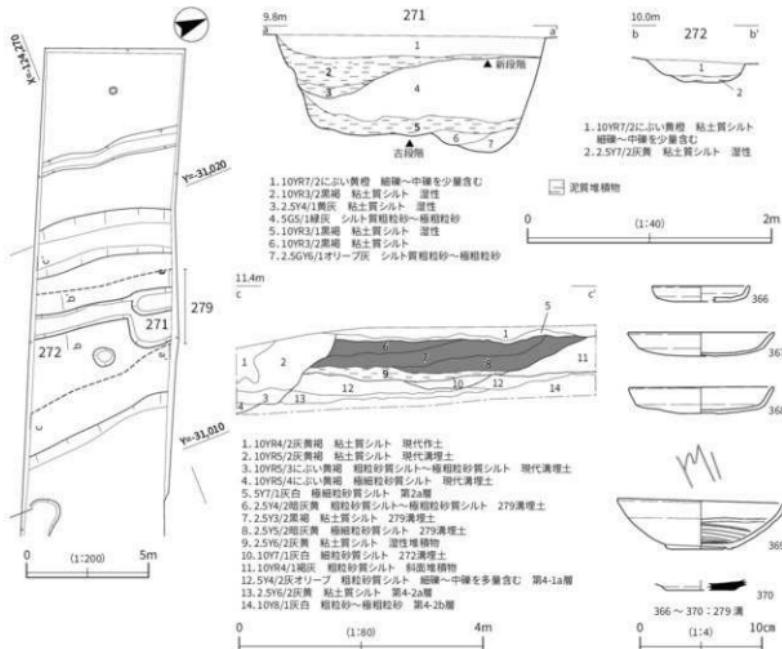


図37 271土坑他平・断面、出土遺物

う1点出土している。365は白磁碗IV類の底部片で、高台内側に墨書が認められるが、判読不明。

#### 453溝(図10)

7区で検出した。幅1.1m、深さ0.1m、埋土は砂質シルトである。埋土中から、礫の集石を検出した(図版3-2)。礫は2~15cm大、岩質は砂岩である。人為的に置かれたものか、検出範囲が狭く不明である。遺物は、土師器皿、瓦器羽釜が鍋体部片、常滑焼甕が出土した。

#### 272・279溝、271土坑(図36~39、図版1)

3区で検出した。279溝は幅4.5m、深さ0.5m、埋土は砂質シルト主体である。平面的な検出は行っていない。遺物は土師器皿、瓦器椀、白磁皿が出土した。271土坑は一部調査区外にあり、全容は不明である。掘り直しが行われており、以下、新段階と古段階に分けて報告する。平面形は隅丸方形状、南北1.8m以上、東西2.3mである。断面の検討から平面形は新段階と古段階で大きく変更されなかったと考えている。深さは、新段階0.5m、古段階0.95mである。新・古段階とともに、埋土には泥質堆積物が認められる。遺物は、土師器皿、白色土器皿、須恵器鉢、瓦器椀、灰釉陶器瓶が出土した。272溝は幅0.8m、深さ0.15m、埋土下層は泥質堆積物である。271土坑と北側で接続する。271土坑の古段階にも伴うものか、新段階の改築で埋土等から検証できておらず不明である。遺物は土師器皿、瓦器椀、瓦器鍋、常滑焼が出土した。時期は13世紀後葉から14世紀前葉を想定している。

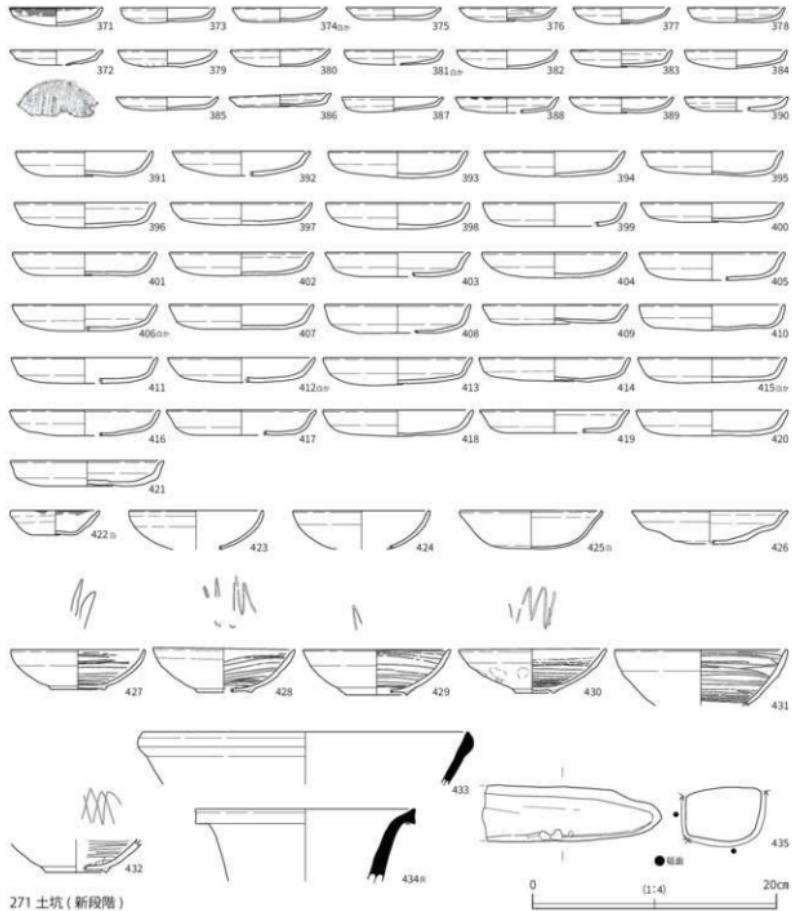


図38 271土坑出土遺物（1）

481土坑、495・554ピット、基盤層上面出土遺物（図40）

481土坑は一部調査区外にあり、全容は不明で、溝となる可能性がある。平面形は不整形、長軸0.38m、短軸1.0m、深さ0.14m、埋土は極細粒砂質シルトである。遺物は瓦器椀456が出土した。時期は13世紀中葉～後葉に位置付けられる。495・554ピットは、平面形円形、直径0.2～0.3m、深さ0.2mである。495ピットから瓦器椀の細片が出土した。554ピットは埋土が495ピットと似ており、時期を中世と判断している。11区では基盤層上面から土師器皿457～460が出土した。

後述する496溝（近世以降）にも中世の遺物が混入しており、中世の遺構・遺物の広がりが11区で確認されている。

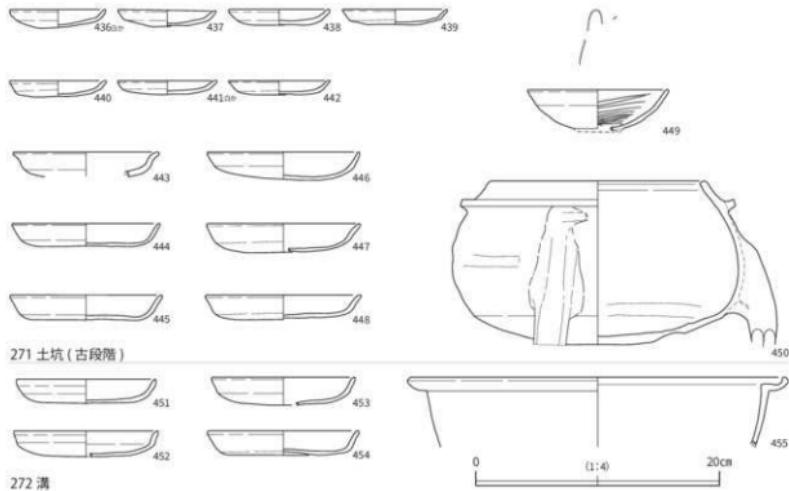


図39 271土坑・272溝出土遺物

### 第3-1b層出土遺物(図41、図版9)

7区第3-1b層からコンテナ1箱以上の土師器、白色土器、木製品が出土した。第3-2a面で検出した水田を覆う洪水堆積物で、堆積状況から洪水の流向は南東方向であったと考えられ、遺物は北西から流されてきたものと考えられる。土師器には、いわゆるヘソ皿462~465があり、466は底部を欠失しているが、ヘソ皿の口縁部であった可能性がある。土師器小皿467~478には、底面から口縁部が屈曲して短く立ち上がるものが多く含まれる。470は第3-2a面395溝内に堆積する第3-1b層から出土したものである。486は細片、外面二段ナデ、器厚は薄く、口縁端部は丸く仕上げられる。土師器皿488・489は黄白色の胎土を用いたもので、乙訓地域からの搬入品か。

木製品は棒状木製品、箸が出土した。全体で棒状木製品は5本、箸は48本出土した。箸495~497は先端を欠失するが、中央部から両端に向かって先細りすることから、両口箸と考えられる。箸48本の内、両口箸は3本、片口箸は1本、それ以外は不明である。ただし、不明品の中には両口箸かと考えられるものが多く含まれており、比率としては両口箸の方が多くなる可能性が高いと思われる。棒状木製品は先端を尖らせており、後世の黒文字のような用途を想定している。圓化した以外に、須恵器鉢(東播系)、瓦器楕・羽釜・鍋、瓦が出土しており、いずれも細片である。

### 3. 第3-2a面の調査成果(図42~44、図版3)

第3-2a面では、13世紀後葉以前の水田を検出した。第3-1b層は、7・10区で0.1m以上堆積しており、第3-1b層の砂礫に覆われた水田畦畔が良好に遺存していた。一方、3~5区は第3-1b層の堆積が希薄で、第3-1b層は溝等の遺構や第3-2a面直上の凹凸に主として堆積した。なお、11・12区(西側)では、12区南側で第3-2a層の堆積が認められた。第3-2a面で水田畦畔等は確認されなかったが、水田が確認できた7区第3-2a層と層相が似ており、水田作土の可能性が高いと考えている。

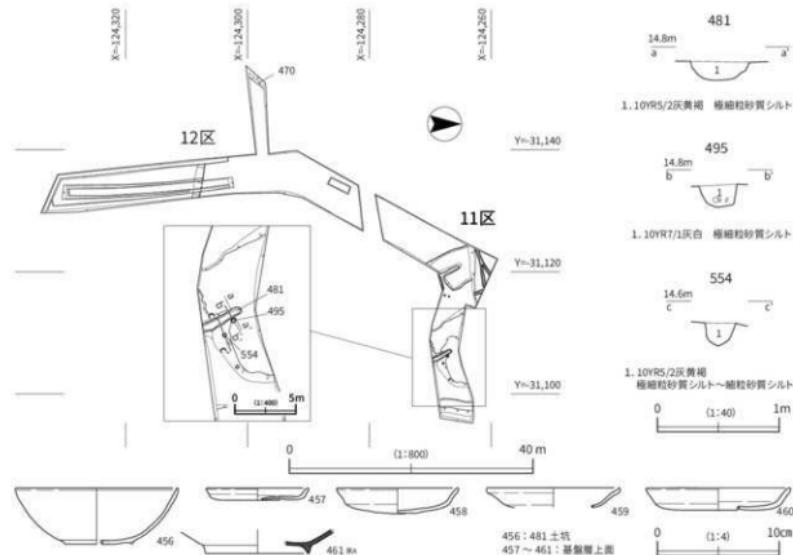


図40 第3-1 b面平面(西侧)、出土遺物

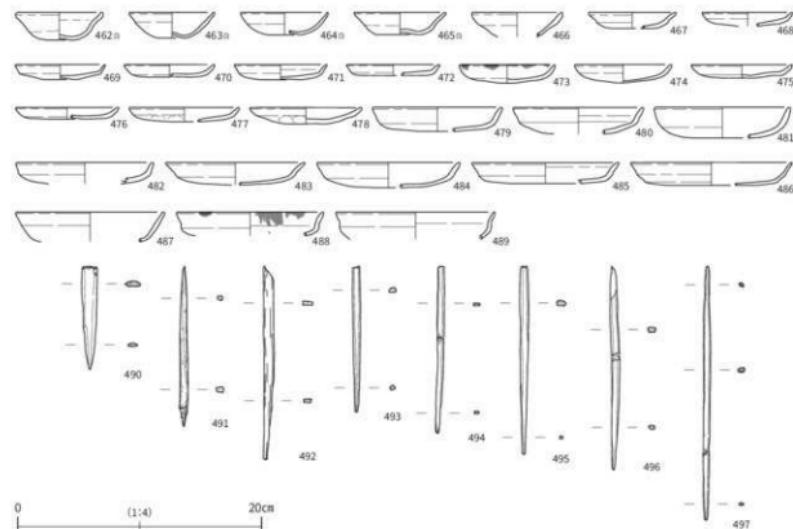


図41 第3-1 b層出土遺物

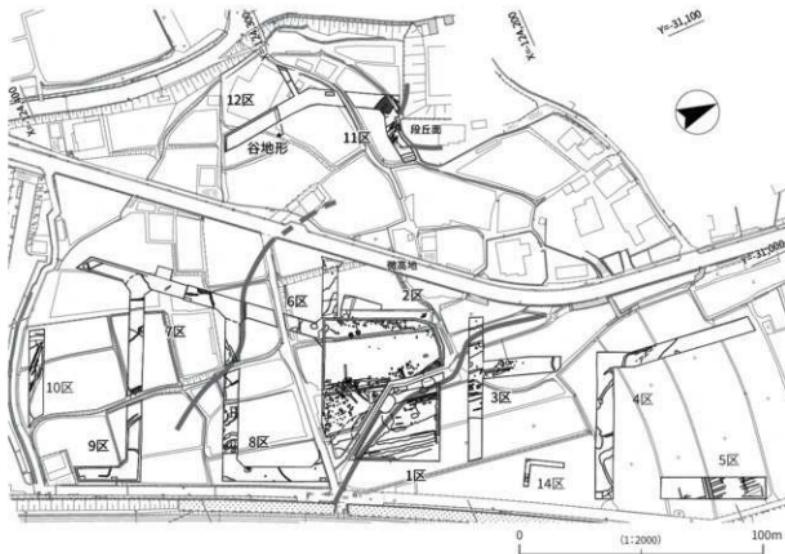


図42 第3-2a面平面

## 2・7~10区の水田（図43、図版3）

7区では水田畦畔と水田に伴う段を検出した。456畦畔は幅0.6m、高さ0.04mである。588段は456畦畔と直交方向に交わる段で、段を境に北側が低い。水田面の高低差は0.3mである。588段直上及び肩部付近から粗粒砂～極粗粒砂（第3-1b層）による浸食が顕著であった。

458畦畔は幅0.3～0.4m、高さ0.1m、南側で水口を検出した。水田面の高低差は、458畦畔を境に東側が低くなっている、比高は最大0.2mである。

457段は458畦畔の北西で検出しており、段を境に南側が低い。高低差は0.2mである。457段の上部で部分的に盛り上がる部分を確認しており、588段と同様、457段にも畦畔が伴っていた可能性が高いと考えている。先述のとおり、457段の南側に堆積する第3-1b層からは大量の土器と木製品が出土した（図41）。

618畦畔は幅1.0m、高さ0.01～0.06mである。618畦畔を境として南側に水田面は低くなっている。619畦畔は幅0.8m、調査時掘り過ぎたため、擬似畦畔として検出した。619畦畔を境に水田面は東側に低くなっている。

395溝は幅0.9～1.4m、深さ0.3m、埋土は第3-1b層に対比できる、水成層の粗粒砂から極粗粒砂である。遺物は、土師器皿470が出土した。395溝の南側では、622畦畔を検出した。

622畦畔は幅1.1m、擬似畦畔として検出しており、東端で屈曲する。7区で検出した水田では、第3-1b層による浸食を受けていたことが主たる原因で、1筆分の水田区画を復元できたところは無かった。

10区は7区と比較して地形的に低く、洪水等の影響を受けやすい場所で、洪水砂（第3-1b層）

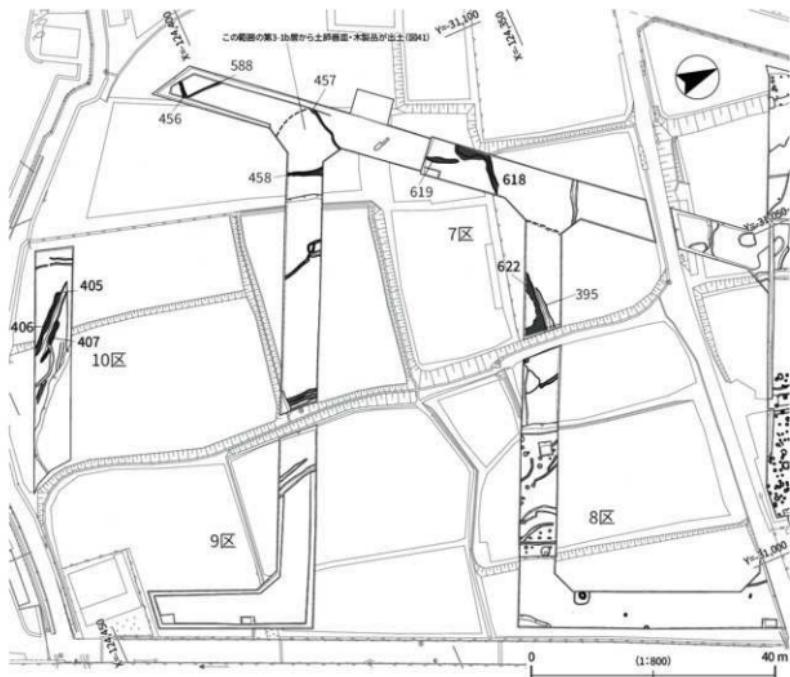


図43 第3-2 a面平面（南側）

は層厚0.4~0.6mに及ぶ。第3-1 a層及び第3-2 a層とした中世の作土の堆積も分厚く、他の調査区より細分することができた。10区第3-2 a面では畦畔・溝を検出した。406・407畦畔は405溝に伴うもので、幅0.5~0.9m、高さ0.02~0.17mである。

405溝は幅1.0m、深さ0.1~0.3m、埋土は水成層の粗粒砂~極粗粒砂である。405溝を境に北東側に低くなっている、高低差は0.05m以下である。遺物は土師器皿、瓦器椀・羽釜が出土しているが、いずれも細片である。瓦器椀は13世紀から14世紀代のものと考えられる。

#### 227溝（図44）

3区で検出した。幅1.0m、深さ0.17m、埋土下層は泥質堆積物である。西側は中世の溝の擾乱を受ける。土師器、須恵器、縁羽口が出土した。縁羽口は先端部で、被熱により変色する。時期は中世以前を想定している。

#### 291・297溝（図44）

4区で検出した。291溝は幅0.8m、深さ0.1m、埋土は粗粒砂~極粗粒砂である。埋土の粗粒砂~極粗粒砂は第3-1 b層に対比できる。遺物は、土師器高杯、サヌカイト製石匙が出土した。297溝は幅0.85m、深さ0.17mで、291溝と連続する溝と考えられる。遺物は土師器高杯が出土した。

297溝の南西側では、591高まりを検出した。第3-2 b層の上面が盛り上がっており、擬似畦畔の

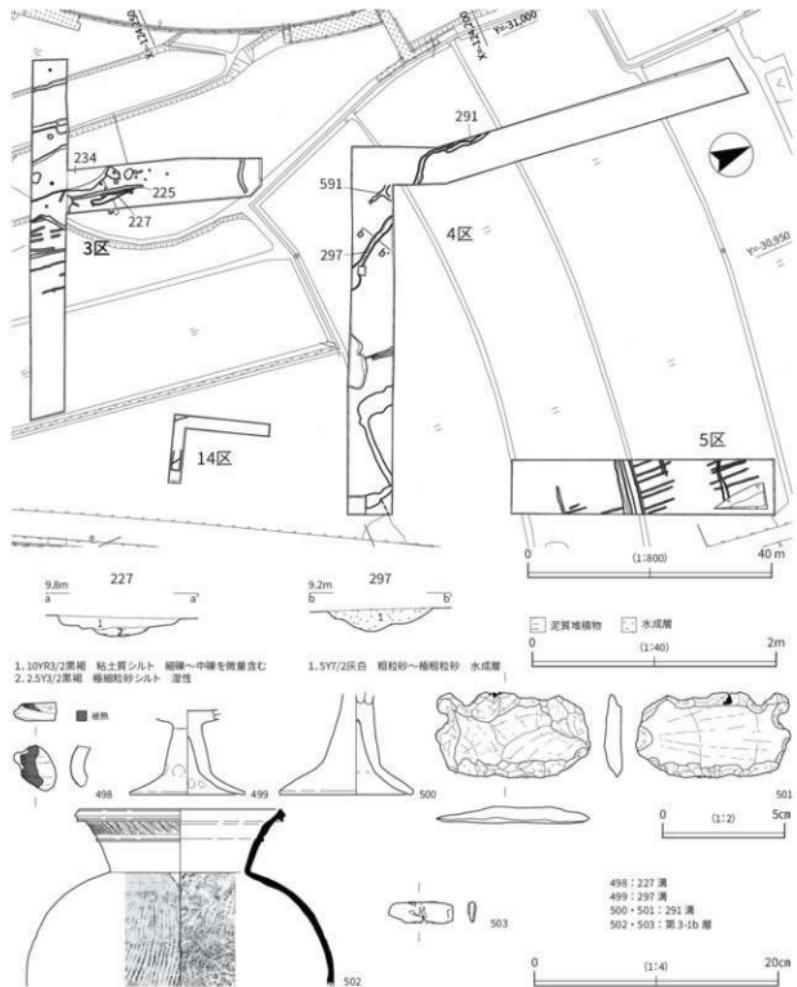


図 44 第3-2 a面平面(北側)、出土遺物

可能性がある。なお、291・297溝周辺で検出した水田は、第3-2 a層とした水田作土から古代から中世の遺物(細片)が出土しているため、最終的には7区(南側)等の第3-2 a層に対比した。ただし、1・2区を中心に検出した微高地を挟んで各調査区が離れていたことから、砂礫(第3-2 b層)や作土(第3-2 a層)の連続性を確認できた調査区は皆無で、地層の対比及び水田の時期幅は検証を要する。

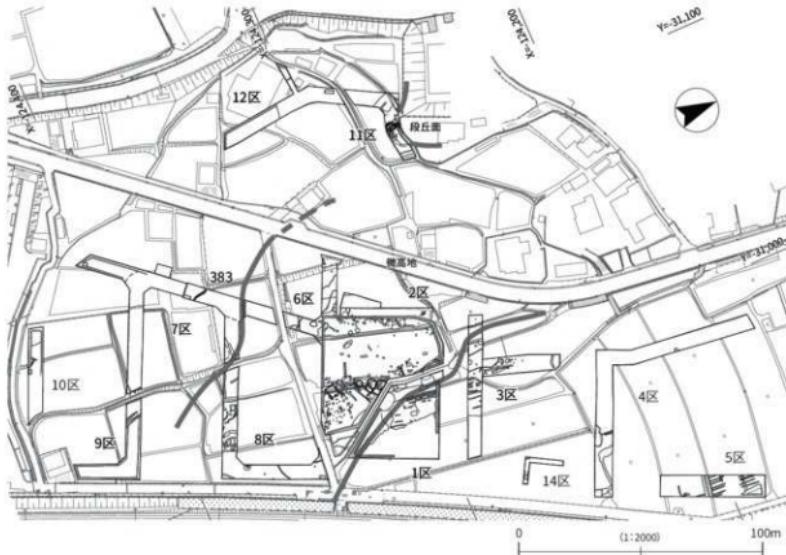


図45 第3-2 b面平面

#### 4. 第3-2 b面の調査成果（巻頭図版2、図45~81、図版4・10~13、原色図版6~14）

第3-2 b面では、御所池瓦窯跡第1号窯（以下、第1号窯）・掘立柱建物・溝・土坑・落ち込み・ピットを検出した。主要な遺構は地形が高い場所で検出しており、第1号窯は11区段丘面、掘立柱建物・土坑等は2区微高地上に立地する。第3-2 b面の低地は、第3-2 a層の堆積範囲と重なる。耕作地として土地利用した可能性を想定しつつ調査したが、古代に堆積した地層は確認されなかった。

11区北側は現代作土を除去した段階で、調査区の大半で黄褐色シルト（段丘構成層）が露出し、第1号窯が埋め戻された範囲と埋め戻し土の上面で土坑を検出した。調査区東側は現代以降に大規模な造成が行われたことが判明しており、造成土を除去した段階で調査区東端に現代作土の堆積を確認した。11区中央から南側では、第2 a層とした近世作土を除去した段階で、砂礫（第4-2 b層）が露出する。なお、469溝は第2 a面の形成より新しく、時期は近世以降と想定しているが、図46では位置関係を示すために第3-2 b面平面図に図示した。また、遺構面の帰属先が不明な古墳時代の遺構と埴輪を中心とした遺物は、第3-2 b面の調査成果に合わせて報告する。

#### 469溝（図46~55、原色図版7、図版13）

11区で検出した。幅2.0~3.0m、深さ0.6~0.7mである。埋土は上層が焼土塊、瓦を多量に含むシルト（偽礫状、埋め戻し土）、下層が泥質堆積物である。東側で現代の水路を検出しており、現代の地割に変更される直前まで機能した水路と考えられ、時期は近世から近代を想定している。遺物は、埋土上層からは、弥生土器、瓦器椀、白磁碗、瓦等が出土した。瓦には窯体・焼土が付着したものや二次的な被熱を受けたものが多量に含まれる。また、第1号窯が近接することや、第1号窯以外に複数の瓦窯の

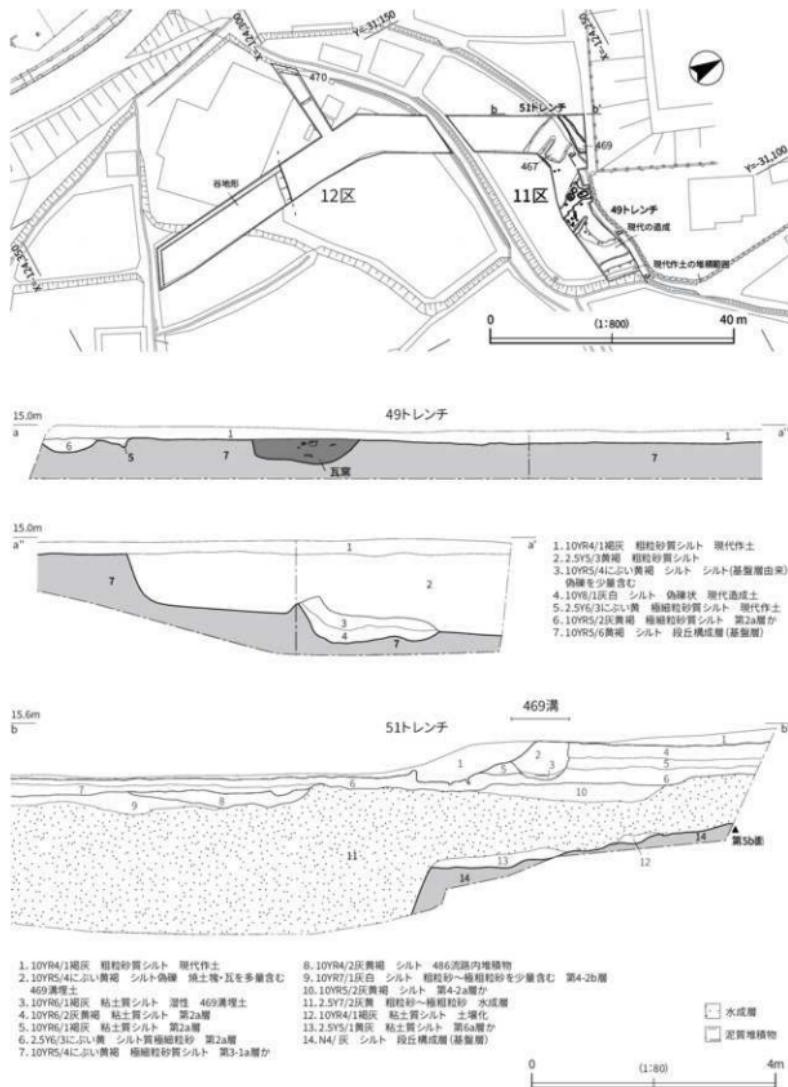


図46 第3-2 b面平面（西側）、49・51トレンチ断面

存在が想定されること（場所は不明確ながら周知の遺跡として登録されていた窯があり、2基以上で操業されていたことが想定される）から主として瓦窯構築材に由来する瓦を廃棄したと想定している。白磁碗504は端反りの口縁部で15世紀以降、瓦器椀505は13世紀中葉から後葉頃のものと考えられる。

瓦は軒瓦、丸瓦、平瓦、熨斗瓦が出土した。軒瓦は、重弧文軒平瓦506が出土した。段瓢。重弧文は型挽き、凹面布目痕と縦方向ナデ、凸面はヨコナデ後ヘラ状工具の痕跡が横方向に入る。桶巻き作り。軒平瓦507・508は凹面布目痕と縦方向ナデ、凸面斜格子タタキ。凸面に粘土を貼り足した後、横方向にナデを施しており、軒平瓦瓢部分に当たると考えている。丸瓦509～517は凸面縦方向ナデ、凹面布目痕、端部の面取りは2～3面で3面のものが多い。平瓦518～533・536～540は、凹面は布目痕があり、縦方向ナデを施すものが大半である。凸面は斜格子タタキを施し、糸切り痕（斜め方向の条線）を残すものが多い。端部や側縁近くの調整に粗いハケを用いる520・526がある。厚みが薄い平瓦524は道具瓦の可能性がある。被熱した粘土が付着した平瓦529・530は粘土表面に529は布目痕、530は斜格子タタキの痕跡を残す。他の瓦と組み合わさせて瓦窯構築材として用いられた際の痕跡と考えられる。529は貼り付けられた粘土の断面形が扇形を呈し、燃焼部ないし焼成部前面の開口部に用いられた可能性が高い。平瓦531には別個体の平瓦が窯着する。平瓦533は凹面模骨痕・布目痕、凸面ナデ、焼け歪みによるものかもしれないが、断面形が丸瓦状に湾曲する。凸面調整がナデの543～545と胎土・厚みが異なっており、異質なものである。平瓦534・535は凸面に縦タタキを施し、535は縦目が粗い。平瓦536～540は凸面に凹型整形台の痕跡を残す。平瓦541は凹面模骨痕・布目痕・縦方向のナデ、凸面は横方向ナデ。当初焼け歪んだ丸瓦の可能性も検討したが、凹面に不明瞭だが模骨痕が確認でき、平瓦に分類した。狭端面が斜めに加工された隅切瓦である。541は542と同一個体になる可能性のあるもので、凹凸面に被熱した粘土が付着する。平瓦543～549は、凹面は布目痕・縦方向ナデ、凸面はナデによつて平滑に仕上げられている。胎土は精良なものか、中粒砂～粗粒砂を多量に含んだ粗いものに分かれれる。焼成は土師質（軟質）のものが多く、厚みがある点で共通する。丁寧に仕上げられていること、法量が大きいこと、全体に占める割合が低いことから、軒平瓦平瓦部となる可能性を想定している。平瓦550・551は、横幅が平瓦599～603の半分のものである。熨斗瓦552は、凸面は摩滅、凹面は布目痕が残る。凸面は摩滅しているものの、凹凸が無く、方向は不明だがナデによって仕上げた可能性が高い。熨斗瓦553・554は、凹面は模骨痕・布目痕が残り、凸面は斜格子タタキを施す。

#### 11区第2a層他出土遺物（図56）

平瓦555～560、熨斗瓦561は11区から出土したもので、第2a層及び第2a層を除去して検出した基盤層上面から出土した。平瓦556・559・560は凸面に凹型整形台痕がある。平瓦558は胎土に土師器体部片を含む。平瓦562は11区北東側で確認した現代造成土から出土しており、凸面に縦タタキを施す。

#### 91土坑他出土遺物（図44・57・75、図版11・12）

91土坑は2区で検出した（図75）。平面形は円形、直径1.2m、深さ0.15m、埋土はシルトである。遺物は須恵器杯蓋563が出土しており、飛鳥II～III型式に比定できる。

234落ち込みは3区で検出した（図44）。検出長14.0m、深さ0.25cm、埋土は粘土質シルトである。土師器皿、須恵器杯身・杯蓋・甕、黒色土器A類椀・甕、灰釉陶器壺、瓦（斜格子タタキの平瓦）が出土した。土師器皿には、「て」の字形土師器がある。古墳時代や奈良時代の遺物が混じっており、須恵器壺567・須恵器円面鏡568と須恵器甕565が出土した。568は細片で、内面に墨痕がある。破断面で透孔は確認できおらず、壺口縁になる可能性がある。234落ち込みの時期は10～11世紀以降を想定して

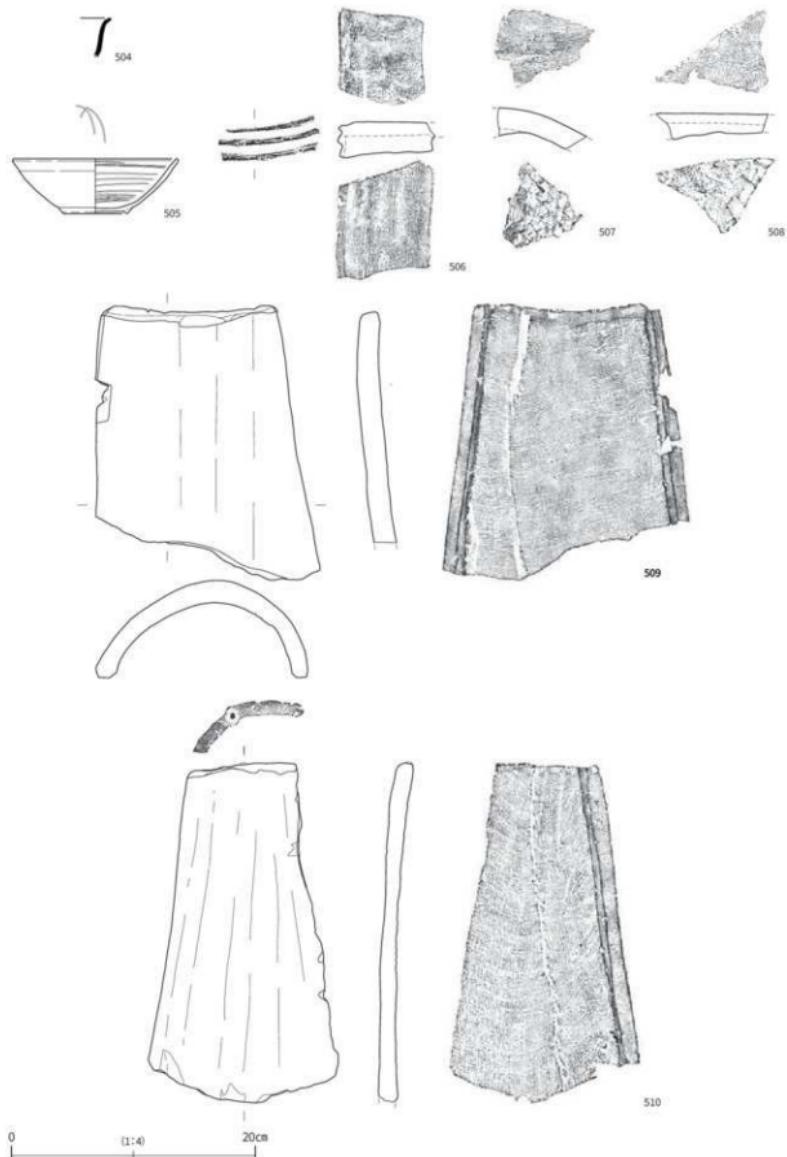


图 47-469 溝出土遺物 (1)

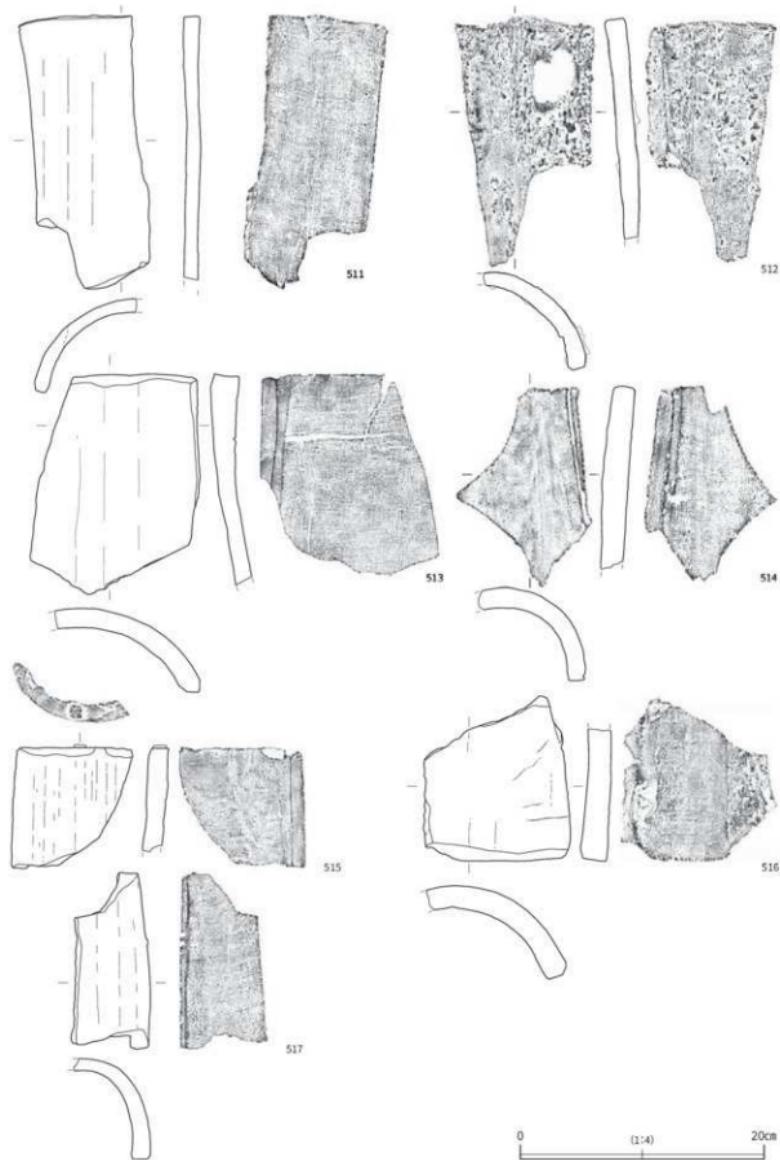
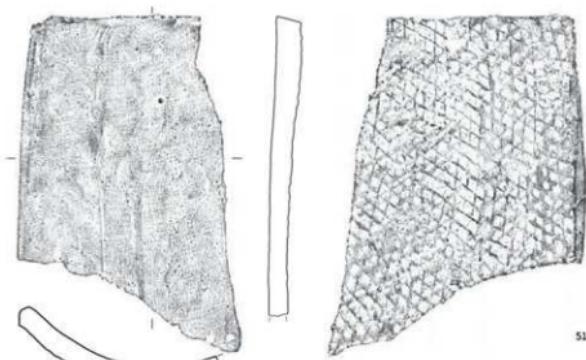
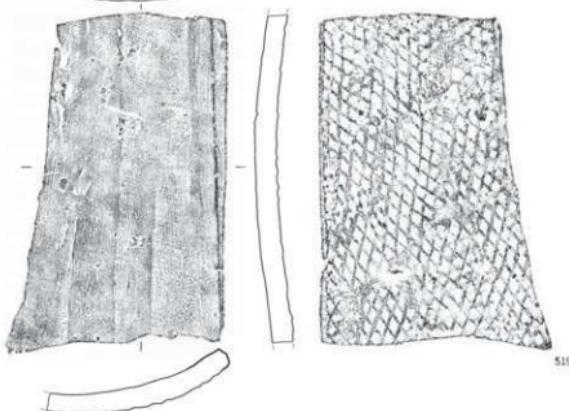


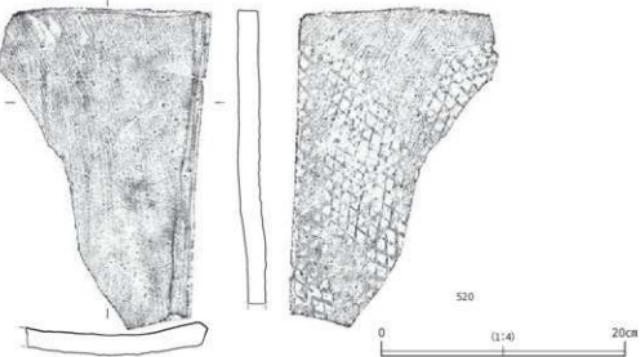
图 48-469 满出土遗物 (2)



518



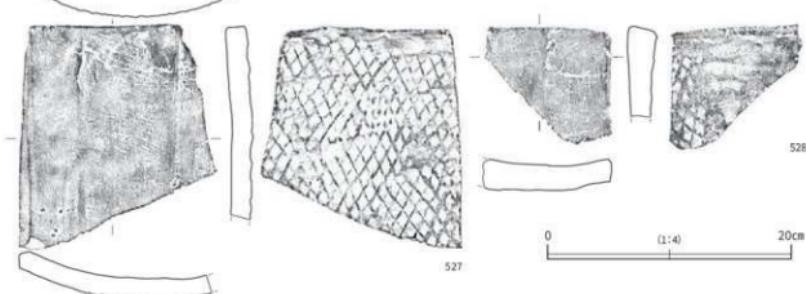
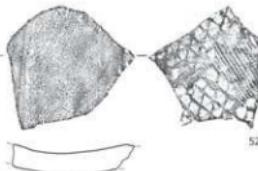
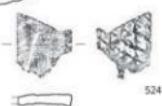
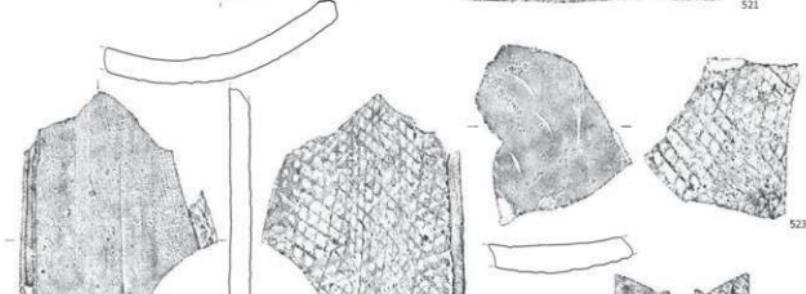
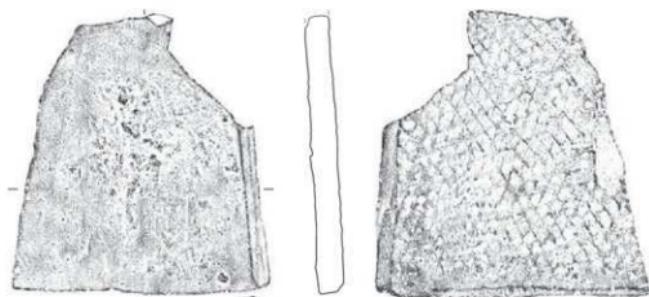
519



520

0 (1:4) 20cm

图 49 469 满出土遗物 (3)



0 (1:4) 20CM

图 50 469 满出土遗物 (4)

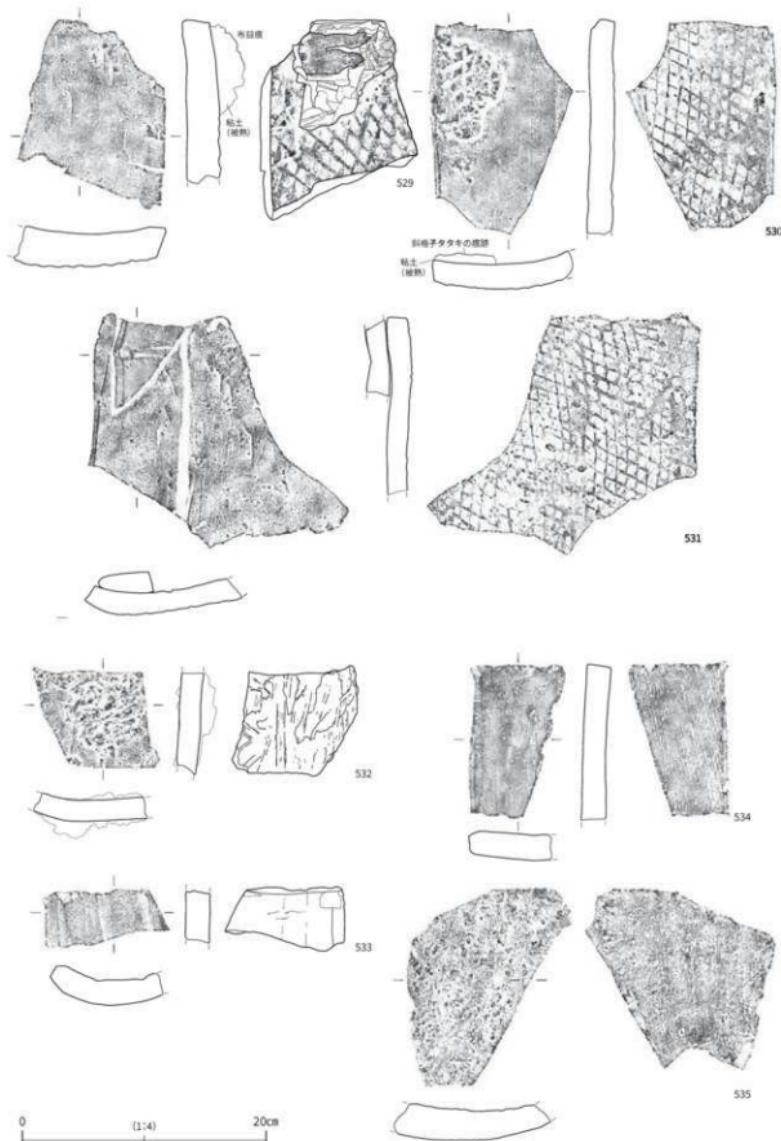


図 51 469 溝出土遺物 (5)

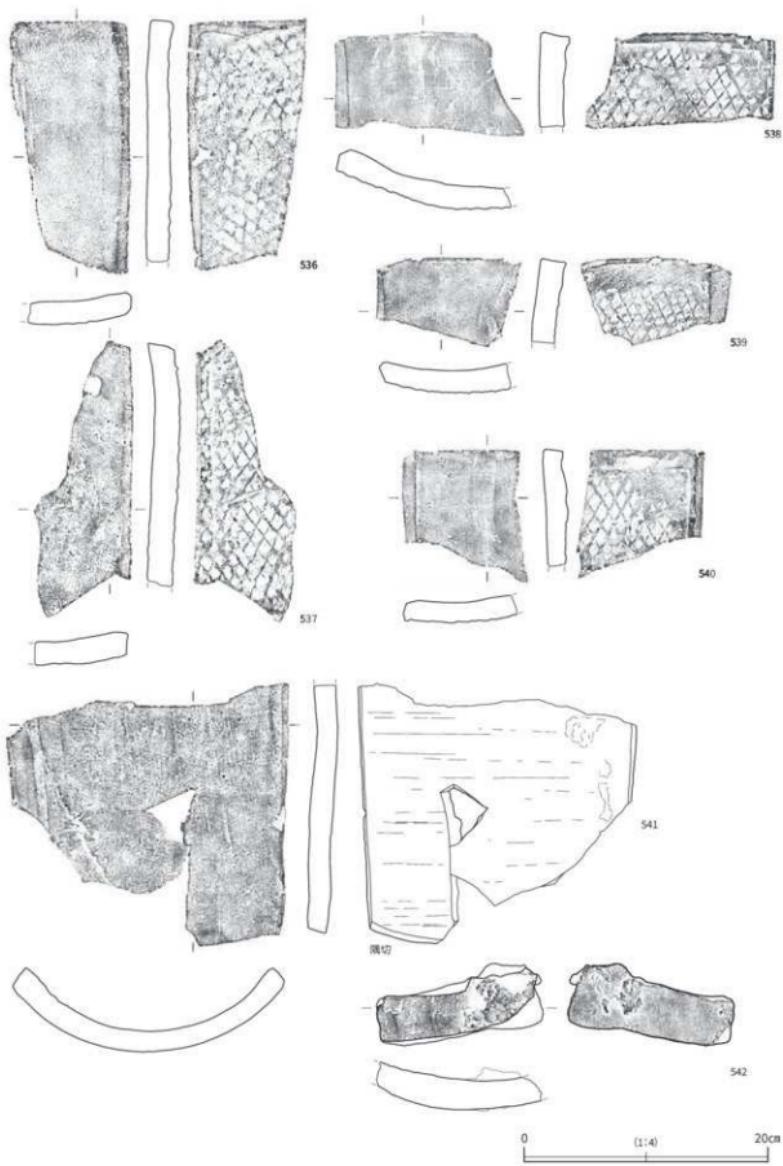
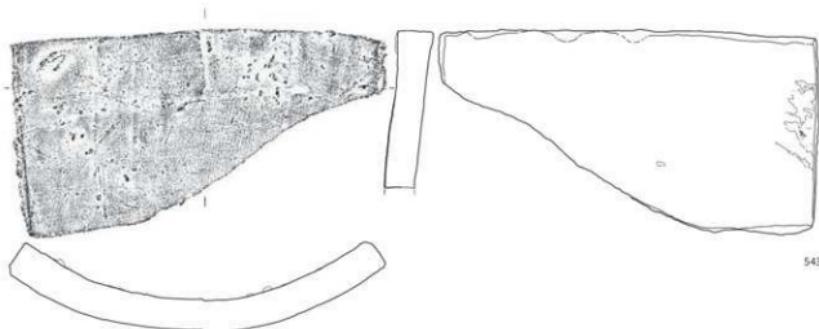
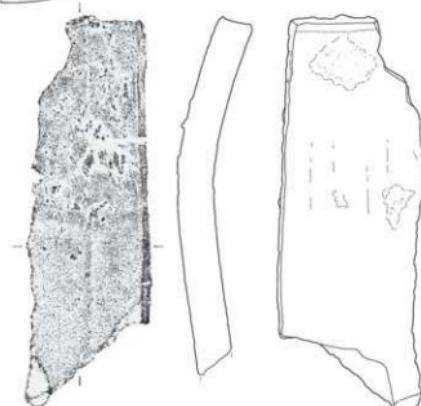


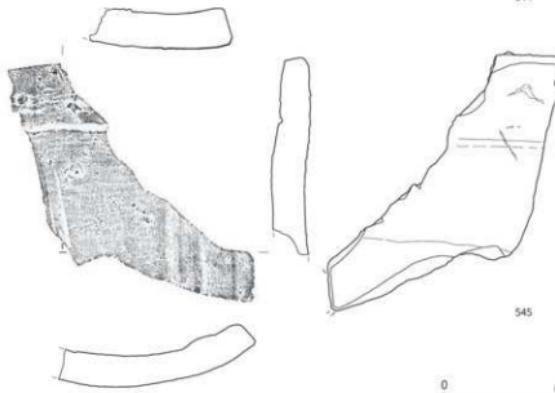
図 52 469 溝出土遺物 (6)



543



544



545

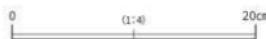


図 53 469 溝出土遺物 (7)

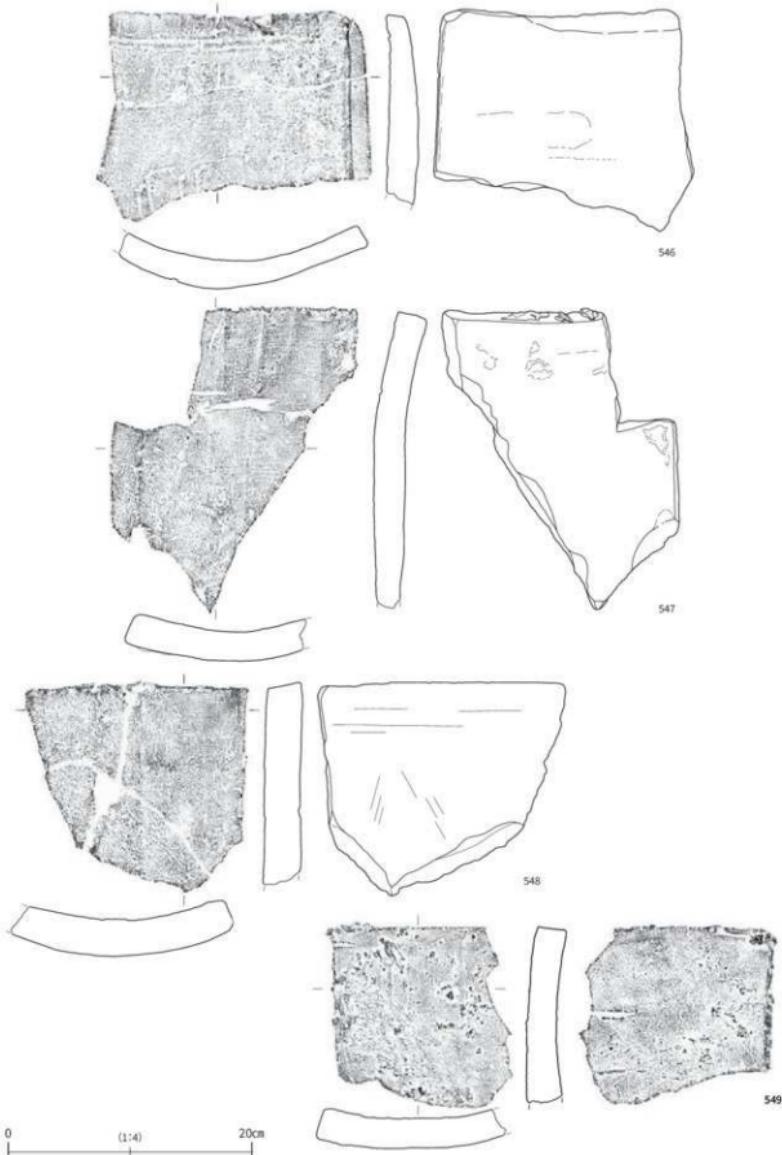


図 54 469 溝出土遺物 (8)

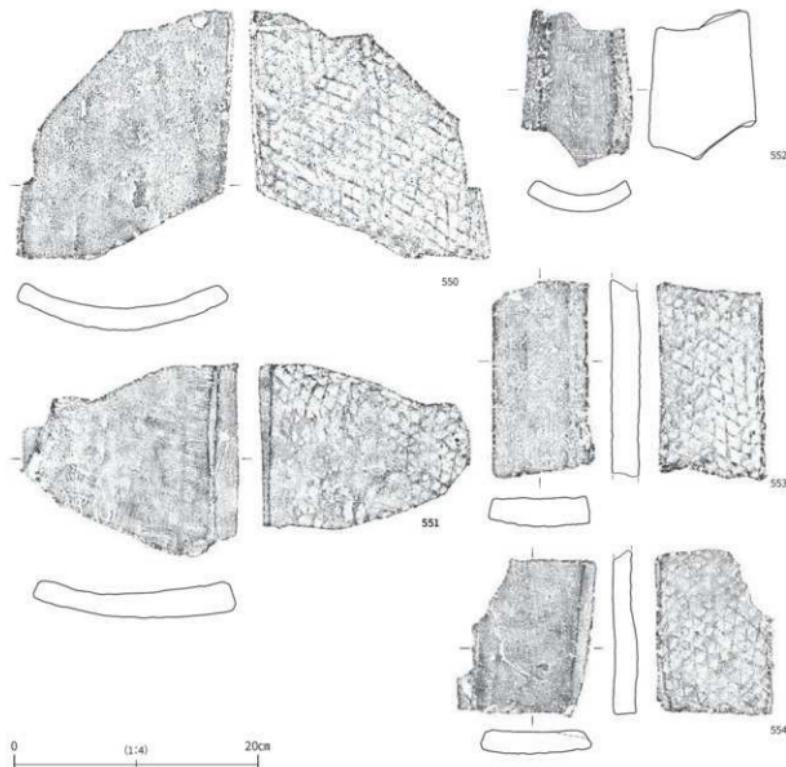


図55 469溝出土遺物(9)

いる。1区では南北方向の地割周辺で複数の溜池を検出しており〔(図11溜池中世後半～)と図示した遺構〕、234落ち込みを検出した場所は1区の南北方向の地割の延長上に当たる。1区で検出した溜池は出土遺物が無いものか、土師器細片のみが出土したものだけであり時期を明確に決め難いが、層位の検討から中世後半以降を想定している。234落ち込みは1区溜池と規模・埋土が似ていることや、凹面に鉄線引きの痕跡のある瓦細片が出土しており、時期が下がる可能性を指摘しておきたい。

383溝は7区で検出した(図45)。幅0.6m、深さ0.2m、埋土は水成層の粗粒砂～極粗粒砂である。遺物は、須恵器高杯566、弥生土器甕784が出土した。

231ピットは2区で検出した(図75)。平面形は不整な円形、直径0.2m、深さ0.06m、埋土は粗粒砂質シルトである。遺物は土師器甕572が出土しており、時期は8世紀前葉から中葉を想定している。

須恵器杯蓋569は3区で機械掘削時出土した。時期は8世紀代のものと考えられる。須恵器杯身570・須恵器甕571は4区3-2a層から出土した。土師器高杯573は11区で検出した瓦窯南側の水田畦畔(現代)で表探したもので、時期は8世紀と考えられる。

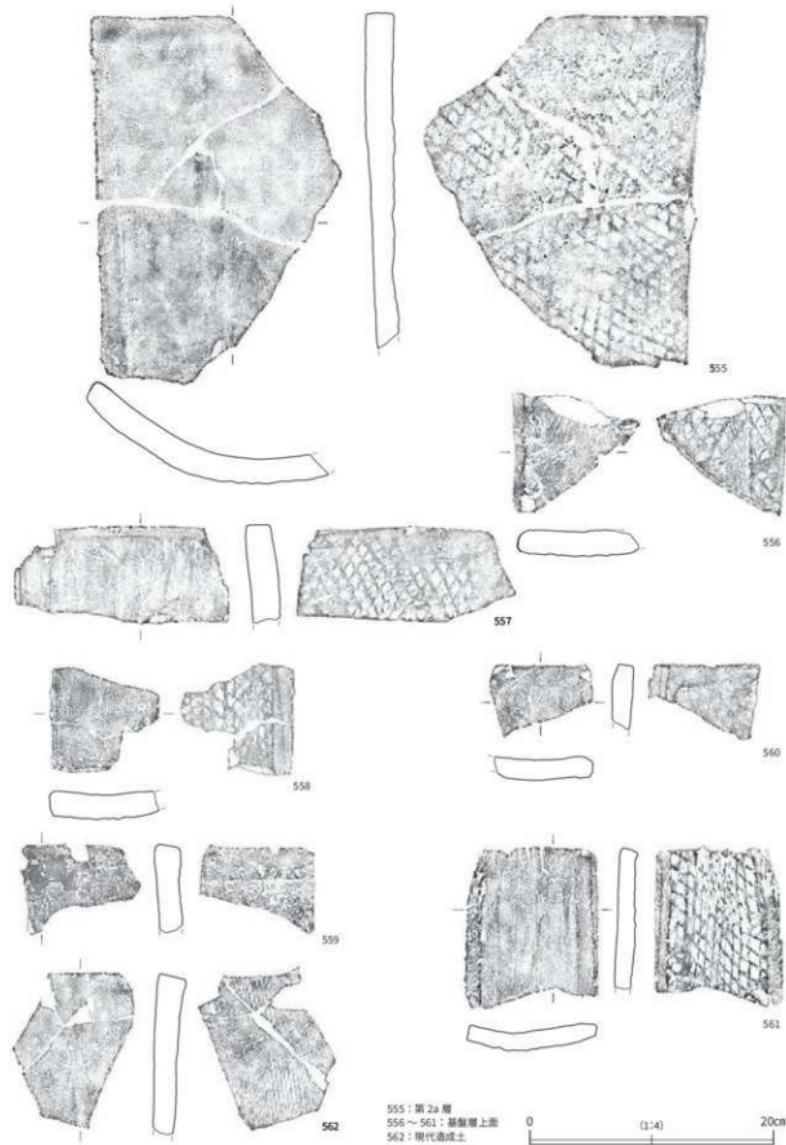


図 56 11 区地層出土遺物

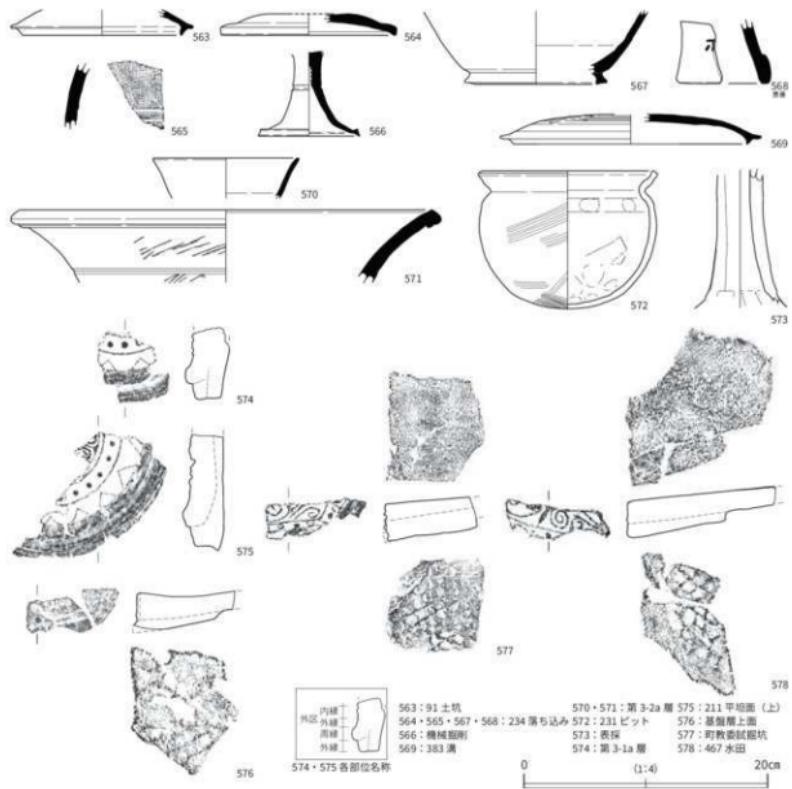


図57 91土坑他出土遺物

軒丸瓦574は1区第3-1a層から出土した。外区と周縁が残存する。焼成不良で、断面は赤褐色を呈す。瓦当裏面はナデ。軒丸瓦575は2区211平坦面(図12)の上部[211平坦面(上)]から出土した。複弁蓮華文。蓮弁は細い沈線で表す。外区内縁には直径5mmの珠文、外区外縁には凸線の鋸歯文を表現する。また、周縁外側には、無文の外縁を付け、瓦当径を大きくしている。無文の周縁と外区の境界がシャープに作り出されていることや、周縁に円周方向の条線が観察できることから、板状の工具を用いて表面を整えたと考えられる。文様や形態の特徴から574と同文の瓦と考えられる。軒平瓦576は11区基盤層上面から出土した。文様は珠文が1点残るのみである。瓦当面は瓦范より小さい。軒平瓦577は1区で調査前に行われた町教委試掘坑から出土した(図11)。均整唐草文。範は瓦当面の高さより大きいものを使用し、範の下半分の文様を表現する。唐草文は巻きが強い。外区と内区の間には界線、外区には直径4mmの珠文がある。外区の角にある珠文は、範傷で界線に接しており、紡錘状を呈す。凹面は布目痕と縱方向のナデ、凸面は糸切り痕と斜格子タタキ、縱方向のハケ。範傷の可能性のあるものは、上記以外に唐草文間と脇区珠文(下から2番目)外側にある。軒平瓦578は中世以降の11区

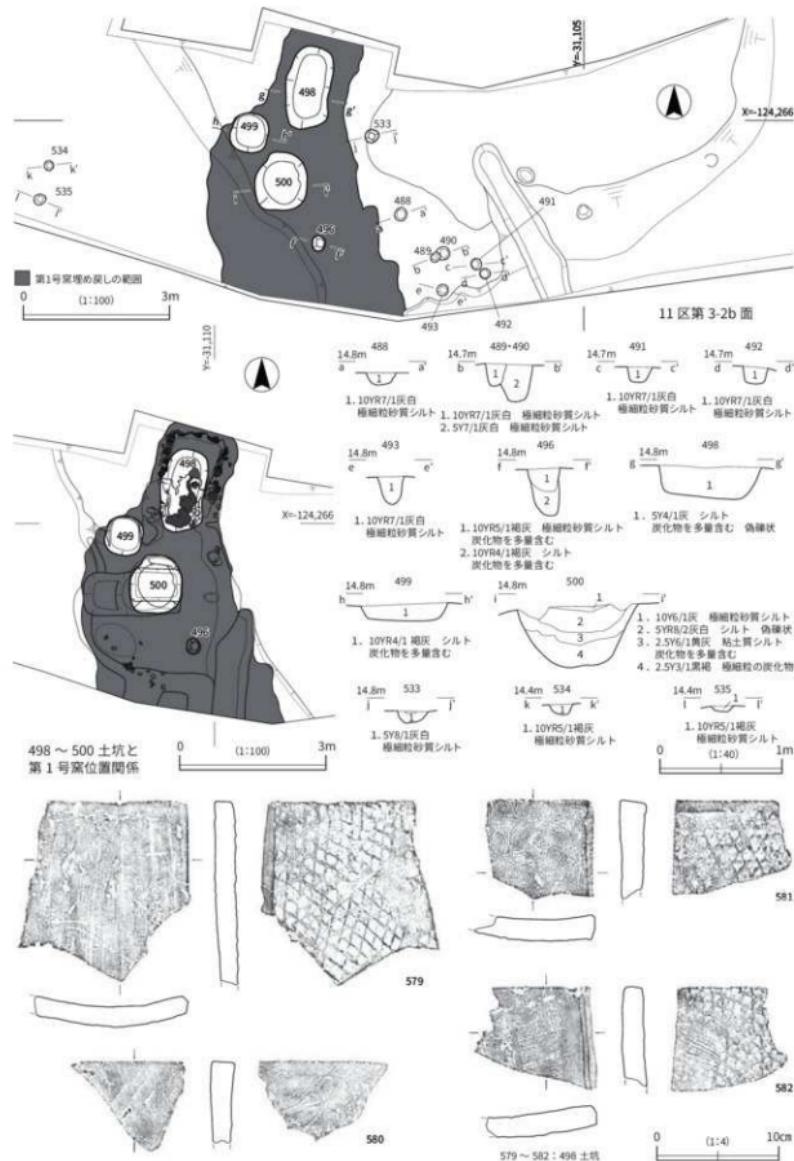


図 58 第3-2 b面平面、488 ピット他断面、出土遺物

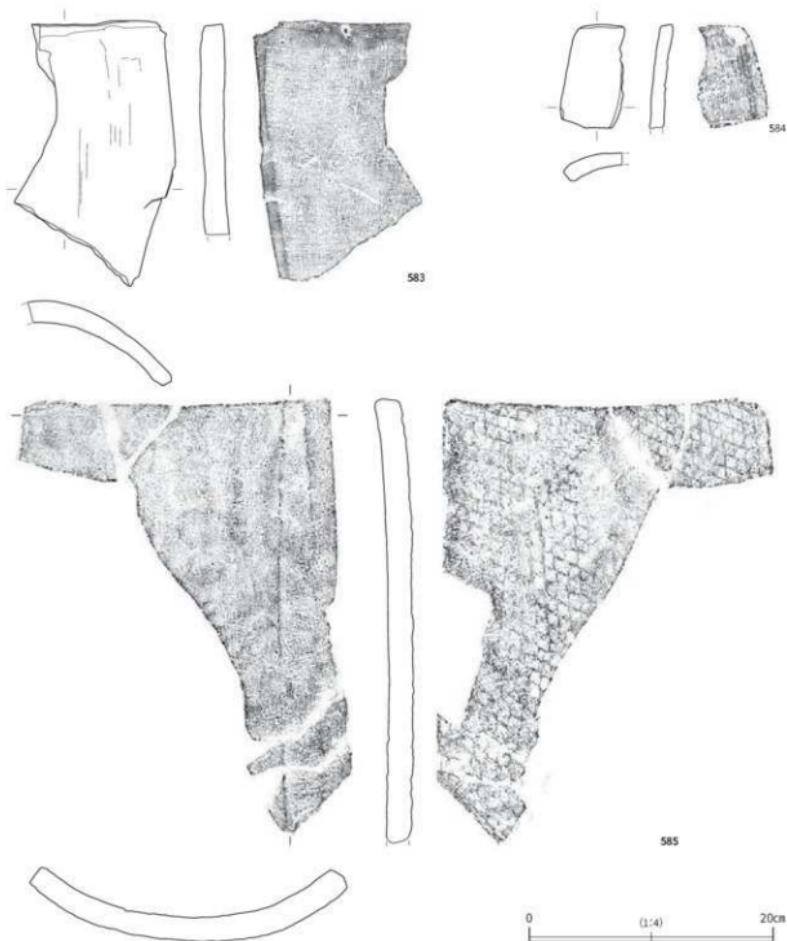


図59 500土坑出土遺物

467水田（図46）から出土した。均整唐草文。範は瓦当面の高さより大きいものを使用し、範の下半分の文様を表現する。唐草文は巻きが強い。外区と内区の間には界線、外区には直径5mmの珠文がある。凹面は模骨痕・布目痕、凸面は顎部分が斜格子タタキ、平瓦部は摩滅により不明。

#### 498～500土坑（図58・59、原色図版6・7）

498～500土坑は、第1号窯を埋め戻した整地層上面で検出した。埋土に炭化物が多量に含まれる点で共通する。498土坑は、平面形は不整な隅丸方形、長辺1.7m、短辺0.9m、深さ0.26mである。埋土

はシルトで炭化物を多量に含む。遺物は丸・平瓦が出土した。平瓦581は凸面に凹型整形台痕が残る。平瓦580・582は凸面側の端部・側縁周辺に粗いハケメが残る。

499土坑は、平面形は隅丸方形、一辺0.7m、深さ0.12m、埋土はシルトで炭化物を多量に含む。遺物は焼土塊・窯体片が出土した。

500土坑は、平面不整な楕円形、長軸1.15m、短軸1.05m、深さ0.5mである。埋土上層は埋め戻し土、下層は機能時の堆積と考えられるシルトで炭化物を多量に含む。第1号窯の前庭部土坑を検出した場所と一致する。遺物は丸瓦・平瓦が出土した。丸瓦583・584は凸面縦方向ナデ、凹面は583が布目痕、584が粗いハケ調整を施す。

498～500土坑は埋土が似ており、498・500土坑は埋没過程も類似している。498土坑は燃焼部右側壁と焚口床面と掘形が完全に一致する。498～500土坑の掘形で被熱を受けた痕跡を確認することはできなかったが、具体的な用途として木炭窯を一つの候補に考えている。

#### 488～493・496・533～535ピット（図58）

488～493・533ピットは、第1号窯が埋め戻された範囲の東側で検出した。533ピットを除いて、第1号窯構築時の整地層の範囲と重なる。488～493・533ピットは、平面形は円形、直径0.17～0.28m、深さ0.1～0.3m、埋土は極細粒砂質シルトである。埋土は整地層に由来する偽礫である。遺物は、490ピットから平瓦（凸面斜格子タタキ）、491ピットから土師器體部片、492ピットから瓦（凹型整形台痕あり）、533ピットから土師器・平瓦（凸面斜格子タタキ）の瓦が出土した。488～493・533ピットは、直上まで現代作土に削平されていたため、第1号窯操業時に伴うものか、不明である。

496ピットは、平面円形、直径0.26m、深さ0.4mである。埋土はシルト主体で、少量の炭化物が含まれる。遺物は土師器杯底部の細片が出土した。496ピットは488～493・533ピットの埋土と異なり、498～500土坑に似ており、498～500土坑と同じ時期に掘削された可能性がある。

534・535ピットは、弥生時代後期以前に堆積した粗粒砂～極粗粒砂（第4～2 b層）の上面で検出した。平面円形、直径0.18m、深さ0.05～0.07m、埋土は極細粒砂質シルトである。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。第2 a層除去面で検出しており、第2 a層下面の凹みの可能性がある。

#### 御所池瓦窯跡第1号窯（巻頭図版2、図60～74、原色図版8・9・10～14、図版12・13）

11区の発掘調査では、現代作土を除去して焼土塊を多量に含んだ層を確認した時点から、窯跡の存在を想定しつづ掘削を進めた。調査区を北側に拡張し、燃焼部を検出した段階で、瓦窯と認識するに至っている。

第1号窯は、燃焼部から前庭部を検出した。北側に想定される焼成部は調査区外である。瓦窯の構造を示す各名称は図60に示した。

なお、燃焼部前面、南側で検出した左右の土坑は、袖石が据付けられていた穴と考えておらず、袖石据付坑と呼称する。また、袖石は廃絶時に抜き取られており、袖石が抜き取られた穴は袖石抜取穴と呼称する。前庭部で検出した方形・長方形の土坑は前庭部土坑として他の土坑と区別する。

第1号窯では、構築から廃絶に至るまでを第1面から第5面として調査した。

第1号窯前庭部では、操業時に形成された地層（以下、機能時形成層）の粘土質シルトが整地層の偽礫状を呈するシルトと互層になっている状況を確認しており、機能時形成層の検討を行って各面の操業時の状態を復元した。

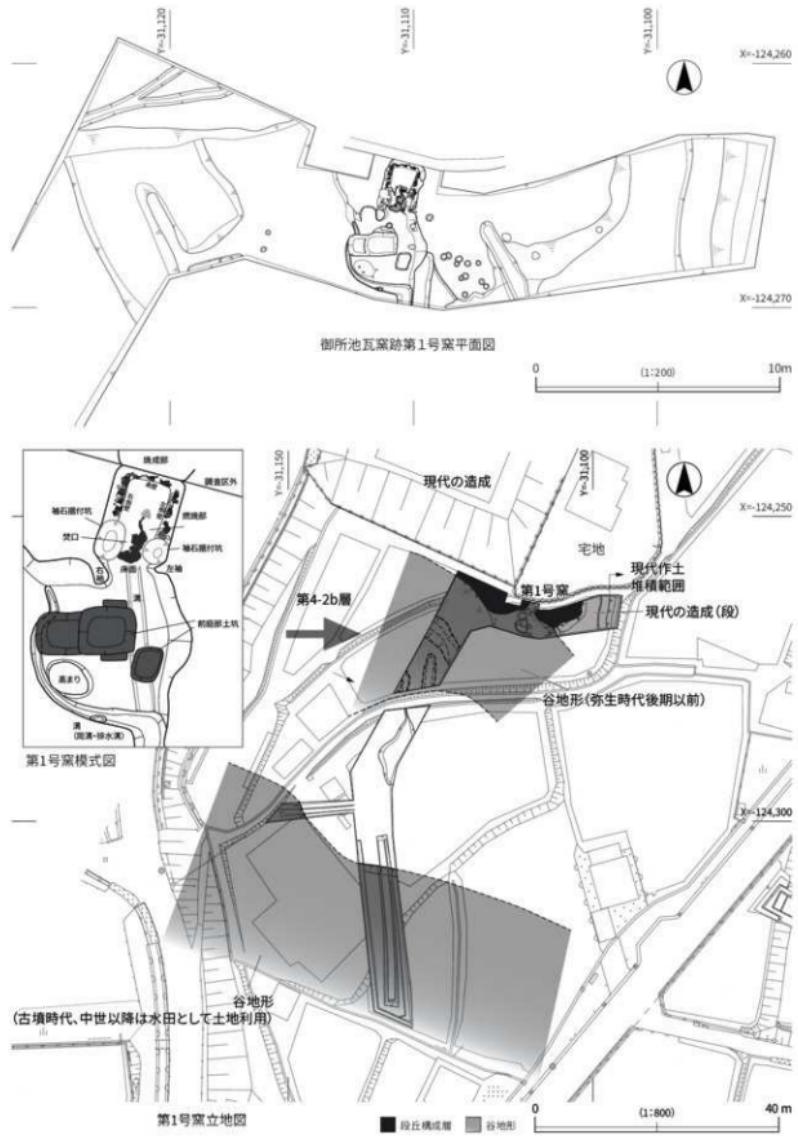


図 60 御所池瓦窯跡第1号窯平面、模式、立地

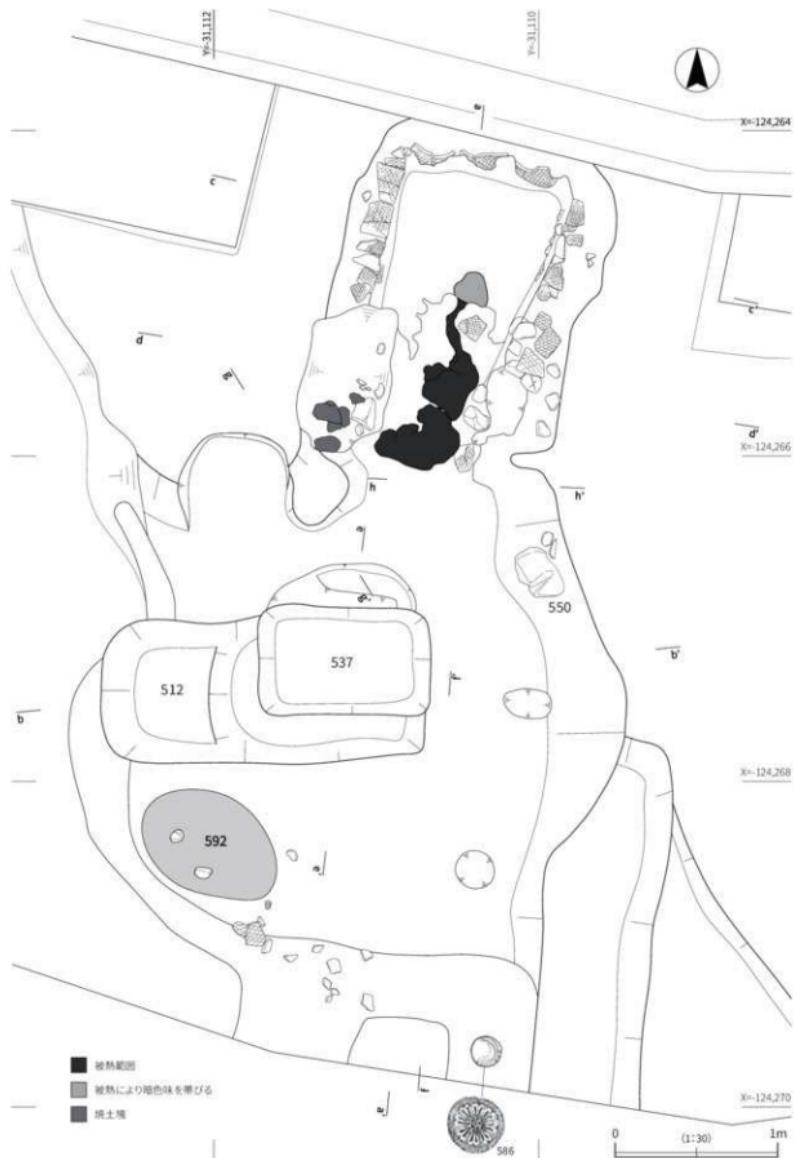


図 61 御所池瓦窯跡第1号窯第1面平面

- ・第1面：第1号窯の機能廃絶面。操業期の最終の段階に当たる。埋め戻し直前の状況を示す。
- ・第2面：第1号窯南北断面では最上位の機能時形成層（図64-6層）を除去した面。
- ・第3面：第1号窯の当初の操業期を示した面。
- ・第4面：第1号窯の構築過程を示すための任意面。燃焼部は内側に貼り付けられた粘土（窯体）を除去した状態である。焚口は第3面床面形成層の除去面である。前庭部は第1号窯構築直前の状態（加工面）に当たる。
- ・第5面：第1号窯の加工面。第1号窯構築直前の状態で、基盤層上面に当たる。

なお、燃焼部は、瓦窯構築時の第3面から廃絶に至る第1面まで踏襲される。焚口・前庭部では、第2面構築時に第3面から改築が行われる。焚口では床面の貼り直し、左右袖部土手状盛土の追加を行う。前庭部では、前庭部を囲む溝が掘削される。第1面は第2面の焚口・前庭部の機能を踏襲するが、第1号窯廃絶時には前庭部を囲む溝は機能しない。

前庭部の機能時形成層は、大別4層、細別9層に分けられた。操業した回数と必ずしも一致せず、1層に複数回の操業で形成された地層が収斂している可能性があるものの、少なくとも9回以上、第1号窯を稼働させたと考えられる。機能時形成層は暗色を呈する泥質の堆積物である。細かく碎いたり、薄く切ったりした状態で観察を行っており、固形物の炭化物が混じる場合が前庭部南側の一部（高まり周辺）を除いて微量であることを確認した。見かけ暗色を呈するのは、粒状が細かい炭化物が全体に混じることと、土壤化が原因と考えている。

前庭部で検出した方形ないし長方形を呈する土坑を前庭部土坑と呼称した。前庭部土坑は、機能時形成層の検討から第1号窯操業時に1基ずつ機能した土坑である。機能時形成層との関係は、断面上で土坑内の埋土と連続するか、土坑肩部に形成される状況を確認して第1号窯の各面に帰属させた。埋土下層に粒状の細かい、シルト～極細粒の炭化物が堆積する。第1号窯廃絶後に掘削された498～500土坑と前庭部土坑の違いは、前者には埋土に炭化物が多量に含まれるが、炭化物のみで形成される埋土がないことである。

以下、第1号窯について、立地、第1面から第5面までの調査成果、出土遺物の順に報告する。

#### a. 第1号窯の検出状況と立地（図60）

第1号瓦窯は、瓦窯廃絶後の埋め戻し土を除去して検出した。埋め戻し土は焼土塊を多量に含んだシルト（偽礫状）で、炭化物は含まない。焼土塊は窯壁や天井部に用いた構築材に由来すると想定している。燃焼部と焚口の上部は現代作土、前庭部南西側は近世作土により削平される。

第1号窯は、南東方向に延びる段丘面と弥生時代後期以前の谷地形の境界部に立地する。谷地形では弥生時代後期以前の流路堆積物（砂礫、第4-2 b層に対比）によって埋没していく状況を確認しており、第1号窯は蛇行する流路の攻撃面に当たる場所に構築される。地形に合わせて第1号窯は構築されており、燃焼部は段丘面、前庭部は谷地形埋没後の砂礫上面（第4-2 b面）に立地する。段丘面は近代以降に大きく改変されており旧地形の原形を留めていないが、調査区外に想定される焼成部は段丘面の斜面地を利用して構築されたと考えている。11区の調査区外に当たる11区南東側は、11区南西側で検出した流路（弥生時代後期）の埋没状況から谷地形が埋没する最終段階に大量の砂礫が供給されたことは想定されず、南方向に低くなる緩斜面になっていたと想定している。

#### b. 第1号窯第1面（図61・64・65・68、原色図版8・9）

第1号窯は、燃焼部から前庭部までが左右非対称で構築する。左右袖は焚口床面に対して位置が異

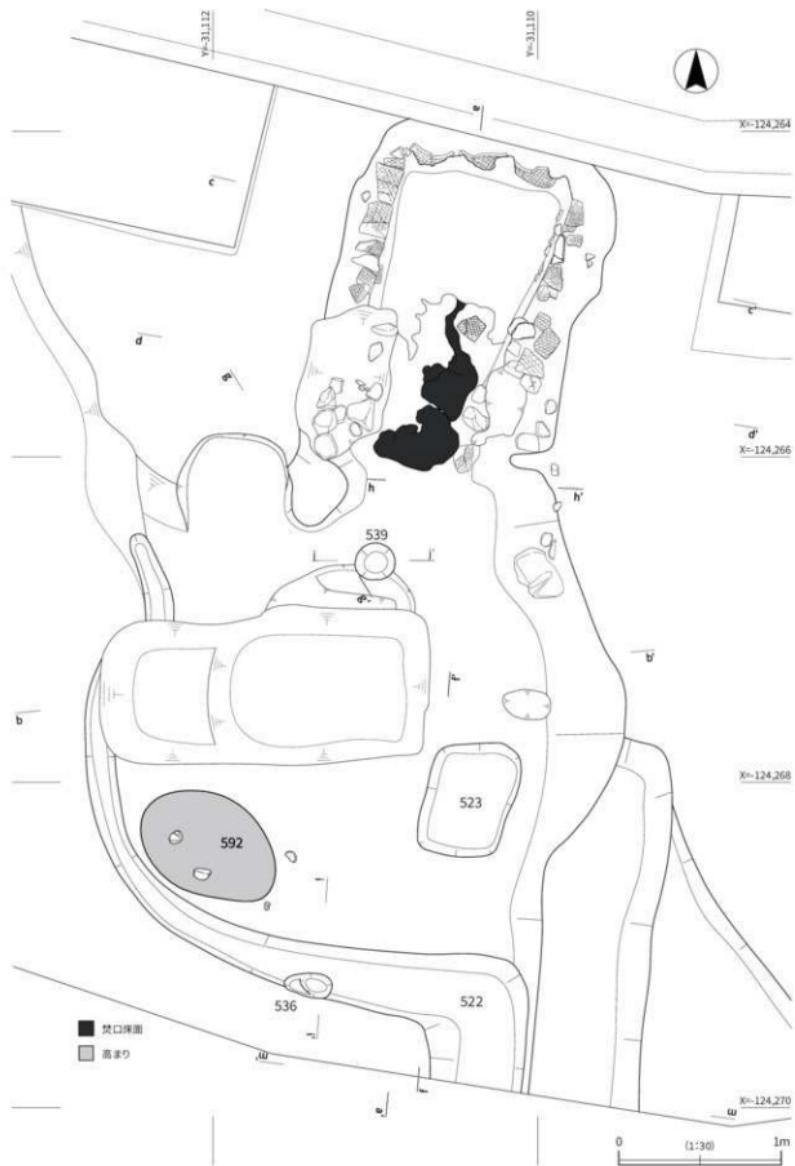


図 62 御所池瓦窯跡第1号窯第2面平面

なっており、燃焼部は平面形が長方形ではなく、奥壁と右側壁がほぼ直角に交わるのに対して、左側壁は焚口に向かって西側に偏る。右側壁でN-11.4°-E、奥壁でE-11.1°-S、左側壁でN-22.4°-Eである。

燃焼部は平瓦と礫を用いて構築する。燃焼部の下部構造が主として残存しており、第3面から大きな改築が加えられていない。内法は、奥壁から左側壁南端までの長さ1.1m、奥壁から焚口床面までの長さ0.75m、奥壁側の幅0.95m、焚口側の幅0.78m、高さ0.2m以上、掘形は調査区北端から左側壁南端までの長さ1.3m以上、幅1.5~1.6m、深さ0.2m以上である。基盤層の白色シルトを加工しており、床面は白色シルトが露出した状態で、これを燃焼部の床面としている。燃焼部床面は被熱による変色や硬化は認められず、炭化物は一切確認できなかった。奥壁・右側壁は瓦、左側壁は瓦・礫を構築材として用いる。瓦・礫を設置した後、内側には壁材として粘土を貼って仕上げている。壁材に用いられた粘土は粗粒砂を少量含んだもので、スサは混じらない。498土坑掘形に接する部分の右側壁は壁土が剥がれて瓦積みが露出した状態を検出している。奥壁は燃焼部との境界に段を設け、平瓦3枚を縦に並べて構築する。奥壁周辺は北側の現代の溝により擾乱を受けており、平瓦はいずれも上端を欠損する。段を境に焼成部側へ高くなっている、比高は0.2m以上。奥壁と左・右側壁のコーナーは基盤層由来で未固結のシルト偽礫（3~4cm大）を用いて壁を構築する。偽礫の重なり方から奥壁側から整えて、側壁の構築に移ったものと考えられる。焚口側の左側壁においても焼土塊を検出しており、構築材として用いた可能性がある。燃焼部の裏込め土は基盤層由来のシルト（偽礫状）を主体とする。シルト（偽礫状）は第1号窯操業時の被熱により、赤变ないし黒変するものもあった。

右側壁は、平瓦と粘土を交互に積み重ねて側壁を構築する。小割にした平瓦は3段以上積み重ねられている。平瓦は接合関係があるものが多く、整理作業の過程で3枚分の平瓦が復元できた。右側壁に用いられた平瓦の9割近くが接合している。完形に近い状態で復元できた平瓦は縦方向に半割した後、横方向に小割して側壁に用いられている。左側壁は、礫と平瓦、粘土を積み重ねて側壁を構築する。礫は7~1.2cm大で、側壁の下段に用いる。岩質は約7割が砂岩、約3割がチャートである。平瓦は小割にして上段の構築材として用いる。整理作業の過程で奥壁側の平瓦が接合している。

焚口では、袖石据付坑、左袖・右袖（土手状盛土）、床面を検出した。第1号窯廃絶時に全体が擾乱されているため、遺存状態は悪い。規模は、左側壁南端から右袖屈曲部までの長さ0.93m、左袖・右袖間の幅0.64mである。焚口床面は、廃絶時に擾乱を受けており、燃焼部寄りの部分は遺存していない。床面は、長さ1.07m、幅0.45m以上、厚み0.03cmである。土質は粗粒砂質シルトで、被熱による変色と硬化が認められる。床面上面は右袖寄りに南北方向の凹みをもち、燃焼部内でも同じ方向で黒変した筋状の凹みがあり、第1号窯操業時の作業痕跡の可能性がある。

袖石据付坑は、燃焼部前面の構造物として石製の立柱（袖石）を据え付けていたことが想定される土坑である。廃絶時に袖石は抜き取られており、第1面から第3面の平面図には袖石抜取穴を示した。袖石抜取穴の埋土と袖石据付坑の埋土は判別が困難であり、図上は掘削時の状況に応じて形状が変わることが、左側壁の壁材として用いられた平瓦が袖石据付坑の裏込めに用いられた石の上に重なっている状況を確認しており、燃焼部の構築→袖石の据付→燃焼部と焚口の境界部の側壁構築という順番に構築過程が復元できる。

左袖・右袖は第3面から第2面の改築時に新たに追加されたもので、土手状盛土によって構築する。改築時に追加した根拠となるのは、左袖・右袖の盛土下位にある機能時形成層で、盛土直下の機能時形

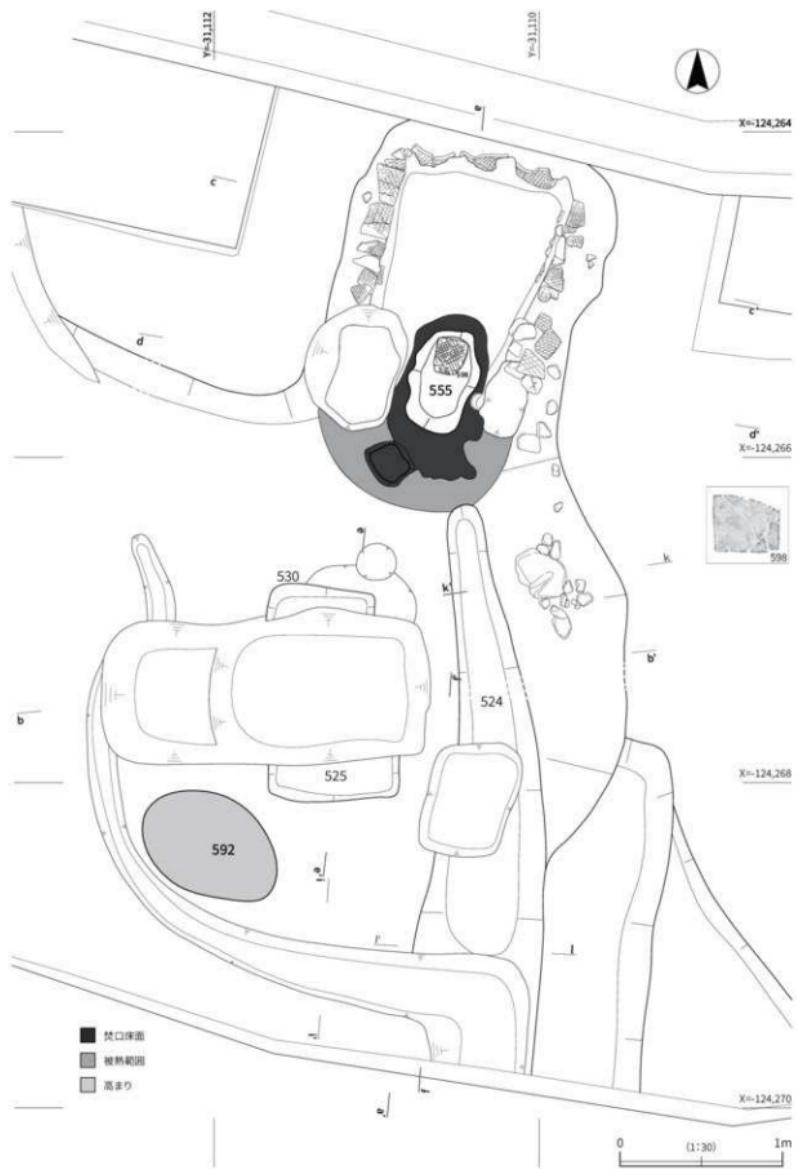
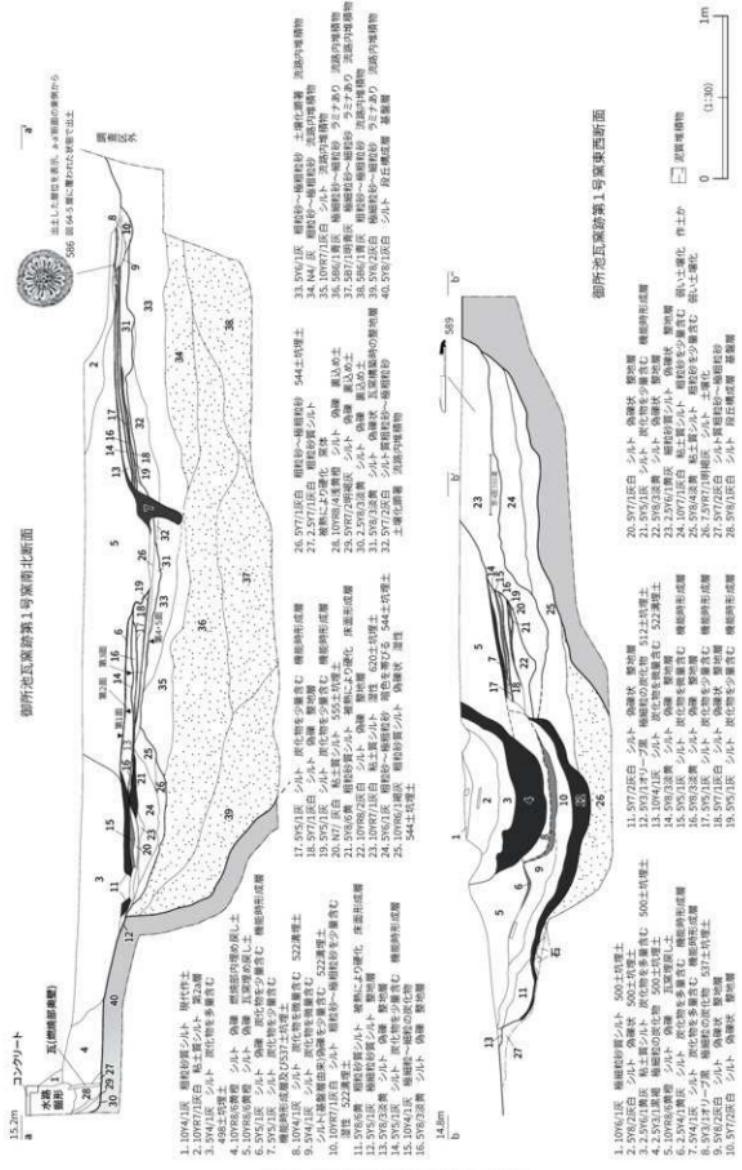


図 63 御所池瓦窯跡第1号窯第3面平面



成層が第3面焚口床面に接する状況を確認している（図68右袖断面5・7層、左袖断面2・5層）。右袖は幅0.55m、高さ0.25m以上である。上部は調査時に掘り過ぎたが、第1号窯廃絶時の埋め戻し土上面では確認できないため、高さは0.2mを超えない可能性がある。左袖は幅0.3m、高さ0.3mである。構築材として礫と軒平瓦587を用いる。左袖・右袖は焚口前面を絞り込んで、残灰の処理と内部の燃焼効率を上げることを目的として構築したと想定している。

512・537前庭部土坑は、切り合い関係があり、537前庭部土坑が新しい。第1号窯の操業に合わせて1基ずつ機能したと考えられるが、2基の土坑周辺で機能時形成層は1層に収斂する。537前庭部土坑は、平面形は長方形、長辺1.05m、短辺0.65m、深さ0.6mである。埋土下層は極細粒の炭化物で、上部は調査で掘り過ぎており不明。遺物は土師器甕が出土した。

512前庭部土坑は平面長方形、長辺2.0m、短辺0.9m、深さ0.5m、埋土下層はシルト質の炭化物である。遺物は土師器、丸瓦、平瓦が出土した。土師器は杯の底部片と考えられるものが出土した。

592高まりは、平面楕円形、長軸0.9m、短軸0.65mである。第1号窯加工面（第5面）からの高さは0.01～0.02mである。第1号窯の構築時に周辺の地下げによって高まりとして残された部分で、当初から存在したものと考えられる。高まり部分は基盤層の粗粒砂～極粗粒砂（第4～2a層）が露出し、周辺には第1号窯操業時に形成された地層（機能時形成層）が堆積する。592高まり周辺の機能時形成層には、焚口及び前庭部土坑周辺の炭化物より粒径が粗いもの（5mm以上）が多く含まれる。盛土の有無については、上部が近世作土に削平されたため不明である。

550石は前庭部の東側肩部で検出した。長さ35cm、幅25cm、厚み17cm、岩質は砂岩である。礫上面のやや平らな面を上に向けており、底面は第1号窯構築時の造成土の直上に接する。周囲では5～10cm大の同岩質の礫を複数検出した。階段状の施設であった可能性もあるが、礫上面の平らな面は狭い。

前庭部の南側では第1面の機能時形成層が南側に広がる状況を検出しており、直上から複弁蓮華文の軒丸瓦586が出土した。軒丸瓦は廃絶時の埋め戻し土に覆われた状況で出土している。

#### c. 第1号窯第2面（巻頭図版2、図62・68、原色図版10）

第1面の機能時形成層を除去して検出した。第2面の機能時形成層は第1面の機能時形成層に収斂しており、前庭部では第3面改築時の整地層上面が露出する。焚口は第3面から床面の貼り替えを行い、左袖・右袖に土手状盛土を行って改築する。

前庭部では、522溝、523・536土坑、539ピットを検出した。522溝は幅0.12～0.57m、深さ0.01～0.15m、埋土は粗粒砂質シルトである。前庭部を囲む周溝で、北側と南側は微高地に沿って掘削する。底面は南に下がっており、南方向に排水を行ったと考えられる。522溝の底面では536土坑を検出した。522溝の一部を掘り下げて加工したものである。平面形は楕円形状、長軸0.3m、短軸0.15m、深さ0.17m、埋土は泥質堆積物である。

522溝は、512土坑に平面的に切られることや第1面の機能時形成層が522溝埋土の上に堆積することから、第1面では完全に埋没していたと考えられる。遺物は丸瓦、平瓦が出土した。523前庭部土坑は平面長方形、長辺0.7m、短辺0.54m、深さ0.23m。下層には極細粒の炭化物のみの埋土が形成される。遺物は土師器甕、丸瓦が出土した。539ピットは、平面形は円形、直径0.24m、深さ0.23m、埋土は偽礫状のシルトである。整地層上面で検出しており、帰属する遺構面は不明である。第3面から第2面にかけて、焚口は大きく改築されており、その際に掘削した作業用ピットの可能性がある。遺物は出土しなかった。

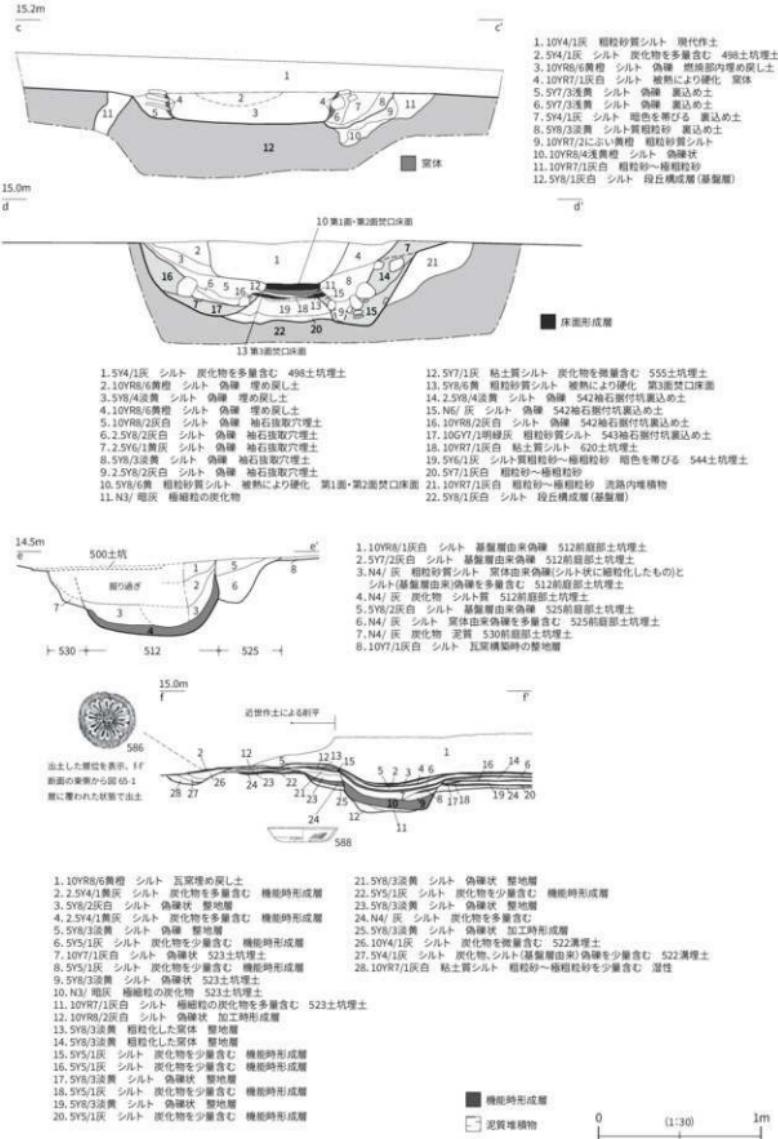


図 65 御所池瓦窯跡第1号窯断面（2）

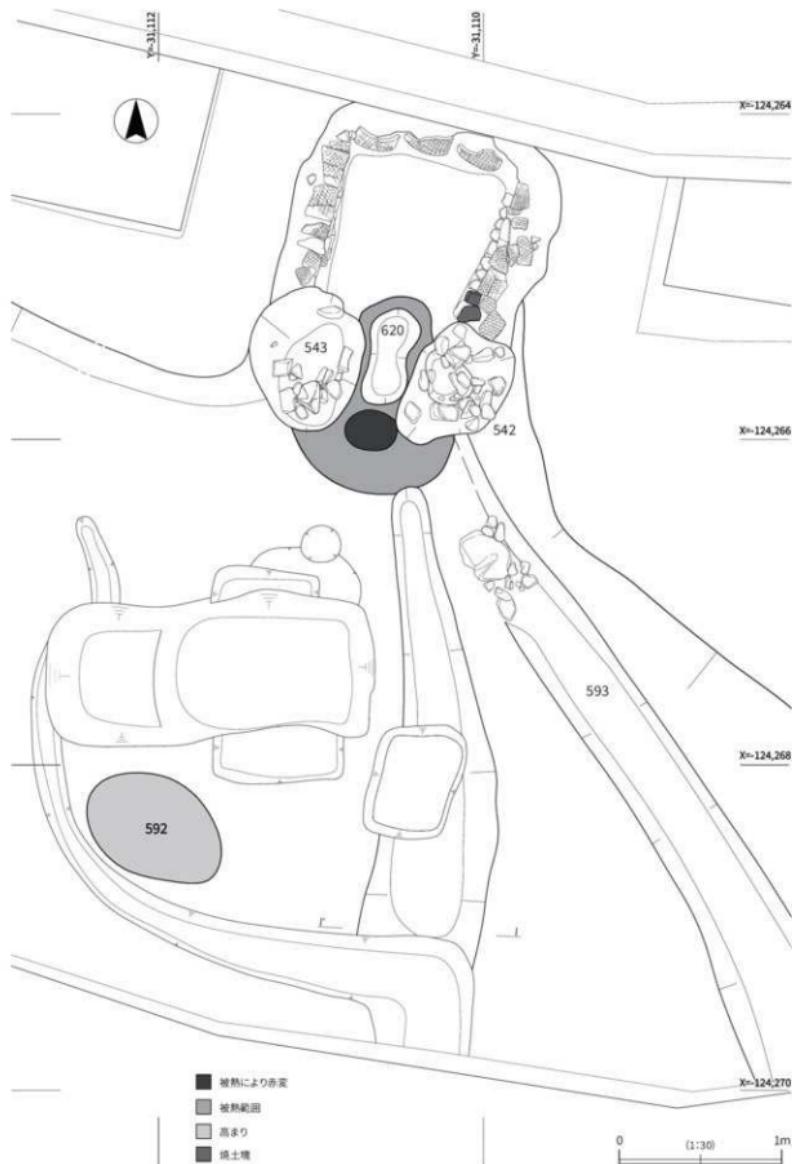


図 66 御所池瓦窯跡第1号窯第4面平面

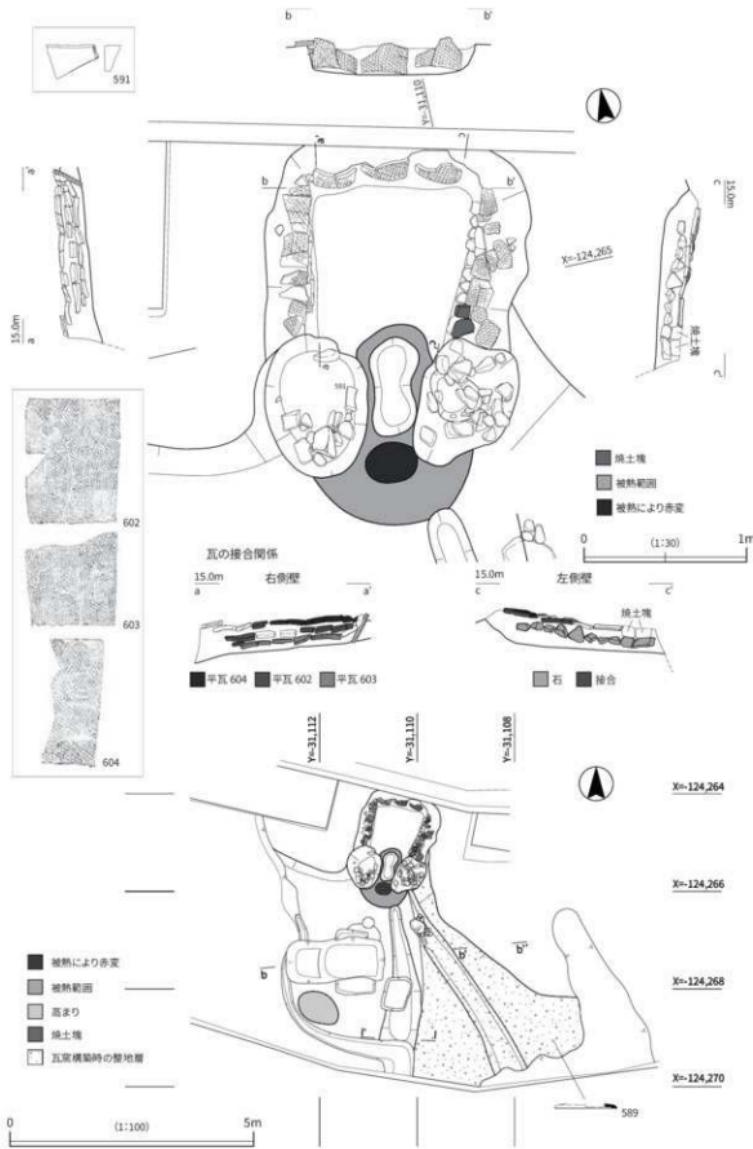


図 67 御所池瓦窯跡第1号窯焼成部平・立面

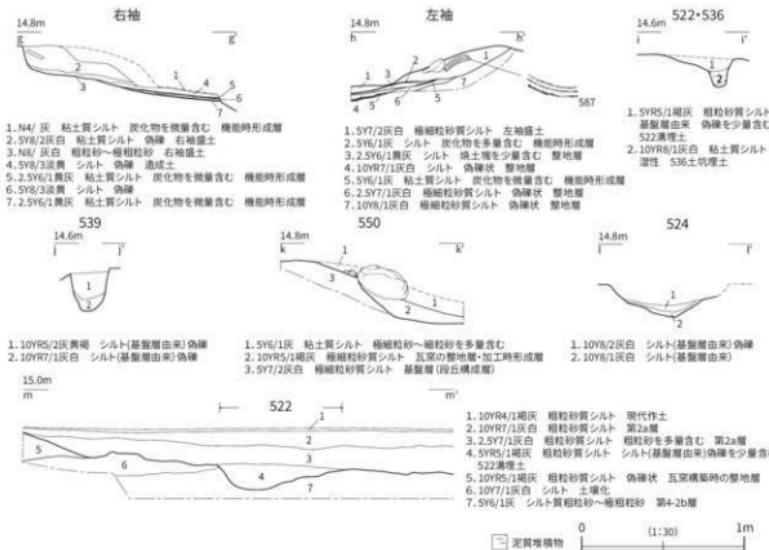


図68 御所池瓦窯跡第1号窯断面（3）

#### d. 第1号窯第3面（図63・68、原色図版11・12）

第1面の機能時形成層直下の整地層（図64南北断面-13層）を除去して、上位から2層目（図64南北断面-14層）以下の機能時形成層の上面が第3面に当たる。焚口床面に接する機能時形成層は前庭部で3層以上に分かれるが、592高まり周辺は地層が収斂しているため、1層目の機能時形成層を除去した段階で部分的に基盤層が露出する。

焚口床面は、北端から南端の長さ1.16m、左右袖の間の幅0.58m、厚み0.04mである。東西は袖石抜穴により擾乱される。南西側では中央より0.01m高い部分を検出した。床面上面は、東西方向で中央に向かって凹んでおり、第2面の平坦な床面の形状と異なる。555土坑は、平面形は不整形、長軸0.63m、短軸0.4m、深さ0.05mである。埋土上層はシルト状の炭化物、下層は泥質堆積物である。上層の炭化物は前庭部の第1号窯操業に形成された地層（機能時形成層）に連続する。下層はシルト偽礫を少量含んでいるが、泥質堆積物は湿潤な状況で形成されたと考えられる。555土坑北側では、凸面向上に向けた状態の平瓦を検出した。第3面焚口床面形成層がすり付くことから、第3面の焚口床面構築時に置いたものと考えている。

524溝は、幅0.2~0.8m、深さ0.2m、埋土は偽礫状のシルトである。第1号窯構築時に掘削された溝である。第3面機能廃絶時まで浅い凹みとして残り、第2面構築時の整地で完全に平坦化する。基底面で泥質堆積物等は確認できていないが、燃焼部と焚口の防水のために第1号窯構築時から付属する施設であったと想定している。遺物は土師器杯A588が出土した。523前庭部土坑の肩部に形成された第1面・第2面の機能時形成層・整地層を除去した後、524溝を検出しており、杯Aは第1面・第2面の第1号窯操業期より確実に古い時期の操業を示す資料である。

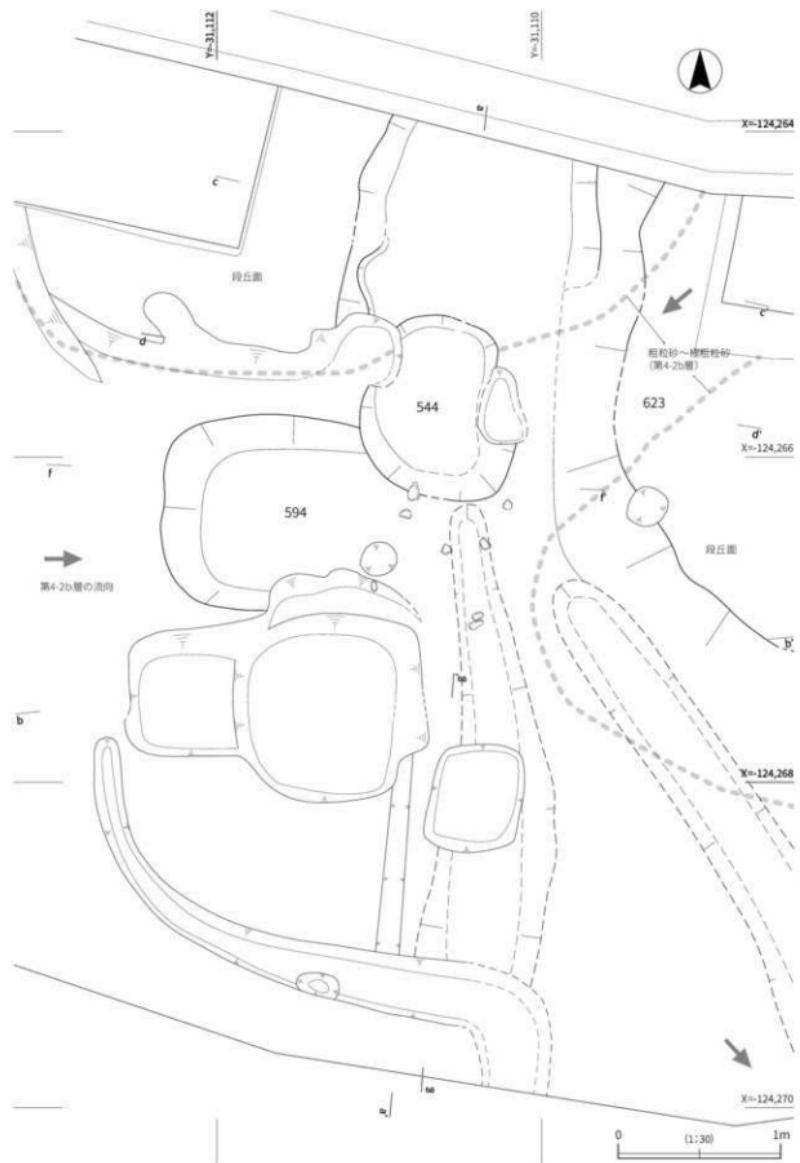


図 69 御所池瓦窯跡第1号窯第5面平面

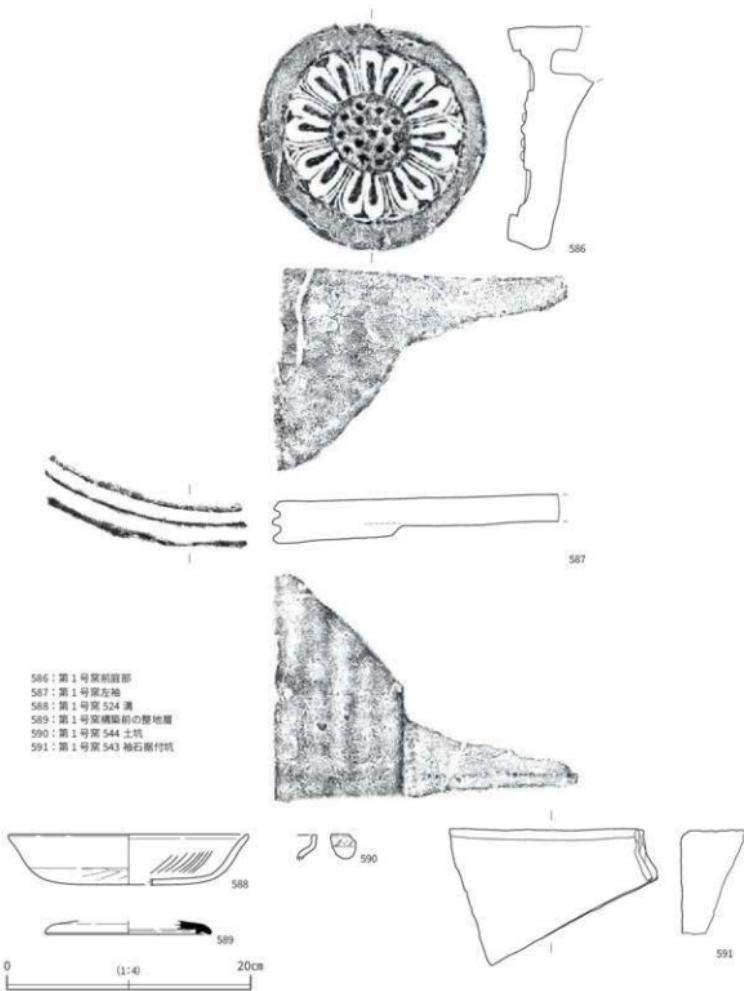


図 70 御所池瓦窯跡第1号窯出土遺物（1）

525・530前庭部土坑は第1面の537土坑に搅乱されており全容は不明。525前庭部土坑は、平面形は方形状、東西0.8m、南北0.35m以上、深さ0.26m、埋土はシルトで還元化した窯体片を多量に含む。530前庭部土坑は、平面形は方形状、東西0.6m、南北0.2m以上、深さ0.2m、埋土は泥質の炭化物である。

なお、第2面522溝は第3面機能時形成層を切って掘り込まれており、第3面には伴わない。

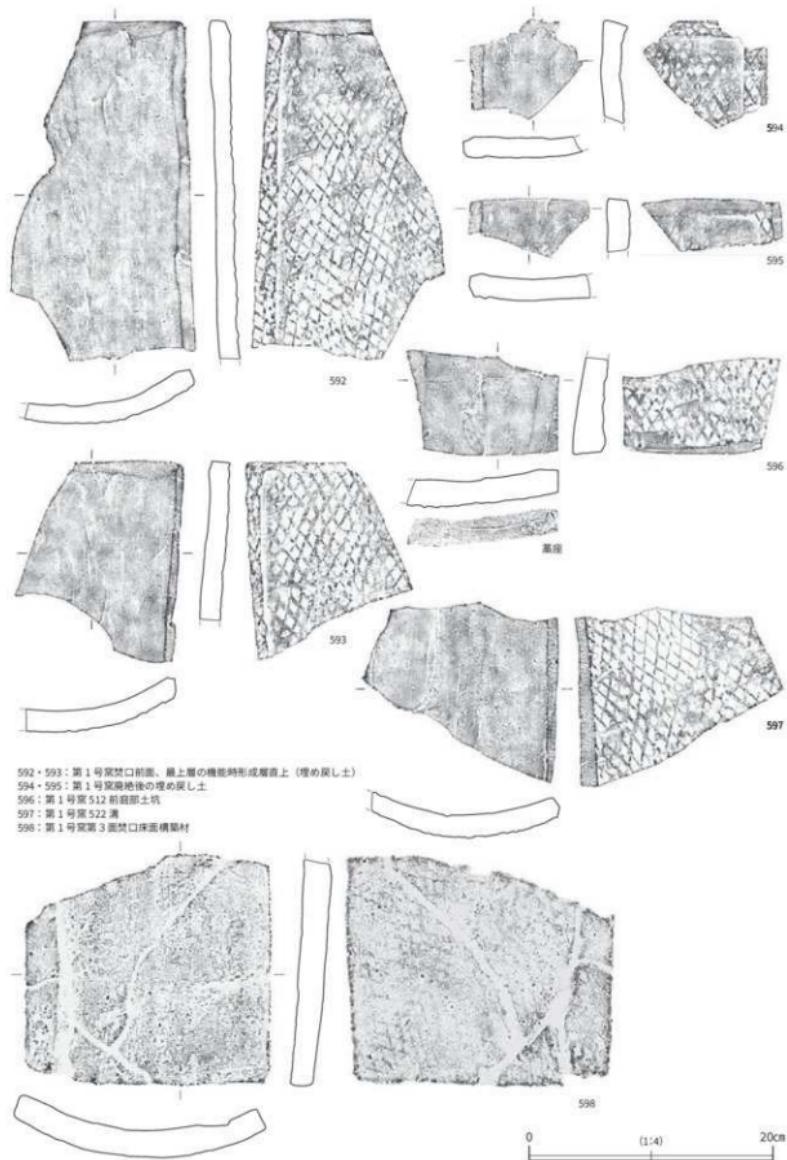


図71 御所池瓦窯跡第1号窯出土遺物（2）

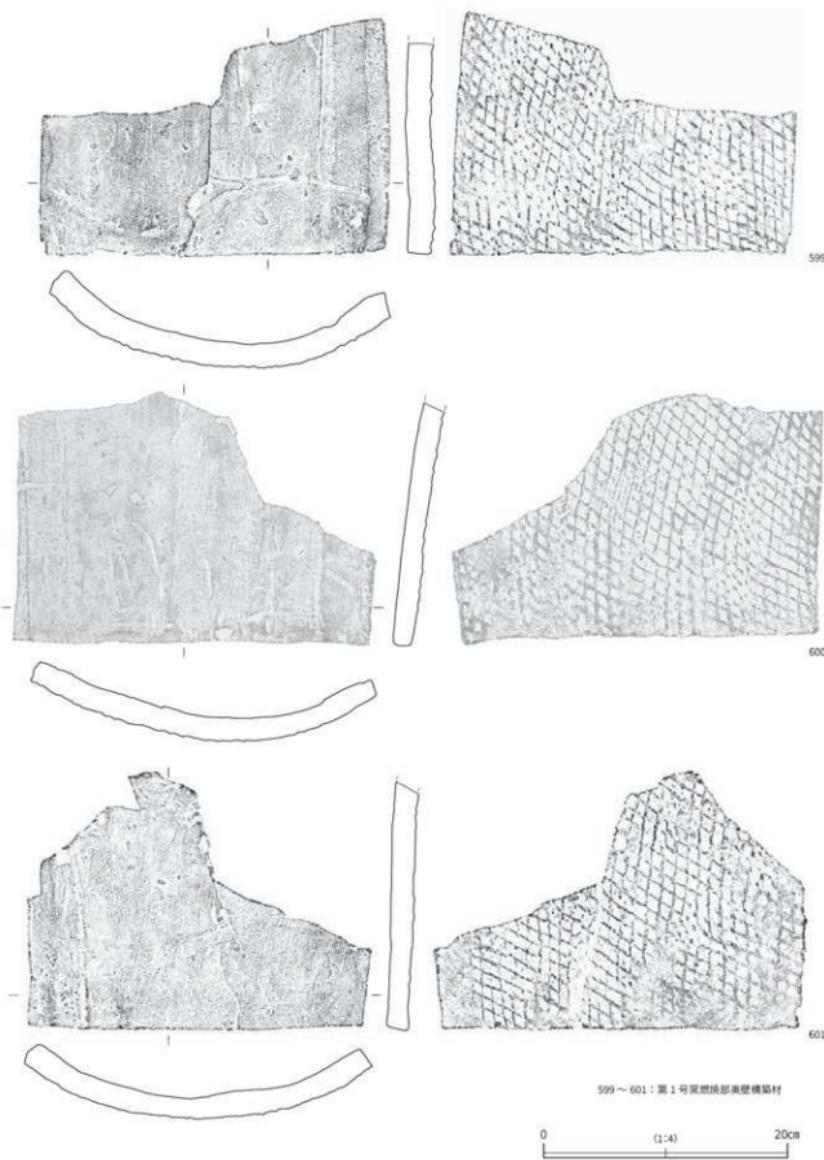


図 72 御所池瓦窯跡第 1 号窯出土遺物 (3)

e. 第1号窯第4面（図66・67、原色図版11～13）

燃焼部は壁土、焚口は第3面床面、前庭部は第1号窯構築時の整地層を除去した状態を第4面とした。第1号窯構築過程を示すために設定した任意面である。焚口内で袖石据付坑・土坑、前庭部で溝、前庭部南東側で溝を検出した。542袖石据付坑は、平面形は不整形、長軸0.8m、短軸0.6m、深さ0.5mである。遺物は出土しなかった。543袖石据付坑は、平面形は楕円形、長軸0.88m、短軸0.7m、深さ0.46mである。遺物は平瓦603が出土した。両据付坑では、袖石の根固めに用いたと考えられる礫を確認した。礫は5～20cm大、岩質は砂岩主体である。620土坑は、平面形は不整形、長軸1.23m、短軸0.95m、深さ0.16mである。埋土は粘土質シルトで、止水性堆積物の可能性がある。遺物は出土しなかった。593溝は幅0.5～0.65m、深さ0.03～0.07mである。前庭部東側の整地層の下面遺構で、浅い凹みのような状態で検出した。直下の粘土質シルト上面の土地利用の痕跡を示す可能性がある。なお、整地層から須恵器杯蓋589が出土した。

f. 第1号窯第5面（図69、原色図版13）

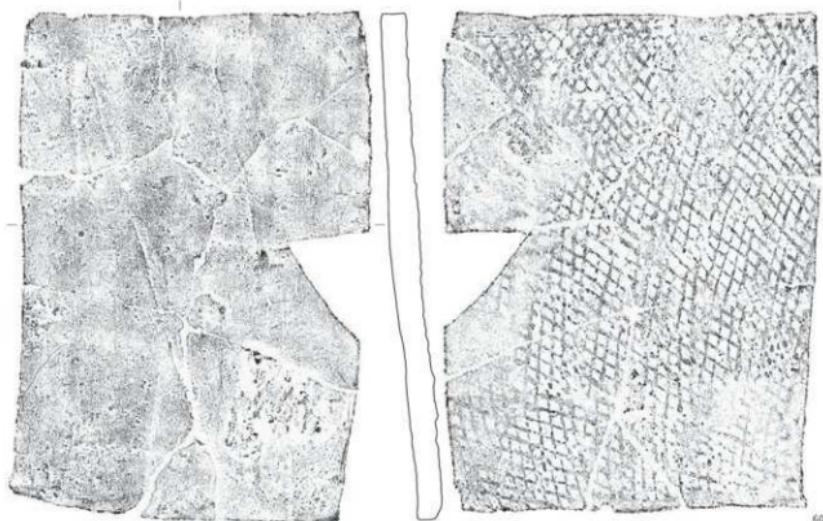
第1号窯構築時に形成された埋土（加工時形成層）を除去して検出した、第1号窯の加工面である。第1号窯構築直前の状況を示す。燃焼部・焚口周辺は、基盤層の段丘構成層が露出する。燃焼部・焚口北側にかけて第4～2b層とした粗粒砂～極粗粒砂が堆積する範囲を検出しており、第1号窯構築以前に谷地形があったと考えられる。前庭部では溝・凹みを検出した。594凹みは第1号窯構築直前の地表面にあった凹みである。544土坑は、平面形は不整形、長軸1.0m、短軸0.7m、深さ0.1m、埋土は粗粒砂～極粗粒砂主体で、基盤層の粗粒砂～極粗粒砂（第4～2b層）に由来する。検出面（第1号窯第4面）では被熱して赤変した部分を確認した。袖石据付坑との切り合い関係から、焚口の構築に先行すると想定している。遺物は弥生土器甕590が出土した。

g. 第1号窯出土遺物（図70～74、原色図版14、図版12・13）

遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯蓋、軒瓦、丸瓦、平瓦、熨斗瓦等が出土した。

土師器杯A588は524溝から出土した。外面底部はヘラナデ、内面には一段の放射状暗文。須恵器杯蓋589は第1号窯構築時の整地層から出土した。弥生土器甕590は544土坑から出土した。口縁部外面に列点文を施す。礫591は543袖石据付坑から出土した。加工痕はないが、瓦窯構築材として使用された他の礫と形状・岩質が異なり、転用材の可能性がある。

軒丸瓦586は第1号窯第1面の前庭部で出土した。複弁蓮華文。蓮弁は周囲に輪郭線を伴う。間弁は中房に接し、間弁端は三つ又に分かれる。蓮子は断面形が扁平な半円形を呈し、外側2個の蓮子は埋め木でつぶし、1+4+9に配置される。中房の蓮子と蓮子の間はナデの痕跡が明瞭である。外縁はナデ、乾燥前にいた筋状の痕跡が斜めに走る。外縁の外側には、側縁外周のナデによって生じた粘土の突出部が縁取り状に認められる。范傷は下側の蓮子と埋め木した蓮子痕跡の輪郭線との間に筋状のものがある。また、明確ではないが、下側の蓮子から中房の外側にかけて縦方向に筋状の痕跡があり、范傷の可能性がある。外縁下端には、瓦当裏側への粘土の貼り足し時に生じた粘土接合痕が認められる。外縁上端には、丸瓦部に対して縦方向に粘土接合痕が2か所あり、内一か所は丸瓦部の折損時の破断面に対応する。丸瓦部は欠損する。丸瓦部との接合面はナデによって成形しており、瓦当裏面の接合面は外周に沿った指ナデの痕跡が明瞭に残る。丸瓦部凹面の接合部には、布目痕が残る。軒平瓦587は左袖盛土内から出土した。三重弧文。桶巻き造り。型挽き施文で、弧線の断面形は半円形、深さ3～4mmである。施文後、中央の弧文は下から横方向のナデ。上下の弧文は、瓦当面の上下に当たる凹凸面を横方



602

603

602・603：第1号窯燃焼部右侧壁構築材

0 (1:4) 20cm

図73 御所池瓦窯跡第1号窯出土遺物(4)

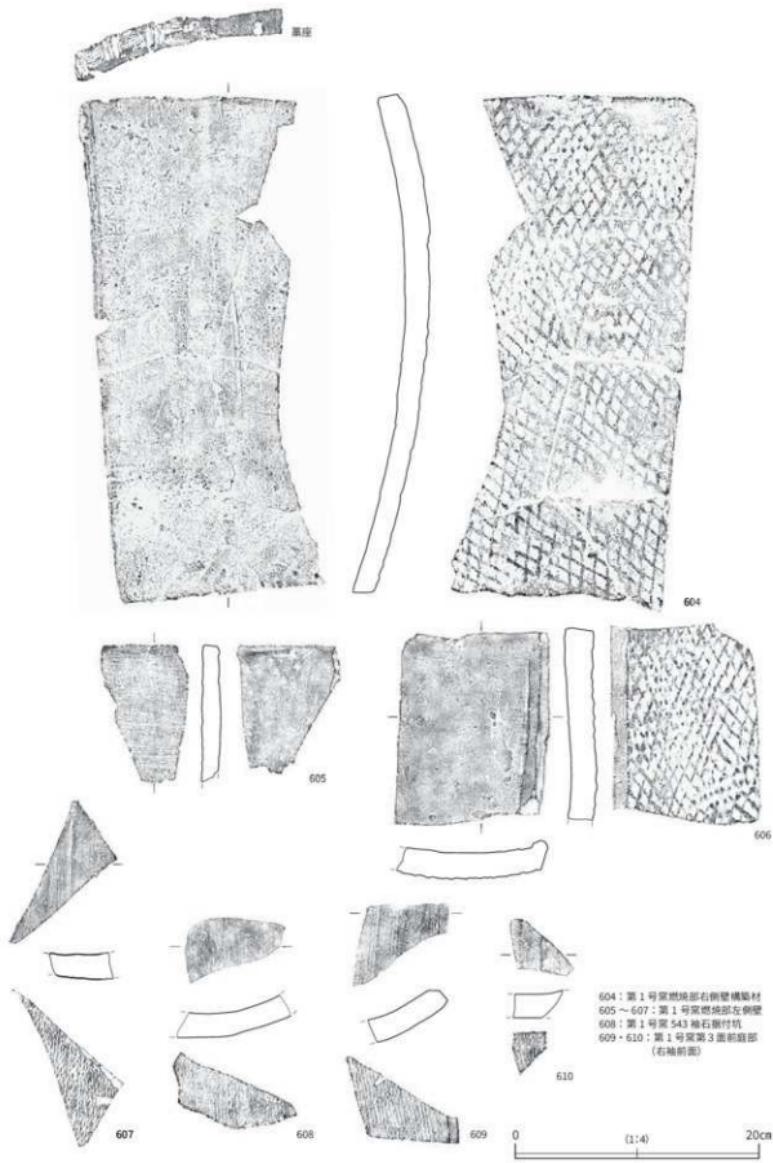


图 74 御所池瓦窑跡第1号窑出土遺物 (5)

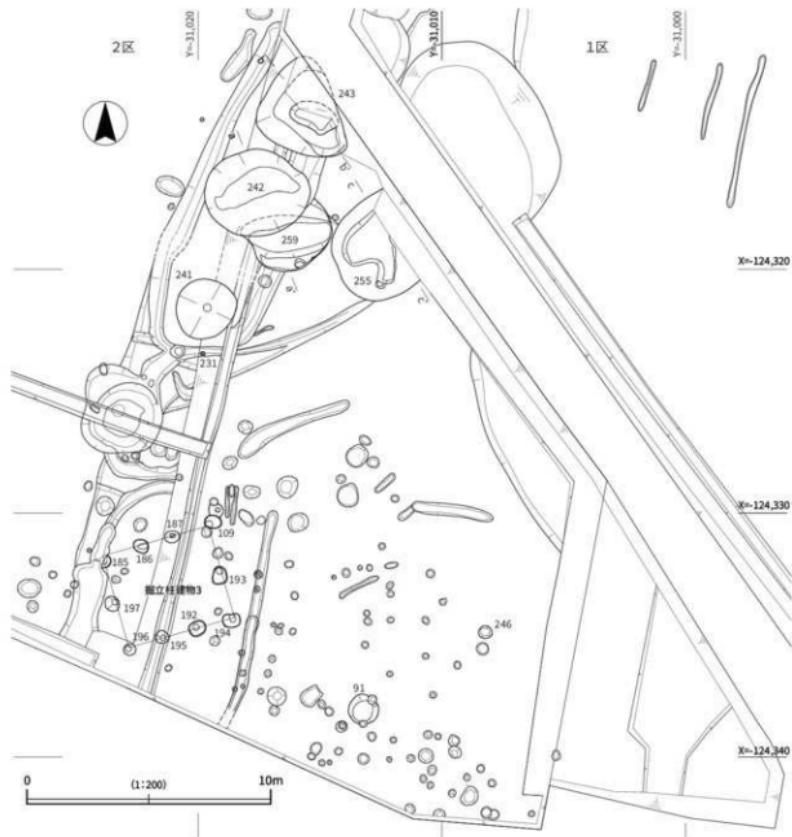


図 75 2区第3-2b面平面

向に強くナデ付けているため、押し出された粘土が凸状に張り出している。凹面は布目痕があり、桶巻きの圧痕部分を縦方向のナデ調整。瓦当面に近い部分に横方向の四線状の凹みがある。凸面は、頸の部分のみが遺存し、横方向にナデ。平瓦592～595は凸面に凹型整形台痕を残す。592・593は焚口前面の第1面機能時形成層直上、594・595は第1号窯廃絶後の埋め戻し土から出土した。平瓦596は512前庭部土坑出土、端面に薺座の痕跡がある。平瓦597は522溝から出土した。平瓦598は第3面焚口床面の構築材で、第1号窯から出土した瓦の中では摩滅が顕著である。平瓦599～601は燃焼部焚口の奥壁構築材、平瓦602～604は右側壁、丸瓦605・平瓦606は左側壁に用いたものである。604は端面に薺座の痕跡を残す。平瓦607～610は縄タタキを施したもので、第1号窯から合計4点出土した。607は燃焼部左側壁構築材、608は543袖石据付坑、609・610は第3面機能時形成層とその直上の整地層掘削時に出土した。軒丸瓦586は、飛鳥池瓦窯XVIIb型式・梶原瓦窯跡VIII型式と同范である。第1号窯の時期上限は

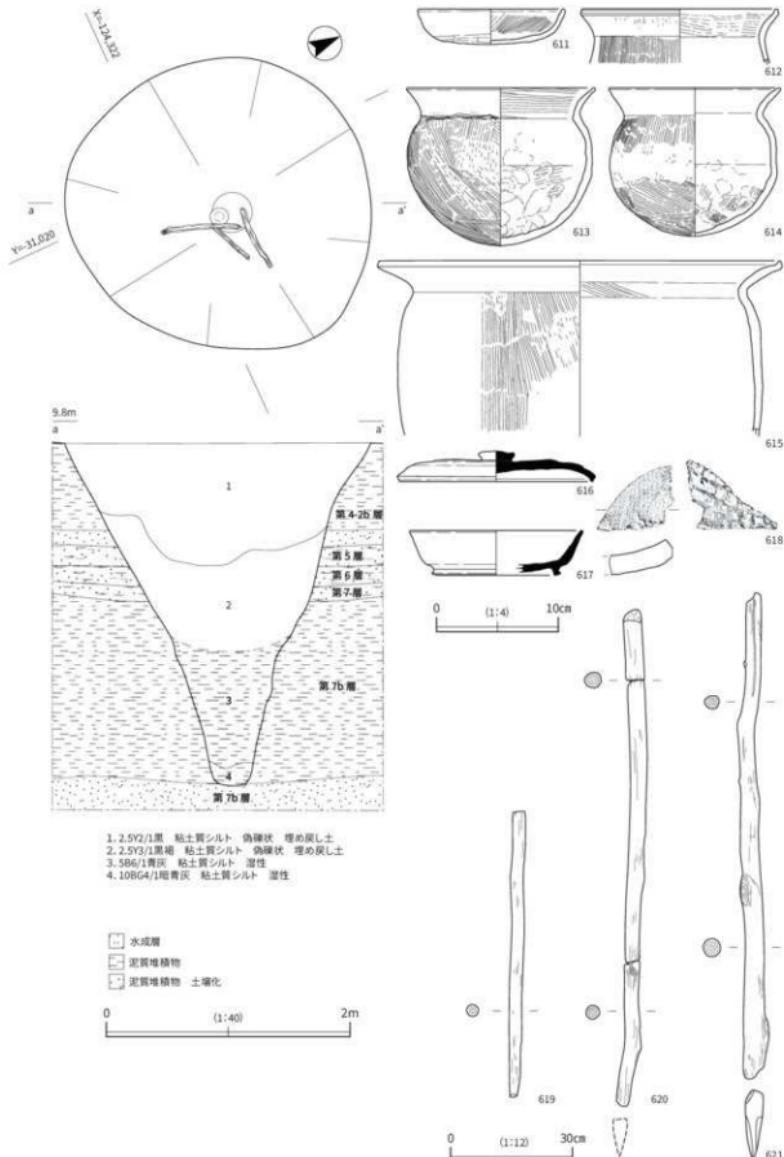


図 76 241 井戸平・断面

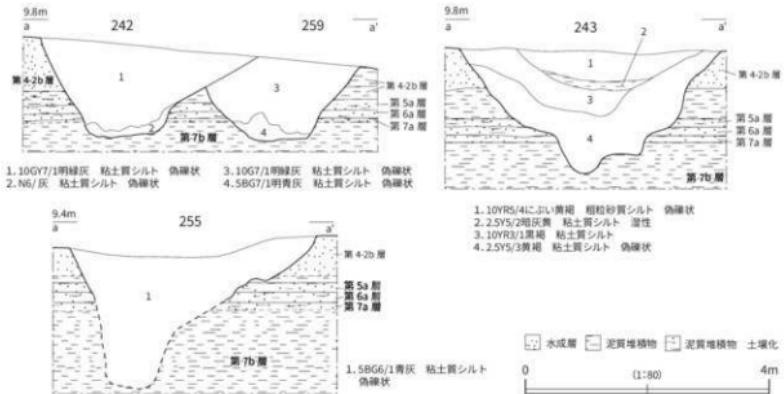


図 77 242 土坑断面

整地層から出土した須恵器杯蓋589から7世紀後葉以降を想定している。時期下限は524溝から出土した土師器A588から8世紀前葉を想定している。

#### 241井戸（図75・76、図版4・10）

2区で検出した。平面は不整な円形、直径2.5m、深さ2.8m、埋土は上位が埋め戻し土、下位が泥質堆積物である。241井戸では、掘形に沿って打設した杭を3本検出した。杭は3本とも241井戸が一定程度埋没した段階に、掘形内側に打設したもので、内1本は基盤層に先端が達する。埋土に壁面の崩落土は確認されなかったが、法面を補強するために打設したものか。遺物は、埋土の中位から土師器杯・壺、須恵器杯蓋・杯身、ウリ科植物の実（瓢箪か）、イネ科植物の葉（束状）が出土した。土師器甕613は頸部に紐が遺存した。2本以上のものに撚りをかけて紐とし、撚りは2か所確認した。厚みは2.0~2.5mmである。釣瓶として用いられたと考えられる。土師器杯及び須恵器杯蓋・杯身は平城II~III型式を想定している。

#### 242・243・255・259土坑（図75・77~79、図版4・12）

2区で検出した。242土坑は259土坑と切り合い関係があり、242土坑が新しい。242土坑は、平面形は不整な楕円形、長軸4.1m、短軸3.6m、深さ1.6mである。遺物は土師器、須恵器杯蓋、平瓦・丸瓦が出土した。平瓦629は259土坑から出土したものと接合した。須恵器杯蓋623は飛鳥III型式以降と考えている。台石624は被熱の痕跡と炭化物が付着しており、金床石等、二次的な転用を行った可能性がある。259土坑は、平面形は不整な円形、直径3.5m、深さ1.4mである。遺物は、土師器甕・鉢、須恵器杯蓋・短頸壺が出土した。土師器甕630は255土坑から出土したものと接合した。243・255土坑は、北側が調査地外にあり、全容は不明である。243土坑は、平面形は不整形、長軸4.0m、深さ2.0mである。遺物は土師器、須恵器甕・壺、丸瓦・平瓦が出土した。平瓦625は端面に薙座の痕跡を残す。255土坑は、平面形は円形、直径4.0m、深さ1.2mである。近接する奈良時代の241井戸は、検出面から2.8m下に堆積する砂層まで掘削しており、242・243・255・259土坑（以下、242他土坑）は井戸として掘削された可能性は低いと考えられる。242他土坑は埋土が粘土質シルト主体の偽礫とする点で共通し、偽礫は周辺の基盤層に由来するものである。243土坑のみ泥質堆積物を挟在するが、242他土坑は

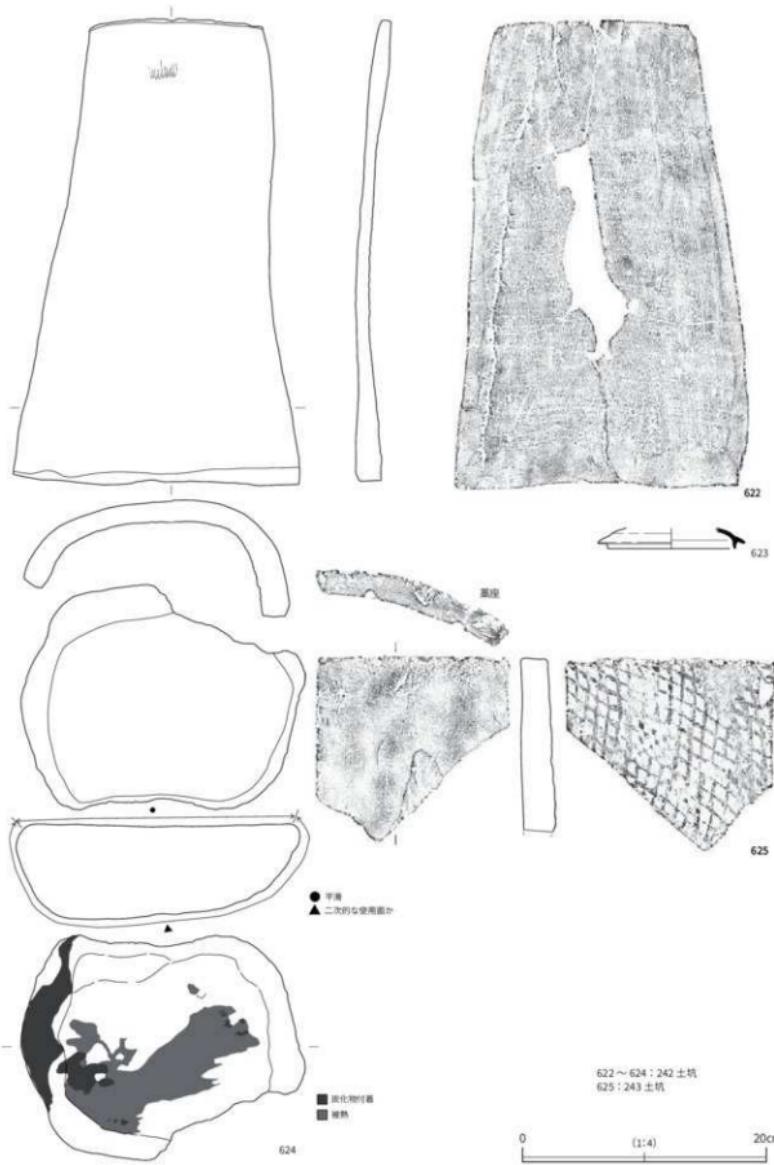


图 78 242 土坑他出土遗物

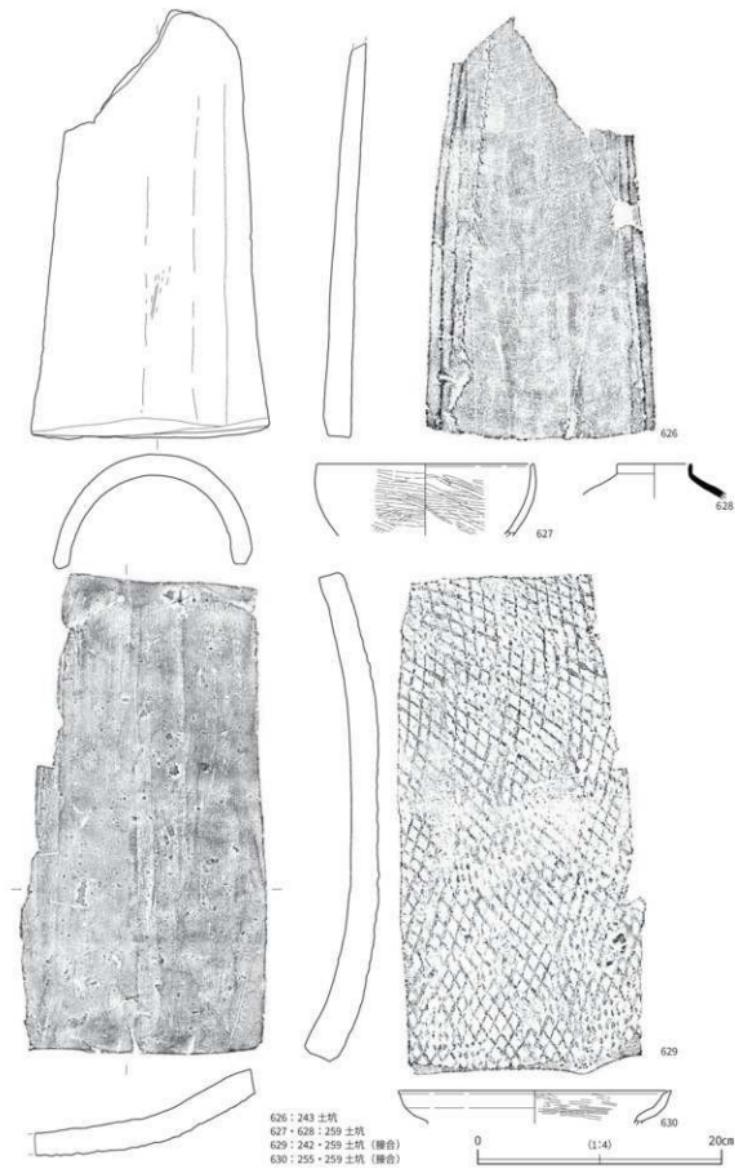


图 79 243 土坑他出土遗物

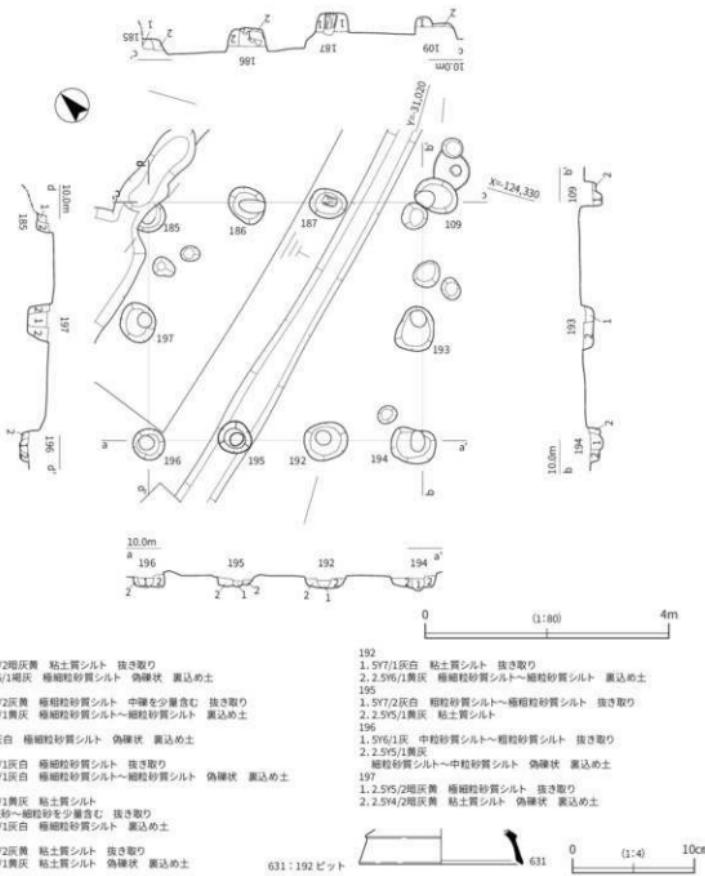


図80 挖立柱建物3平・断面、出土遺物

掘削した後、短期間に埋め戻されたと想定している。埋め戻し土には第5a層から第7b層由来の偽礫が多く含まれることから、242他土坑は上部に堆積する第4-2b層とした砂礫（側方変化で泥質に細粒化する部分もある）を採取するための土取り穴であった可能性が高いと考えている。242他土坑の時期は7世紀後葉以降を想定している。

#### 掘立柱建物3（図75・80、図版4）

2区で検出した。建物構造は2間×3間である。梁行3.9m、桁行4.5mである。柱穴の平面形は、方形・梢円形状を呈する。187柱穴のみ柱根が遺存した。遺物は、192柱穴から須恵器杯蓋631が出土した。TK47~TK10型式。掘立柱建物3周辺で古墳時代の遺構が確認されていないことや、柱穴平面形が方形のものがあることから、時期下限は奈良時代までを想定している。

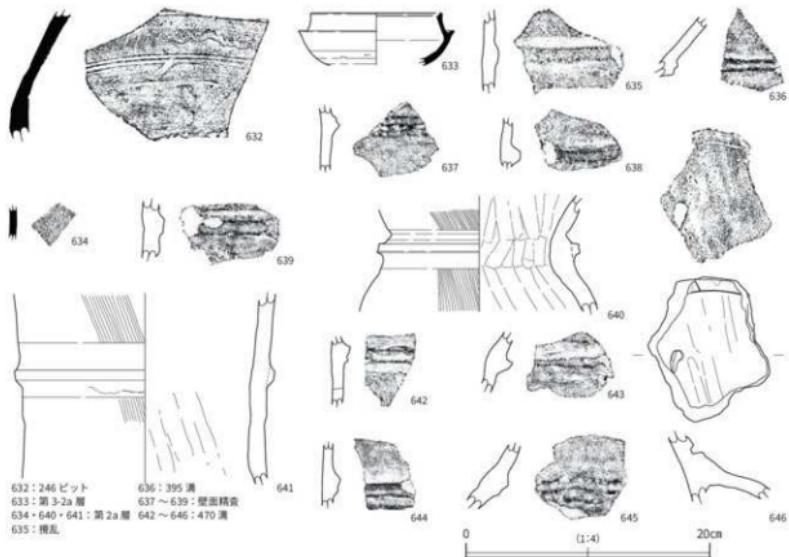


図81 246ピット他出土遺物

#### 246ピット他出土遺物（図81、図版14）

出土遺物を掲載した遺構と埴輪を中心とした遺物を以下にまとめる。246ピットは2区で検出した。平面形は円形、直径0.5m、深さ0.1m、埋土は粗粒砂質シルトである。須恵器甕632が出土した。TK216～TK208型式。須恵器杯633は8区で、第3-2a層下位から出土した。TK23～47型式。須恵器甕部634は11区第2a層から出土した。外面に繩タタキを施す。円筒埴輪635は6区攪乱、朝顔形埴輪636は7区395溝（中世）、円筒埴輪637～638は7区壁面精査、円筒埴輪639は11区壁面精査、朝顔形埴輪640は12区第2a層、円筒埴輪641・642・644・朝顔形埴輪643・645・蓋形埴輪646は12区470溝（中世後半以降）から出土した。埴輪は図化した以外に他の調査区でも出土しているが、1～10区では7区で出土量が多い。1～10区より11・12区では相対的に出土量が多く、遺存状態が良好である。土師質と須恵質のものが混在する。埴輪は川西編年IV期後半～V期に位置付けられる。

#### 5. 第4-1a面の調査成果（図82～94、図版5・6・14）

第4-1a面では、水田・溝・土坑等を検出した。地形は西側の11・12区が最も高く、1・2・6・8区の微高地を挟んで北側と南側が低い。水田は微高地南北の低地を利用したものである。水田の時期は、弥生時代後期から古墳時代前期初頭で、古墳時代前期（布留式期）に下る可能性がある。なお、1・2・6区の微高地上は、第4-1a層から第4-2a層が堆積しておらず、微高地上で検出した土坑・溝については第4-1a面で報告する。

#### 164土坑（図83・84、図版6）

2区で検出した。平面形は不整な楕円形、長軸1.1m、短軸0.8m、深さ0.6m、埋土下層は泥質堆積物である。遺物は、土師器甕・壺が出土した。土師器甕647は生駒西麓産の胎土で、庄内式期新段階に

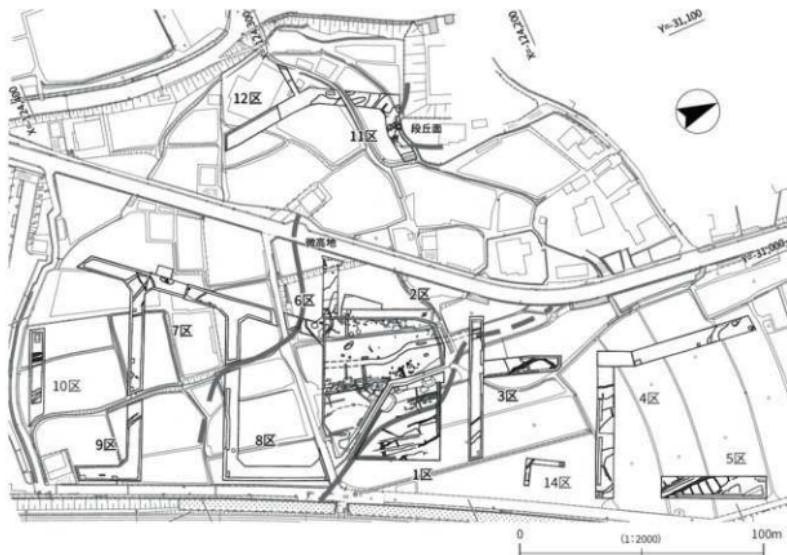


図82 第4-1a面平面

位置付けられる。土師器壺648は口縁部が大きく外反し、外面ミガキ、内面ハケ調整・指頭圧痕が残る。胎土は粗粒の石英・長石を含んだ在地のものを使用する。四国東部地域の影響を受けた土器の可能性がある。

#### 206・276流路（図83・85、図版14）

206流路は2区で検出した。206流路は幅1.5m、深さ0.5mである。埋土は下層が水成層の粗粒砂～極粗粒砂、上層がシルト質極細粒砂である。遺物は土師器、叩石が出土した。二重口縁壺650は梶原古墳群・上牧遺跡に類例があり、櫛描波状文と竹管文を口縁部と頸部外面に施す。壺651は外面に沈線文（綾杉文）を施す。壺652は外面に櫛描直線文と波状文を施す。壺656は外面に矢羽根状タタキを施す。叩石664は、岩質は安山岩である。206流路については弥生時代後葉から庄内式期新段階までの時期幅を想定している。

276流路は3区で検出した。幅2.0m、深さ0.5m、埋土は水成層の粗粒砂～極粗粒砂である。V様式系甕底部665が出土した。流路の時期は、出土遺物と層位の所見から、時期は弥生時代後葉から古墳時代前期初頭を想定している。

#### 127・311・322溝、133土坑（図83・86、図版14）

127溝は2区、311・322溝、133土坑は6区で検出した。127溝は、幅0.75m、深さ0.2m、埋土下層は泥質堆積物である。遺物は弥生土器甕・壺が出土した。壺666は口縁端部外面に擬凹線を施す。667は口縁端部外面に列点文、体部外面に櫛描直線文を施す。甕底部668は外面平行タタキ、内面ナデ。甕底部669は内外面ナデ調整である。311溝は、幅0.3m、深さ0.1m、埋土下層は粘土質シルトである。遺物は弥生土器甕が出土した。甕670は口縁部の立ち上がりが短い小型の甕で、外面は板ナデを施す。

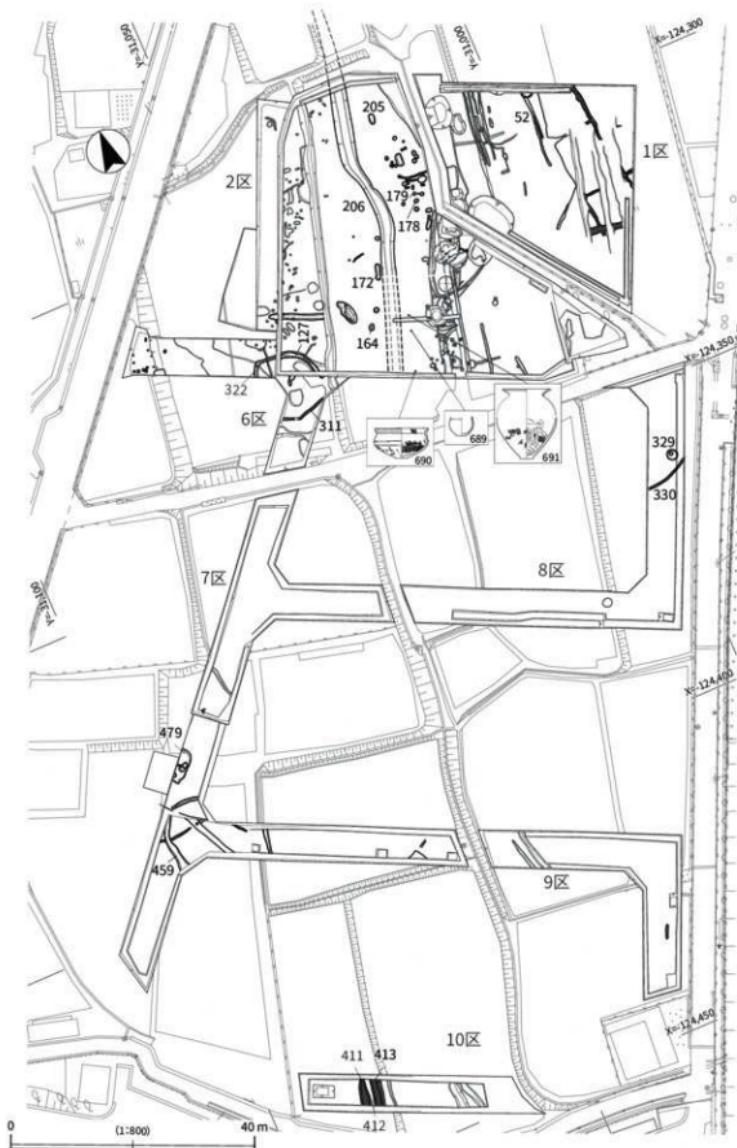


図 83 第4-1 a面平面 (南側)

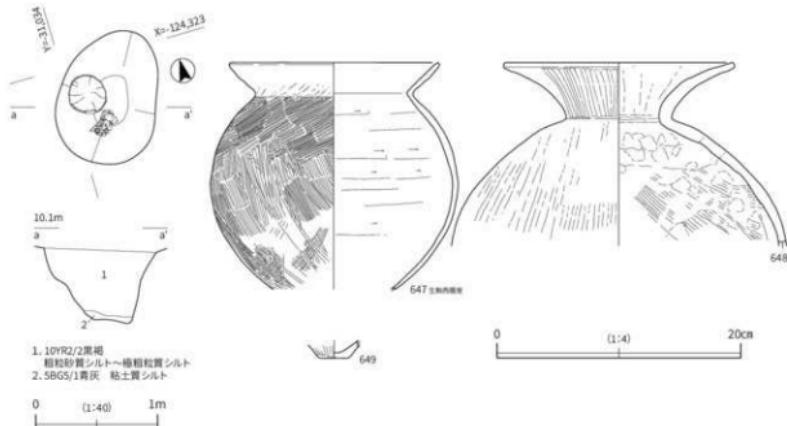


図84 164土坑平・断面、出土遺物

322溝は、幅0.34m、深さ0.14m、埋土は粗粒砂～極粗粒砂質シルトである。遺物は弥生土器甕・壺が出土した。甕674は、内外面摩滅、内面には粘土接合痕と指印の痕跡が残る。127・311・322溝は、位置関係や出土遺物から同時期に機能した溝と考えられる。127・311・322溝の平面の形状は、北西側に屈曲部のある不整な円形を呈する。直径20.0mに復元できる。溝は311溝の南側が一部途切れ、南東側は現代に削平されている。127・311・322溝は、平面形や規模から、竪穴建物の外周溝の可能性が高いと考えられる。133土坑は、127・311・322溝内の中央部で検出した。平面形は不整形、長軸2.0m、短軸1.0m、深さ0.1mである。埋土上層は炭化物を多量に含む粘土質シルトである。下層は極細粒砂質シルトで、土坑加工時の堆積と考えられる。133土坑は竪穴建物の炉に関係する施設の可能性があるが、周辺は現代に削平されており詳細は不明である。

#### 207溝・208土坑（図86、図版14）

2区で検出した。207溝は幅1.0m、深さ0.5m、埋土は粗粒砂～極粗粒砂である。遺物は器種不明の脚部676が出土した。外面に円形の粘土剥離痕がある。208土坑はトレーナーを設定した場所に一部かかっているため、全容は不明である。残存した部分で、平面形は円形を呈し、直径0.7m以上、埋土は粘土質シルトである。207溝と切り合い関係があり、207溝が新しい。遺物は台付革袋状土製品677が出土した。遺存状態は良くないものの、外面ミガキと内底面ミガキの痕跡が残る。

#### 205土坑他出土遺物（図83・87、図版14）

205土坑は2区で検出した。平面形は梢円形、長軸1.7m、短軸0.9m、深さ0.05m、埋土は粗粒砂質シルトである。遺物は土師器甕と弥生時代後期V様式系甕が出土した。土師器甕679は脚台が付くもので、東海系の搬入品である。胎土には粗粒の長石・石英・雲母を多量に含み、にぶい黄橙色を呈する。土師器甕678は679と胎土が同じである。弥生時代後期V様式系甕680は胎土に赤色味があるもので、高槻市では丘陵地に多い土器の特徴とされる。弥生時代後期V様式系甕682は外面平行タタキ、内面摩滅。

172土坑は、2区で検出した。平面形は不整形、長軸2.7m、短軸0.8m、深さ0.14m、埋土は粘土質

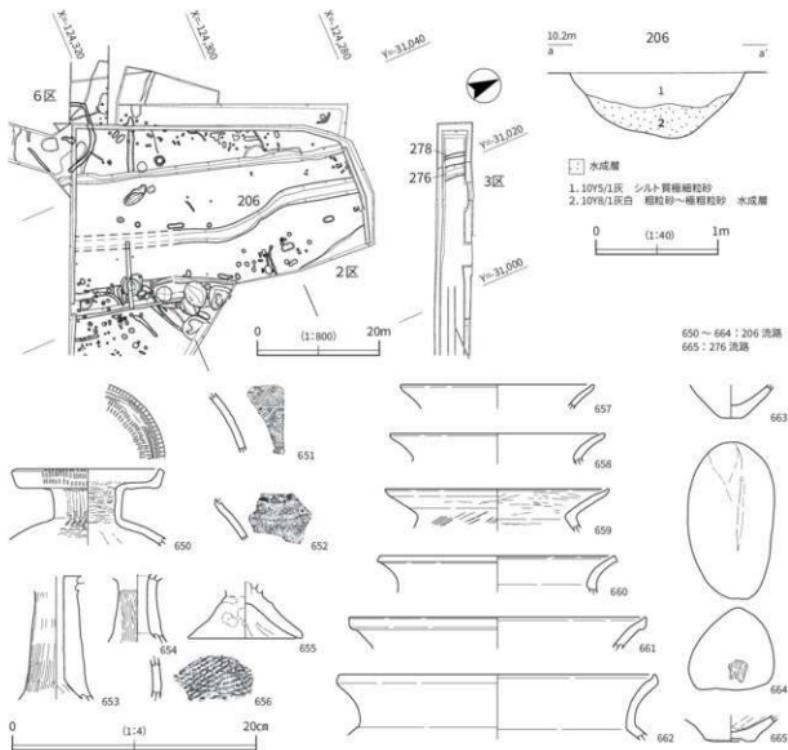


図 85 206 流路他平・断面、206 流路他出土遺物

シルトである。遺物は弥生土器蓋683が出土した。

179ピットは2区で検出した。平面形は円形、直径0.5m、深さ0.14m、埋土は粗粒砂質シルトである。弥生土器壺684が出土した。弥生土器壺686・壺687は1区第4-2a層から出土した。壺687は外側に竹管文を施す。土師器壺685は、2区第3-1b面119溝南側部分の掘り下げ時に出土した。布留式期中段階以降に位置付けられる。弥生土器壺688は6区機械掘削時に出土した。外側に櫛描直線文と列点文を施す。弥生土器壺689・鉢690・壺691は2区第4-1b層から出土した。壺689は内外面摩滅、底部は上げ底味に仕上げられる。鉢690は体部中位に剥離痕があり、突帯の貼付痕と考えられる。時期は弥生時代後期後葉に位置付けられる。銅鏡692は1区第4-2a層（水田作土）から出土した。鏡身には表面・裏面に鎬を表現し、鎬の凸状の表現は茎部まで直線的に伸びる。弥生土器（弥生時代後期）が共伴しており、形状から古墳時代まで下ることを想定しておらず、弥生時代後期の銅鏡と考えられる。178ピットは2区で検出した。平面形は不整形、長軸0.7m、短軸0.5m、深さ0.04mである。遺物は管状土錘693が出土した。外側は粗雑なナデ調整。全体に歪んでおり、孔は圧し潰されたような状態になっている。

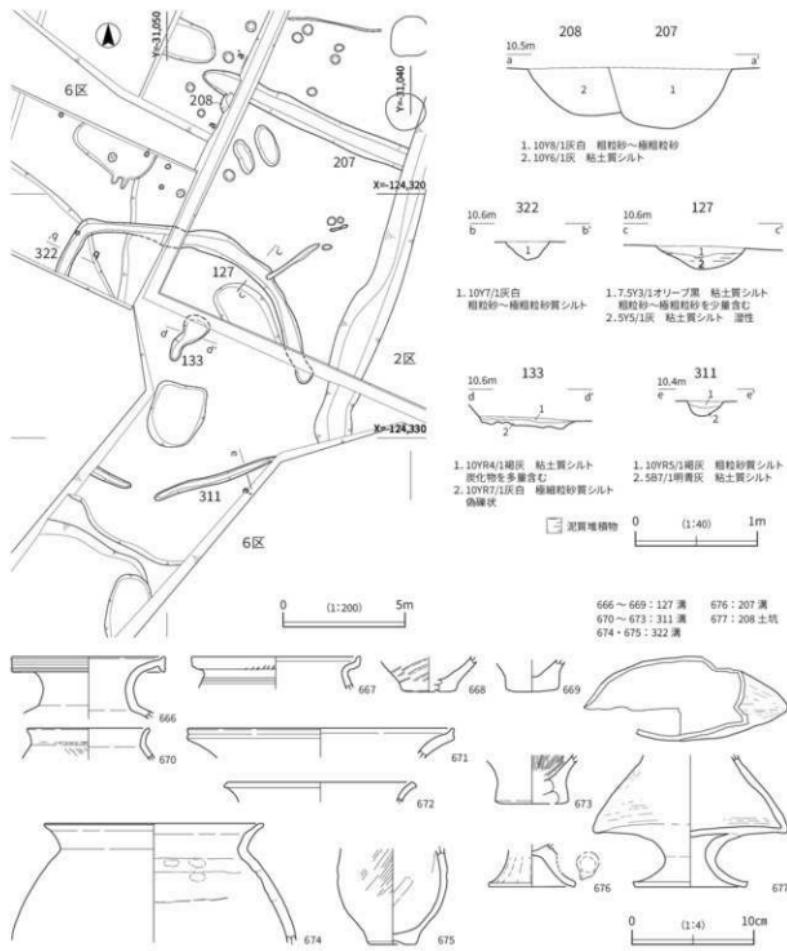


図 86 127 溝他平・断面、出土遺物

459溝・473溝、474～476土坑、479落ち込み、第4～1a層出土遺物（図88、図版6）

7区で検出した。459溝は幅0.9m、深さ0.8m、埋土はシルト質粗粒砂である。遺物は弥生土器底部片712が出土した。器種は壺ないし鉢か。479落ち込みは北西側が調査区外にあり、全容は不明である。平面形は不整形、長軸5.4m、深さ0.06m、埋土は泥質堆積物である。断面の検討から第4～1a層形成時に機能していた可能性が高いと考えられる。肩部の加工は不明瞭で、中央に向かって緩やかに低くなっている。

遺物は弥生土器壺・壺・鉢等が出土した。壺694・698は口縁端部外面に列点文、698は体部外面に櫛

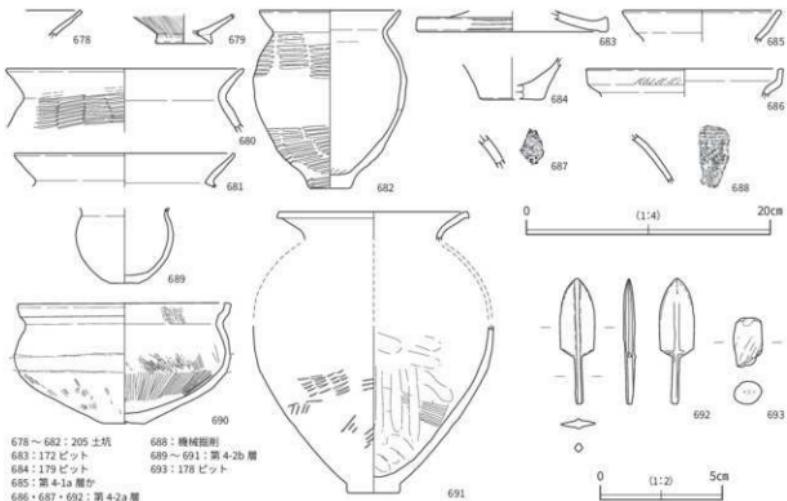


図 87 205 土坑他出土遺物

描直線文と列点文を施す。鉢695は内外面ヨコナデ調整。甕696は内外面摩滅。甕697は北近畿に広く分布する甕の口縁部の形状を示す。内外面は横方向のナデ調整。鉢699は内外面ナデ調整。鉢700は口縁端部に刻目を施す。小型の甕701は内外面摩滅。二重口縁甕702は内外面横方向ナデ調整。攝津地域の弥生時代後期後半の二重口縁甕の古相の特徴を示す。703～705は甕、706は鉢か壺の底部片である。705には内面に板ナデの痕跡が残る。鉢707は内外面ナデ調整。器種不明の脚部708は内外面横方向のナデ調整、内面の調整が粗い。時期は弥生時代後期後葉頃を想定している。

479落ち込みの底面では473溝、474～476土坑を検出した。473溝は、幅0.2m、深さ0.08m、埋土は泥質堆積物である。南東側で474土坑に接続する。遺物は出土しなかった。

474土坑は、平面形は不整形、長軸0.8m、短軸0.6m、埋土は泥質堆積物である。遺物は弥生土器甕細片が出土した。

475土坑は、平面形は不整な円形、直径0.66m、深さ0.1m、埋土は泥質堆積物である。遺物は弥生土器甕709が出土した。外面に櫛描直線文と列点文を施す。476土坑は南西側が調査区外にあるため、全容は不明である。検出した範囲で、平面形は円形状、直径0.3m、深さ0.08m、埋土は泥質堆積物である。遺物は、弥生土器台710と甕711が出土した。

474～476土坑はいずれも埋土に泥質堆積物が認められ、滯水しているような状況で埋没したと考えられる。7区第4-1a面及び第4-2a面では擬似畦畔状の高まりを検出しており、周辺は耕作地として土地利用されていた可能性が高く、474～476土坑は水溜として機能した可能性がある。

7区の地層等出土遺物を以下にまとめる。713～715・717～722は第4-1a層から出土した。甕715は外面に二円形の沈線文を施す。甕716は外面に櫛描直線文と扇形文を施す。灰白色の胎土で、他地域からの搬入品（東海系か）の可能性がある。甕717は外面に櫛描波状文を施す。時期は弥生時代後期後葉頃を想定している。

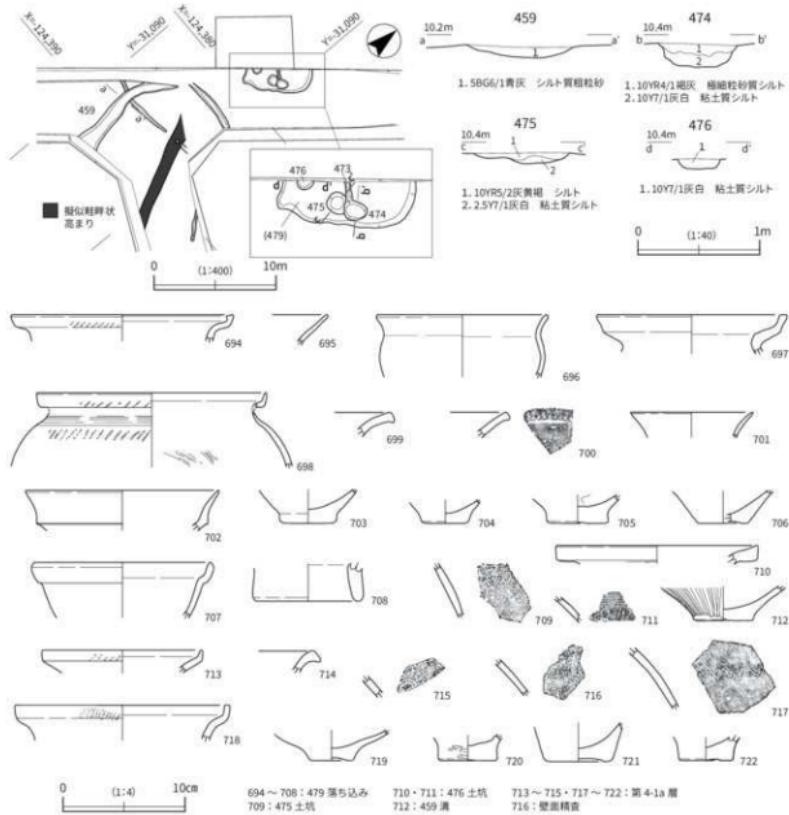


図88 7区第4-1a面平面、474土坑他断面、出土遺物

1区では小区画の水田を検出した。畠畔は幅0.3~0.7m、高さ0.02~0.06mである。水田の面積は38.5~70m<sup>2</sup>である。水田に関係して溝・土坑を検出した。52溝は、幅0.57m、深さ0.2m、埋土下層は泥質堆積物である。微高地を形成する砂礫（第4-2b層）と水田作土（4-1a層）の層境付近に掘削される。遺物は軟質で焼成された体部片が出土した。52溝以外に、同じ時期に機能した可能性のある溝として50溝を検出した。

28土坑は北側がトレーナーを掘削した場所に当たり、全容は不明である。検出した範囲では、平面形は不整形、長軸0.35m以上、深さ0.25m以上、埋土下層は泥質堆積物である。52溝と接続する。

遺物は土師器窓部片、弥生土器高杯の細片が出土した。土師器窓部片は外側ハケ、内側は磨滅するものが多いが、ケズリは施していない。1区の水田作土（第4-1a層）から弥生時代後期V様式系の窓部片と高杯脚部片かと考えられる微細な破片が出土したが、詳細な時期は不明である。

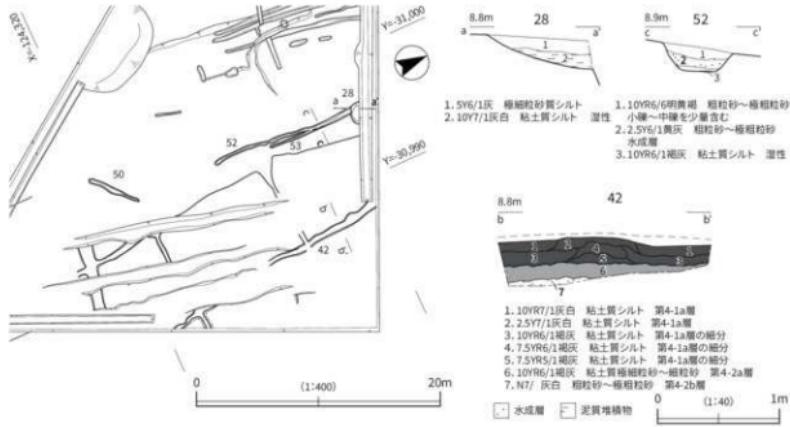


図89 1区第4-1a面平面、28土坑他断面

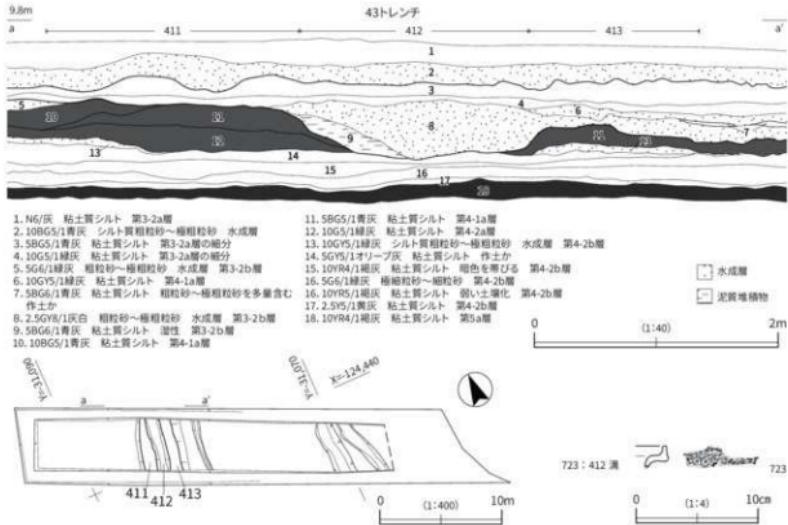


図90 10区4-1a面平面、43トレンチ断面、出土遺物

#### 10区水田、411・413堤、412溝（図90、図版5）

10区では、第3-1b層とした砂礫に覆われて良好に遺存する水田を検出した。412溝は、幅1.0～1.2m、深さ0.4m、埋土は水成層の粗粒砂～極粗粒砂である。遺物は弥生土器甕・高杯が出土した。甕723は口縁端部に列点文を施す。時期は弥生時代後期後葉頃のものと考えられる。

412溝の両側には、411・413堤が伴う。411・413堤は、幅0.7～1.5m、高さ0.04～0.11mである。10

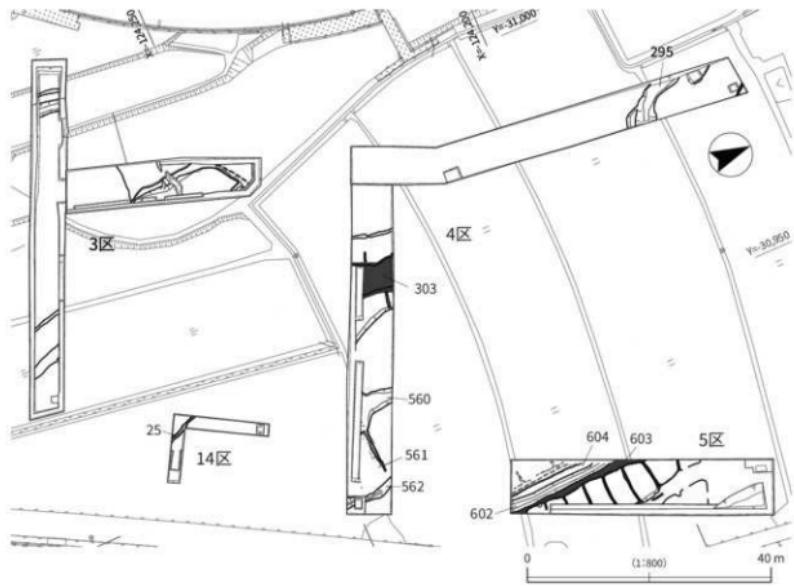


図91 第4-1a面平面(北側)

区は、他の調査区より地形が低い位置にあるため、第4-1a層の細分が可能で、図90-1層上面でも畠畔状の高まりを検出したが、出土遺物が皆無であったため時期を特定できておらず、10区と他の調査区の第4-1a層の対比については課題を残している。

#### 25溝(図91・92)

14区で検出した。幅0.3~0.6m、深さ0.1m、埋土は極細粒砂質シルトである。弥生土器高杯脚部724が出土した。時期は弥生時代後期前葉から中葉頃と考えられる。

#### 295・560・567流路、561・562溝(図91・92、図版5)

4区で検出した。295流路は、第4-1a面と第4-2a面で機能した。第4-1a面では、幅2.3~5.0m、深さ0.2m、埋土は水成層の粗粒砂~極粗粒砂である。遺物は出土しなかった。平面的に確認できなかったが、断面の検討から両側に堤を伴っていた可能性が高いと考えられる。

560流路は、2.3~3.2m、深さ0.1mである。流向は南方向である。遺物は出土しなかった。561溝は、幅0.2~0.6m、深さ0.01m、西側で560流路に接続する。流向は東方向である。560流路・561溝の埋土は水成層の粗粒砂~極粗粒砂である。

560流路では、流路に直交する杭列4・5を検出した。杭列4・5は561溝肩部周辺で検出したが、561溝は中世以降削平されているため、杭列は本来溝内に打設されていたものと想定している。

562溝は、幅0.8~1.3m、深さ0.2m、埋土は水成層の粗粒砂~極粗粒砂である。遺物は出土しなかつた。295流路と560流路は離れた位置で検出しているが、同様の規模の流路は他に確認されていないことから連続している可能性が高いと考えられる。

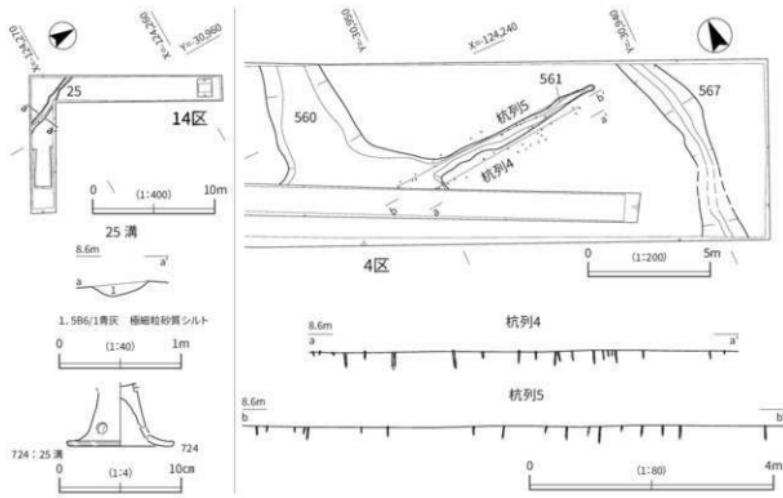


図92 4・14区第4-1 a面平面、25溝断面、杭列4・5立面、出土遺物

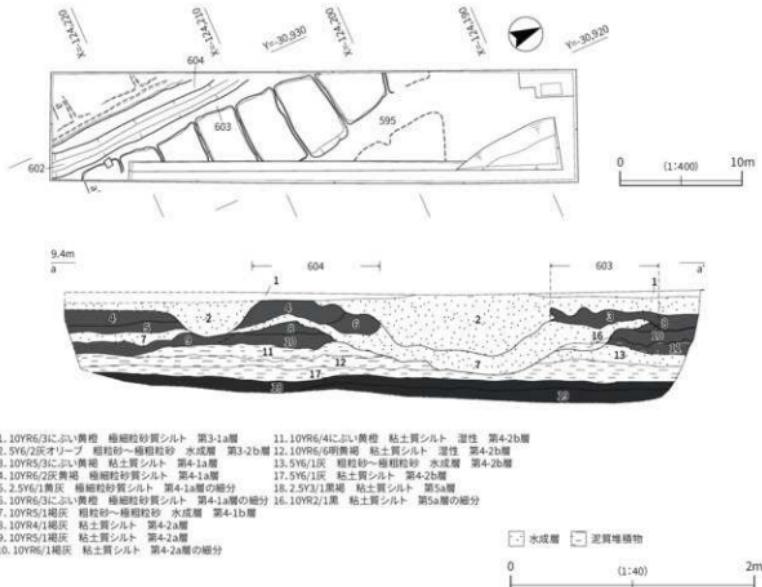


図93 5区第4-1面平面、22トレンチ断面

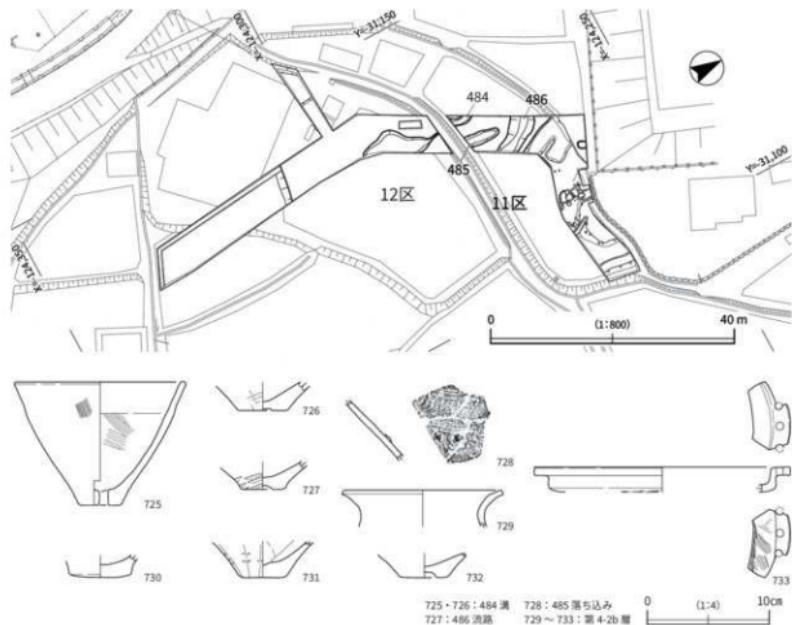


図94 第4-1 a面平面（西側）、484溝他出土遺物

### 303高まり（図91、図版5）

4区で検出した。第4-2 a面307溝が砂礫で埋没して形成された高い部分を土手状に加工して、高まりとして利用したものである。幅5.0m、高さ0.04～0.19mである。東西で畦畔を検出しており、小区域の水田が303高まりの東西に展開していたことを想定している。

### 5区水田、602溝、595畦畔、603・604堤（図91・93、図版5）

602溝は、幅1.3～1.8m、深さ0.45m。埋土は水成層の粗粒砂～極粗粒砂である。遺物は出土しなかった。602溝の両側には603・604堤が伴う。603・604堤は、幅0.3～1.3m、高さ0.04～0.09mである。

595畦畔は近世以降の削平により南側部分のみ検出した。595畦畔直下に堆積する粗粒砂～極粗粒砂（第4-2 b層）が堆積することによって形成された高まりと位置が重なり、高まりを加工して畦畔として利用したと考えられる。幅は2.0mを超える可能性がある。

603堤と595堤の間では、東西方向に畦畔を設けた小区域の水田を検出した。水田1区画当たりの面積は18m<sup>2</sup>前後である。5区第4-1 a層から遺物は出土しなかった。

### 484溝、485落ち込み、486流路、第4-2 b層出土遺物（図94）

11区で出土遺物を掲載した遺構と、地層出土遺物を以下にまとめる。

484溝は幅1.3m、深さ0.11m、埋土はシルト質粗粒砂～極粗粒砂である。遺物は弥生土器壺・鉢が出土した。壺726は底部片で、外側ハケ、内側摩滅。鉢725は有孔鉢で、外側ハケ調整後ナデ、内側ハケ

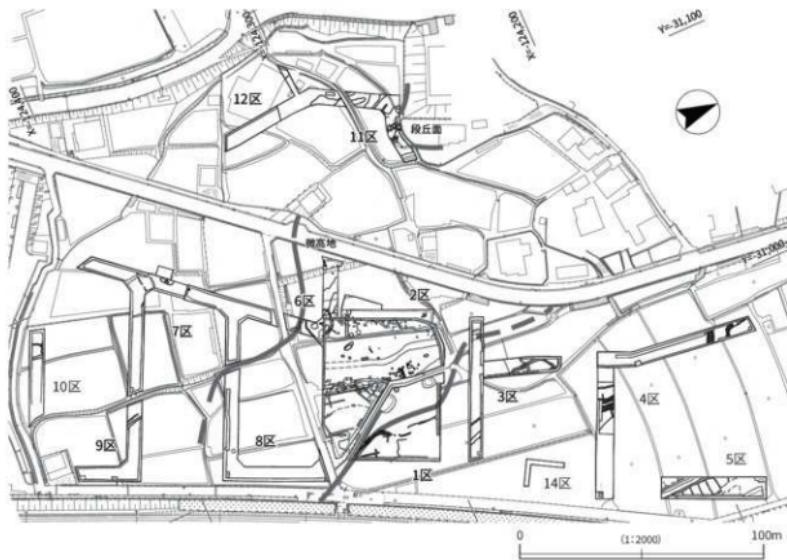


図 95 第4-2a面平面

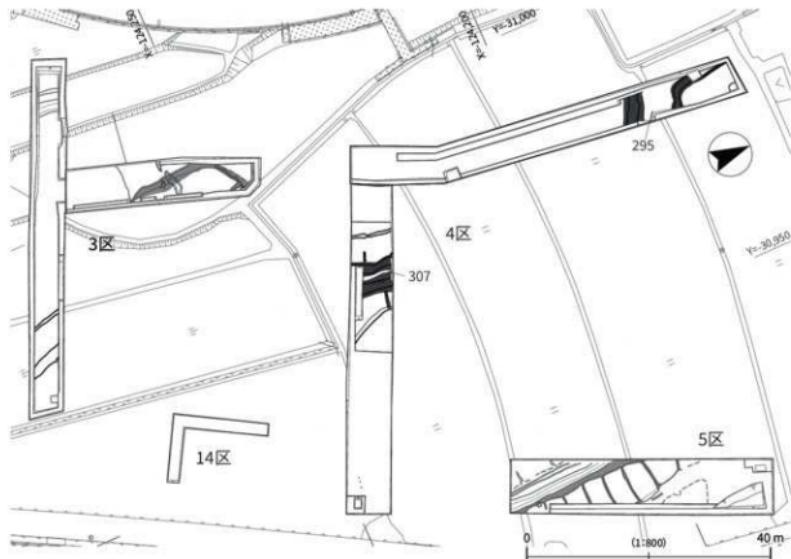


図 96 第4-2a面平面（北側）

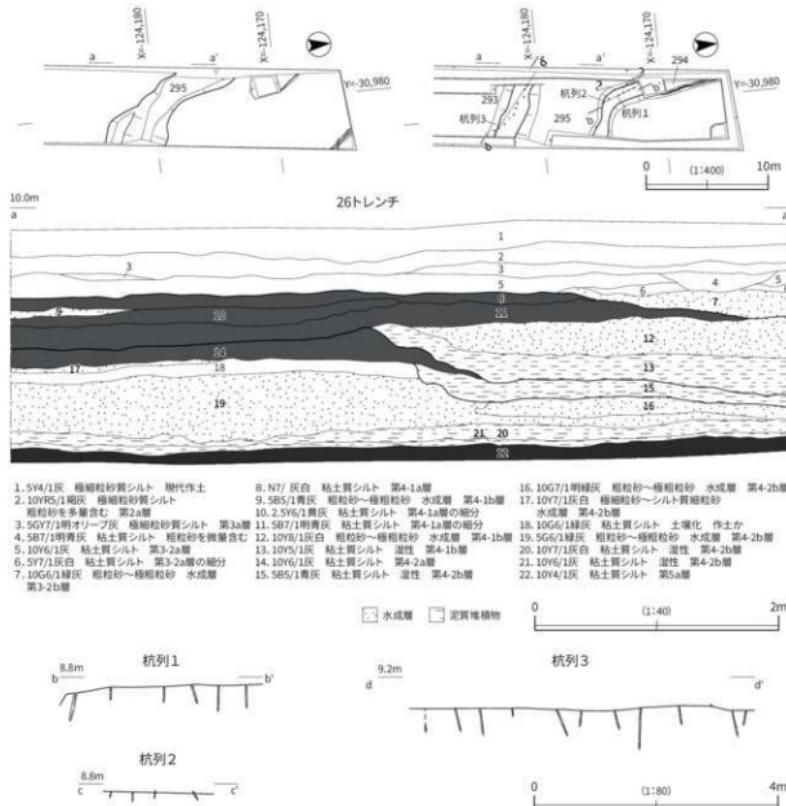


図 97 4区第4-2 a面平面、26トレンチ断面、杭列1～3立面

ないし横方向ナデを施す。485落ち込みは幅2.0m、深さ0.2m、埋土はシルト質粗粒砂である。遺物は弥生土器壺が出土した。壺728は、外面に櫛描直線文と列点文を施し、円形浮文を貼り付ける。486流路は幅4.0m、深さ0.2m、埋土はシルトである。遺物は弥生土器壺727が出土した。第4-2 b層の最上部（第1号窯直下の基盤層）から弥生土器壺729～732・鉢733が出土した。鉢733は口縁端部を接地面で水平に屈曲させたもので、端部には円形の穿孔を行う。体部外表面はハケ調整し、下位に工具を強く押し当てる痕跡（斜位）が認められる。11区から出土した725～733は、弥生時代後期後葉頃の時期を想定している。

#### 6. 第4-2 a面の調査成果（図95～98、図版5・14）

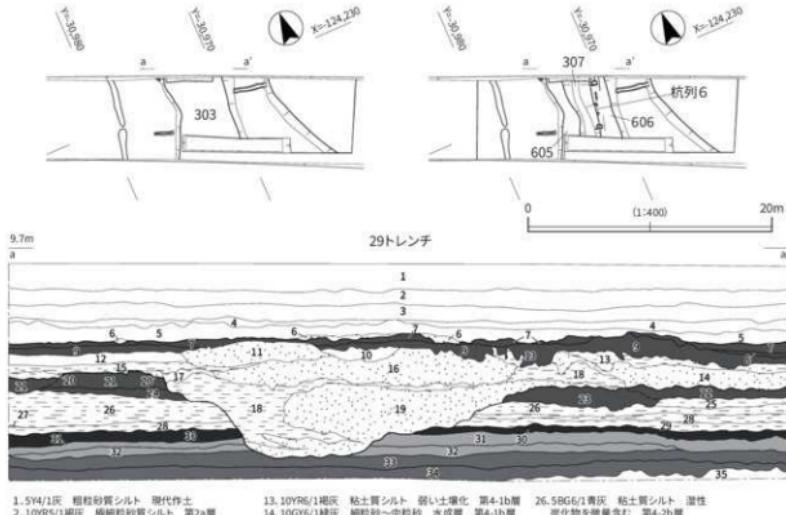
水田・溝を検出した。1・2・6・8区で検出した微高地の南北に広がる低地に第4-2 a層は堆積しており、第4-1 a層の堆積範囲と重なる。微高地南側に当たる7・9区の第4-2 a層は層厚が薄く、第4-1 a層との間に自然堆積層を挟在しない場合、第4-1 a層と明確に掘り分けができるなかつ

た。10区は地形が他の調査区より低いため、第4-2 a層を細分して掘り下げを行っており、図90-14層の上面では溝状の凹みを検出している。7~10区の調査では全体的に第4-2 a層の遺存状態が悪く、第4-2 a面に帰属する畦畔は検出されなかった。

4・5区は第4-1 a層と第4-2 a層の間に水成層の砂礫（第4-1 b層）が堆積しており、第4-2 a面が良好な状態で遺存した。5区は第4-1 a層と第4-2 a層の掘り分けを行わなかつたが、断面の所見から第4-1 a面602溝・603堤は第4-2 a面から機能したものと想定している。3区は北側と南東側で第4-1 b層の堆積が認められたが、第4-2 a面で畦畔等は検出されなかった。

#### 295流路、293・294堤（図97、図版5）

4区で検出した。第4-2 a面の295流路は、幅6.0m、深さ0.5m、埋土は上層が水成層の粗粒砂～極粗粒砂、下層が泥質堆積物である。遺物は出土しなかつた。調査区内で大きく蛇行し、両側には293・294堤が伴う。293・294堤は、幅0.9~2.5m、高さ0.04~0.09mである。293堤では杭列1・2、294堤では杭列3を検出した。杭列は堤直上で検出しており、畦畔に平行する方向で打設する。295流路の屈曲部に当たるため、堤の補強等を目的として打設したものと考えられる。



- |  |                                      |  |
|--|--------------------------------------|--|
| 1. 5Y4/1灰 粗粒砂質シルト 現代土作                                   | 13. 10Y9G6/1褐色 粘土質シルト 弱い土壤化 第4-1b層   | 26. 5BG6/1青灰 粘土質シルト 混性<br>灰岩を微量含む 第4-2b層 |
| 2. 10YR5/1褐色 極粗粒砂質シルト 第2a層                               | 14. 10GY6/1褐色 粘土質シルト-半粘粒砂 水成層 第4-1b層 | 27. 10BG6/1青灰 粘土質シルト 混性                  |
| 3. 10YR6/1褐色 極粗粒砂質シルト 第2a層                               | 15. 2.5Y6/2灰灰 黏土質シルト 混性 第4-1b層       | 極粗粒砂質シルトミナホ 第4-2b層                       |
| 4. 10YR6/1褐色 粗粒砂～極粗粒砂 第3-1a層                             | 16. 5Y6/1灰白 粗粒砂～極粗粒砂 水成層 第4-1b層      | 28. 10G5/1灰灰 粘土質シルト 混性 第4-2b層            |
| 5. 5Y6/1灰白 極粗粒砂質シルト 第3-2a層                               | 17. 10Y6/1灰 黏土質シルト 混性 第4-1b層         | 29. 10Y7/1灰白 粘土質シルト 混性 第4-2b層            |
| 6. 5Y8/1灰色 粗粒砂～極粗粒砂 水成層 第3-2b層                           | 18. 10Y6/1灰 極粗粒砂～粗粒砂 混性 第4-1b層       | 30. 10Y7/1灰白 粘土質シルト 混性 第4-2b層            |
| 7. 5Y8/1灰色 粗粒砂～極粗粒砂 水成層 第3-2b層                           | 19. 10Y6/1灰 極粗粒砂～粗粒砂 混性 第4-1b層       | 31. 10Y6/1褐色 粘土質シルト 第6a層                 |
| 8. 2.5Y6/1黄灰 黏土質シルト 第4-1a層                               | 20. 5Y6/1灰 極粗粒砂～粗粒砂 混性 第4-1b層        | 32. 3N/4/1灰 黏土質シルト 第6a層                  |
| 9. 10YR5/1褐色 黏土質シルト 第4-1a層                               | 21. N5/4 黏土質シルト 第4-2a層               | 33. 5Y5/1灰 黏土質シルト 第7a層                   |
| 土壤化顯著 第4-1a層   | 22. 10BG6/1青灰 黏土質シルト 第4-2a層 弱い土壤化    | 34. 5GA4/1暗緑灰 黏土質シルト 第7a層                |
| 10. 10YR6/1褐色 極粗粒砂質シルト 過構造土か<br>11. 5Y8/1灰白 粗粒砂～極粗粒砂 水成層 | 23. 10BG6/1青灰 黏土質シルト 第4-2a層          | 35. 5BG7/1青灰 黏土質シルト 第7a層                 |
| 12. 10YR7/2/に少し黄橙 シルト質極粗粒砂～粗粒砂<br>第4-1a層の細分              | 24. N6/ 底 黏土質シルト 第4-2a層の細分           |  |
|  | 25. 5BG6/1青灰 黏土質シルト 混性 第4-2b層        |  |

図 98 4区第4-1 a面・第4-2 a面平面、29トレンチ断面、杭列6立面

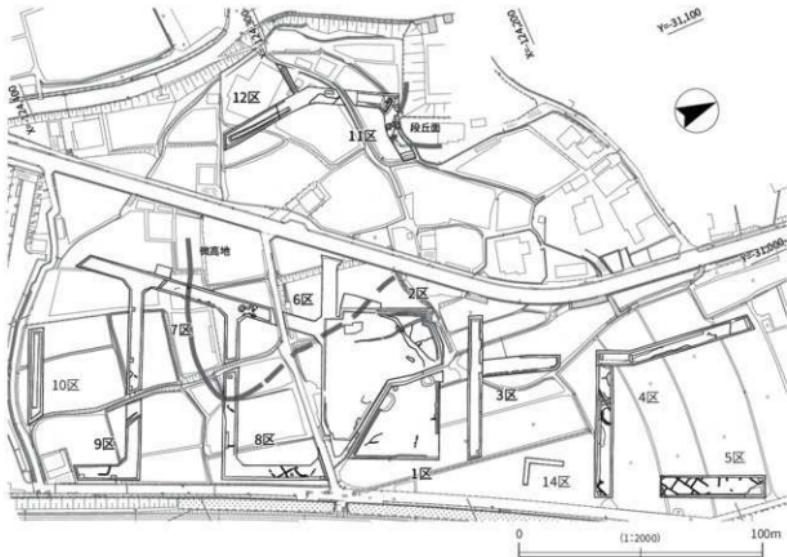


図99 第5a面平面（南側）

#### 307流路、605・606堤（図98）

4区で検出した。307流路は第4-1a面303高まりの直下で検出した。幅1.5~2.2m、深さ0.6m、埋土は水成層の粗粒砂～極粗粒砂である。遺物は出土しなかった。307流路の両側には605・606堤が伴う。605・606堤は、幅1.2~1.8m、高さ0.06mである。605・606堤から派生する畦畔状の高まりを東西に検出している。606堤では、堤部分の掘り下げ時に、杭列6を検出した。杭列6は、堤に平行する方向で打設しており、堤の補強を目的としたものと考えられる。

#### 7. 第5a面の調査成果（図99～103、図版7）

水田・溝・土坑等を検出した。4・5区では、湿地性堆積物の粘土質シルト（第4-2b層）に覆われた水田を検出した。6・7区では第5b層とした砂礫が堆積することによって形成された微高地を検出した。7区では、第5b面で溝・土坑・ピットを検出しており、第5a面平面図（図99）に合成して位置関係を示している。1区では第4-1a層を除去した段階で第5a層が露出した状態となり、微高地の縁辺に当たる場所で44~47・49・51・54・57溝を検出した。溝は機能時の地層（作土）が削平されており遺構面の帰属は不明である。なお、3区の調査は第5b層中の任意の高さで調査を終わっており、1・2区第5a層との地層の連続性は下位の地層を含めた検証が不十分であったため、6・7区の第5b層・第6b層の堆積によって形成された微高地の範囲は不明確なものとなっている。

#### 44~47・49・51・54・57溝、608段（図101、図版7）

46・47・51溝には切り合い関係があり、47溝→46溝→51溝の順に新しい。47溝は第5層の堆積を切って掘り込まれている。地形は西側に向かって高くなっている。地形の平坦化に伴い溝の位置が西側に移動したものと考えられる。46・47・51溝は幅0.2~0.6m、深さ0.01~0.1mである。埋土は57溝が

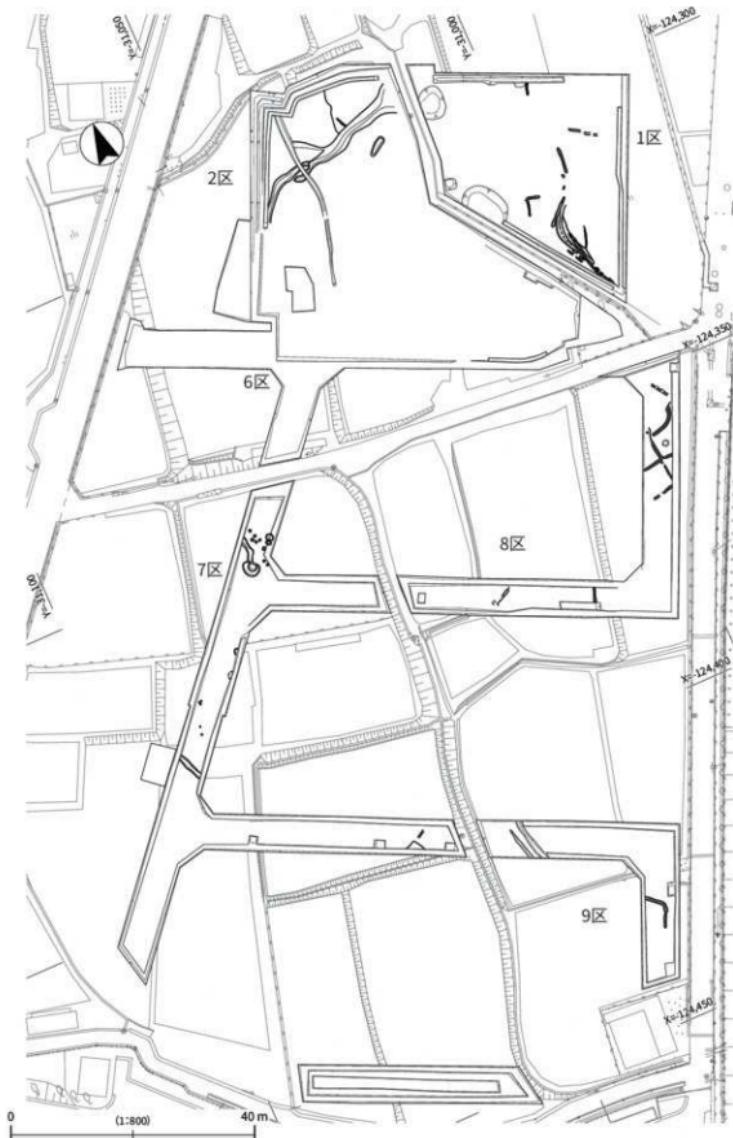


図 100 第5a面平面

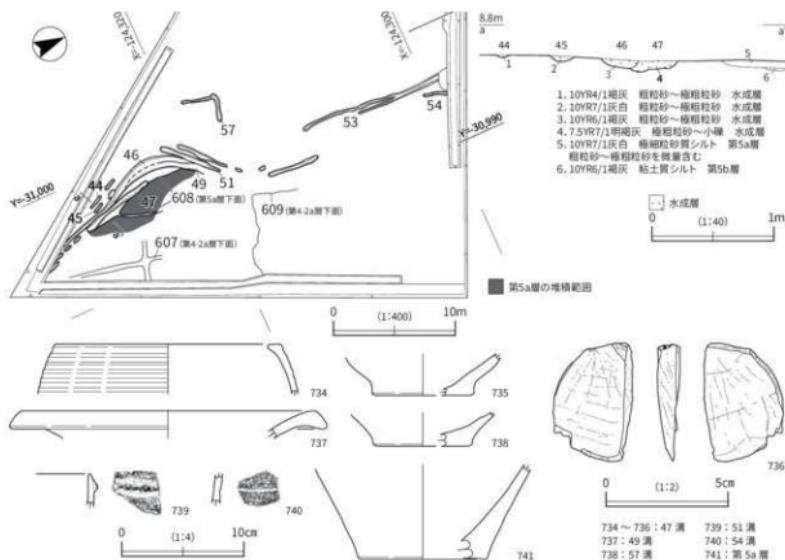


図 101 1区第5a面平面、44溝他断面、出土遺物

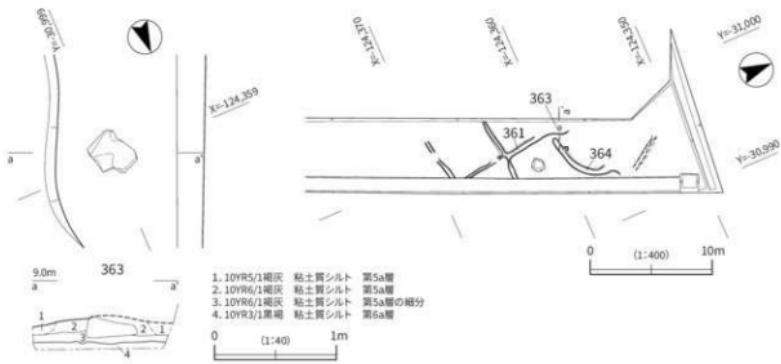


図 102 8区第5a面平面、363石平・断面

泥質堆積物の粘土質シルトで、その他の溝は水成層の砂砾である。遺物は、47溝から弥生土器壺ないし鉢734・壺735・サスカイト製剝片736、49溝から弥生土器壺737、57溝から弥生土器壺738、51溝から突帯文土器739、54溝から繩文土器深鉢740が出土した。608段では第5b層とした粘土質シルトが筋状に盛り上がる部分を検出した。第5a層と第5b層の層境が直線的に分かれる状況を確認している。第5a層の残存する範囲が限られており、1区の第5a層が作土かどうか判別できなかった。第5a層の出土遺物は、弥生土器壺741が出土した。時期は弥生時代中期以前のものと考えられる。

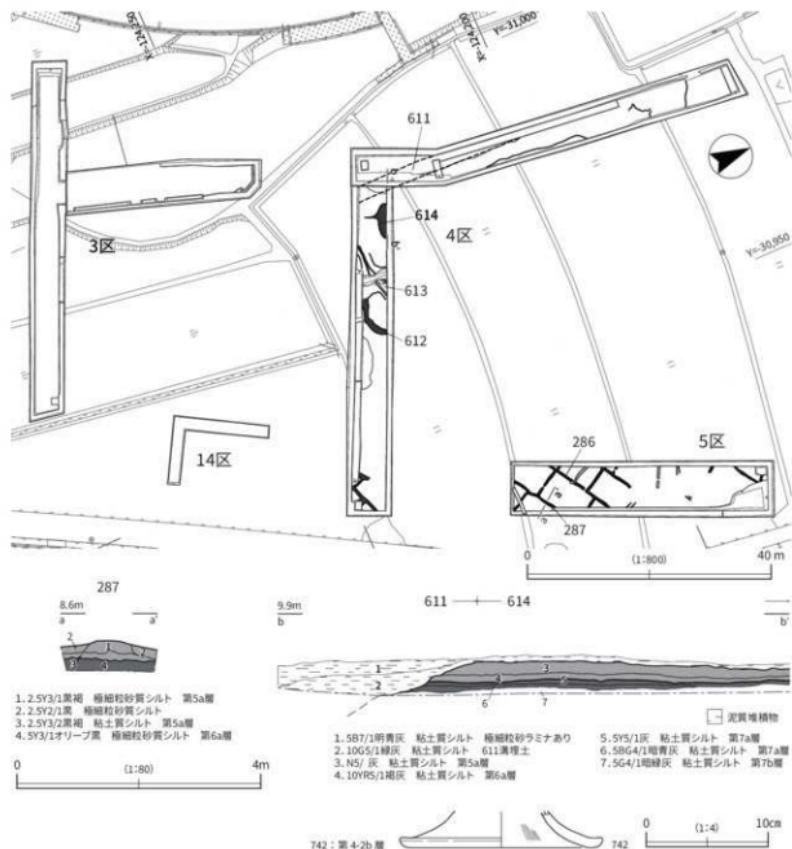


図 103 第5a面平面(北側)、287 畦畔他断面、出土遺物

#### 8区水田(図102、図版7)

小区画の水田を検出した。地形は南西方向に向かって緩やかに低くなっている。畦畔は、幅0.2~0.8m、高さ0.01~0.04mである。地形の傾斜に対して直交方向に設けられた364畦畔の規模が他の畦畔よりやや大きい。調査区内では水田の1区画全体を検出することができておらず、1区画当たりの面積は不明。南北方向で一辺4.0~4.5mである。

361畦畔では、畦畔内から363石が出土した。石は不整形な形状を呈し、長軸35cm、短軸25cm、厚さ15cmである。岩質は砂岩。363石は周辺の基盤層には含まれない大きさで、外部から搬入されたものと考えられる。第5a層から軟質に焼成された土器片が出土した。

#### 4・5区の水田、第4-2b層出土遺物(図103)

小区画の水田を検出した。畦畔は、幅0.3~0.4m、高さ0.02~0.03mである。5区286畦畔の南東側

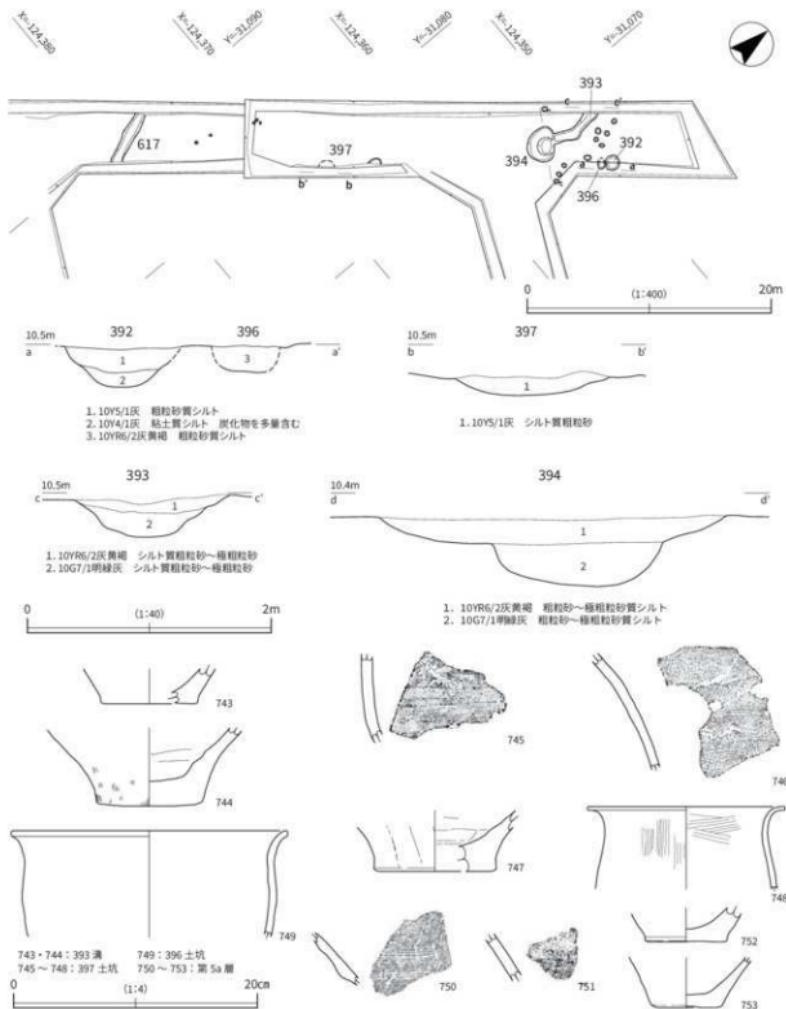


図104 7区第5b面平面、392土坑他断面、出土遺物

の水田区画の面積は37.5m<sup>2</sup>、北西側の水田区画の面積は24.8m<sup>2</sup>にそれぞれ復元できる。4区611溝は幅3.0m以上、深さ0.5m以上、埋土は泥質堆植物である。平面的には調査での掘削深度が限界に達したことから完掘しておらず、調査した範囲で遺物は出土しなかった。平・断面の所見から溝東側には畦畔が伴うものと考えられる。溝の規模から灌漑用の基幹水路となる可能性が高い。411溝の東側では614高まりを検出した。平面形は不整形、長軸5.8m以上、高さ0.06mである。盛土によって造成されたもの

と考えられるが、土壤化の影響により詳細は不明である。613溝は幅0.2~1.4m、深さ0.06m、埋土は泥質堆積物である。溝の両側に擬似状の高まりを検出しており、堤を伴っていた可能性がある。612畦畔は幅0.5~1.0m、高さ0.02mである。612畦畔を境に南東側に低くなっている。弥生土器蓋742は3区第4~2b層とした粘土質シルトから出土した。第4~2b層の最上部ではなく、層中から出土した土器としては唯一のものである。時期は弥生時代中期以前のものと考えられる。

#### 8. 第5b面の調査成果(図104・105、図版7)

7区では、微高地で溝・土坑・ピットを検出した。11区では北西側の基盤層上面で土坑、谷地形に堆積する砂礫(第4~2b層)を除去して検出した基盤層上面で溝・ピットを検出した。

#### 393・617溝、392・394・396・397土坑、第5a層出土遺物(図104)

393溝は幅0.7~1.3m、深さ0.3m、埋土はシルト質粗粒砂~極粗粒砂である。393溝から弥生土器甕743・壺744が出土した。南西側で394土坑に接続する。394土坑は、平面形は不整な梢円形状、長軸2.9m、短軸2.1m、深さ0.5m、埋土は泥質堆積物である。394土坑から排水する溝等の施設は確認できなかつたが、394土坑は泥質堆積物で埋没しており、水溜であった可能性を想定している。392土坑は、平面形は不整形、長軸1.2m、短軸1.1m、深さ0.3m、埋土は上層が極細粒砂質シルト、下層が粗粒砂質シルトである。遺物は弥生土器の破片が出土した。397土坑は第5b層の掘削時に確認した構造で、平面は未検出である。最大長1.2m以上、深さ0.3m、埋土はシルト質粗粒砂~極粗粒砂である。遺物は弥生土器甕745~747、弥生土器甕748が出土した。時期は弥生時代中期前葉と考えられる。396土坑は、平面梢円形、長軸0.8m、短軸0.6m、深さ0.2m、埋土は粗粒砂質シルトである。遺物は弥生土器甕749が出土した。617溝は幅1.1m、深さ0.15m、埋土は泥質堆積物である。遺物は出土しなかつた。393溝の北東側ではピットを8基検出した。ピットは、平面円形ないし梢円形、直径0.5m以下、深さ0.1~0.3mである。397土坑と617溝の間でもピットを5基検出したが、その分布は希薄であった。弥生土器甕752・753、弥生土器甕750・751は第5a層から出土した。時期は弥生時代中期以前を想定している。

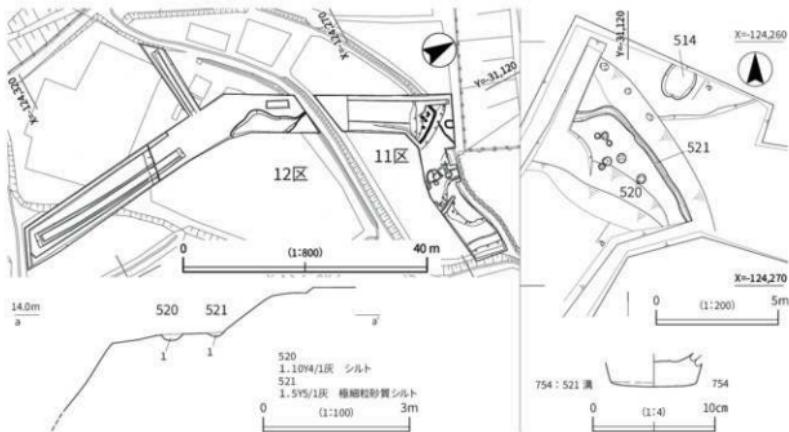


図105 11区第5b面平面、出土遺物

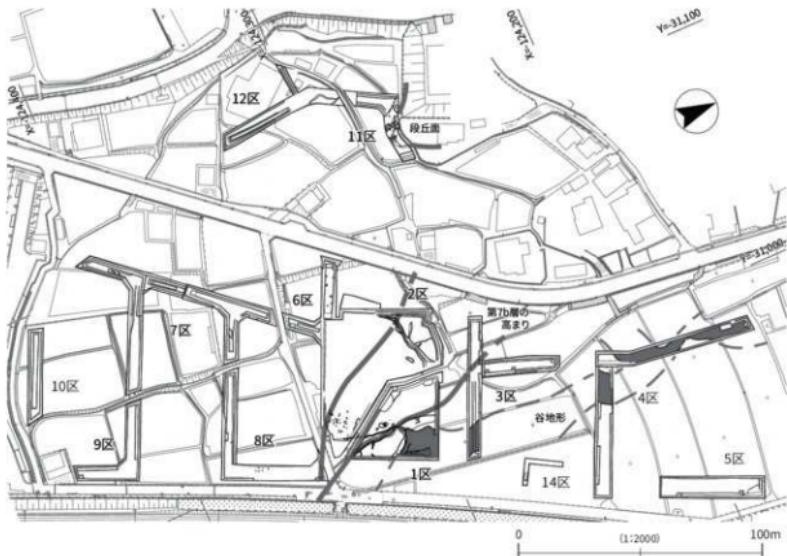


図106 第6 a面平面

#### 521溝、520他ピット（図116、図版7）

11区テラス状の平坦地では溝・ピットを検出した。平坦地の断面形は「L」字形で、人為的に加工された可能性が高いと考えられる。521溝は、幅0.3m、深さ0.1m、埋土は極細粒砂質シルトである。遺物は弥生土器甕底部754が出土した。時期は弥生時代中期以前のものと考えられる。520他ピットは、平面形は円形、直径0.2~0.3m、深さ0.1~0.3m、埋土はシルトである。ピットから遺物は出土しなかった。南側は水成層の砂礫（第4~2b層）に浸食されており、テラス状の平坦地の全容は不明である。ただし、平坦地より南側に下がった斜面地で第6 a層の可能性がある土壤を確認しており、今回検出した範囲と大きく異なる規模で平坦地は広がっていなかったと考えられる。

#### 9. 第6 a面の調査成果（図106~108、図版8・14）

1・2区で溝・土坑を検出した。第6 a層からは縄文時代晚期から弥生時代前期の土器が出土しており、縄文時代晚期と弥生時代前期の土器が1・2区、縄文時代晚期の土器が4・6・7・8区でそれぞれ出土している。12区で検出した谷地形は第5 a層まで掘削を行ったが、最深部には到達しておらず、12区南側に第6 a層が堆積している可能性がある。1区では樹木の根株及び根株の痕跡を検出した。樹木は遺存状況が悪く腐食が進んでおり、樹齢が明確に分かることは無かった。

#### 59土坑（図107、図版8）

1区で検出した。平面形は不整形、長軸3.4m、短軸1.6m、深さ0.17m、埋土は極細粒砂質シルトで炭化物を多量に含む。浅い凹み状を呈し、底面は凹凸が顕著である。20cm大の礫が出土しており、59土坑周辺でも10cm大の礫3点が出土している。遺物は弥生土器甕756、突帯文土器深鉢755が出土した。

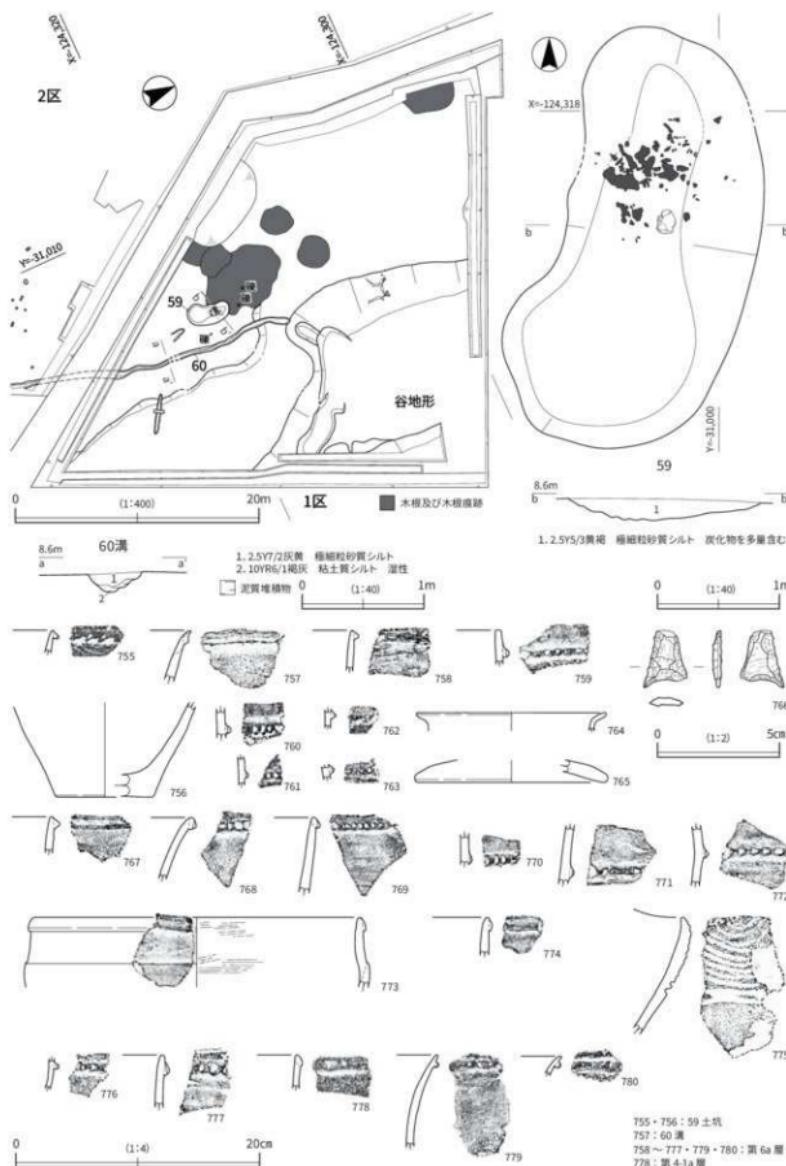


図 107 1・2区第6a面平面、59土坑平・断面、出土遺物

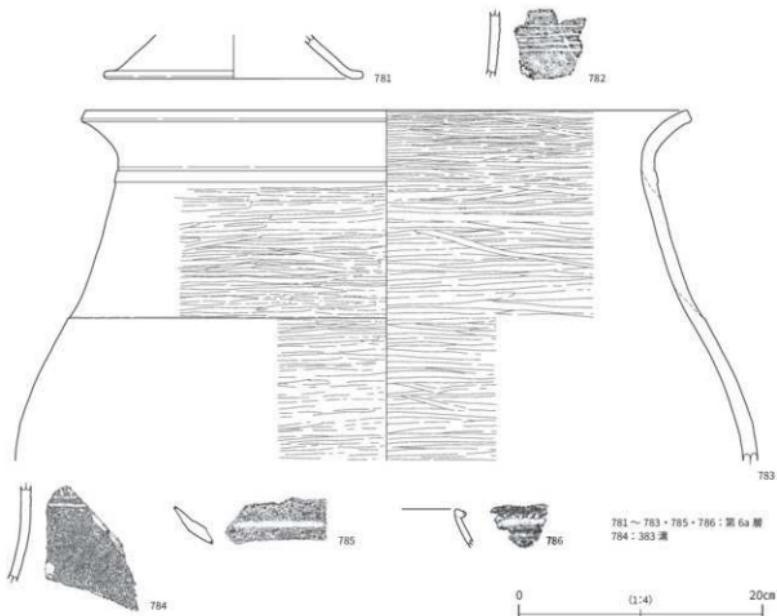


図108 7区第6a層他出土遺物

#### 60溝（図107、図版8・14）

1・2区で検出した。幅0.3~0.5m、深さ0.15m、埋土下層は泥質堆積物である。底面は北方向に低くなっている、北側で谷地形に接続する。遺物は、突帯文土器757が出土した。口縁部は外反し、端部より下がった位置に無刻目の突帯が付く。

#### 1・2・4区第6a層他出土遺物（図107、図版14）

1・2・4区から出土した縄文時代晩期から弥生時代前期の土器・石器を以下にまとめる。1区では縄文土器深鉢758~762、弥生土器壺763、弥生土器壺764・蓋765、サヌカイト製石鐵766が出土した。

突帯文土器深鉢758は無刻目。759は端部に面があり、口縁端部から下がった位置に突帯を貼り付け、小「o」字形刻目を施す。760~762は胴部の破片で、突帯は丸みを帯びた三角形状、小「o」字形刻目を施す。弥生土器壺763は体部片で、胎土から弥生土器と判断した。外面に突帯を貼り付ける。弥生土器壺764は内外面摩滅、蓋は内外面ナデ調整。石鐵766は側縁に細かい調整剥離を施す。岩質は白色を帶び、金山産の可能性がある。

2区では縄文土器深鉢767~772・775、弥生土器壺773・774が出土した。突帯文土器767は無刻目、768・769は口縁端部に丸みを帯びた突帯を貼り付け、小「o」字形刻目を施す。770~772は胴部の破片で、丸みを帯びた三角形状の突帯を施す。770・772は小「D」刻目、771は小「o」字形刻目が不規則に施される。深鉢775は波状口縁の深鉢で、外面に多条の沈線による、弧状の文様を施す。時期は縄文時代中期末と考えられる。

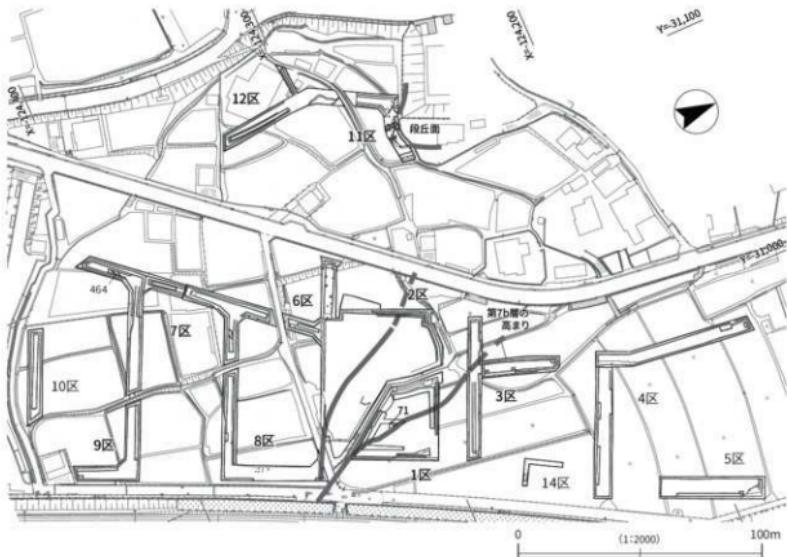


図 109 第7 b面（調査最終面）平面

弥生土器壺773・774は、いわゆる縄文系弥生土器で口縁部に突帯を貼り付ける。773は胸部に段を有する。774は773と接合関係が無く、突帯の形状が若干異なることから別個体と判断して図化した。

4区では縄文土器深鉢776～780が出土した。778は第4～1a層、それ以外は第6a層から出土した。

突帯文土器深鉢776は胸部片で、丸みを帯びた突帯に小「D」刻目を施す。777は丸みを帯びた端部からやや下がった位置に突帯を貼り付け、粗雑な大「D」字形刻目を施す。778は端部に接して丸みを帯びた突帯を貼り付け、無刻目。779・780は端部より下がった位置に丸みを帯びた突帯を貼り付け、不規則な小「o」字形刻目を施す。突帯文土器は長原式中段階から新段階のものである。弥生土器は弥生時代前期初頭から中葉頃を想定している。

#### 7～8区第6a層出土遺物（図108、図版14）

7区では第6b層が堆積することによって形成された微高地縁辺に堆積する泥質堆積物から弥生土器蓋781・壺782・壺783が出土した。蓋781は内外面摩滅、壺782は外面にヘラ描き沈線文を4条施す。壺783は内外面横方向のミガキ調整、頸部に削り出し突帯、胸部に段を有する。時期は弥生時代前期中葉におさまるものと考えている。

弥生土器壺784は第3～2b面383溝から出土した。溝底面は第6a層に達しており、383溝埋土に混入したものと考えられる。外面に沈線2条以上を施す。8区では弥生土器壺785・縄文土器深鉢786が出土した。壺785は外面に段を有する。突帯文土器深鉢786は端部に接して丸みを帯びた突帯を貼り付け、小「o」字形刻目を施す。

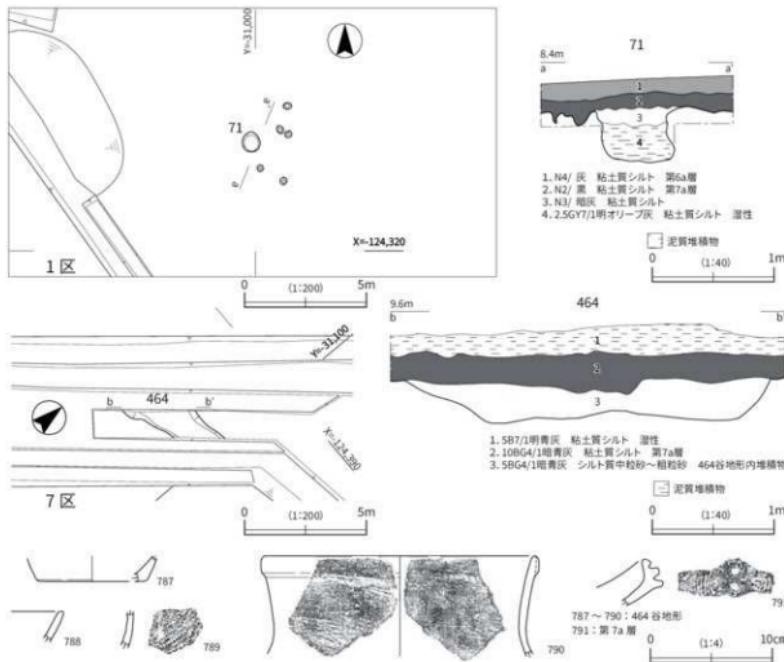


図 110 71 土坑他平・断面、出土遺物

#### 10. 第7 b面の調査成果 (図109・110、図版8・14)

1区では土坑・ピット、7区では谷地形を検出した。7区の谷地形からは、縄文土器がまとまって出土している。なお、第7 a面は土壤化した泥質堆積物で、11・12区を除いて広範囲に堆積している状況を確認したが、第7 a面では遺構は確認されなかった。第7 b面は地表面から3m以上に達する場合があり、各調査区の幅が狭かったため、3・7・10区では面的な調査は限定的な範囲に留まっている。

#### 71土坑・ピット (図110、図版13)

1区で検出した。平面円形、直径0.7m、深さ0.45m、埋土は泥質堆積物である。ピットは、平面形は円形、直径0.2~0.3m、深さ0.1~0.2m、埋土は極細粒砂～細粒砂質シルトである。71土坑・ピットから遺物は出土しなかった。

1区では第7 a層から粗製の縄文土器と考えられる土器片が出土しているが、時期が確実に分かれる資料は出土しなかった。

#### 464谷地形 (図110、図版13・14)

7区で検出した。幅3.0m、深さ0.3m、埋土は泥質の中粒砂～粗粒砂である。直上に堆積する第7 a層と地層の境界が不明瞭で、土質は似る。調査区内で部分的な検出に留まったが、人為的に加工された

可能性は低いと考えられる。

遺物は、縄文土器等が出土した。深鉢底部787は内外面摩滅。788は、鉢として図化したが、胎土は弥生土器に似ており混入品の可能性がある。深鉢789は外面に纖維痕のある縄文（単節縄文L R）を施す。深鉢790は縁帶文土器で、内外面に巻貝による条痕調整を施す。深鉢791は464谷地形より北側に堆積する第7a層から出土した。波状口縁で波頂部外面には2か所刺突を施し、渦巻状と弧状の沈線文を刺突の両側に施す。

787・789～791の時期は、789が縄文時代中期まで遡る可能性があるものの、縄文時代後期前葉（～中葉）に位置付けている。

# 第5章 自然科学分析

## 第1節 各種分析の概要と目的

今回の発掘調査及び遺物整理作業では、微化石分析、大型植物遺体同定（種実同定、炭化材・木製品等の樹種同定等）を行った。微化石分析・種実同定は、遺跡周辺の古環境復元を目的として分析を行った。炭化材の樹種同定は御所池瓦窯跡第1号窯（以下、第1号窯）前庭部土坑等から出土したものを対象とし焚き付けや燃料等に用いられた木材を特定すること、木製品の樹種同定は古代・中世の遺構から出土したものを対象とし木製品に使用された木材を特定することをそれぞれ目的として分析を行った。上記以外に、大型植物遺体同定では土師器甕頭部に遺存した紐の樹種同定を行った。

## 第2節 尾山遺跡における大型植物遺体同定分析（図111、表3～6）

### 1. 分析試料について

今回の分析試料は、木炭窯の可能性がある土坑及び第1号窯から出土した炭化材と中世の遺構から出土した炭化材、及び古墳時代初頭の流路、中世の井戸・池泉から出土した種実・木製品及び土師器甕に巻かれていた紐、中世の井戸及び池泉から出土した木製品である。

### 2. 同定結果

#### a. 炭化材の樹種同定

炭化材は横断面、放射断面、接線断面の3方向の断面を割り取り、粘土でプレパラートに固定して反射光式顕微鏡で観察・同定した。針葉樹はマツ属、アスナロ属を、広葉樹はコナラ属コナラ節、コナラ属クヌギ節、カエデ属、ユズリハ属の6分類群を出土した。

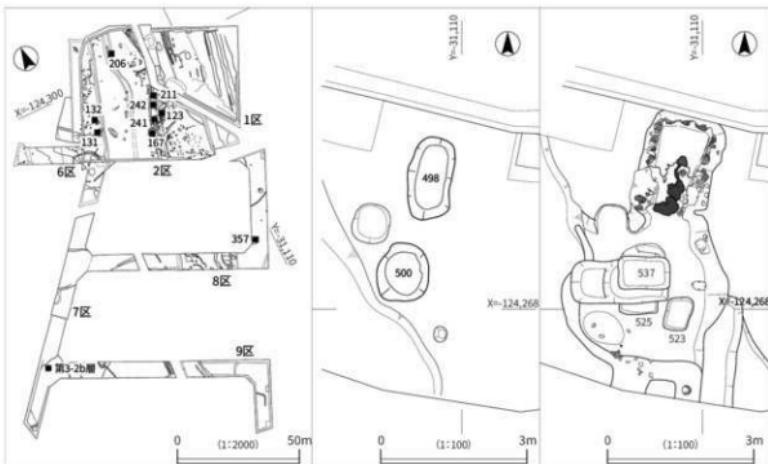


図 111 分析試料採取位置

## b. 木製品の樹種同定

木製品からはステンレス剃刀で横断面、放射断面、接線断面の3方向の切片を採取し、封入剤ガムクロラールでプレパラートを作成して生物顕微鏡で観察・同定した。針葉樹はマツ属、コウヤマキ、スギ、ヒノキ、ヒノキ科を、広葉樹はコナラ属コナラ節、サクラ属サクラ節、クロモジ属クロモジ節、トサミズキ属の9分類群を出土した。

## c. 種実同定

試料は肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、分類群別、部位別に同定・計数を行った。土器表面に付着していた紐についてはステンレス剃刀で切片プレパラートを作成し生物顕微鏡で観察した。栽培あるいは利用されていたと考えられる木本は、オニグルミ、モモ、ウメを、草本はキュウリ属メロン仲間の4分類群を出土した。その他周囲に生育していたと考えられる木本はマツ属複雑管束亞属、ムクノキ、サクラ属サクラ節、センダンの4分類群が同定された。葉は落葉広葉樹で、紐はイネ科タケ亞科であった。以下に出土した種実のうち特筆すべき分類群の形態記載を行う。イネ科タケ亞科 (*Bambusoideae*)：横断面は薄く線維が規則的に並んでいる様子のみ確認されたが接線断面で植物珪酸体の配列が確認され、これがイネ科の短細胞珪酸体の長座鞍形a（タケ型）（近藤2010）に似ることからイネ科タケ亞科を薄く長く紐状に剥いだものを巻き付けたのではないかとみられる。

## 2. 炭化材と樹種、種実からみた当時の植物利用と周辺の環境

弥生時代：溝と土坑からモモ核を出土しており利用があったと考えられる。

飛鳥時代～奈良時代：今回調査された遺構は飛鳥時代～奈良時代とみられる木炭焼成窯の可能性がある土坑と第1号窯に関連する土坑である。試料は燃焼が進んで脆く崩れやすく小破片が多い。塊状の炭化物は破片が様々な方向に向いて多樹種の存在が予想された。出土した樹種はマツ属とユズリハ属、カエデ属が2点ずつ、針葉樹、コナラ節、クヌギ節が1点ずつで比較的多くの樹種を用いている。出土した炭化材にサイズが大きい試料が確認されておらず、おそらく炭材として利用する大きい炭化材は持ち出されて小さい破片のみが残った状態で廃絶した可能性があり、この多樹種の破片群は炭窯の焚き付けとして用いていた可能性も考えられる。マツ属やコナラ節、クヌギ節は炭材とすると高温が得られるこ

表3 尾山遺跡出土炭化材の樹種

番号	遺構	備考	樹種
1	498 土坑	木炭窯の可能性あり	カエデ属
3	500 土坑	木炭窯の可能性あり	コナラ属コナラ節
5	523 土坑	第1号窯内前庭部土坑 a. マツ属	
			b. カエデ属
6	525 土坑	第1号窯内前庭部土坑	コナラ属クヌギ節
8	537 土坑	第1号窯内前庭部土坑 a. ユズリハ属	
			b. マツ属
9	555 土坑	第1号窯燃焼部	針葉樹
10	第1号窯前庭部	第3面機能時形成層	ユズリハ属
12	211 平坦面	比較試料	アスロ属

表4 尾山遺跡出土木製品の樹種

番号	遺構	種類	樹種
1	241 井戸	杭	コナラ属コナラ節
2	241 井戸	杭	トサミズキ属
3	241 井戸	杭	サクラ属サクラ節
4	132 井戸	棒状木製品	ヒノキ科
5	132 井戸	底板	ヒノキ
6	132 井戸	枠板	スギ
7	131 井戸	球形木製品（棒杖）	クロモジ属クロモジ節
8	167 池泉	底板	ヒノキ
9	131 井戸	球形木製品（棒杖）	クロモジ属クロモジ節
10	131 井戸	球形木製品（棒杖）	マツ属
11	167 池泉	底板	ヒノキ
12	167 池泉	蓋	ヒノキ
13	167 池泉	棒状木製品	ヒノキ
14	167 池泉	球形木製品	ヒノキ
15	167 池泉	蓋	コウヤマキ
16	167 池泉	蓋	ヒノキ
17	第3-1b 窓	枠板	ヒノキ科
18	第3-1b 窓	蓋	ヒノキ科
19	167 池泉	杭	ヒノキ
20	167 池泉	板材（土留め）	ヒノキ
21	167 池泉	枠板	ヒノキ

表5 尾山遺跡出土土種実

調査区	遺構	分類群名	出土部位	個数	調査区	遺構	分類群名	出土部位	個数
2区	167池泉	センダン	核完形	9	2区	206溝	モモ	核半分	1
2区	167池泉	センダン	核完形	1	2区	211平坦面	モモ	核完形風化	1
2区	167池泉	センダン	核完形	5	2区	206溝	モモ	核完形	3
			核半分	1				核完形食痕	1
2区	167池泉	オニグルミ	内果皮半分半風化	1				核半分風化	2
		ムクノキ	内果皮完形	3	2区	242土坑	モモ	核半分風化	1
		モモ	核完形	1	2区	131井戸	ウメ	核完形	1
		ウメ	核完形	1				核半分	1
		サクラ属サクラ節	核完形	1	2区	241井戸	キュウリ属メロン 特開	種子完形	1
		センダン	核完形	15	8区	357井戸	モモ	核完形風化	1
			核完形風化	1	7区	第3-1-b層	オニグルミ	内果皮半分	1
2区	167池泉	センダン	核完形	1	2区	241井戸土師 器皿頭部	イネ科タケ亜科		
2区	123土坑	センダン	核完形風化	1	2区	167池泉	落葉広葉樹		

とから陶器の焼成や金属器鋳造など

にも炭として用いる。ユズリハ属やカエデ属は周囲に生育していた樹種を焚き付けとして用いたとも考えられる。

鎌倉時代中期～室町時代前期：本遺跡の鎌倉～室町時代では井戸と池泉から廃棄したとみられる木製品が

多数出土している。使用樹種はヒノキが圧倒的に多く5割を占め、ヒノキ科も含めると6割となり、針葉樹使用率は7割を超える。ヒノキなどの針葉樹はおもに食事具と器として利用されているが、本遺跡では杭や棒材としても利用されており、本遺跡は京都府との県境で桂川、宇治川、木津川の合流地点付近の淀川西岸に位置し流通が盛んであったと考えられ、ヒノキなどの優良材の供給が多かったことが推測される。淀川を挟んで対岸に位置する枚方市の船橋遺跡（大阪府文化財センター2021）では鎌倉時代の木製品の樹種同定を実施しており、食事具、容器などにほぼ針葉樹が使われており、ヒノキヒノキ科は全体の53%を占めていた。大阪府における木材利用は針葉樹の比率が高くなる傾向にあり、中世には「広葉樹と針葉樹の割合は、2：8程度となる」（黒須2012）とされ、本遺跡でもこの傾向に調和的である。本遺跡の井戸と池泉からは利用植物のオニグルミ、モモが出土した。またセンダンが多く出土していることから池泉周辺に生育していたと考えられる。

#### 参考文献

黒須恵希子、2012. V遺跡出土木製品の種類と地域性 19章 南近畿（1）一大阪府・和歌山県一、木の考古学 出土木製品用材データベース、海青社、241-257.

公益財团法人大阪府文化財センター、2021. 第6章自然科学分析第2節大型植物遺体同定分析（種実・葉・材）、公益財团法人大阪府文化財センター調査報告書第309集枚方市船橋遺跡 高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、224-250.

近藤謙三、2010. プラント・オパール図譜 走査型電子顕微鏡写真による植物ケイ酸体学入門、387p、北海道大学出版会、

藤下典之、1984. 出土遺体からみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法、古文化財に関する保存科学と人文・自然科学－総括報告書、638-654.

表6 木製品使用樹種まとめ

樹種	合計	食事具	器	球状木製品	體形木製品	板材	机材
ヒノキ	10	4	2	-	1	2	1
ヒノキ科	3	2	1	-	-	-	-
クロモジ属クロモジ節	2	-	-	2	-	-	-
マツ属	1	-	-	1	-	-	-
コウヤマキ	1	1	-	-	-	-	-
コナラ属コナラ節	1	-	-	-	-	-	1
トサミズキ属	1	-	-	-	-	-	1
サクラ属サクラ節	1	-	-	-	-	-	1
樹木総数	21	7	3	3	1	3	4

### 第3節 尾山遺跡における花粉分析 (図112~115)

#### 1. 分析試料について

今回の分析試料は、第3-1 b面で検出した167池泉・271土坑・446土坑の埋土である。各地点の層序、試料採取位置は、各地点の花粉ダイアグラムに示した。

#### 2. 花粉分析方法

渡辺(2010)に従って実施した。花粉化石の観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて実施した。原則的に木本花粉総数が200粒以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・胞子化石の同定も行った。

#### 3. 花粉分析結果

花粉ダイアグラムでは、分類ごとに百分率（百分率の算出には、木本花粉総数を基数にしている。）を、分類群ごとに異なるハッチのスペクトルで表している。このほか、[総合ダイアグラム]として分類群ごとの割合を示したほか、[含有量ダイアグラム]として分類群ごとに含有量（湿潤試料1 g中の粒数）を算出し、変化を示している。また、木本花粉の検出数が200粒に達していない2試料（167池泉試料№7、9）について、他の試料と大きな齟齬が認められなかったことから、他の試料同様にダイアグラムにはスペクトルで示している。

#### 4. 古植生の推定

##### (1) 271土坑・446落ち込み

両遺構とも底部では（栽培種であるイネを含む可能性が高い）イネ科（40ミクロン以上）花粉（中村、1974）が高率で検出されるほか、草本・藤本花粉の割合が高いことから、遺構周辺（あるいは近辺）には水田や草地が広がっていたと考えられる。また、遺構周辺に開放空間（水田・草地）が広がっていたことから、木本花粉化石群集は主に遺跡に比較的近い場所（背後の山地）を覆う森林から飛来したものと考えられる。上述のこととマツ属（複維管束亞属）が高率で出現することから、遺跡背後の山地にはアカマツを主体とする薪炭林が広がっていたものと考えられる。同様の結果が茨木市東奈良遺跡でも得られており（川崎地質（株），1995）、この時期の北摂山地東縁では広くアカマツを主体とする薪炭林が広がっていた可能性がある。また、マツ属（複維管束亞属）に次いで高率を示すスギ（スギ属）は一般に谷筋に生育するとされ、淀川に流れ込む水無瀬川などの中小河川沿いに生育していたと考えられる。スギは富山平野の臨海部で「天然記念物杉沢の沢スギ（小路・早川，1986）」として残存しているように、湧水地に湿地林を形成することがある。北摂山系からの伏流水や淀川の伏流水などが豊富

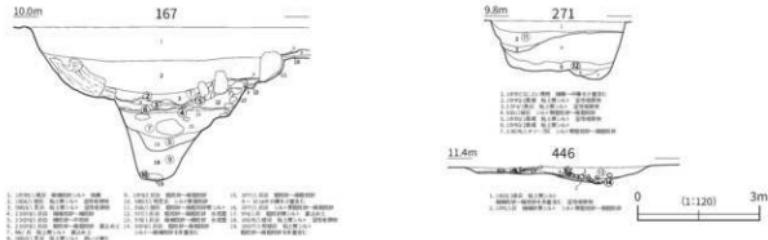


図 112 試料採取地点断面

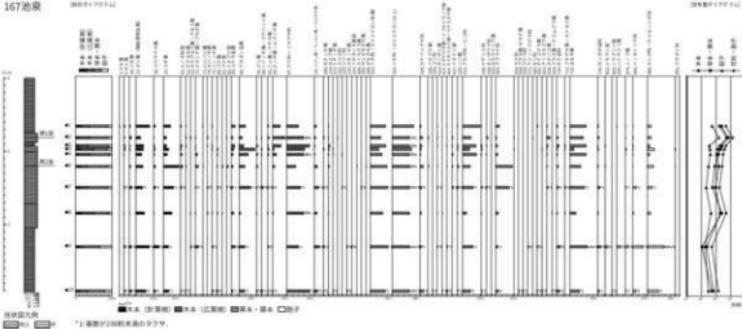


図 113 167 池泉花粉ダイアグラム

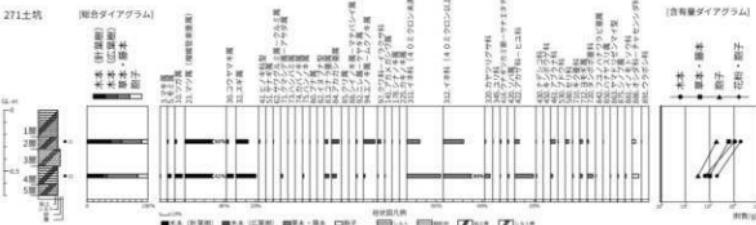


図 114 271 土坑花粉ダイアグラム

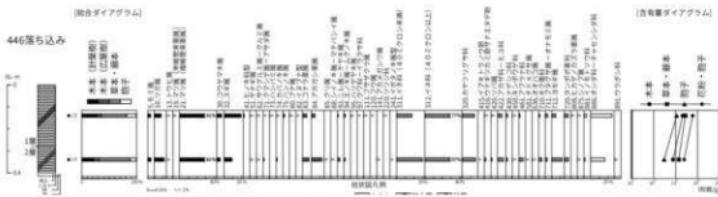


図 115 446 落ち込み花粉ダイアグラム

な遺跡の立地から周辺に湧水地も存在したと考えられ、このような場所にスギ林が形成されていた可能性もある。スギの生育場所を北摂山系谷筋ではなく扇状地末端の湧水地と捉えると、両地点近辺に生育したスギの量（あるいはスギの分布地からの距離）が異なったものと考えられる。一方、草本・藤本花粉も多く検出されることから、両地点の周辺は開放的で、草地等が広がっていたと考えられる。イネ科（40ミクロン未満）が高率で検出され、両地点の近辺にはアシ類や、スゲ類などが生育していたと考えられる。また、栽培種であるソバ属や栽培の可能性が高いイネ科（40ミクロン以上）も検出されるほか、271土坑下位の試料№12ではアザケ科ヒユ科も検出される。これらのことから、周辺で稲作やソバ、アカザ（あるいはヒュ）などの栽培が行われていた可能性が指摘できる。更に271土坑上位の試料№11ではカキノキ属が検出され、271土坑の近隣で生育していたと考えられる。

## (2) 167池泉

271土坑、446落ち込みと同様に、背後の北摂山地東縁にはアカマツを主体とする薪炭林が広がっていたと考えられる。また167池泉では、271土坑に比べ、北摂山地低所を広く覆っていたアカガシ類を主体とした照葉樹林（古谷、1997）の影響が認められる。また、271土坑同様に草本・藤本花粉が多く検出されており、167池泉周辺も開放的で、草地等が広がっていたと考えられる。一方、全体にクワ科－イラクサ科が高率を示すことから、クワ類（コウゾ類）の樹木、あるいはミズ類や栽培種のカラムシなどのほか、高率で検出されるオシダ科－チャセンシダ科のオクマワラビなどが泉の近辺に生育していたほか、やや乾燥した場所にはヨモギ属が生育していたと考えられる。また、組み合わせに変化があるものの、クリ属、ミカン属－キンカン属－カラタチ属、カキノキ属やソバ属、アカザ科－ヒユ科などの栽培種（あるいは栽培の可能性がある種類）が同時に検出される。更にイネ科（40ミクロ以上）も高率を示すことから、近隣に水田や畑が存在し、これらの樹木や雑穀類が栽培されていた可能性もある。また、ヨモギ属などのキク科草本やオシダ科－チャセンシダ科のシダ類は日当たりの良い場所に広く生育し、畦や畑地で「雑草」として生育していた可能性もある。167池泉を庭園遺構と考えた場合、検出された木本の内、ミカン属－キンカン属－カラタチ属には庭木として植栽される種類も多い。また低率の検出であるが、カエデ属やツツジ科、イボタノキ属型、スイカズラ属も庭木として用いられる。

## 5.まとめ

尾山遺跡発掘調査に伴い検出された13～14世紀の池泉、土坑、落ち込みの堆積物を対象とした、花粉分析を行った。この結果、以下の事柄が明らかになった。

(1) 花粉分析結果から、遺跡背後の山地はアカマツを主要素とする薪炭林で覆われていたと考えられる。東奈良遺跡との対比が妥当である場合、アカマツを主要素とする薪炭林が北摂山地東縁の一般的な植生を考えることもできる。ただし北摂山地低所の広くは、アカガシ類を主要素とする照葉樹林で覆われていたと考えられる。また、遺跡近辺の湧水地には、小規模なスギ林が形成されていたと考えられる。

(2) 271土坑、446落ち込み近辺にはアシ類やスゲ類などのイネ科湿性草本が生育していたほか、イネやソバ、アカザ（あるいはヒユ）などが栽培されていたと考えられる。

(3) 167池泉近辺にはミズ類やオクマワラビ、ヨモギ類が生育していたと考えられる。また、周辺には水田や畑が存在し、イネやソバ、カラムシ、アカザのほか、果樹が栽培されていた可能性もある。

(4) 167池泉近辺で、ミカン属－キンカン属－カラタチ属、カエデ属、ツツジ科、イボタノキ属型、スイカズラ属が栽培されていた可能性がある。

## 〈参考文献〉

- 川崎地質株式会社（1995）東奈良遺跡における花粉・珪藻分析、東奈良遺跡－大阪府茨木東奈良第2期第1次住宅建替事業に伴う発掘調査報告書一、53－62。（財）大阪府埋蔵文化財協会。
- 小路登一・早川 崇（1986）杉沢の植物、入善町史 資料編、1、39－44、入善町、富山。
- 中村 純（1974）イネ科花粉について、特にイネを中心として、第四紀研究、13、187－197。
- 古谷正和（1979）大阪周辺地域におけるウルム氷期以降の森林植生変遷、第四紀研究、18（3）、121－141。
- 渡辺正巳（2010）花粉分析法、必携 考古資料の自然科学調査法、174－177、ニュー・サイエンス社、東京。

第6章 総括

今回の発掘調査では、縄文時代後期から中世に至る遺構・遺物を確認した。以下では各遺構面で検出した遺構の変遷と出土遺物を総括する（図116～121、表7）。

#### 1. 平安時代後期～室町時代（第3-1 b面、第3-2 a面）

池泉・平坦面・井戸・溝・土坑・ピット・水田を検出した。167 池泉には景石が据えられており、同じ時期に機能した溝・平坦面と一体となって、庭園遺構ないし儀式の場を構成した可能性がある。

また、10世紀から12世紀代の遺物が池泉周辺の遺構埋土から出土した。この内、巴文軒丸瓦・唐草文軒平瓦・丸瓦は11世紀後葉から12世紀代に位置付けられる。

167 池泉を中心とした遺構群については、立地、石の配置、溝、ケヤキ・植栽、出土遺物について以下に総括する。

### a. 167 池泉の立地

尾山遺跡の西側には大山崎から島本町南部にかけて北撰山地があり、北撰山地から淀川まで扇状地が形成される。167 池泉は扇状地内の緩やかな斜面地に立地する。北側は大山崎周辺が京都盆地に向けて

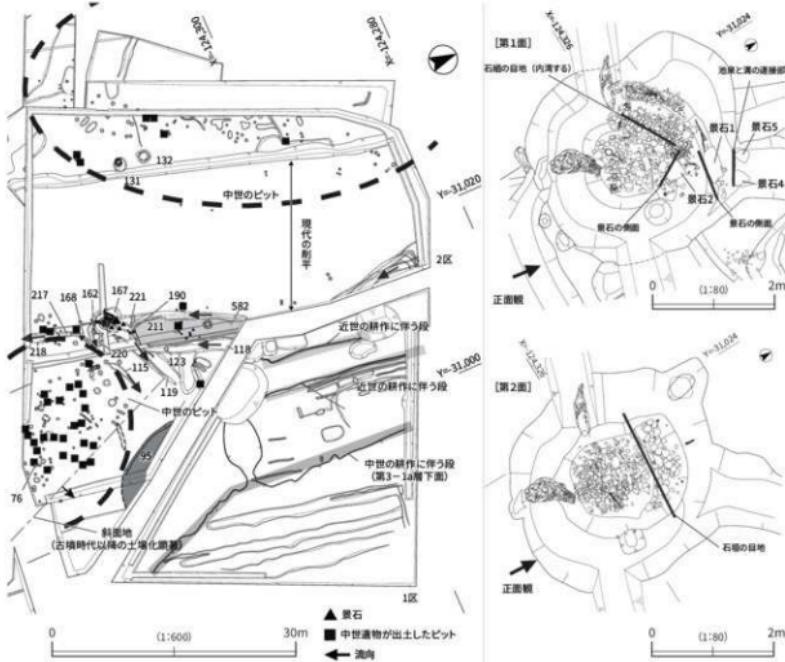


図 116 167 池泉他平面

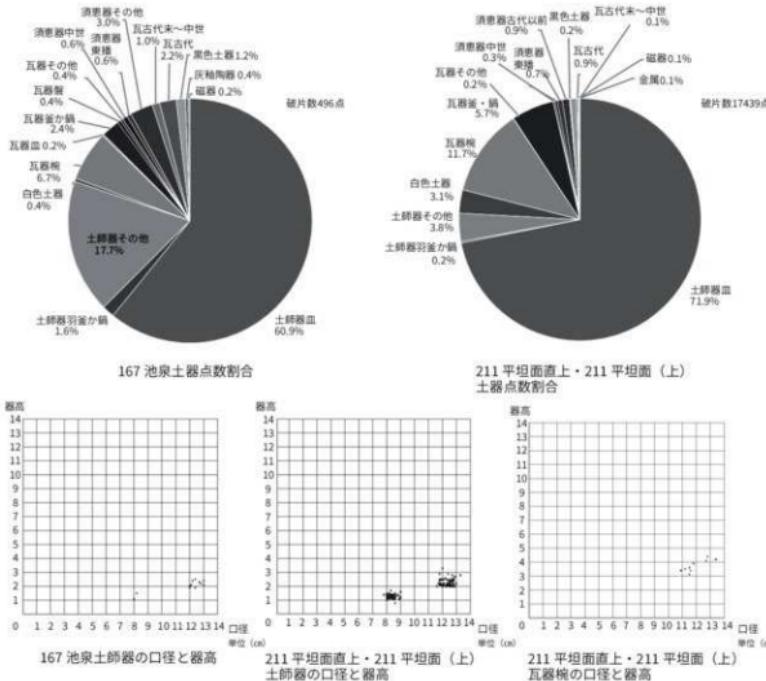


図 117 167 池泉・211 平坦面出土土器割合、土器法量

開放した空間になっており、八幡丘陵まで見渡せる場所である。

#### b. 居住域

167 池泉周辺は現代に削平を受けており、居住域は明確な形で検出されなかった。167 池泉西側と南東側でピットを検出しており、ピットから出土した遺物を検討したところ、13世紀から14世紀に属するものが多く認められ、ピットを検出した範囲が居住域を構成した可能性がある。167 池泉の西側のピットの分布範囲には131・132井戸も含まれている。

他に、3区北側(271土坑周辺)、8区南東部(357井戸周辺)、11区北西部(481土坑周辺)で遺構・遺物をまとめて確認しており、居住域等の可能性がある。また、7区第3-1b層では7区北西側から流されてきたと考えられる多量の土器・木製品が出土しており、7区北西側も居住域等の候補の一つである。

#### c. 石の配置

第1面で景石は167池泉内に2か所、溝内で2か所、190土坑肩部で2か所検出した。景石1は167池泉の掘形に接して横向き、景石2は中央部の掘形に接して縦に置かれている。167池泉と北側で接続する221溝には景石4・5が溝内で対向する位置に縦に置かれている。反対側の162溝には景石は据えられていない。景石の配列やケヤキの位置から、第1面の167池泉の正面観(池泉の鑑賞位置)は

図 118 中世の遺構変遷

南西側ないし南東側からの視覚を意識したものであったと考えられる。

第2面の石垣は、目地が南西—北東方向に湾曲はするものの通っており、正面観は南東側からの視覚に比重があったものと想定される。景石6・7は190土坑の肩部だけではなく、119・221溝の肩部にも当たる場所に設置したものである。溝が屈曲する位置に置かれており、211平坦面側からの視覚を意識して設置された可能性がある。

第1面の景石・礫は岩質が砂岩、チャート、石英である。色調別では、景石1・2・5と167池泉内礫は青色、景石4は緑色、景石6・7は赤黒色、景石2南側段での石英は白色を呈する。第2面の石垣・礫は砂岩主体で、全体的に青色を呈する。

d. 167 池泉周辺の溝

167 泉池には南北に溝が取り付く。溝の勾配は、平安時代後期に成立した作庭の細則が記された『作庭記』に定義された角度には当てはまらないが、全体として東側への排水を計画して掘削されたものと考えられる。また、168 溝から 218 土坑にかけては、162 溝と逆方向の南方向に水が流れるように加工されている。

167 池泉及び周辺の溝・土坑では、水成層の砂礫の堆積は認められなかった。湿性堆積物は 582 溝の一部、118 溝、190・217・218 土坑内、167 池泉中央部で確認できており、水浸かりしている状況が想定できるのはこれらの遺構に限られる。167 池泉では第 1 面・第 2 面の水の供給源が湧水地点を含む北側から北東側の基盤層であったと考えられ、平時の水位は 167 池泉内の段を超えることはなかったものと想定される。167 池泉に直結する 162・221 溝に水がオーバーフローするのは降雨量が多い時に限定されることが想定される。

#### e. ケヤキ・植栽

167 泉池南側ではケヤキを検出した。第2面構築時の埋土から多量に出土した樹葉は落葉広葉樹といふ同定結果を得ており、樹葉の形状はケヤキのものと同じである。『作庭記』には樹木の配置についても細則が決められており、南側にケヤキがあるのは、167 泉池の構築を含めた庭造作に際し、ケヤキを重視したものであったことが想定される。落葉広葉樹で高木に育つため、池泉の位置を遠方からもよく

表したと考えられる。なお、植栽については種実同定や花粉分析により、167 池泉周辺で果樹等を栽培した可能性があり、確実なものとして種実が多数出土したセンダンが候補として挙げられる。

#### f. 出土遺物

167 池泉と 211 平坦面から出土した土器の点数割合を図 117 に示した。時期は 13 世紀後葉から 14 世紀前葉。土師器と瓦器椀の割合では、211 平坦面で土師器の量が多い。また、割合としては少ないが、白色土器が一定量含まれている。また、211 平坦面には、丸底杯と白色土器模倣系の赤色土器が少量混じる。

白磁・青磁・青白磁は調査全体で合計 20 点出土しており、内 9 点が池泉周辺から出土している。白磁・青磁は少いものの、167 池泉では白磁四耳壺 28 が出土している。陶器は調査全体で合計 34 点出土しており、内 26 点が常滑焼である。167 池泉と 211 平坦面では黄彩褐釉陶器盤と、鉢の可能性のあるものが出土している。

土師器皿の口径と器高は、二極化しており、中間的なものは無い。図化していないものも含めて、二段ナデを施すものは 7 区第 3-2 b 層から出土した土師器皿 486 のみであった。土師器は小森編年の京 7 期古～中段階、平尾編年の京 VIII 期 A～B、瓦器椀は III-3～4 型式に対比できる。

#### g. 167 池泉及び関連遺構の位置づけ

167 池泉は、13 世紀以降、当地に関与した有力者が構築した可能性がある。当事者の具体的な名前は伝わっていないが、庭園遺構が多数検出されている京城に深い関わりを持つ人物によって構築されたことも考えられる。ただし、周辺から池泉に関係するような建物が確認されていないことから、現時点では何らかの儀式の場として構築された可能性も想定しておく。

#### 2. 飛鳥時代～奈良時代（第 3-2 b 面）

第 1 号窯・井戸・土坑・ピットを検出した。第 1 号窯は飛鳥寺東南禅院・飛鳥池瓦窯と同範の軒丸瓦が出土しており、窯構造に瓦積みを用いることを特徴とする。2 区で検出した 242・243・255・259 土坑は土取り穴の可能性があり、御所池瓦窯跡の操業と関係する可能性がある。242・243・255・259 土坑から出土した遺物は第 1 号窯の整地層から出土した遺物の時期（7 世紀後葉）に近いことも注目される。

近接して検出した 241 井戸は、第 1 号窯を含めた御所池瓦窯跡の操業時に機能していた可能性があり、井戸周辺の土地利用については、工房、瓦生産従事者の居住域や瓦搬出の中継地であった可能性がある。ただし、御所池瓦窯跡と距離が離れていることや、工房に関係する遺構・遺物が確認されていないことから、工房があった可能性は現段階では低いものと考えられる。

また、1～10 区と 11・12 区の間に現在も利用されている南北方向の道路は、西国街道のルートの候補の一つとして指摘されている。道路が現在ある場所は、今回の発掘調査の所見から、砂礫（弥生時代後期以前）により形成された微高地上の安定した場所であったと考えられる。241 井戸等を検出した 2 区周辺の立地を考える上で重要と考えられる。

表 7 御所池瓦窯跡第 1 号窯跡の瓦集計

瓦集計	11・12 区、1・2 区主要遺構	469 点	御所池瓦窯跡 1 号窯
総点数	1619 点	930 点	199 点
総面積	267.01 (÷ 4) → 66.75 点	154 点 (÷ 4) → 38.5 点	35 点 (÷ 4) → 8.75 点
総重量	325kg 965 g	222kg 316 g	34kg 658 g

第1号窯は、当地における古代の瓦生産を考える上で、様々な知見が得られており、以下に総括する。

#### a. 第1号窯から出土した瓦分類

第1号窯と尾山遺跡から出土した瓦は、以下の分類を行った。

軒瓦	軒丸瓦、軒平瓦
丸瓦	d : 凸面縦方向ナデ、凹面布目痕
平瓦	a 1 : 凹面布目痕、凸面ナデ
a 2	：凹面ナデ、凸面ナデ
b 1	：凹面布目痕、凸面板ナデ（全体が残っておらず、部分的な調整の可能性が高い）
d	：凹面布目痕、凸面縦タタキ
f	：凸面斜格子タタキ
v	：凹面布目痕、凸面軒平瓦平瓦部か（543～549等）
w	：幅が半分の平瓦
y	：丸瓦・平瓦の判別ができるが、調整不明。
闕切平瓦	（541）
熨斗瓦	
z	：器種不明

瓦は点数、各瓦の隅点数（1枚で4隅）、重量別に集計した。焼成についても検討し、土師質（軟質）、須恵質（硬質）に分けて集計した。第1号窯では瓦窯構築材（燃焼部壁や袖等）に用いた瓦12点、前庭部等から出土した瓦178点である。全体の割合では平瓦が7割を占める。焼成は、点数・重量別の集計で土師質・須恵質が50%ずつに近い数値である。焼成不良のものが多いが、失敗品以外の瓦が出荷されたことを考慮すると、土師質・須恵質の割合がただちに瓦製作技術の評価に結び付くものではないかもしれない。丸瓦は点数・重量で縦方向ナデを施すものが6割から7割を占める。平瓦は点数・重量で凸面斜格子タタキが9割以上を占める。また、第1号窯から縦タタキの瓦が4点出土している点が注目される。1点は右袖石据付坑の裏込め土、1点は燃焼部左側壁から出土しており、窯構築材として使用する。他2点第1号窯の第2面機能時形成層から出土しており、第1号窯では縦タタキの平瓦と斜格子タタキの平瓦を同時に生産していたものと考えられる。

#### b. 軒瓦について

今回の調査全体で古代の軒瓦は8点出土した。軒丸瓦3点、軒平瓦5点である。文様別に分類し、型式名を付与した。複弁蓮華文軒丸瓦586をGM I型式とした。飛鳥寺東南禅院（XVIIIb型式）、梶原寺跡（VII型式）に同范の瓦があり、飛鳥寺東南禅院の瓦は飛鳥池瓦窯、梶原寺跡の瓦は梶原瓦窯で焼かれたことが知られている（註1）。XVIIIb型式には改范前のXVIIIa型式があり、図119に示した文様の変遷を辿る。梶原瓦窯と第1号窯の前後関係は範傷等により抑えられていないが、第1号窯より文様がシャープなものが梶原瓦窯には含まれている。なお、飛鳥寺東南禅院は入唐僧の道昭が帰国後に活動の根拠地とした場所である。道昭は文武4（700）年荼毘に付されるまで各地に布教・土木工事の治績を残した。飛鳥寺東南禅院・飛鳥池瓦窯と同范瓦は、道昭が行った淀川西岸域での布教・土木工事に関係する地域で出土している。道昭の淀川西岸域での土木工事の代表的なものとして淀川への山崎橋架橋がある。行基が師である道昭が建立した山崎橋の橋脚のみとなった状態を見て再建を発願する話が『行基菩薩伝』に書かれている（註2）。

複弁蓮華文軒丸瓦574・575をGM II型式とした。周縁の外側に無文の外縁を付け、瓦当径を大きく



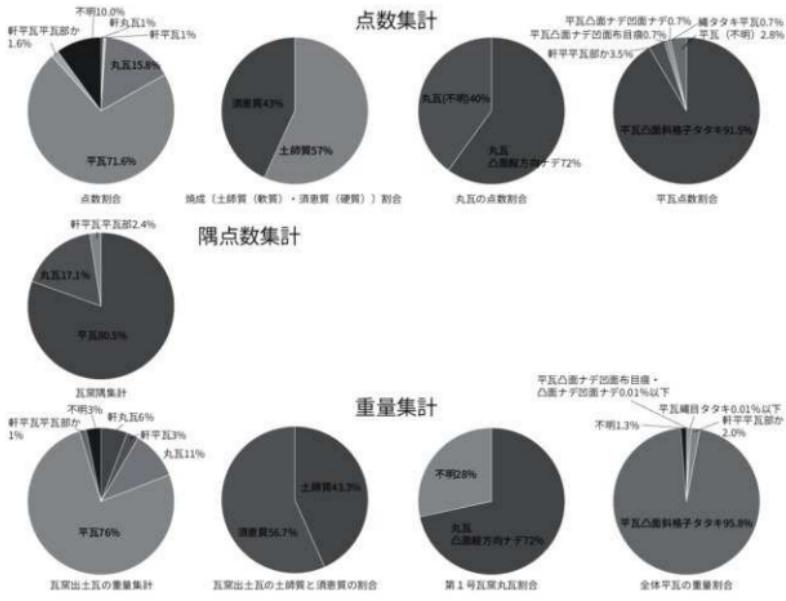


図 120 御所池瓦窯跡 1 号窯の瓦割合

している。梶原寺跡・梶原瓦窯、郡家今城遺跡に同じ文様の瓦がある。范傷等で同范照合できなかつたが、肉厚の蓮弁と間弁、外区外側の圈線に非接触で不等三角形を表現した鋸歯文の特徴から同范瓦と判断してよい資料と考えている。

重弧文軒平瓦 587 は GH I 型式とした。梶原瓦窯 C 型式に対比できるものか。左袖の土手状盛土から出土しており、第 1 号窯で生産したものと考えられる。

重弧文軒平瓦 506 は GH II 型式とした。GH II ～ IV 型式は瓦当面の高さが同じである。梶原瓦窯 E 型式に対比でき、梶原瓦窯では後出的な三重弧文軒平瓦に分類される。軒平瓦 506 の頬はヨコナデ、梶原瓦窯のものにはヨコナデ以外に斜格子タタキを施すものがある。

均整唐草文軒平瓦 577 は、GH III 型式とした。瓦範の高さより瓦当面が小さく、瓦範下位を施す。梶原寺跡 KH J 型式と同範である。梶原寺跡では段頬で斜格子タタキを施すものと、直線頬で瓦範上位を施す軒平瓦がある。

均整唐草文軒平瓦 578 は GH IV 型式とした。GH IV 型式は GH III 型式と法量の規格が同じで、段頬で斜格子タタキを施すなど製作技法が共通する。梶原瓦窯 H 型式と同文瓦である。遺存範囲で范傷はないが、巻きの強い唐草文と唐草文の間に表現する子葉の特徴から梶原瓦窯と同範の可能性が高い。

GH II 型式、GH III 型式の軒瓦は後世の遺構等から出土しており、時期については現状は不明である。全体的な出土遺物の傾向から、平城 IV 型式まで下ることはないと想定している。

#### c. 丸瓦について

丸瓦は、第 1 号窯から 30 点出土した。凸面縦方向ナデ、凹面布目痕を残す。側縁は 2 ～ 3 面の面取

りを行う。丸瓦は杵型を用いた製作が想定されており、凸面に分割線を残す丸瓦 514 が出土している。奈良時代の玉縁式の丸瓦は今回の調査で出土していない。

#### d. 平瓦について

第1号窯から平瓦は142点出土した。桶巻き作り。1枚作りの平瓦は無い。凸面を斜格子タタキ調整するものが大半を占める。斜格子の大きさは菱形の対角線数値で縦1.5cm、横1.0cm前後である。斜格子タタキが重なって、見かけ上、小さい斜格子に見えるものもあったが、上記の規格外のものはなかった。斜格子タタキの下には斜め方向の条線、タラ製作時の糸切り痕を残すものが多い。

ハケ調整は主として平瓦の端面・側縁際の調整に用いる。ハケは粗いもの（526等）が主流をなす。ナデ、板ナデ（520等）も同様に、端面・側縁近くの調整に用いられたものがあったが、梶原瓦窯のように凸面全体を調整したものは今回出土した平瓦には無かった。

平瓦の厚みは1cm大(平瓦524)から3cm大の平瓦vのようなものまであった。薄いものは熨斗瓦の可能性もあるが、破片で出土した場合判別できないものも多くあった。厚み2cm前後のものが最も多く出土しており、第1号窯の右側壁に使用した平瓦31のような厚みのもの(2.6cm)は量的な割合は少なかった。凹型整形台痕のある平瓦は今回の調査全体で合計15点出土した。梶原瓦窯跡の瓦では凹型整形台痕のある瓦は報告書に掲載された資料には無く、第1号窯の製作技法上の特徴の一つとなりうるかもしれない。布目痕は糸本数1cm当たり縦7~8本、横7~8本が大半を占めるが、平瓦vとした軒平瓦平瓦部の可能性のあるもの(546等)は、縦9~10本、横9~10本の細かい布目痕のものが含まれる。布目の縞目は、まつり縫いするものが少量あった。

側縁は2～3面の面取りを行う。側縁端面から面取りして、端面にはみ出した粘土を凹凸面から削って面を形成したと考えている。厚みのある瓦は、面取りの際、側縁の平坦面を安定的に形成することができず、凹凸面から削って2面の面取りになった平瓦（518～520）があった。

#### e. 胎土について

胎土には1mm以下の長石・石英が含まれる。平瓦Vは、胎土が精良なものと、1mm以下の長石・石英を多量に含まれるものとに分かれる。GM 1型式とした複弁蓮華文軒丸瓦は胎土に2mm以下の黒色石粒と1mm以下の長石・石英を多量に含んでおり、他の瓦と異なっている。

図 121 御所池瓦窯跡 1 号窯と他の関連遺跡消長・出土遺物・属性の比較

#### f. 第1号窯の操業期間について

第1号窯の操業期間を示す土器・瓦で、特に重要と考えられる資料は以下の3点である。

○瓦窯構築年を示す資料：須恵器杯蓋589（飛鳥III～IV型式）

○第3面操業時期を示す資料：土師器杯A588（平城II～III型式）

○瓦窯操業最終面（機能廃絶時）を示す資料：軒丸瓦GM I型式（586、飛鳥寺東南禪院・飛鳥池瓦窯、梶原寺跡・梶原瓦窯と同範）

御所池瓦窯跡の操業期間を示す可能性がある瓦は以下の5点である。

△御所池瓦窯跡の操業時期を示す可能性がある資料：第1号窯から近い位置で出土した軒平瓦GH II・GH IV型式（506・578）、1・2区で出土した軒平瓦GM II型式・GH III型式（574・575・577）

土師器杯Aの時期と、生産した瓦に想定される時間幅を最小限に想定すれば、第1号窯の操業期間は7世紀後葉から8世紀前葉と想定される。なお、2区では土取り穴の可能性が高い土坑を検出しており、第1号窯を含めた御所池瓦窯跡総体としては7世紀後葉まで遡るのは確実と考えられる。

#### g. 瓦窯構造について

第1号窯は焼成部に瓦積みを用いる瓦窯である。窯構造に瓦積みを採用する事例として、大津市真野庵寺瓦窯（7世紀後葉）では、焼成部から燃焼部の窯構造に瓦積みを用いる。飛鳥池瓦窯は燃焼部の窯構造に瓦積みを用いる。島本町に所在する鈴谷瓦窯跡は詳細が不明ながら、窯構造に瓦積みを用いられていたことが伝えられている。焼成部が未検出であるため、真野庵寺瓦窯のような窯構造になるのか、現状では不明と言わざるを得ない。

第1号窯と同時代に操業し、製作した瓦に共通点のある梶原瓦窯では5基の瓦窯が検出されている。7世紀後葉に操業した第2号窯が「半地下式有段窯」、梶原VIII型式（GM I型式と同範）の軒瓦を焼成し第1号窯と操業した年代が重なる第1号窯は「地下式有段窯」、第1号窯の操業後半期に年代が重なる4号窯は「ロストル式平窯」を採用する。

第1号窯の焼成部があった場所及びその周辺は、現在、宅地として造成され旧地形を留めていないが、燃焼部から焼成部は段丘構成層上面に構築されており、段丘構成層の堆積状況、燃焼部に斜交する623谷地形の形状（底面が前庭部方向に傾斜）・堆積状況（粗粒砂～極粗粒砂の堆積ユニットが上方に累重する）から、焼成部の方向に向かって緩やかな斜面地であったことが想定される。第1号窯の操業期間を考慮すれば、斜度が緩い地形を利用した窯窓であった可能性が高いと想定している。ただし、燃焼部と焼成部の境界に段を設け、奥壁に3枚の平瓦を凸面が焼成部側を向くように立てる構造は、平瓦に壁材の粘土を貼り付けた後も火焔及び熱流を分散する機能があったことが想定され、ロストル式平窯に通じる過渡的な様相の窯であった可能性がある。

また、前庭部埋め戻し土には多量の焼土塊が含まれており、想定2.4～3.0m<sup>3</sup>以上（近世作土による削平分は控除）の土量が必要である。埋め戻し土は主として窯構造の天井部等の壁材を起源としていることを想定しているが、焼成部の構造が窯窓であった場合、容易に獲得できる土量であったと考えられる。

#### h. 469溝から出土した瓦について

469溝では瓦が930点出土した。平瓦の出土量が卓越し、被熱した粘土が付着するものや二次被熱を受けるものが大半を占めており、窯構築材として使用したものを廃棄したと考えられる。第1号窯と5m程度しか離れておらず、1号窯の窯構築材であった可能性があるものの、現状では推測の域を出な

い。御所池瓦窯跡では既知の瓦窯があったことが『島本町史』等でも指摘されており、複数の窯が同時に操業していた可能性が高いことが想定でき、469 溝出土の瓦は第1号窯とは別の窯のものであった可能性は否定できない。第1号窯の窯構築材であった場合、焼成部においても真野庵寺瓦窯のように瓦積みを行っている可能性が高まるが、窯の壁土に由来すると考えられる前庭部埋め戻し土に含まれる瓦は量が少なく、焼成部の窯構築材に瓦積みを採用していたかどうかについては検討を要する。

#### i. 第1号窯の瓦供給先

第1号窯で生産した瓦の供給先は、同范瓦が出土した梶原寺跡が候補として挙げられる。『類聚国史』延暦11(792)年の条には僧寺と尼寺があったことが記載されており、現状は実体が不明な尼寺についても供給先の一つであった可能性を残す。

『正倉院文書』の天平勝宝8(756)年東大寺造営に当たって摂津梶原寺に6000枚の瓦を発注した記事が残る。第1号窯については出土遺物に見る限り、東大寺造営時には操業していない可能性が高いと考えられる。第1号窯廃絶後に窯構造の一部を利用した土坑(木炭窯か)を検出しており、別の瓦窯が瓦生産を行った可能性を残す。ただし、①平城IV型式以降の遺物が出土していないこと、②凸面縄タタキの軒平瓦が皆無で平瓦が微量であること、③軒平瓦の顎形態に直線顎・曲線顎が混じないこと、④丸瓦に玉縁式が入らないことから、梶原瓦窯より操業が先に終わっていた可能性がある。

#### 3. 弥生時代後期～古墳時代前期(第4-1a面・第4-2a面)

溝・土坑・落ち込み・ピット・水田を検出した。古墳時代前期初頭(庄内式期)の土坑、弥生時代後期の溝・土坑は2・6区の微高地上で検出しており、集落の一部を構成する。2・6区で検出した127・322・127溝は平面形が円形に復元でき、竪穴建物に伴う外周溝と考えられる。一方、低地に当たる調査区では小区画の水田を検出した。時期は弥生時代後期から古墳時代前期初頭を想定しており、下限は古墳時代前期(布留式期)に下る可能性がある。

#### 4. 弥生時代中期(第5a面・第5b面)

溝・土坑・水田を検出した。第5a面では、4・5・8区で小区画水田を検出した。時期は弥生時代中期前葉から中期後葉を想定する。水田作土からの遺物は乏しく、現状では時期を絞り切っていない。時期の下限は、1区で検出した47溝(弥生時代中期後葉)が第5a層の堆積を切っていることを根拠とする。時期の上限は、7区第5b面で検出した392土坑他から出土した弥生土器(弥生時代中期前葉)を根拠とする。なお、水田面を覆う泥層(第4-2b層)から出土した遺物は弥生土器蓋742の1点のみである。

#### 5. 縄文時代晩期～弥生時代前期(第6a面)

1区で溝を検出した。1・2・4区から突帯文土器、弥生土器がまとめて出土した。突帯文土器は、刻目が小「D」字形ないし小「o」字形のものが大半を占め、不規則に施文するものも多い。また、無刻目のものも含まれることから、長原式中段階(後半)から新段階を想定している。1区60溝から出土した突帯文土器757は東大阪市水走遺跡出土のものと形状が同じで、突帯文土器としては最も新しい段階のものが出土している。また、口縁端部に突帯を貼り付けた、「縄文系弥生土器」の甕773・774が他の突帯文土器と共に出土している。土壤化が顕著な湿地状の堆積物から出土しており、堆積環境に大きな変化が無い状況下で同時に埋没した可能性が高いが、突帯文土器・弥生土器の分布は広範囲に広がっており、集落が周辺に存在する可能性は極めて高いと考えている。なお、第6a面では各調査区で水田畦畔の検出を試みたが、今回の調査では検出されなかった。

## 6. 繩文時代後期（第7 b面）

土坑・ピット・谷地形を検出した。1区で検出した土坑・ピットについては、遺物が出土しておらず、時期は不明である。7区464谷地形では縄文土器がまとまって出土した。時期は縄文時代後期前葉（～中葉）で、第7a層が形成された時期を考える上で重要な資料である。縄文土器は摩滅しておらず、遺存状態は良好である。1～10区には湿润な環境で形成されたと考えられる第7a層が全体的に堆積し、住環境には適さなかったと考えられ、464谷地形の縄文土器は7区から距離が離れない、西側の北摺山地に近い場所で使用したものと想定している。

### 註

- (1) 資料調査に際し、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所、高槻市文化財課の協力を得た。報告書に掲載した軒丸瓦の写真については独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所、高槻市所蔵の資料を撮影した。
- (2) 他に、飛鳥寺東南押院で出土し、道昭関連の遺物として火頭形博仏がある。

### 参考文献

- 網伸也 2019『畿内の古代寺院と道昭』『古代山崎の架橋と造寺』
- 網伸也 2000『古代寺院の創建と瓦陶兼業窯～天王寺の創建年代を中心として～』『あまのともしひ一原口正三先生古稀記念集－』
- 網伸也 1997『摂津の古墳と寺院』『季刊考古学』60
- 上原眞人 2020『丹波国における律令制成立期および盛期の寺院』『黒川古文化研究所紀要 古文化研究』第19号
- 大阪府立弥生文化博物館編 2021『近畿最初の弥生人』
- 大津市教育委員会 2014『真野庵寺発掘調査報告書 I』
- 大山崎町教育委員会 2003『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第25集
- 大脇潔 1991『研究ノート丸瓦の製作技術』『研究論集IX』奈良文化財研究所学報
- 窯跡研究会編 2020『土器窯と瓦窯の接点』
- 黒板勝美・國史大系編修會編 1981『類聚國史』
- 公益財団法人大阪府文化財センター 2017『槻原寺跡』
- 公益財団法人大阪府文化財センター 2021『上牧遺跡』
- 古閑正浩 2018『山崎橋・山崎庵寺と道昭』『古代山崎の架橋と造寺』
- 古閑正浩 2013『槻寺としての山崎庵寺』『第19回京都府埋蔵文化財研究会発表資料集』
- 島谷稔 1974『高槻上代寺院跡の研究（一）』『大阪文化誌』第1巻第1号
- 島本町史編さん委員会 1978『島本町史』
- 槇河泉古代寺院研究会 2002『行基の考古学』
- 槇河泉古代寺院研究会 2003『槇河泉の古代瓦窯を考える』
- 続群書類従完成会 1904『行基菩薩伝』『続群書類従』
- 高槻市立今城塚古代歴史館 2015『律令時代の槇津船主郡』
- 高槻市役所 1973『高槻市史』第6巻考古編
- 高橋公一 1992『槻原庵寺出土の平城宮系軒瓦』『文化財学集』
- 高橋公一 1994『郡家今城遺跡の軒丸瓦』『高槻市文化財年報平成4年度』
- 高橋公一 2013『II 槻原寺の礎石』『高槻市文化財年報平成23年度』
- 谷崎仁美 2021『4 摂津・河内・和泉・紀伊地域の一本づくり・一枚づくり』『古代瓦研究X』

- 中世瓦研究会編 2019『中世瓦の考古学』
- 東京大學史料編纂所 1977「正倉院文書」『大日本古文書』
- 奈良文化財研究所・歴史土器研究会編 2019『飛鳥時代の土器編年再考』
- 奈良国立文化財研究所 1978『飛鳥・藤原宮発掘調査報告 2 藤原宮西方官衙地域の調査』
- 奈良国立文化財研究所 1993『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 23』
- 奈良文化財研究所 2021『飛鳥池遺跡発掘調査報告』
- 西村恵祥 2003『菟原瓦窯と梶原寺』『槀河泉の古代瓦窯を考える』第5回槀河泉古代寺院フォーラム
- 花谷浩 2013『飛鳥寺東南禅院とその創建瓦』『瓦衣千年』
- 花谷浩 1995『丸瓦作りの一工夫—畿内における竹状模骨丸瓦の様相—』『文化財論叢 II』
- 原口正三 1977『考古学からみた原始・古代の高槻』『高槻市史』第1巻本編I
- 原田憲二郎 2018『大安寺造営と瓦生産』『早稲田大学考古学会古代』第141号
- 名神高速道路内遺跡調査会 1998『梶原瓦窯跡』
- 山崎信二 2000『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所学報第59冊

尾山遺跡・御所池瓦窯跡遺物観察表

発見番号	発見場所	調査式	種類	出土遺物名	地質	口径・高	断面・幅	厚	残存率	調査	出土	性状	貢献度	備考
1	2 台	上部断面	167 窓	(7.4)	(12.2)	1/5	外・内：ナデ		術 良 10YR6/2に古い黄相					
2	2 台	上部断面	167 窓	(11.0)	(2.1)	1/5	外・内：ナデ		術 良 10YR6/2に古い白相					
3	2 台	上部断面	167 窓	(12.0)	2.0	3/10	外・内：ナデ、指揮丸		術 良 10YR6/1灰白					
4	9	2 台	上部断面	167 窓	12.1	2.1	1/1	外・内：ナデ、指揮丸		術 良 7.5YR6/2灰褐色				
5	2 台	上部断面	167 窓	(12.4)	2.2	1/4	外・内：ナデ、指揮丸		術 良 10YR6/2灰褐色		明治。			
6	2 台	上部断面	167 窓	8.0	1.1	1/2	外・内：ナデ		術 良 10YR6/2灰白					
7	2 台	上部断面	167 窓	(12.0)	3.6	1/4	外・内：ナデ		術 良 2.5Y7/2灰褐色					
8	2 台	上部断面	167 窓	(12.0)	2.2	3/10	外・内：ナデ、指揮丸		術 良 2.5Y7/2灰褐色					
9	2 台	白色遮蔽	167 窓	13.2	3.0	4/5	外・内：ナデ、指揮丸		術 良 10YR6/1灰白					
10	2 台	白色遮蔽	167 窓	(5.0)		1/10 以上	外・内：厚底		術 不良 5YR6/6暗					
11	14	2 台	砾石	167 窓	2.0	1.7	0.8	1/1				等々 12年。		
12	14	2 台	平手形陶器	167 窓	3.8	3.3	0.7	1/1				等々 12年。		
13		2 台	砾石	167 窓	4.0	3.2						等々 12年。		
14		2 台	上部断面	167 窓	(10.6)	(1.8)	1/5	外・内：ナデ		術 良 7.5YR6/2灰白				
15		2 台	上部断面	167 窓	(12.0)	1.9	1/2	外・内：ナデ		術 良 10YR6/2に古い黄相				
16	9	2 台	上部断面	167 窓	12.4	3.9	1/3	外・内：ナデ、指揮丸		術 良 10YR6/2に古い黄相				
17	2 台	上部断面	167 窓	12.7	2.3	4/5	外・内：ナデ		術 良 10YR6/2に古い黄相					
18	2 台	上部断面	167 窓	(13.0)	2.1	2/5	外・内：ナデ		術 良 10YR6/2に古い黄相					
19	2 台	五角錐	167 窓	(13.4)	(2.4)	1AD 1CT	外・内：ナデ、土ガキ		術 良 NS/灰					
20	2 台	五角錐	167 窓	14.0	(3.9)	1/5	外・内：ナデ、指揮丸		術 良 N4/灰					
21	2 台	上部断面	167 窓	(7.9)	1.2	1/4	外・内：ナデ、指揮丸		術 良 10YR6/2に古い黄相		細部に擦り。			
22	9	2 台	上部断面	167 窓	8.2	1.5	1/3	外・内：ナデ、指揮丸		術 良 10YR6/2灰白				
23	2 台	上部断面	167 窓	(12.0)	(2.4)	1/5	外・内：ナデ、指揮丸		術 良 10YR6/2に古い黄相					
24	9	2 台	上部断面	167 窓	13.0	2.4	9/10	外・内：ナデ、指揮丸		術 良 2.5Y7/2灰白				
25	9	2 台	上部断面	167 窓	12.2	2.4	1/1	外・内：ナデ、指揮丸		術 良 2.5Y7/2灰褐色				
26	2 台	五角錐	167 窓	(25)	(4.0)	1/8	外・内：ナデ		術 良 N4/灰					
27	14	2 台	砾石	167 窓	18.9	6.5	2.9					等々 65年。		
28	9	2 台	白磁PCR裏	167 窓	(6.0)				1/10 以上	外・内：厚底		7.5GV7/3灰褐色		表面有り。
29	9	2 台	上部断面	167 窓	12.4	2.5	1/1	外・内：ナデ、指揮丸		術 良 2.5Y7/3灰白		形状は桶円形。		
30		2 台	灰被付陶器	167 窓	(6.0)	(2.1)	1/4	外・内：白被付ナデ		術 良 2.5Y7/2灰褐色				
31	9	2 台	五角錐	167 窓	(13.4)	4.3			1/4	外・内：ナデ、指揮丸				コウヤマキ属。
32	2 台	五角錐	167 窓	(9.0)	1.4			1/2	外・内：ナデ		術 良 10YR6/3浅黄相			
33	2 台	箆	167 窓	(23.2)	0.6	0.4						ヒノキ		
34	2 台	追瓶	167 窓	(11.2)	(2.0)	0.2						ヒノキ		
35	2 台	箆	167 窓	18.9	0.6	0.5						ヒノキ		
36	14	2 台	抹村付陶器	167 窓	9.2	0.8	0.3					ヒノキ		
37	2 台	追瓶	167 窓	(7.1)	(3.0)	0.2						ヒノキ		
38	2 台	箆	167 窓	20.9	0.5	0.4						ヒノキ		
39	2 台	箆	167 窓	23.5	0.7	0.6						ヒノキ		
40	2 台	上部断面	211 年断面	(9.0)	(0.2)	1/4	外・内：ナデ		術 不良 10YR6/3浅黄相					
41	2 台	上部断面	211 年断面	(12.4)	0.7	1/5	外・内：厚底		術 良 7.5YR6/6					
42	2 台	上部断面	211 年断面	12.4	2.9	7/10	外・内：厚底		術 良 2.5YR6/6相		形状は桶円形。			
43	2 台	上部断面	211 年断面	(12.7)	2.3	1/3	外・内：ナデ		術 良 2.5YR6/6相		形状は桶円形。			
44	2 台	上部断面	211 年断面	(12.8)	1.9	1/8	外・内：厚底		術 不良 7.5YR6/4に古い型					
45	2 台	上部断面	211 年断面	(13.0)	(2.0)	1/8	外・内：ナデ		術 不良 10YR6/2灰白					
46	2 台	薄唇器裏	118 窓	25.6	(7.6)	1/5	外・内：ナデ		術 良 N4/灰					
47	2 台	上部断面	118 窓	(7.4)	(3.0)	1/5	外・内：ナデ		術 良 10YR6/2に古い素面					
48	2 台	土被付陶器	118 窓	(7.7)	(2.1)	1/5	外・内：ナデ		術 良 10YR6/2白色					
49	2 台	上部断面	118 窓	(7.6)	(1.2)	1/5	外・内：ナデ		術 良 2.5Y7/2灰白					
50	2 台	上部断面	118 窓	(10.4)	(3.9)	1/5	外・内：ナデ		術 良 10YR6/2浅黄相					
51	2 台	上部断面	118 窓	(10.8)	(2.4)	1/10	外・内：ナデ		術 良 10YR6/2に古い型					
52	2 台	上部断面	118 窓	(12.8)	(2.4)	1/10	外・内：ナデ		術 良 7.5YR6/4に古い型					
53	2 台	上部断面	118 窓	(15.4)	(2.7)	1/5	外・内：ナデ		術 不良 10YR6/2灰白					
54	2 台	石瓶	118 窓	(26.0)	(4.2)							瓶口有り。		
55	2 台	上部断面	118 窓	(22.4)	(5.2)	1/8	外・内：ナデ		術 良 7.5YR6/3浅黄相					
56	2 台	上部断面	211 年断面	7.8	1.4							口縁部有り。		
57	2 台	上部断面	211 年断面	(0.0)	1.0	1/3	外・内：ナデ		術 良 7.5YR6/4に古い型					
58	2 台	上部断面	211 年断面	(0.0)	1.1	1/2	外・内：厚底		術 良 7.5YR6/3浅黄相		明治。			
59	2 台	上部断面	211 年断面	8.0	1.1	9/10	外・内：ナデ		術 良 7.5YR6/4に古い型					
60	2 台	上部断面	211 年断面	8.0	1.2	9/10	外・内：厚底		術 良 7.5YR6/4に古い型					
61	2 台	上部断面	211 年断面	(1.1)	0.8	1/1	外・内：ナデ、指揮丸		術 良 7.5YR6/4に古い型					
62	2 台	上部断面	211 年断面	8.0	1.3	9/10	外・内：ナデ		術 良 10YR6/2浅黄相					
63	2 台	上部断面	211 年断面	(0.0)	1.3	1/2	外・内：ナデ		術 良 10YR6/4に古い黄相					
64	2 台	上部断面	211 年断面	(0.0)	2.4	9/10	外・内：ナデ		術 良 7.5YR6/4に古い型					
65	2 台	上部断面	211 年断面	(1.1)	1.5	9/10	外・内：ナデ		術 良 7.5YR6/4に古い型					
66	2 台	上部断面	211 年断面	8.0	1.5	1/1	外・内：ナデ		術 良 10YR6/4に古い黄相		口縁部有り。			
67	2 台	上部断面	211 年断面	(0.0)	1.1	1/2	外・内：厚底		術 良 10YR6/2灰白		瓶口は白色。			
68	2 台	上部断面	211 年断面	(1.1)	8.1	1/1	外・内：ナデ		術 良 10YR6/3に古い素面					

被災番号	実測測定	測量区	土工清掃・地盤	口径・深	断面・幅	厚	現存高	測量	地主	地主	台地名	備考
69	2.05	上解田畠	211 平原地	8.1	1.3		9/10	高・内・ナデ 内・ナダ	高	良	10YR0/2 深白	口縁部歪みあり。
70	2.05	上解田畠	211 平原地 (+)	8.1	1.4		1/3	外・内・ナデ	相	良	10YR0/2 にじい黄橙	口縁部歪みあり。
71	2.05	上解田畠	211 平原地	8.2	1.1		9/10	外・内・ナデ	高	良	10YR0/2 にじい黄橙	口縁部歪みあり。
72	2.05	上解田畠	211 平原地	8.2	1.1		9/10	外・内・ナデ	高	良	7.5YR0/2 にじい橙	口縁部歪みあり。
73	2.05	上解田畠	211 平原地	8.2	1.2		1/3	外・内・ナデ	高	良	10YR0/2 にじい黄橙	口縁部歪みあり。
74	2.05	上解田畠	211 平原地 (+)	8.2	1.4		1/3	高・ナダ、細孔丸 内・ナダ	相	良	10YR0/2 深白	口縁部歪みあり。
75	2.05	上解田畠	211 平原地	8.2	1.5		1/3	外・内・ナデ	相	良	2.5YR0/2 白灰	
76	2.05	上解田畠	211 平原地	8.2	1.4		9/10	外・内・ナデ	相	良	2.5YR0/2 浅黄	
77	2.05	上解田畠	211 平原地	(8.2)	1.2		1/2	高・ナダ、細孔丸 内・ナダ	高	良	7.5YR0/2 にじい橙	
78	2.05	上解田畠	211 平原地 (+)	(8.3)	(1.1)		1/4	高・ナダ、細孔丸 内・ナダ	相	良	10YR0/2 深白	
79	2.05	上解田畠	211 平原地	8.3	1.2		1/3	高・ナダ、細孔丸 内・ナダ	相	良	7.5YR0/2 にじい橙	
80	2.05	上解田畠	211 平原地	8.3	1.3		1/3	外・内・ナデ	相	良	10YR0/2 深白	転王塙の脇付り付帯。
81	2.05	上解田畠	211 平原地	8.3	1.4		4/5	高・ナダ、細孔丸 内・ナダ	相	良	10YR0/2 にじい黄橙	転王塙の脇付り付帯。
82	2.05	上解田畠	211 平原地 (+)	(8.4)	1.4		1/3	外・内・ナデ	相	良	10YR0/2 にじい黄橙	
83	2.05	上解田畠	211 平原地	8.4	0.9		1/4	高・ナダ、細孔丸 内・ナダ	相	良	10YR0/2 にじい黄橙	
84	2.05	上解田畠	211 平原地	(8.4)	1.1		1/3	外・内・ナデ	相	良	10YR0/2 にじい黄橙	
85	2.05	上解田畠	211 平原地 (+)	8.4	1.2		1/3	高・ナダ、細孔丸 内・ナダ	相	良	10YR0/2 深白	口縁部歪みあり。
86	2.05	上解田畠	211 平原地	8.4	1.2		1/2	外・内・ナデ	相	良	10YR0/2 深白	口縁部歪みあり。
87	2.05	上解田畠	211 平原地	(8.4)	1.2		1/2	外・内・ナデ	相	良	10YR0/2 にじい黄橙	明照。
88	2.05	上解田畠	211 平原地	(8.4)	1.3		1/2	高・ナダ、細孔丸 内・ナダ	相	良	7.5YR0/2 にじい橙	
89	2.05	上解田畠	211 平原地	(8.4)	1.2		1/2	高・ナダ、細孔丸 内・ナダ	相	良	10YR0/2 にじい黄橙	
90	2.05	上解田畠	211 平原地 (+)	(8.4)	(1.4)		7/10	高・ナダ、細孔丸 内・ナダ	相	良	10YR0/2 深白	
91	2.05	上解田畠	211 平原地	(8.4)	(1.4)		1/2	外・内・ナデ、細孔丸 内・ナダ	相	良	10YR0/2 深黒	
92	2.05	上解田畠	211 平原地 (+)	(8.4)	1.4		1/2	外・内・ナデ、細孔丸 内・ナダ	相	良	10YR0/2 深白	
93	2.05	上解田畠	211 平原地	8.4	1.2		7/10	高・ナダ、工耕丸あり 内・ナダ	相	良	2.5Y0/2 淡黄	
94	2.05	上解田畠	211 平原地 (+)	8.4	1.3		1/3	高・ナダ、細孔丸 内・ナダ	相	良	2.5YR0/2 深白	物土は白色。
95	2.05	上解田畠	211 平原地	(9.5)	1.0		1/4	高・ナダ、細孔丸 内・ナダ	相	平	10YR0/1 深白	物土は白色。
96	2.05	上解田畠	211 平原地	8.5	1.1		1/2	高・ナダ、細孔丸 内・ナダ	相	良	10YR0/2 にじい黄橙	口縁部テリ付り下葉付。
97	2.05	上解田畠	211 平原地	8.5	1.4		4/5	高・ナダ、細孔丸 内・ナダ	相	良	7.5YR0/2 にじい橙	口縁部付り下葉付。
98	2.05	上解田畠	211 平原地 (+)	8.5	1.3		7/10	高・ナダ、細孔丸 内・ナダ	相	良	7.5YR0/2 深黒	
99	2.05	上解田畠	211 平原地	8.6	1.2		4/5	高・ナダ、細孔丸 内・ナダ	相	良	10YR0/2 にじい黄橙	
100	2.05	上解田畠	211 平原地	8.6	1.2		1/2	高・ナダ、工耕丸あり 内・ナダ	相	良	2.5Y0/2 淡黄	
101	2.05	上解田畠	211 平原地	(8.6)	1.2		1/2	高・ナダ、細孔丸 内・ナダ	相	良	10YR0/2 深白	
102	2.05	上解田畠	211 平原地 (+)	(8.6)	1.1		1/2	高・ナダ、細孔丸 内・ナダ	相	良	7.5YR0/2 にじい黄橙	
103	2.05	上解田畠	211 平原地	(8.6)	0.8		1/2	外・内・ナデ	相	平	7.5YR0/4 深白	表面付り下葉付。
104	9	2.05	上解田畠	211 平原地	8.6	1.4	1/1	高・ナダ、細孔丸付り底付りあり 内・ナダ	相	良	2.5YR0/2 にじい橙	表面付り下葉付。
105	2.05	上解田畠	211 平原地	8.6	1.5		4/5	外・内・ナデ	相	良	10YR0/2 にじい黄橙	
106	2.05	上解田畠	211 平原地 (+)	(8.7)	1.3		4/5	高・ナダ、細孔丸 内・ナダ	相	良	10YR0/2 深白	
107	2.05	土解田畠	211 平原地	(9.7)	1.3		1/2	外・内・ナデ	相	良	10YR0/2 にじい黄橙	
108	2.05	土解田畠	211 平原地	8.8	1.4		1/3	外・内・ナデ	相	良	2.5Y0/2 淡黄	
109	2.05	土解田畠	211 平原地	(9.8)	1.4		1/2	高・ナダ、細孔丸 内・ナダ	相	良	10YR0/2 深黒	
110	2.05	土解田畠	211 平原地 (+)	(9.9)	1.2		1/4	外・内・ナデ	相	良	7.5YR0/2 にじい橙	
111	2.05	土解田畠	211 平原地	(9.9)	1.3		1/2	高・ナダ、細孔丸 内・ナダ	相	良	10YR0/2 にじい黄橙	
112	2.05	土解田畠	211 平原地	8.9	1.1		7/10	外・内・ナデ	相	良	2.5Y0/2 淡黄	口縁部付り下葉付。
113	2.05	土解田畠	211 平原地	9.0	1.6		9/10	外・内・ナデ	相	良	10YR0/2 深白	口縁部歪みあり。
114	2.05	土解田畠	211 平原地	(9.0)	1.2		1/3	高・ナダ、細孔丸 内・ナダ	相	良	10YR0/2 にじい黄橙	口縁部歪みあり。
115	2.05	土解田畠	211 平原地	(9.0)	1.2		1/2	外・内・ナデ	相	良	10YR0/2 深白	
116	2.05	白色土壌地	211 平原地	(4.0)	0.9		1/2	外・内・ナデ	相	良	10YR0/2 深白	ヨースター付。
117	2.05	白色土壌地	211 平原地	(6.0)	1.0		1/4	外・内・ナデ	相	良	10YR0/2 深白	ヨースター付。
118	9	2.05	白色土壌地	211 平原地	7.3	1.9	4/5	外・内・ナデ	相	良	10YR0/2 深白	
119	2.05	白色土壌地	211 平原地	(7.5)	(3.6)		1/4	外・内・ナデ	相	良	10YR0/2 深白	
120	9	2.05	白色土壌地	211 平原地	7.5	1.8	7/10	外・内・ナデ	相	良	10YR0/2 深白	ヘソ付。
121	2.05	土解田畠	211 平原地	8.3	1.7		9/10	高・ナダ、細孔丸 内・ナダ	相	良	2.5YR0/2 深白	物土は白色。
122	2.05	白色土壌地	211 平原地	8.6	1.4		4/5	外・内・ナデ	相	良	2.5Y0/2 淡黄	
123	2.05	白色土壌地	211 平原地	(8.6)	1.4		4/5	高・ナダ、細孔丸 内・ナダ	相	良	10YR0/2 深白	
124	2.05	白色土壌地	211 平原地	(12.2)	3.0		1/4	高・ナダ、細孔丸 内・ナダ	相	良	10YR0/3 深白	
125	2.05	白色土壌地	211 平原地 (+)	(12.3)	(3.2)		1/4	高・ナダ、細孔丸 内・ナダ	相	良	10YR0/1 深白	
126	2.05	白色土壌地	211 平原地	(12.3)	(2.9)		2/5	外・内・ナデ	相	良	2.5YR0/2 深白	
127	2.05	白色土壌地	211 平原地	12.8	3.2		3/5	高・ナダ、細孔丸 内・ナダ	相	良	10YR0/2 深白	
128	2.05	白色土壌地	211 平原地	(13.1)	3.5		2/5	外・内・ナデ	相	良	10YR0/1 深白	
129	2.05	白色土壌地	211 平原地	(13.4)	(3.1)		2/5	高・ナダ、細孔丸 内・ナダ	相	良	7.5YR0/2 深黒	
130	2.05	土解田畠	211 平原地 (+)	13.5	3.7		1/4	外・内・ナデ	相	良	10YR0/2 深白	
131	2.05	土解田畠	211 平原地	(16.9)	(2.9)		1/4	外・内・ナデ	相	良	10YR0/3 にじい黄橙	
132	2.05	土解田畠	211 平原地	(11.0)	(2.9)		1/3	外・内・ナデ	相	良	10YR0/2 深白	
133	2.05	土解田畠	211 平原地	(11.0)	(3.2)		3/5	高・ナダ、細孔丸 内・ナダ	相	良	7.5YR0/4 浅黒	
134	2.05	土解田畠	211 平原地	(11.1)	11.8	2.9	1/1	外・内・ナデ	相	良	7.5YR0/3 浅黒	丸近くに近い。
135	2.05	土解田畠	211 平原地	(10.7)	2.1		1/4	外・内・ナダ	相	良	7.5YR0/6 稃	

被告番号	実用段階	説明文	特許請求項	記載事項	記載事項	特許	権利	特許権	備考
136	2段	上側面	211 平面 (11.4)	2.1.	1/4	外・内・ナデ	否	不良	10YR6/3 混合物
137	2段	上側面	211 平面 (11.5)	1.8	1/4	外・内・ナデ	否	不良	2.5YR6/2 黄白
138	2段	上側面	211 平面	11.6	2.0		7/8	外・内・摩擦	否
139	2段	上側面	211 平面	11.7	2.2		9/10	外・内・摩擦	良
140	2段	上側面	211 平面	(11.7)	2.2	1/4	外・内・ナデシ	否	10YR6/3 混合物
141	2段	上側面	211 平面 (11.8)	(2.0)	1/4	外・内・ナデ	否	良	7.5YR6/4 混合物
142	2段	上側面	211 平面	11.8	2.1	1/2	外・内・ナデ	否	良
143	2段	上側面	211 平面	11.8	2.4	1/2	外・内・ナデ	否	良
144	2段	上側面	211 平面 (11.8)	2.4	1/4	外・内・ナデ	否	良	10YR6/3 混合物
145	2段	上側面	211 平面 (11.8)	2.2	3/4	外・内・ナデ	否	良	10YR6/4 混合物
146	2段	上側面	211 平面	11.8	2.5	1/2	外・内・ナデ	否	良
147	2段	上側面	211 平面	11.9	2.1	3/4	外・内・ナデ	否	良
148	2段	上側面	211 平面	11.9	2.2	3/4	外・内・ナデ	否	良
149	2段	上側面	211 平面 (11.9)	2.3	1/2	外・内・ナデ	否	良	7.5YR6/4 混合物
150	2段	上側面	211 平面	11.9	2.5	3/4	外・内・ナデ	否	良
151	2段	上側面	211 平面	11.9	2.5	5/8	外・内・ナデ	否	10YR6/4 に近い黄緑
152	2段	上側面	211 平面	12.0	2.0	3/4	外・内・ナデ	否	良
153	2段	上側面	211 平面	12.0	2.0	2/5	外・内・ナデ	否	良
154	2段	上側面	211 平面	12.0	2.1	1/2	外・内・ナデ	否	良
155	2段	上側面	211 平面 (12.0)	2.1	1/2	外・内・ナデ	否	良	10YR6/2 黄白
156	2段	上側面	211 平面	(12.0)	2.2	1/4	外・内・ナデ	否	良
157	2段	上側面	211 平面 (12.0)	2.5	1/2	外・内・ナデ	否	良	10YR6/4 混合物
158	2段	上側面	211 平面	12.0	3.3	1/2	外・内・ナデ	否	良
159	2段	上側面	211 平面	12.1	2.1	1/2	外・内・ナデ	否	良
160	2段	上側面	211 平面	12.1	2.2	2/3	外・内・ナデ	否	良
161	2段	上側面	211 平面	12.1	2.2	1/2	外・内・ナデ	否	良
162	2段	上側面	211 平面	12.1	2.2	1/2	外・内・ナデ	否	良
163	2段	上側面	211 平面	12.1	2.2	3/4	外・内・ナデ	否	良
164	2段	上側面	211 平面	12.1	2.5	1/2	外・内・ナデ	否	良
165	2段	上側面	211 平面 (12.2)	1.9	1/2	外・内・ナデ	否	良	7.5YR6/4 混合物
166	2段	上側面	211 平面 (12.2)	2.0	2/5	外・内・ナデ	否	良	7.5YR6/4 混合物
167	2段	上側面	211 平面	12.2	2.4	1/4	外・内・ナデ	否	良
168	2段	上側面	211 平面	(12.2)	2.6	1/4	外・内・ナデシ	否	良
169	2段	上側面	211 平面 (12.2)	2.6	2/5	外・内・ナデ	否	良	10YR6/3 混合物
170	2段	上側面	211 平面 (12.3)	2.0	1/8	外・内・ナデ	否	良	2.5YR6/2 黄白
171	2段	上側面	211 平面	12.3	2.0	1/2	外・内・ナデ	否	良
172	2段	上側面	211 平面	12.3	2.1	1/2	外・内・ナデ	否	良
173	2段	上側面	211 平面 (12.3)	2.1	1/2	外・内・ナデ	否	良	7.5YR6/4 混合物
174	2段	上側面	211 平面	12.3	2.1	3/5	外・内・ナデ	否	良
175	2段	上側面	211 平面	12.3	2.1	1/2	外・内・ナデ	否	良
176	2段	上側面	211 平面	12.3	2.5	1/2	外・内・ナデ	否	良
177	2段	上側面	211 平面	12.3	2.2	9/10	外・内・ナデ	否	良
178	2段	上側面	211 平面	12.4	2.1	2/5	外・内・ナデ	否	良
179	2段	上側面	211 平面	12.4	2.1	5/8	外・内・ナデ	否	良
180	2段	上側面	211 平面	12.4	2.2	1/2	外・内・ナデ	否	良
181	2段	上側面	211 平面 (12.4)	2.4	1/2	外・内・ナデ	否	良	10YR6/4 混合物
182	2段	上側面	211 平面	12.5	2.0	1/2	外・内・ナデ	否	良
183	2段	上側面	211 平面	(12.5)	2.0	1/4	外・内・ナデ	否	良
184	2段	上側面	211 平面	12.5	2.1	3/4	外・内・ナデ	否	良
185	2段	上側面	211 平面	12.5	2.1	7/8	外・内・ナデ	否	良
186	2段	上側面	211 平面 (12.5)	2.2	2/5	外・内・ナデ	否	良	7.5YR6/6 紫
187	2段	上側面	211 平面 (12.5)	2.6	1/4	外・内・ナデ	否	良	2.5YR6/2 黄白
188	2段	上側面	211 平面	12.5	2.3	1/2	外・内・ナデ	否	良
189	2段	上側面	211 平面 (12.5)	2.5	1/2	外・内・ナデ	否	良	10YR6/4 混合物
190	2段	上側面	211 平面	12.6	1.9	1/4	外・内・ナデ	否	良
191	2段	上側面	211 平面	(12.6)	2.0	2/5	外・内・ナデ	否	良
192	2段	上側面	211 平面 (12.6)	2.1	1/2	外・内・ナデ	否	良	10YR6/2 黄白
193	2段	上側面	211 平面 (12.6)	2.1	1/4	外・内・ナデ	否	良	7.5YR6/6 紫
194	2段	上側面	211 平面	12.6	2.1	1/2	外・内・ナデ	否	良
195	2段	上側面	211 平面	(13.0)	(2.0)	1/4 以下	外・内・ナデ	否	良
196	2段	上側面	211 平面	12.6	2.3	1/2	外・内・ナデ	否	良
197	2段	上側面	211 平面	12.6	2.4	1/2	外・内・ナデ	否	良
198	2段	上側面	211 平面	(12.7)	2.0	1/4	外・内・ナデシ	否	良
199	2段	上側面	211 平面	12.7	2.0	3/5	外・内・ナデ	否	良
200	2段	上側面	211 平面	(12.7)	2.2	1/2	外・内・ナデ	否	良
201	2段	上側面	211 平面	12.7	2.4	9/10	外・内・ナデ	否	良
202	2段	上側面	211 平面	(12.7)	2.5	1/1	外・内・ナデ	否	良

報告番号	実測測定	測定区	土・清掃・地盤	口・岸	断面・堤	周	堆積帯	調査	紹介	測定	参考図	備考
203	2.05	上層部	211 平野部 (上)	12.7	2.8	1/3	外・内：ナデ	善	良	10YR6/4 黄赤色		
204	2.05	上層部	211 平野部 (上)	12.8	1.8	1/4	外・内：ナデ	善	良	7.5YR6/8 灰		
205	2.05	上層部	211 平野部 (上)	12.8	2.0	1/4	外・内：ナデ	善	良	7.5YR6/8 灰		
206	2.05	上層部	211 平野部 (上)	12.8	2.0	1/2	男：ナデ。指揮丸	善	良	7.5YR6/4 に近い灰		
207	2.05	上層部	211 平野部 (上)	12.8	2.0	1/3	外・内：ナデ。指揮丸	善	良	7.5YR6/4 黄		
208	2.05	上層部	211 平野部 (上)	12.8	2.1	3/4	内：ナデ。	善	良	7.5YR6/4 黄赤色		
209	2.05	上層部	211 平野部 (上)	12.8	2.2	1/2	外・内：ナデ	善	良	10YR6/2 淡白		
210	2.05	上層部	211 平野部 (上)	12.8	2.4	1/3	男：ナデ。ハチ見跡	善	良	7.5YR6/3 黄赤色		
211	2.05	上層部	211 平野部 (上)	12.8	2.4	1/3	内：ナデ。指揮丸	善	良	10YR6/4 黄赤色		
212	2.05	上層部	211 平野部 (上)	12.8	2.5	3/4	外・内：ナデ	善	良	7.5YR6/4 黄赤色		
213	2.05	上層部	211 平野部 (上)	12.8	2.6	2/3	外・内：ナデ。指揮丸	善	良	10YR6/4 黄赤色	灯標間。	
214	2.05	上層部	211 平野部 (上)	12.9	2.2	3/4	男：ナデ。指揮丸	善	良	10YR6/2 淡白		
215	2.05	上層部	211 平野部 (上)	12.9	2.9	2/5	外・内：ナデ	善	良	10YR6/3 黄赤色		
216	2.05	上層部	211 平野部 (上)	12.9	2.7	1/3	外・内：ナデ	善	良	10YR6/2 淡白		
217	2.05	上層部	211 平野部 (上)	13.0	2.1	3/4	内：ナデ	善	良	10YR6/2 淡白		
218	2.05	上層部	211 平野部 (上)	13.0	2.2	1/2	外・内：ナデ	善	良	7.5YR6/4 黄赤色	表面に枯れ木の葉類 及び枝付あり。	
219	2.05	上層部	211 平野部 (上)	13.0	2.2	3/4	外・内：ナデ	善	良	10YR6/4 黄赤色	灯標間。	
220	2.05	上層部	211 平野部 (上)	13.2	2.2	1/4	外・内：ナデ	善	良	7.5YR6/4 黄赤色	表面に枯れ木の葉 たりあり。	
221	2.05	上層部	211 平野部 (上)	13.3	2.8	9/10	外・内：ナデ	善	良	7.5YR6/4 黄赤色	表面に枯れ木の葉類 たりあり。	
222	2.05	瓦礫堆	211 平野部 (上)	10.9	3.4	4/5	男：ナデ。指揮丸	善	良	10YR6/4 黄赤色	瓦礫堆並みあり。	
223	2.05	瓦礫堆	211 平野部 (上)	11.2	3.5	1/1	内：ナデ。見込み暗又はジグザグ状	善	良	7.5Y4/5 黑		
224	2.05	瓦礫堆	211 平野部 (上)	11.5	3.1	3/10	内：ナデ。見込み暗又はジグザグ状	善	良	NS/灰		
225	2.05	瓦礫堆	211 平野部 (上)	11.5	3.6	1/1	内：ナデ。見込み暗又はジグザグ状	善	良	NS/灰		
226	2.05	瓦礫堆	211 平野部 (上)	11.6	3.4	1/1	内：ナデ。見込み暗又はジグザグ状	善	良	7.5Y5/3 黑		
227	2.05	瓦礫堆	211 平野部 (上)	11.8	3.9	1/2	内：ナデ。見込み暗又はジグザグ状	善	良	NS/灰		
228	9. 2.05	瓦礫堆	211 平野部 (上)	12.7	4.1	1/1	内：ナデ。見込み暗又はジグザグ状	善	良	NS/灰		
229	2.05	瓦礫堆	211 平野部 (上)	12.8	3.7	1/2	内：ナデ。見込み暗又はジグザグ状	善	良	7.5Y2/3 黑		
230	2.05	瓦礫堆	211 平野部 (上)	12.8	4.4	9/10	内：ナデ。見込み暗又はジグザグ状	善	良	NS/灰		
231	2.05	瓦礫堆	211 平野部 (上)	13.4	4.2	5/7	内：ナデ。見込み暗又はジグザグ状	善	良	NS/灰		
232	2.05	瓦礫堆	211 平野部 (上)	13.4	4.2	1/4	内：ナデ。指揮丸	善	良	10YR6/1 黄		
233	2.05	瓦礫堆	211 平野部 (上)	14.0	4.5	3/5	内：ナデ。見込み暗又はジグザグ状	善	良	NS/灰		
234	2.05	瓦礫堆	211 平野部 (上)	8.8	1.7	9/10	内：ナデ。指揮丸	善	良	7.5Y4/5 黑		
235	2.05	瓦礫堆	211 平野部 (上)	9.0	1.5	1/4	内：ナデ。指揮丸	善	良	NS/灰		
236	2.05	瓦礫堆	211 平野部 (上)	9.5	1.6	1/4	内：ナデ。指揮丸	善	良	2.5Y4/4 黄		
237	2.05	瓦礫堆	211 平野部 (上)	7.5	2.4	1/2	内：ナデ。指揮丸	善	良	NS/灰		
238	2.05	瓦礫堆	211 平野部 (上)	19.0	6.9	2/5	内：ナデ。指揮丸	善	良	7.5Y2/1 黑		
239	2.05	瓦礫堆	211 平野部 (上)	19.3	6.2	2/7	内：ナデ。指揮丸ナデ	善	良	NS/灰		
240	2.05	瓦礫堆	211 平野部 (上)	5.4	1.9	1/10 以下	外・内：指揮丸ナデ	善	良	7.5Y4/5 黑		
241	2.05	瓦礫堆	211 平野部 (上)	5.4	1.9	1/10 以下	外・内：指揮丸ナデ	善	良	10YR6/1 黄白	筋工は白色土器に似 る。	
242	2.05	瓦礫堆	211 平野部 (上)	15.0	3.7	1/10 以下	外・内：ナデ	善	良	7.5YR6/3 黄灰	軟質の盤と同様。	
243	2.05	瓦礫堆	211 平野部 (上)	21.2	6.7	1/4	外・内：ナデ	善	良	7.5Y4/4 黑		
244	2.05	瓦礫堆	211 平野部 (上)	21.9	14.3	1/4	内：ナデ。指揮丸ナデ	相	良	NS/灰		
245	2.05	瓦礫堆	211 平野部 (上)	14.6	4.3	1/5	内：ナデ。指揮丸	相	良	2.5Y3/3 黄		
246	2.05	瓦礫堆	211 平野部 (上)	26.0	5.7	1/10 以下	内：ナデ。指揮丸ナデ	相	良	2.5Y3/3 黄		
247	2.05	瓦礫堆	211 平野部 (上)	28.0	3.0	1/10 以下	内：ナデ	相	良	2.5Y5/5 黄灰		
248	2.05	瓦礫堆	211 平野部 (上)	32.6	8.6	1/4	内：ナデ。指揮丸ナデ	相	良	10YR5/3 に近い黄	瓦面に褐色斑、上部 筋土なし。	
249	2.05	瓦礫堆	211 平野部 (上)	35.2	10.9	1/4	内：ナデ。指揮丸	相	良	10YR6/1 黄	瓦面に褐色斑、上部 筋土なし。	
250	2.05	上層部	218 土(上)	6.4	4.4	1/10 以下	内・外：ナデ	善	良	7.5YR6/4 黄赤色	2B 土瓦の壁の壁の表 面。	
251	2.05	上層部	218 土(上)	5.0	3.9	1/10 以下	内・外：指揮丸ナデ	相	良	2.5Y3/3 黄	無	
252	2.05	上層部	218 土(上)	6.0	4.7	1/10 以下	内・外：指揮丸ナデ	相	良	10YR6/3 黄	無	
253	2.05	上層部	218 土(上)	6.0	5.4	1/10 以下	内・外：指揮丸ナデ	相	良	10YR5/3 に近い黄	無	
254	2.05	消音器	211 平野部 (上)	25.6	9.8	1/10 以下	内・外：指揮丸ナデ、ナデ	相	良	NS/2 黄白	表面に白膠土器の 表面の壁の表層部分 の壁の表層部分。	
255	2.05	消音器	211 平野部 (上)	27.3	10.3	3/10	内・外：指揮丸ナデ、ナデ	相	良	2.5Y7/3 黄白	表面に白膠土器の 表面の壁の表層部分 の壁の表層部分。	
256	2.05	消音器	211 平野部 (上)	34.8	56.2	1/2	内・外：指揮丸ナデ、ナデ	相	良	10YR6/1 黄	表面に白膠土器の 表面の壁の表層部分 の壁の表層部分。	
257	2.05	白砂礫	211 平野部		4.3	1/10 以下	外・内：指揮丸	相	良	2.5G6/1 黄		
258	2.05	白砂礫	211 平野部		5.6	1/10 以下	外・内：指揮丸	相	良	7.5G6/1 10W 黄		
259	2.05	青砂礫	211 平野部		9.4	2/5	外・内：指揮丸	相	良	3Y7/2 黄		
260	2.05	青砂礫	211 平野部		33.6	1/10 以下	外・内：指揮丸	相	良	5G6/1 黄		
261	2.05	青砂礫	211 平野部		4.1	2/5	内・外：指揮丸	相	良	7.5V4/3 墓オーブ		
262	2.05	青砂礫	211 平野部		4.2	1/10 以下	外・内：指揮丸	相	良	2.5G6/1 オーブ灰		
263	2.05	黄砂礫陶器	211 平野部 (上)	30.2	4.7	1/10 以下	外・内：指揮丸	相	良	10Y6/2 オーブ灰	赤茶あり。	
264	2.05	黄砂礫陶器	167 沼渠(上)		2.5	1/10 以下	外・内：指揮丸	相	良	10Y6/2 オーブ灰	167 沼渠の壁の表層 部分を有する。	
265	2.05	土層部	211 平野部 (上)	9.4	3.3	1/10 以下	外・内：指揮丸ナデ	相	良	SYK/2 黄白	'て'の字形。	

報告番号	採取地點	調査区	種別	生長消長・特徴	口徑・深	断面・幅	厚	堆積物	調査	出土	発見	参考文献	備考
266	2 区	高毛上層部	211 平原部		(3.7)	1/5	外・内・ナデ		米	良	2.5Y5/3 黄灰	B類。	
267	2 区	高毛上層部	211 平原部	(1)	(0.8)	1/5	外・内・ナデ 内・外・ヘリズリ、回転ナデ	米	良	NM/灰白			
268	2 区	高毛上層部	211 平原部	(30.2)	(3.4)	1/8	外・内・ナデ	相	良	5Y7/1 灰白			
269	2 区	高毛上層部	211 平原部	(6.2)	(3.2)	1/10 以下	外・内・ナデ 内・外・ヘリズリ 内・外・ナデ	相	良	2.5Y7/3 灰白			
270	2 区	計	211 平原部	5.4	0.5	0.5	1/4						
271	2 区	計	211 平原部	(1)	5.7	0.5	0.5	1/1					
272	2 区	計	211 平原部	5.2	0.6	0.6	1/1						
273	2 区	石綿	211 平原部	(6.0)	(0.9)	1/0	1/2					率 50.2g、灰瓦灰。	
274	10	軒瓦区	211 平原部 (上)	瓦当破損 (14.4)	瓦当厚 1.9	1/6	瓦当部・柱・瓦と瓦縫の瓦残存。周縁部 瓦当部上ナデ	相	瓦質	NM/灰		瓦当部の外縁と瓦質 部分のみ選出。	
275	10	軒瓦区	211 平原部 (上)	(8.0)	瓦当部 瓦当厚 1.9	1/10 以下	瓦当部 瓦当部上ナデ 内・外・ナデ	相	瓦質	NM/灰			
276	10	軒瓦区	218 土壌(上)	(0.3)	1/9 以下		内・外・ナデ 内・外・ナデ	相	瓦質	NM/灰		2.18 土壌表面の埋め戻 し土。瓦質と瓦質 交換。	
277	2 区	瓦区	218 土壌(上)	(12.0)	(7.0)	3.0	1/4 内・外・ナデ 内・外・ナデ	相	瓦質	NM/灰白		2.18 土壌表面の埋め戻 し土。瓦質。	
278	2 区	土削留置	131 井戸	0.01	1.3	1/2	外・内・ナデ	相	良	1.0YR0.2 灰白			
279	2 区	瓦剥離部	131 井戸	(17.0)	(9.0)	1/10 以下	内・外・ナデ 内・外・ナデ	相	良	NM/灰		外縁に複付着。	
280	2 区	土削留置	131 井戸	10.5	2.1	9/10	内・外・ナデ	相	良	1.0YR0.2 灰白		灯明跡。	
281	2 区	瓦剥離部	131 井戸	(12.0)	3.9	1/4	内・外・ナデ 内・外・ナデ	相	良	NM/灰白			
282	2 区	土削留置	131 井戸	10.6	2.0	9/10	内・外・ナデ 内・外・ナデ	相	良	1.0YR0.3 浅黄褐			
283	2 区	瓦剥離部	131 井戸	(1.3)	1/10 以下	内・外・ナデ 内・外・ナデ	相	良	NM/灰				
284	2 区	土削留置	131 井戸	12.8	3.5	1/8	内・外・ナデ	相	良	1.0YR0.2 灰白			
285	2 区	土削留置	131 井戸	0.01	1.1	1/5	内・外・ナデ	相	良	2.5Y7/3 灰白			
286	14	柳枝状鉱品	131 井戸	5.5	4.9	(0.1)						種付、クロモジ属？ 日本之松。	
287	14	柳枝状鉱品	131 井戸	5.2	5.2	4.5						種付、クロモジ属？ 日本之松。	
288	14	柳枝状鉱品	131 井戸	7.5	5.9	5.8						種付、クロモジ属？ 日本之松。	
289	2 区	井戸跡	131 井戸	66.6	37.5	2.9						ヒノキ科	
290	2 区	井戸跡	131 井戸	59.1	33.7	3.0						ヒノキ科	
291	2 区	井戸跡	131 井戸	60.2	28.1	3.8						ヒノキ科	
292	2 区	井戸跡	131 井戸	59.6	19.4	2.2						ヒノキ科	
293	2 区	土削留置	132 井戸	(7.4)	0.9	1/5	内・外・ナデ	相	良	1.0YR1.3 によい黄褐			
294	2 区	土削留置	132 井戸	(0.0)	(1.3)	1/7	内・外・ナデ	相	良	1.0YR1.3 によい黄褐			
295	2 区	土削留置	132 井戸	(8.0)	1.2	1/4	内・外・ナデ	相	良	1.0YR1.3 浅黄褐			
296	2 区	土削留置	132 井戸	(12.2)	2.0	1/7	内・外・ナデ	相	良	2.5Y7/2 灰黄			
297	2 区	土削留置	132 井戸	(12.0)	2.2	1/8	内・外・ナデ	相	良	2.5Y7/2 灰黄			
298	2 区	瓦剥離部	132 井戸	(12.0)	(2.0)	1/5	内・外・ナデ 内・外・ナデ	相	良	NM/灰			
299	9	青白融合合子	132 井戸	(6.9)	(2.3)	1/4	内・外・ナデ 内・外・ナデ	相	良	10GK1/1 明緑			
300	2 区	白堀跡	132 井戸	(16.0)	(2.0)	1/9	内・外・ナデ	相	良	5Y7/2 白		四脚。	
301	2 区	柳枝状鉱品	132 井戸	(17.0)	2.1	1.2						ヒノキ科	
302	2 区	瓦剥離部	132 井戸	(23.6)	(5.9)	0.3						ヒノキ科	
303	2 区	井戸跡	132 井戸	40.1	13.7	1.4						スギ	
304	14	2 区	砾石	132 井戸	22.8	9.4	9.1	砾石 あり				率 33.3%、黒色骨 器物あり、玉有り。	
305	2 区	土削留置	137 井戸	7.8	1.1	3/4	内・外・ナデ 内・外・ナデ	相	良	1.0YR1.4 浅黄褐		器物含みあり。	
306	2 区	土削留置	137 井戸	(13.4)	1.9	2/5	内・外・ナデ	相	良	1.0YR1.3 浅黄褐			
307	2 区	高毛上層部	137 井戸	(14.1)	4.7	1/4	内・外・ナデ 内・外・ナデ	相	良	NM/灰			
308	2 区	瓦剥離部	137 井戸	(13.0)	4.5	1/2	内・外・ナデ 内・外・ナデ	相	良	NM/灰			
309	2 区	瓦剥離部	137 井戸	(28.0)	(10.0)	1/4	内・外・ナデ	相	良	NM/灰			
310	2 区	土削留置	139 井戸	(8.0)	1.1	7/10	内・外・ナデ	相	良	2.5YD1.4 灰			
311	2 区	土削留置	139 井戸	(11.8)	2.1	1/4	内・外・摩滅	相	良	1.0YR1.3 浅黄褐			
312	2 区	土削留置	139 井戸	12.4	2.0	1/2	内・外・ナデ	相	良	1.0YR1.3 灰白		物主は白色。	
313	2 区	白色苔類	139 井戸	(10.4)	(3.2)	3/10	内・外・ナデ	相	良	1.0YR1.3 灰白			
314	2 区	土削留置	139 井戸	(10.4)	(3.4)	1/4	内・外・ナデ 内・外・ナデ	相	良	2.5YD1.4 浅黄褐			
315	2 区	白色苔類	139 井戸	(11.0)	3.0	1/4	内・外・ナデ	相	良	1.0YR1.3 灰白			
316	2 区	青苔	139 井戸	(1.0)	1.0	1/4	内・外・ナデ	相	良	2.5G5/1.4 ローリー			
317	10	軒瓦区	139 井戸	19.9	4.1	3/10	文様は文	相	土削留置	1.0YR1.3 浅黄褐			
318	2 区	土削留置	375 井戸	(9.2)	3.1	1/5	内・外・ナデ 内・外・ナデ	相	良	2.5YD1.4 によい			
319	7 区	瓦剥離部	375 井戸	(24.8)	(4.0)	1/10 以下	内・外・ナデ 内・外・ナデ	相	良	1.0YR1.4 灰			
320	2 区	瓦剥離部	375 井戸	(21.2)	4.0	1/10 以下	内・外・ナデ 内・外・ナデ	相	良	1.0YR1.4 灰白			
321	2 区	瓦剥離部	375 井戸	(20.4)	(4.0)	1/10 以下	内・外・ナデ 内・外・ナデ	相	良	2.5YD1.4 灰			
322	2 区	土削留置	378 井戸	(7.2)	(1.1)	1/5	内・外・ナデ	相	良	2.5YR1.4 によい			
323	2 区	白色苔類	378 井戸	6.4	1.4	9/10	内・外・ナデ	相	良	1.0YR1.2 灰白		ヘソ印。	
324	2 区	土削留置	378 井戸	(10.0)	(1.7)	1/4	内・外・摩滅	相	良	2.5YD1.4 灰			
325	2 区	土削留置	378 井戸	(10.2)	2.0	1/4	内・外・ナデ 内・外・ナデ	相	良	2.5YD1.4 によい			
326	2 区	土削留置	378 井戸	(11.4)	2.0	1/4	内・外・ナデ 内・外・ナデ	相	良	2.5YD1.4 摩滅			
327	2 区	土削留置	378 井戸	(11.6)	1.6	1/2	内・外・ナデ 内・外・ナデ	相	良	2.5YR1.4 によい			
328	2 区	土削留置	378 井戸	(12.4)	1.3	1/4	内・外・ナデ 内・外・ナデ	相	良	2.5YD1.4 によい		口縁部含みあり。	
329	2 区	土削留置	378 井戸	(12.0)	3.0	1/5	内・外・ナデ 内・外・ナデ	相	良	2.5YD1.4 によい			
330	2 区	瓦剥離部	378 井戸	(11.0)	3.5	1/5	内・外・ナデ 内・外・ナデ	相	良	NM/灰			
331	2 区	器皿部	378 井戸	(21.2)	0.6	1/10 以下	内・外・ナデ 内・外・ナデ	相	良	2.5Yd1.4 灰			
332	7 区	瓦剥離部	378 井戸	(24.4)	14.0	1/5	内・外・ナデ 内・外・ナデ	相	良	2.5YD1.4 によい		物質。	
333	7 区	計	378 井戸	5.7	1.0	0.6	1/1						
334	2 区	土削留置	446 落ち込み	(6.0)	0.9	1/4	内・外・ナデ	相	良	2.5Yd1.4 灰白			
335	2 区	白色苔類	446 落ち込み	(7.7)	0.9	1/5	内・外・ナデ	相	良	2.5Yd1.4 灰白			
336	2 区	土削留置	446 落ち込み	(11.0)	2.2	2/5	内・外・ナデ	相	良	1.0YR1.0 灰			

種小名	採取地	調査区	標期	生長地・地被	口徑・高	断面・幅	厚	保存状	調物	出土	地質	古色調	備考	
327	7 区	奥羽高森沢合	446	落木込	(2.4)			1/10以	外・内・ナダ	相	良	7.5YR2/6 灰	根。	
338	7 区	内間田沢	446	落木込	(3.9)			1/10以	外・内・ナダ	相	中良	10YR8/2 深黒	上部質。	
339	7 区	上御前田	417	落木	(11.2)	3.2		1/5	外・内・ナダ	相	良	10YR2/3 に似る黒		
340	7 区	上御前田	417	落木	(26.2)	2.7		1/5	外・内・ナダ	相	良	2.5YR7/3 深黄		
341	7 区	上御前田	444	落木	(12.0)	2.0		1/4	外・内・ナダ	相	良	7.5YR8/2 深黄		
342	7 区	上御前田	445	落木	(12.1)	2.3		1/5	外・内・ナダ	相	良	7.5YR8/2 深黄		
343	7 区	白山・源流	451	生木	(6.0)	(3.3)		1/4	外・内・ナダ	相	良	10YR8/1 黄白	コースター用。	
344	7 区	上御前田	451	生木	(8.6)	(3.0)		1/6	外・内・ナダ	相	良	10YR8/2 黄褐		
345	7 区	上御前田	451	生木	(9.2)	(3.0)		1/3	外・内・ナダ	相	良	10YR8/2 黄白		
346	7 区	上御前田	451	生木	(11.0)	(1.6)		1/5	外・内・ナダ	相	良	2.5YR8/4 深黄		
347	8 区	上御前田	328	落木	(7.4)	(2.2)		2/5	外・内・ナダ	相	良	7.5YR2/6 灰		
348	8 区	上御前田	327	落木	(8.0)	1.0		1/4	外・内・ナダ	相	良	7.5YR8/3 に似る		
349	8 区	上御前田	357	落木	(0.6)	1.2		1/2	外・内・ナダ	相	良	10YR8/1 黄		
350	8 区	上御前田	357	落木	(0.2)	(1.7)		1/5	外・内・ナダ	相	良	10YR8/3 に似る		
351	8 区	瓦沶沢	357	落木	(14.2)	4.3		1/5	外・内・ナダ	相	良	5Y6/1 黄		
352	8 区	渋沢瀬	357	落木	(39.8)	(8.0)		1/3	外・内・ナダ	相	良	5Y6/1 黄		
353	1 区	地物向西	9	生木		(1.8)		1/10以	外・内・無	相	良	10YR2/1 黑	美濃瓦灰。	
354	1 区	地物向西	9	生木	(11.0)	6.1		1/4	外・内・無	相	良	7.5YR8/3 黑	美濃瓦灰。	
355	1 区	上御前田	9	生木	(16.0)	(3.7)		1/10	外・内・無	相	中良	5Y6/4 深黄		
356	1 区	五箇瀬	9	生木	(27.0)	(5.6)		1/6	外・内・無	相	良	5Y6/1 黄		
357	2 区	上御前田	26	ビード	8.8	1.6		1/8	外・内・ナダ	相	良	7.5YR8/3 に似る	春明否みあり。	
358	2 区	上御前田	89	ビード	(7.4)	(3.6)		1/4	外・内・無	相	良	5Y6/2 深白	ハツ面。	
359	2 区	瓦沶沢	95	生木	(13.0)	(4.7)		1/5	外・内・無	相	良	5Y6/1 深黄		
360	2 区	丸丸	147	ビード	(12.9)	(8.4)	1.5	1/5以	外・内・無	相	良	5Y6/1 深白		
361	2 区	石城	172	生木	(28.2)	(5.9)		1/20以	外・内・ナダ	相	良	5Y6/1 深白	滑石斑。	
362		地物向西	18	生木		(3.1)		1/10以	外・内・無	相	良	5Y6/1 深白	華南斑。	
363	8 区	黄色地	18	ビード	(6.0)			1/1	外・内・無	相	良	5Y6/1 深白		
364	7 区	甚谷井沢	甚谷井沢合	6(4)	落木	(3.0)			1/1	外・内・無	相	良	2.5YR8/3 深黄	小型。
365	9 区	白山	甚谷井沢合	2(4)	落木				1/10以	外・内・無	相	良	2.5YR7/4 深黄	根毛あり。
366	3 区	上御前田	279	落木	(7.9)	(3.3)		1/2	外・内・ナダ	相	良	10YR8/2 に似る	春明否みあり。	
367	3 区	上御前田	279	落木	(11.0)	2.0		2/5	外・内・ナダ	相	良	7.5YR8/3 深黒		
368	3 区	上御前田	279	落木	(11.8)	2.2		9/10	外・内・ナダ	相	良	10YR8/2 深黒		
369	3 区	瓦沶沢	279	落木	(13.7)	4.0		3/5	外・内・ナダ	相	良	5Y6/1 黄	高台の脇付けは全然しない。	
370	3 区	白山	279	落木	(10.0)			1/10以	外・内・無	相	良	5Y6/1 黄	高台の脇付けは全然しない。	
371	3 区	上御前田	271	生木	(1.1)	7.6	1.5	1/2	外・内・ナダ	相	良	10YR8/2 に似る	リーフ	
372	3 区	上御前田	271	生木	(7.4)	1.3		1/3	外・内・ナダ	相	良	2.5YR8/4 深白	灯明斑。	
373	3 区	上御前田	271	生木	(7.7)	1.3		1/1	外・内・ナダ	相	良	10YR8/2 に似る		
374	3 区	上御前田	271	生木	(7.8)	1.2		2/3	外・内・ナダ	相	良	2.5YR8/3 深黄		
375	3 区	上御前田	271	生木	(7.9)	1.0		1/4	外・内・ナダ	相	良	7.5YR8/2 深白		
376	3 区	上御前田	271	生木	(7.9)	1.1		3/4	外・内・ナダ	相	良	2.5YR8/3 深黄		
377	3 区	上御前田	271	生木	(7.9)	1.4		9/10	外・内・ナダ	相	良	10YR8/1 深白	形状は楕円状。	
378	3 区	上御前田	271	生木	(7.9)	1.2		1/4	外・内・ナダ	相	良	2.5YR8/3 深白	形状は楕円状。	
379	3 区	上御前田	271	生木	(8.1)	1.4		1/1	外・内・ナダ	相	良	2.5YR8/3 深白	形状は楕円状。	
380	3 区	上御前田	271	生木	(8.1)	1.4		4/5	外・内・ナダ	相	良	2.5YR8/2 深白	形状は楕円状。	
381	3 区	上御前田	271	生木	(9.2)	(1.2)		1/4	外・内・ナダ	相	良	2.5YR8/3 深白	新土は白色。	
382	3 区	上御前田	271	生木	(1.1)	8.2		4/5	外・内・ナダ	相	良	10YR8/2 深白		
383	3 区	上御前田	271	生木	(1.1)	8.2		1/1	外・内・ナダ	相	良	2.5YR8/3 深白		
384	3 区	上御前田	271	生木	(1.1)	8.3	1.5	1/1	外・内・ナダ	相	良	10YR8/2 に似る	瓦全体全体に折曲線。	
385	3 区	上御前田	271	生木	(1.1)	8.3	1.1	3/4	外・内・ナダ	相	良	10YR8/1 深白		
386	3 区	上御前田	271	生木	(1.1)	8.3	1.0	1/1	外・内・ナダ	相	良	10YR8/1 深白	形状は楕円状。	
387	3 区	上御前田	271	生木	(1.1)	8.3	1.2	1/1	外・内・ナダ	相	良	10YR8/1 深白	形状は楕円状。	
388	3 区	上御前田	271	生木	(8.4)	1.3		1/4	外・内・ナダ	相	良	2.5YR7/2 深黄	灯明斑。	
389	3 区	上御前田	271	生木	(8.4)	1.3		1/2	外・内・ナダ	相	良	10YR8/2 深白	瓦面みみあり。	
390	3 区	上御前田	271	生木	(8.4)	0.2		1/2	外・内・ナダ	相	良	2.5YR8/3 深白	瓦面みみあり。	
391	3 区	上御前田	271	生木	(8.4)	(1.1)		1/2	外・内・ナダ	相	良	2.5YR8/3 深白	瓦面みみあり。	
392	3 区	上御前田	271	生木	(11.0)	2.0		1/4	外・内・ナダ	相	良	10YR8/2 深白		
393	3 区	上御前田	271	生木	(11.1)	1.4		3/5	外・内・ナダ	相	良	7.5YR8/3 深黒		
394	3 区	上御前田	271	生木	(11.3)	2.0		2/5	外・内・ナダ	相	良	2.5YR8/2 深白		
395	3 区	上御前田	271	生木	(11.5)	2.0		4/5	外・内・ナダ	相	良	10YR8/1 深白		
396	3 区	上御前田	271	生木	(11.5)	2.0		3/5	外・内・ナダ	相	良	2.5YR8/2 深白		
397	3 区	上御前田	271	生木	(11.5)	1.8		3/5	外・内・ナダ	相	良	7.5YR8/3 深黒		
398	3 区	上御前田	271	生木	(11.6)	2.2		1/2	外・内・ナダ	相	良	10YR8/1 深白		
399	3 区	上御前田	271	生木	(11.6)	2.0		1/4	外・内・ナダ	相	良	7.5YR8/3 深黒		
400	3 区	上御前田	271	生木	(11.6)	1.6		1/4	外・内・ナダ	相	良	10YR8/1 に似る		
401	3 区	上御前田	271	生木	(11.7)	1.9		3/10	外・内・ナダ	相	良	2.5YR8/2 深白		
402	3 区	上御前田	271	生木	(11.7)	1.9		7/10	外・内・ナダ	相	良	10YR8/1 深白		
403	3 区	上御前田	271	生木	(11.7)	2.0		1/4	外・内・ナダ	相	良	2.5YR8/3 深黒		
404	3 区	上御前田	271	生木	(11.8)	2.1		1/2	外・内・ナダ	相	良	2.5YR8/3 深黒		
405	3 区	上御前田	271	生木	(11.8)	2.0		1/4	外・内・ナダ	相	良	7.5YR8/3 深黒		
406	3 区	上御前田	271	生木	(11.8)	2.2		1/2	外・内・ナダ	相	良	2.5YR8/2 深白	新土は白色。	
407	3 区	上御前田	271	生木	(11.8)	2.0		4/5	外・内・ナダ	相	良	2.5YR8/2 深白		
408	3 区	上御前田	271	生木	(11.8)	2.3		3/5	外・内・ナダ	相	良	10YR8/1 に似る		
409	3 区	上御前田	271	生木	(11.8)	1.6		3/4	外・内・ナダ	相	良	10YR8/1 深白		
410	3 区	上御前田	271	生木	(11.8)	2.3		2/5	外・内・ナダ	相	良	2.5YR8/2 深白		
411	3 区	上御前田	271	生木	(11.9)	2.1		1/4	外・内・無	相	良	7.5YR8/2 深白		

被災番号	実測測定日	測量区	標高	北緯・東経	口幅・底幅	断面・幅	厚	堆積物	調査		地土	地成	当色調	備考
									角	底				
432	3月	上部断面	27.1 土壌 (上)	12.0	2.1		1/4	角・内・ナダ	衛	良	10YR8/2 黄白	地土は白色。		
433	3月	上部断面	27.1 土壌 (上)	12.1	2.2		1/3	角・内・ナダ	衛	良	10YR8/2 黄白			
434	3月	上部断面	27.1 土壌 (上)	12.2	2.0		7/10	角・内・ナダ	衛	良	10YR8/2 黄白			
435	3月	上部断面	27.1 土壌 (上)	12.1	2.1		1/1	角・内・ナダ	衛	良	7.5YR8/3 黄白	地土は白色。		
436	3月	上部断面	27.1 土壌 (上)	12.2 (2.1)	2.5		2/5	角・内・ナダ	衛	良	2.5YR8/2 黄白			
437	3月	上部断面	27.1 土壌 (上)	12.2 (2)	2.1		2/5	第・ナダ、指揮丸	衛	良	10YR8/2 黄白			
438	3月	上部断面	27.1 土壌 (上)	12.2 (2)	2.2		1/1	第・ナダ、指揮丸 内・ナダ	衛	良	7.5YR8/3 に近い・橙			
439	3月	上部断面	27.1 土壌 (上)	12.2	1.9		2/5	第・内・ナダ	衛	良	2.5Y/2 黄黄			
440	3月	上部断面	27.1 土壌 (上)	12.3	2.1		2/5	第・内・ナダ	衛	良	2.5YR8/1 黄白			
421	3月	上部断面	27.1 土壌 (上)	12.0	2.1		1/2	第・ナダ、指揮丸、底面に崩壊状況有り	衛	良	2.5Y/2 黄白			
422	9月	白色土壌	27.1 土壌 (下)	7.2	2.0		1/1	角・内・ナダ	衛	良	2.5YR8/2 黄白	灯明面、ヘソ部。		
423	3月	上部断面	27.1 土壌 (上)	(10.0)	3.2		1/4	第・ナダ、内・純白ナダ	衛	良	10YR8/2 に近い・黒褐			
424	3月	上部断面	27.1 土壌 (上)	(11.1)	3.2		1/4	角・内・ナダ	衛	良	10YR8/2 黄白			
425	9月	白色土壌	27.1 土壌 (上)	(11.6)	3.2		1/2	角・内・ナダ	衛	良	2.5YR8/2 黄白			
426	3月	上部断面	27.1 土壌 (上)	12.0	2.7		3/10	角・内・純白ナダ、ナダ	衛	良	2.5YR8/2 黄白			
427	3月	瓦礫層	27.1 土壌 (上)	(11.0)	3.3		1/4	第・ナダ、内・純白ナダ、見込小礫交代はジグザグ状	衛	良	N4/灰			
428	9月	瓦礫層	27.1 土壌 (上)	11.7	3.6		1/3	第・ナダ、内・純白ナダ、見込小礫交代はジグザグ状	衛	良	N4/灰			
429	3月	瓦礫層	27.1 土壌 (上)	12.0	3.7		1/4	角・内・純白ナダ、見込小礫交代はジグザグ状	衛	良	N4/灰			
430	3月	瓦礫層	27.1 土壌 (上)	12.0	3.6		2/5	角・内・純白ナダ、見込小礫交代はジグザグ状	衛	良	N4/灰			
431	3月	瓦礫層	27.1 土壌 (上)	(14.0)	4.6		3/5	角・内・純白ナダ、見込小礫交代はジグザグ状	衛	良	N4/灰			
432	3月	瓦礫層	27.1 土壌 (上)	(2.7)			1/10	第・ナダ、内・純白ナダ、見込小礫交代はジグザグ状	衛	良	N4/灰			
433	3月	泥炭層	27.1 土壌 (上)	(26.7)	14.3		1/10	第・内・純白ナダ	衛	良	N6/灰			
434	3月	泥炭層	27.1 土壌 (上)	(18.0)	5.9		1/10	第・内・純白ナダ	衛	良	3YR1 黄白			
428	3月	砾石	27.1 土壌 (上)	(14.7)	4.4	6.2		堆積3面あり						
436	3月	上部断面	27.1 土壌 (下)	7.8	3.5		3/10	第・ナダ、底部に崩壊状の仕切あり	衛	良	2.5YR8/3 黄白	表面は白色、底部に崩壊あり。内・側面は白色。		
437	3月	上部断面	27.1 土壌 (下)	8.0	4.4		4/5	第・ナダ	衛	良	2.5YR8/3 黄白	内・側面は白色。		
438	3月	上部断面	27.1 土壌 (下)	(8.2)	4.5		2/5	第・内・ナダ	衛	良	2.5Y/2 黄白	内・側面は白色。		
439	3月	上部断面	27.1 土壌 (下)	8.6	4.2		1/1	第・ナダ	衛	良	10YR8/1 黄白			
440	3月	上部断面	27.1 土壌 (下)	7.9	4.3		2/3	第・内・ナダ	衛	良	2.5YR8/3 黄白			
441	3月	上部断面	27.1 土壌 (下)	8.1	4.1		7/10	第・内・ナダ	衛	良	2.5YR8/1 黄白	地土は白色。 崩壊仕方にナダの傾向がある。		
442	3月	上部断面	27.1 土壌 (下)	8.3	4.2		9/10	第・内・ナダ	衛	良	2.5YR8/3 黄白			
443	3月	上部断面	27.1 土壌 (下)	(11.9)	2.0		1/5	第・内・ナダ	衛	良	2.5YR8/3 黄白			
444	3月	上部断面	27.1 土壌 (下)	(12.1)	3.9		1/2	第・ナダ	衛	良	2.5YR8/2 黄白			
445	3月	上部断面	27.1 土壌 (下)	12.4	2.1		4/5	内・ナダ、指揮丸	衛	良	10YR8/1 に近い・黄褐			
446	3月	上部断面	27.1 土壌 (下)	(12.4)	2.3		4/5	第・内・ナダ	衛	良	2.5YR8/2 白	面面赤みあり。		
447	3月	上部断面	27.1 土壌 (下)	12.6	2.4		9/10	第・内・ナダ、指揮丸	衛	良	10YR8/2 に近い・黄褐			
448	3月	上部断面	27.1 土壌 (下)	12.8	2.0		7/10	内・ナダ、指揮丸	衛	良	10YR8/1 黄白			
449	3月	瓦礫層	27.1 土壌 (下)	(11.6)	3.2		1/2	内・ナダ、見込小礫交代はジグザグ状	衛	良	N4/灰			
450	3月	瓦礫層	27.1 土壌 (下)	(17.0)	3.34		2/3	第・ナダ、見込小礫交代はジグザグ状	衛	良	N7/2 黄白			
451	2月	上部断面	27.2 砂	(11.6)	2.0		1/4	第・ナダ	衛	良	2.5YR8/3 黄白	外・内部に腐葉質。		
452	2月	上部断面	27.2 砂	(11.8)	2.0		1/2	第・内・ナダ	衛	良	2.5YR8/4 に近い・白			
453	2月	上部断面	27.2 砂	(11.8)	2.29		1/2	第・内・ナダ	衛	良	10YR8/1 黄白			
454	3月	上部断面	27.2 砂	(12.4)	2.0		9/10	第・内・ナダ	衛	良	2.5YR8/3 に近い・白			
455	3月	瓦礫層	27.2 砂	(30.4)	35.7		1/10	第・内・純白ナダ	相	良	2.5YR8/2 明快灰			
456	11月	瓦礫層	48.1 砂	(11.5)	4.6		1/3	内・ナダ、指揮丸	衛	良	N4/灰			
457	11月	上部断面	48.1 砂	(9.3)	1.0		1/4	内・ナダ、指揮丸	衛	良	10YR8/2 黄白			
458	11月	上部断面	48.1 砂	(10.0)	2.0		1/4	第・ナダ、指揮丸	衛	良	7.5YR8/4 黄黒			
459	11月	上部断面	48.1 砂	(10.6)	3.6		1/10	内・ナダ、指揮丸	衛	良	7.5YR8/4 に近い・白			
460	11月	上部断面	48.1 砂	(11.7)	3.9		1/4	内・ナダ、指揮丸	衛	良	7.5YR8/4 に近い・白			
461	12月	白色土壌	48.1 砂	(2.0)			1/10	外・内・摩擦	相	良	2.5YR8/3 白			
462	7月	白色土壌	第3.5b層	6.9	2.3		1/1	外・内・ナダ、指揮丸	衛	良	2.5YR8/3 白	外・内部に褐色斑。		
463	9月	白色土壌	第3.5b層	(7.0)	2.1		1/2	内・ナダ、指揮丸	衛	良	2.5YR8/3 白	外・内部。		
464	7月	白色土壌	第3.5b層	(7.2)	1.8		1/4	内・ナダ	衛	良	2.5YR8/3 白	外・内部。		
465	2月	白色土壌	第3.5b層	7.5	1.8		4/5	第・ナダ、指揮丸	衛	良	2.5YR8/3 黄白	ヘソ部。		
466	7月	白色土壌	第3.5b層	(7.4)	2.09		1/5	内・ナダ、指揮丸ナダ	衛	良	10YR8/3 に近い・黄褐	内・側面は赤みあり。		
467	7月	白色土壌	第3.5b層	(7.2)	1.3		1/3	内・ナダ、指揮丸ナダ	衛	良	10YR8/3 に近い・黄褐	内・側面は赤みあり。		
468	2月	白色土壌	第3.5b層	(7.4)	1.1		1/3	内・ナダ、指揮丸	衛	良	10YR8/3 に近い・黄褐	内・側面は赤みあり。		
469	7月	白色土壌	第3.5b層	(7.4)	1.3		1/3	内・ナダ、指揮丸	衛	良	10YR8/3 に近い・黄褐	内・側面は赤みあり。		
470	7月	白色土壌	第3.5b層	(7.4)	2.0		1/4	内・ナダ	衛	良	7.5YR8/4 に近い・白			
471	7月	上部断面	第3.5b層	(7.4)	1.3		1/3	内・ナダ、指揮丸	衛	良	10YR8/2 黄白			
472	2月	上部断面	第3.5b層	(7.7)	0.9		1/3	内・ナダ、指揮丸ナダ	衛	良	10YR8/3 に近い・黄褐			
473	2月	上部断面	第3.5b層	(7.6)	1.5		1/2	内・ナダ、指揮丸ナダ	衛	良	10YR8/3 黄白	ヘソ部。		
474	7月	上部断面	第3.5b層	(7.6)	1.5		1/2	内・ナダ、指揮丸ナダ	衛	良	10YR8/3 黄白	内・側面は赤みあり。		
475	7月	上部断面	第3.5b層	(9.2)	1.1		1/2	内・ナダ、指揮丸	衛	良	10YR8/3 に近い・黄褐			
476	2月	上部断面	第3.5b層	(9.4)	3.0		1/2	内・ナダ、指揮丸	衛	良	10YR8/3 に近い・黄褐			
477	2月	上部断面	第3.5b層	(9.8)	1.2		1/4	外・内・ナダ	衛	良	2.5YR8/3 黄白			
478	2月	上部断面	第3.5b層	(9.2)	1.4		1/5	第・ナダ、指揮丸	衛	良	10YR8/3 に近い・黄褐			
479	2月	上部断面	第3.5b層	(10.6)	2.09		1/3	内・ナダ、指揮丸	衛	良	10YR8/3 に近い・黄褐			
480	7月	上部断面	第3.5b層	(10.6)	2.2		1/3	内・ナダ、指揮丸	衛	良	10YR8/3 に近い・黄褐			
481	2月	上部断面	第3.5b層	(11.0)	2.59		1/10	外・内・ナダ	衛	良	10YR8/3 に近い・黄褐			
482	2月	上部断面	第3.5b層	(11.2)	0.8		1/4	内・ナダ	衛	良	10YR8/3 に近い・黄褐			

報告書番号	実施測定日	測定区	種別	水文・清流・熱帯	口・岸	断面・幅	周	堆積物	特徴	地主	地城	危険度	備考
483	7/05	上御前川	第3.5b 堤	(11.4)	1.8		1/3	白・内・ナダ	粘土	市	良	10YR5/2 に高い直樹	豊田市並みあり。
484	7/05	上御前川	第3.5b 堤	(11.7)	2.0		1/2	白・内・ナダ	粘土	市	良	10YR6/2 黄白	
485	7/05	上御前川	第3.5b 堤	(12.0)	1.7		1/4	白・内・ナダ	粘土	市	良	10YR6/2 に高い直樹	
486	7/05	上御前川	第3.5b 堤	(13.2)	1.9		1/10 以下	白・内・ナダ	粘土	市	良	SYTH4 混粘	鶴来町一帯にヨコドア、根付。
487	7/05	上御前川	第3.5b 堤	(12.2)	(2.4)		3/5	白・内・ナダ	粘土	市	良	2.5YR7/4 に高い直樹	
488	7/05	上御前川	第3.5b 堤	(12.0)	(3.9)		3/4	白・内・純白ナダ	粘土	市	良	10YR3/2 に高い直樹	灯明川。
489	7/05	上御前川	第3.5b 堤	(12.0)	(2.9)		1/10	白・内・ナダ	粘土	市	良	10YR3/2 に高い直樹	
490	7/05	柳枝川左岸	第3.5b 堤	(8.4)	1.3	0.5							
491	7/05	柳枝川左岸	第3.5b 堤	(12.1)	0.7	0.5							
492	7/05	柳枝川左岸	第3.5b 堤	(15.8)	0.9	0.3							ヒノキ
493	7/05	柳枝川左岸	第3.5b 堤	(11.9)	0.6	0.4							ヒノキ
494	7/05	柳枝川左岸	第3.5b 堤	(13.7)	0.6	0.3							ヒノキ判
495	7/05	柳枝川左岸	第3.5b 堤	(15.4)	0.8	0.4							
496	7/05	栗	第3.5b 堤	(16.7)	0.7	0.4							ヒノキ判
497	7/05	栗	第3.5b 堤	(20.8)	0.6	0.4							ヒノキ
498	3/05	轟谷口	227 測	(3.5)	(3.7)	1.1	1/10 以下	白・純白あり 白・内・ナダ	粘土	相	良	2.5Y7/3 混黄	先端部。
499	4/05	上御前川	297 測		(8.9)		1/10 以下	白・純白あり 白・内・ナダ	粘土	相	良	3YR6/4 に高い直樹	
500	4/05	上御前川	291 測		(8.2)		1/2	白	粘土	市	良	2.5YR6/4 に高い直樹	
501	4/05	石毛	291 測	3.5	0.3	0.7	1/3	白・平行キヌキ、波状紋 白・内・ナダ	粘土	市	良	N6/1 黄	墨田川下流 墨田川下流
502	3/05	波形河原	第3.5b 堤	(14.6)	(34.5)		2/3	白・平行キヌキ、波状紋 白・内・ナダ	粘土	市	良	N6/1 黄	墨田川下流
503	4/05	刀子	第3.5b 堤	(5.3)	1.7	0.4							墨田川下流
504	11/05	白山川	495 測		(3.2)		1/10 以下	白・内・ナダ	粘土	市	良	2.5YR1 混白	
505	11/05	白山川	497 測		(13.4)	4.6	1/2	白・内・ナダ、見込み縦断文「F」字	粘土	市	良	2.5Y4/6 混白	
506	11/05	軒平川	469 測	(7.9)	(3.6)	7.0	3/30	白・内・純白、黒方筋ナダ 白・内・ナダ	粘土	市	良	10BG6/3 青黄	
507	12/05	野川	469 測	(7.3)	(2.3)	2.3	1/5 以下	白・内・純白、黒方筋ナダ 白・内・ナダ	粘土	市	良	10BG6/3 青黄	
508	12/05	野川	469 測	(9.2)	(7.6)	2.0	1/5 以下	白・内・純白、黒方筋ナダ 白・内・ナダ	粘土	市	良	10YR6/4 混黄	
509	11/05	丸川	469 測	(22.5)	(37.5)	1.8	1/10	白・内・ナダ	粘土	市	良	NS/1 黄	
510	11/05	丸川	469 測	(27.8)	(35.6)	1.9	1/3 以下	白・内・ナダ	粘土	市	良	2.5Y6/3 混灰	
511	11/05	丸川	469 測	(22.4)	0.7	1.2	1/5 以下	白・内・ナダ	粘土	市	良	2.5YR7/6 混	
512	11/05	丸川	469 測	(18.5)	(9.2)	1.5	1/5 以下	白・内・ナダ	粘土	市	良	NS/1 黄	凸凹面に突起付。
513	11/05	丸川	469 測	(18.0)	(33.2)	2.3	1/5 以下	白・内・ナダ	粘土	市	良	NS/1 黄	
514	11/05	丸川	469 測	(15.7)	(9.0)	2.2	1/10 以下	白・内・ナダ	粘土	市	良	10YR6/4 混黄	
515	11/05	丸川	469 測	(9.9)	(9.6)	1.6	1/10 以下	白・内・純白、黒方筋ナダ 白・内・ナダ	粘土	市	良	2.5Y6/3 混灰	堤防に貼付材。
516	11/05	丸川	469 測	(12.5)	(11.9)	2.3	1/5 以下	白・内・純白、黒方筋ナダ 白・内・ナダ	粘土	市	良	10YR6/4 混黄	
517	11/05	丸川	469 測	(14.4)	(6.2)	1.6	1/10 以下	白・内・純白、黒方筋ナダ 白・内・ナダ	粘土	市	良	NS/1 黄	
518	11/05	平川	469 測	(28.4)	(19.4)	1.8	1/4 以下	白・内・ナダ	粘土	市	良	NS/1 黄	船主に土削済みが入る。
519	11/05	平川	469 測	(27.5)	(38.0)	1.8	1/4 以下	白・内・純白、黒方筋ナダ 白・内・ナダ	粘土	市	良	NS/1 黄	
520	11/05	平川	469 測	(16.9)	(26.5)	1.8	1/10 以下	白・内・純白、黒方筋ナダ 白・内・ナダ	粘土	市	良	2.5Y6/1 黄	
521	11/05	平川	469 測	(23.0)	(21.7)	2.2	1/5	白・内・純白、黒方筋ナダ 白・内・ナダ	粘土	市	良	2.5YR6/4 混黄	
522	13/05	平川	469 測	(18.5)	(33.5)	1.7	1/5 以下	白・内・純白、黒方筋ナダ 白・内・ナダ	粘土	市	良	NS/1 黄	
523	11/05	平川	469 測	(14.8)	(33.4)	2.3	1/5 以下	白・内・純白、黒方筋ナダ 白・内・ナダ	粘土	市	良	2.5Y7/6 混	凸凹面に船上材。
524	11/05	平川	469 測	(4.0)	(4.3)	0.7	1/5 以下	白・内・純白、黒方筋ナダ 白・内・ナダ	粘土	市	良	SYH6/3 黄	
525	11/05	平川	469 測	(15.0)	(38.6)	2.2	1/5 以下	白・内・純白、黒方筋ナダ 白・内・ナダ	粘土	市	良	2.5YR7/6 混	豊橋市、古河原面に船底材が入る。
526	11/05	平川	469 測	(10.6)	(30.6)	2.0	1/10 以下	白・内・純白、黒方筋ナダ 白・内・ナダ	粘土	市	良	2.5YR6/4 に高い直樹	
527	11/05	平川	469 測	(18.4)	(36.1)	1.8	1/5 以下	白・内・純白、黒方筋ナダ 白・内・ナダ	粘土	市	良	2.5YR6/6 混	
528	11/05	平川	469 測	(10.3)	(30.8)	2.4	1/5 以下	白・内・純白、黒方筋ナダ 白・内・ナダ	粘土	市	良	10YR6/4 混黄	
529	13/05	平川	469 測	(16.3)	(32.8)	2.8	1/5	白・内・純白、黒方筋ナダ 白・内・ナダ	粘土	市	良	SYH7/6 混	豊橋市、布引川の ある木村川筋、船主 は土削済みで、船底 材底付なし。船底 材に貼付材が入る。 船底材。
530	13/05	平川	469 測	(17.7)	(11.6)	2.1	1/5 以下	白・内・純白、黒方筋ナダ 白・内・ナダ	粘土	市	良	2.5Y6/3 混灰	
531	13/05	平川	469 測	(19.6)	(22.9)	1.9	1/5 以下	白・内・純白、黒方筋ナダ 白・内・ナダ	粘土	市	良	2PBR6/3 青灰	平川の黒川あり。
532	11/05	平川	469 測	(9.0)	(30.3)	1.8	1/10 以下	白・内・純白、黒方筋ナダ 白・内・ナダ	粘土	市	良	NS/1 黄	
533	11/05	平川	469 測	(5.2)	(9.9)	2.1	1/10 以下	白・内・純白、黒方筋ナダ 白・内・ナダ	粘土	市	良	2.5Y7/3 混灰	
534	11/05	平川	469 測	(12.6)	(7.5)	2.0	1/30 以下	白・内・純白、黒方筋ナダ 白・内・ナダ	粘土	市	良	2.5YR7/4 に高い直樹	
535	11/05	平川	469 測	(16.6)	(34.8)	2.7	1/5 以下	白・内・純白、黒方筋ナダ 白・内・ナダ	粘土	市	良	NS/1 黄	
536	11/05	平川	469 測	(21.1)	(9.6)	1.9	1/5 以下	白・内・純白、黒方筋ナダ 白・内・ナダ	粘土	市	良	SYH7/2 に高い直樹	
537	11/05	平川	469 測	(23.2)	(38.1)	2.2	1/10 以下	白・内・純白、黒方筋ナダ 白・内・ナダ	粘土	市	良	2.5YR6/6 混黄	凸面に凹凸形状有り あり。
538	11/05	平川	469 測	(8.5)	(35.4)	2.2	1/5 以下	白・内・純白、黒方筋ナダ 白・内・ナダ	粘土	市	良	10YR6/6 甲等地	凸面に凹凸形状有り あり。
539	11/05	平川	469 測	(7.0)	(32.2)	2.1	1/10 以下	白・内・純白、黒方筋ナダ 白・内・ナダ	粘土	市	良	NS/1 黄	凸面に凹凸形状有り あり。
540	11/05	平川	469 測	(10.9)	(9.7)	1.8	1/10 以下	白・内・純白、黒方筋ナダ 白・内・ナダ	粘土	市	良	SYH6/4 に高い直樹	
541	11/05	平川	469 測	(21.0)	(22.7)	2.1	1/10 以下	白・内・純白、黒方筋ナダ 白・内・ナダ	粘土	市	良	NS/1 黄	
542	11/05	平川	469 測	(6.0)	(33.7)	2.6	1/30 以下	白・内・純白、黒方筋ナダ 白・内・ナダ	粘土	市	良	SYH7/2 に高い直樹	軒平川の平底部。
543	13/05	平川	469 測	(16.4)	31.2	3.3	1/3 以下	白・内・純白、黒方筋ナダ 白・内・ナダ	粘土	市	良	2PBR6/3 青灰	軒平川の平底部。
544	11/05	平川	469 測	(31.1)	(11.3)	2.7	1/5 以下	白・内・純白、黒方筋ナダ 白・内・ナダ	粘土	市	良	SYH7/5 黄	軒平川の平底部。
545	11/05	平川	469 測	(21.4)	(18.3)	2.7	1/5 以下	白・内・純白、黒方筋ナダ 白・内・ナダ	粘土	市	良	NS/4 底	軒平川の平底部。
546	11/05	平川	469 測	(18.2)	(21.4)	2.6	1/3 以下	白・内・純白、黒方筋ナダ 白・内・ナダ	粘土	市	良	10YR6/4 混黄	軒平川の平底部。
547	11/05	平川	469 測	(24.4)	(39.4)	2.6	1/5 以下	白・内・純白、黒方筋ナダ 白・内・ナダ	粘土	市	良	SYh1/3 黄	軒平川の平底部。

報告番号	実測箇所	測量区	標高	土質・構造	口径・深	断面・幅	厚	現存高	調査	出土	地盤	外見状	備考
548	11 区	平汎	469 游	(17.5)	(20.3)	3.1	1/4以下	四: 橋脚柱、石臼柱 五: 砂利柱、石臼柱	相	上鉢置	10YR4/4 黄赤色		
549	11 区	平汎	469 游	(14.9)	(16.0)	2.8	1/5以下	四: 砂利柱、石臼柱 五: 砂利柱、石臼柱、魔方回ナデ	相	上鉢置	10YR5/4 黄赤色		
550	11 区	平汎	469 游	(20.8)	17.3	1.8	1/5以下	四: 砂利柱、石臼柱 五: 砂利柱、石臼柱、魔方回ナデ	相	上鉢置	7.5YR8/6 黄赤色	魔方回ナデ、魔方回ナデの下に砂利柱と魔方回ナデがある。	
551	11 区	平汎	469 游	(14.8)	16.6	2.5	1/5以下	四: 砂利柱、石臼柱 五: 砂利柱、石臼柱、魔方回ナデ	相	上鉢置	7.5YR1/4 黄赤色	魔方回ナデの下に砂利柱と魔方回ナデがある。	
552	11 区	鷹之丘	469 游	(12.2)	8.7	1.4	1/2以上?	四: 砂利柱 五: 砂利柱	相	上鉢置	10YR2/6 黄赤色		
553	13 区	賀茂川	469 游	(16.4)	8.5	2.3	2/3以上?	四: 砂利柱、石臼柱 五: 砂利柱、石臼柱、魔方回ナデ	相	上鉢置	10YR4/4 黄赤色		
554	11 区	賀茂川	469 游	(13.5)	9.2	1.8	3/2以上?	四: 砂利柱、石臼柱 五: 砂利柱、石臼柱、魔方回ナデ	相	上鉢置	7.5YR8/6 黄赤色		
555	11 区	平汎	第 2a 番	(30.4)	(21.0)	2.3	1/5	四: 砂利柱、石臼柱 五: 砂利柱、石臼柱、魔方回ナデ	相	上鉢置	7.5YR8/6 黄赤色		
556	11 区	平汎	基盤壁上層	(9.9)	(30.0)	2.1	1/5以下?	四: 砂利柱 五: 砂利柱、石臼柱	相	上鉢置	7.5YR8/2 黄赤色		
557	11 区	平汎	基盤壁上層	(9.3)	(17.7)	2.4	1/5以上?	四: 砂利柱、石臼柱、魔方回ナデ 五: 砂利柱、石臼柱、魔方回ナデ	相	上鉢置	SYR6/6 暗灰		
558	11 区	平汎	基盤壁上層	(8.6)	(9.2)	2.0	1/10以下?	四: 砂利柱、石臼柱 五: 砂利柱、石臼柱、魔方回ナデ	相	上鉢置	7.5YR6/3 黄赤色		
559	11 区	平汎	基盤壁上層	(7.5)	(10.3)	2.2	1/10以下?	四: 砂利柱、石臼柱 五: 砂利柱、石臼柱、魔方回ナデ	相	上鉢置	7.5YR6/3 黄赤色		
560	11 区	平汎	基盤壁上層	(6.3)	(8.2)	1.8	1/10以下?	四: 砂利柱、石臼柱、魔方回ナデ 五: 砂利柱、石臼柱	相	上鉢置	7.5YR8/6 黄赤色		
561	11 区	鷹之丘	基盤壁上層	(12.7)	11.0	1.6	1/5	四: 砂利柱、石臼柱、魔方回ナデ 五: 砂利柱、石臼柱、魔方回ナデ	相	上鉢置	10YR5/5 黄赤色		
562	11 区	平汎	近代造出堤	(13.0)	(11.4)	2.4	1/10以下?	四: 砂利柱、石臼柱 五: 砂利柱、石臼柱、魔方回ナデ	相	底走置	2.5YR5/5 黄赤色		
563	2 区	酒田路	91 基	(13.0)	(2.1)	1/10 以下?	四: 砂利柱、石臼柱 五: 砂利柱、ヘアリズム・チード	相	底走置	2.5YR8/5 黄赤色			
564	3 区	酒田路	234 基南北山	(14.2)	(1.8)	1/10	1/10 以下?	四: 砂利柱、石臼柱、魔方回ナデ 五: 砂利柱、ヘアリズム・チード	相	底走置	SPH6/2 青灰		
565	3 区	酒田路	234 基南北山	(5.3)		1/10 以下?	四: 砂利柱、石臼柱、魔方回ナデ 五: 砂利柱、ヘアリズム・チード	相	底走置	SYR7/1 黄白			
566	3 区	酒田路高井	地形剖面	(6.9)		1/10 以下?	四: 砂利柱、石臼柱 五: 砂利柱、ヘアリズム・チード	相	底走置	NS/8 黄白			
567	3 区	酒田路	236 南立ち込み	(10.0)	(6.0)	1/10 以下?	四: 砂利柱、石臼柱 五: 砂利柱、ヘアリズム・チード	相	底走置	2.5YR6/1 黄褐色	白色付着物あり。		
568	3 区	酒田路	236 南立ち込み	(5.1)		1/10 以下?	四: 砂利柱、石臼柱 五: 砂利柱、ヘアリズム・チード	相	底走置	10B6/6 青灰	茎葉あり。		
569	2 区	酒田路	361 谷	(19.1)	(2.4)	1/5	1/5 以下?	四: 砂利柱、ヘアリズム・チード、回転チード 五: 砂利柱、ヘアリズム・チード	相	底走置	SYR7/1 黄白		
570	4-2 区	酒田路	第 2a 番	(11.6)	(3.3)	1/10	1/10 以下?	四: 砂利柱、石臼柱 五: 砂利柱、ヘアリズム・チード	相	底走置	SYR7/1 黄白		
571	4-2 区	酒田路	第 2a 番	(33.6)	(5.0)	1/10 以下?	四: 砂利柱、石臼柱、利根文化、波瀬文化 五: 砂利柱、ヘアリズム・チード	相	底走置	SPH4/1 浅褐色			
572	2 区	上加瀬路	231 ピート	(14.1)	11.3	1/5	1/5 以下?	四: 砂利柱、石臼柱 五: 砂利柱、ヘアリズム・チード、ハナ	相	底走置	10YR5/3 ない葉類 + 内部に腐葉酸		
573	11 区	上加瀬路	渡渉	(11.2)		1/10 以下?	四: 砂利柱、石臼柱 五: 砂利柱、ヘアリズム・チード、ハナ	相	底走置	SYR7/8 黄褐	底走付近で断面變化。		
574	12 区	1 区	野丸川	古河堤防	(3.3) 種	1/5 以下?	1/5 以下?	四: 砂利柱 五: 砂利柱	相	底走置	SYR6/1 黄褐色		
575	12 区	2 区	野丸川	古河堤防	(3.0) (1.1)	1/5 以下?	1/5 以下?	四: 砂利柱 五: 砂利柱	相	底走置	SYR7/1 黄白	堆積量多く、外見は 緑豊かで黒斑文。	
576	11 区	野丸川	基盤壁上層	(2.0)		1/5 以下?	1/5 以下?	四: 砂利柱 五: 砂利柱	相	上鉢置	SYR6/6 黄赤色		
577	11 区	野丸川	明教寺跡園地	(8.0)		1/4	1/4	四: 砂利柱 五: 砂利柱	相	底走置	10BG6/3 青灰		
578	11 区	野丸川	467 木田	(12.1)		1/5	1/5	四: 砂利柱 五: 砂利柱	相	上鉢置	2.5YR8/6 黄赤色		
579	11 区	平汎	498 上段	(15.4)	(3.7)	1.7	1/5 以下?	四: 砂利柱、石臼柱 五: 砂利柱、魔方回ナデ	相	上鉢置	7.5YR8/6 黄赤色		
580	11 区	平汎	498 上段	(7.6)	(8.2)	1.9	1/10 以下?	四: 砂利柱、石臼柱 五: 砂利柱、魔方回ナデ、粘土層	相	底走置	NT/灰白		
581	11 区	平汎	498 上段	(6.3)	(10.0)	2.2	1/10 以下?	四: 砂利柱、石臼柱 五: 砂利柱、魔方回ナデ、粘土層	相	底走置	7.5YR8/6 黄赤色		
582	11 区	平汎	498 上段	(8.0)	(9.0)	1.8	1/10 以下?	四: 砂利柱、石臼柱 五: 砂利柱、魔方回ナデ、ハナ	相	底走置	7.5YR8/6 黄赤色		
583	11 区	丸山	500 上段	(21.7)	(2.0)	2.0	1/2 以下?	四: 砂利柱 五: 砂利柱	相	底走置	2.5YR8/6 黄赤色		
584	11 区	丸山	500 上段	(0.5)	(4.7)	1.4	1/10 以下?	四: 砂利柱 五: 砂利柱、石臼柱、魔方回ナデ	相	底走置	2.5YR8/6 黄赤色		
585	11 区	丸山	500 上段	(3.6)	26.0	2.1	1/5	四: 砂利柱 五: 砂利柱、石臼柱、魔方回ナデ	相	底走置	2.5YR8/6 黄赤色		
586	黑色 14	11 区	野丸川	瓦屋根廻廊	(17.3) (25.6)	3.0~ 2.0	1/5 以下?	四: 砂利柱 五: 砂利柱	相	上鉢置	SYR7/8 黄	土木工事の邊の邊に瓦屋根廻廊と埋蔵チード、瓦	
587	黑色 14	11 区	野丸川	瓦屋根廻廊	(2.0) (2.5)	3/5~ 3/3	1/5 以下?	四: 砂利柱 五: 砂利柱	相	上鉢置	7.5YR8/6 黄	瓦木 1.33kg、瓦屋 根からセラミック瓦 瓦木の上に瓦屋根廻廊	
588	11 区	土御門	瓦屋根 52 游	(19.7)	(4.3)	1/5	1/5 以下?	四: 砂利柱、ヘアリズム・チード 五: 砂利柱、瓦屋根廻廊	相	底走置	10YR6/2 黄白		
589	11 区	土御門	瓦屋根廻廊等の 瓦屋根	(13.4)	(1.3)	1/10	1/10 以下?	四: 砂利柱 五: 砂利柱	相	底走置	SYR6/6 黄赤色	窓が空みあり。	
590	11 区	土御門	告生川・泥濘	(2.0)		1/10 以下?	四: 砂利柱 五: 砂利柱	相	底走置	SYT7/2 黄白	窓が空みあり。		
591	11 区	从官宿跡	御官宿材	(1.1)		1/5 以下?	1/5 以下?	四: 砂利柱 五: 砂利柱	相	底走置	SYR6/1 浅褐色	土木工事跡	
592	13 区	11 区	門前廻廊	(28.2)	(35.5)	1.6	1/3 以下?	四: 砂利柱、魔方回ナデ 五: 砂利柱、魔方回ナデ	相	底走置	NT/灰	古墳に地盤整形台痕 あり。	
593	11 区	平汎	門前廻廊	(16.0)	(33.0)	1.8	1/5 以下?	四: 砂利柱、魔方回ナデ 五: 砂利柱、魔方回ナデ	相	底走置	NT/灰	古墳に地盤整形台痕 あり。	
594	11 区	平汎	五重の廻廊	(9.5)	(30.0)	2.1	1/10 以下?	四: 砂利柱、魔方回ナデ 五: 砂利柱、魔方回ナデ	相	底走置	NT/灰	古墳に地盤整形台痕 あり。	
595	11 区	平汎	五重の廻廊	(0.2)	(1.0)	1.9	1/10 以下?	四: 砂利柱、魔方回ナデ 五: 砂利柱、魔方回ナデ	相	底走置	10Y6/1 黄	古墳に地盤整形台痕 あり。	
596	11 区	平汎	五重の廻廊	(0.4)	(1.3)	2.7	1/5 以下?	四: 砂利柱、魔方回ナデ 五: 砂利柱、魔方回ナデ、魔方回ナデ	相	底走置	SPH4/1 浅褐色	古墳の低場あり。	
597	11 区	平汎	五重の廻廊	(15.3)	(33.7)	1.9	1/5 以下?	四: 砂利柱、魔方回ナデ 五: 砂利柱、魔方回ナデ	相	底走置	SYR7/3 黄		
598	11 区	平汎	五重の廻廊	(3.9)	20.8	2.3	1/5	四: 砂利柱、魔方回ナデ 五: 砂利柱、魔方回ナデ	相	底走置	SYR6/6 暗灰		
599	11 区	平汎	五重の廻廊	(19.6)	27.9	2.4	1/4	四: 砂利柱、魔方回ナデ 五: 砂利柱、魔方回ナデ	相	底走置	NT/灰		
600	13 区	11 区	御官宿材	(21.3)	28.2	2.1	1/2	四: 砂利柱、魔方回ナデ 五: 砂利柱、魔方回ナデ	相	底走置	SYR6/3 黄	土木工事跡あり。	
601	11 区	平汎	御官宿材	(21.7)	28.3	2.1	1/5	四: 砂利柱、魔方回ナデ 五: 砂利柱、魔方回ナデ	相	底走置	SYT5/3 黄	内面に刷毛付。	
602	12 区	11 区	御官宿材	(41.5)	27.0~30.6	2.6	9/10	四: 砂利柱、魔方回ナデ 五: 砂利柱、魔方回ナデ	相	底走置	NT/灰	土木工事跡あり。	
603	11 区	平汎	石御官宿材	(31.0)	26.5	2.4	2/3	四: 砂利柱 五: 砂利柱	相	底走置	SYR6/4 黄	漆喰芯あり。	
604	11 区	平汎	石御官宿材	(40.9)	34.4~ 17.2	2.5	2/2	四: 砂利柱 五: 砂利柱	相	底走置	2.5YR7/6 黄	内面に刷毛付。	
605	11 区	平汎	石御官宿材	(16.5)	(32.6)	2.5	1/5 以下?	四: 砂利柱、魔方回ナデ 五: 砂利柱、魔方回ナデ	相	底走置	NT/灰	土木工事跡あり。	
606	11 区	丸山	瓦屋根廻廊等の 瓦屋根	(11.3)	(8.2)	1.6	1/10 以下?	四: 砂利柱、魔方回ナデ 五: 砂利柱、魔方回ナデ	相	底走置	NT/灰	窓が空みあり。	
607	11 区	平汎	瓦屋根廻廊等の 瓦屋根	(13.1)	(9.8)	2.2	1/10 以下?	四: 砂利柱、魔方回ナデ 五: 砂利柱	相	底走置	7.5Y7/8 黄白	窓目には織縫模様あり。	



相当番号	実用区分	測量区	測量	地主・通路・地物	口目・井	断面・幅	厚	堆存率	調査	出土	焼成	色合	備考
674	6 口	先主・浴槽	322 潜	(12.6)	29.8	1.8	外・内・摩滅	相	平良	10YR7/3に近い黄褐			
675	6 口	先主・浴槽	322 潜	(7.9)	1.8	1/30以下	内・外・ナダ	相	良	7.5YR7/4に近い褐			
676	2 口	御膳千石脚部	207 潜	(3.5)	1/30以下	外・内・ナダ		相	良	10YR8/2灰白	脚部、 円筒部の剥離あり。		
677	14	行水・浴槽部	208 上坑	(10.8)	1/30以下	内・外・ナダ		相	良	2.5YR8/3灰黄			
678	2 口	上御湯置	205 上坑	(2.2)	1/30以下	外・内・摩滅		相	平良	2.5YR8/2灰黄			
679	2 口	上御湯置	205 上坑	(2.4)	1/30以下	外・内・ナダ		相	良	10YR7/3に近い黄褐	東南張りと柱跡。		
680	2 口	V様式瓦窓	205 上坑	(19.6)	5.2	1/2	外・内・ナダ		相	良	7.5YR8/4灰白		
681	2 口	上御湯置	205 上坑	(18.0)	2.8	1/30以下	内・外・ナダ	相	良	2.5YR8/3灰白	東南張りと柱跡。		
682	2 口	V様式瓦窓	205 上坑	(11.4)	34.6	1/2	外・内・ナダ		相	良	5YR8/6灰暗		
683	2 口	先主・浴槽	172 上坑	(15.5)	1.7	1/30以下	外・内・ナダ		相	平良	5YR8/1灰白		
684	2 口	先主・浴槽	179 ピット	(5.2)	3.9	1/30以下	内・外・ナダ		相	良	10YR8/2灰白	口縁部に付着。	
685	2 口	上御湯置	179 潜御湯	(12.7)	2.6	1/8	外・内・摩滅		相	良	2.5YR8/3灰白		
686	2 口	先主・浴槽	第4-2a 烧	(16.0)	2.7	1/30以下	内・外・ナダ		相	平良	7.5YR8/4灰黃斑	127 潜御湯。	
687	2 口	先主・浴槽	第4-2a 烧	(2.7)	1/30以下	内・外・ナダ			相	平良	5YR8/4灰暗	127 潜御湯。	
688	6 口	先主・浴槽	機械軸駆	(4.0)	1/30以下	内・外・ナダ			相	良	5YR7/4に近い褐		
689	2 口	先主・浴槽	第4-2d 烧	(6.2)	1/30以下	内・外・ナダ			相	良	2.5YR8/2灰黃斑		
690	2 口	先主・浴槽	第4-2d 烧	(17.5)	9.9	3/4	外・内・ハラカナ		相	良	10YR8/2灰白	黒斑あり。	
691	2 口	先主・浴槽	第4-2d 烧	(15.4)	(13.7)	1/4	外・内・ハラカナ		相	良	10YR8/2灰白		
692	14	土壁	第4-2d 烧	5.1	1.4	0.4	1/1					表・裏面に縞模様。	土製品。
693	2 口	土壁	第4-2d 烧	(2.0)	1.2	0.95	1/3	ナダ	相	平良	10YR7/3褐色		
694	7 口	先主・浴槽	479 亂らぬみ	(18.2)	2.2	1/30以下	外・内・ナダ		相	良	10YR8/1灰白		
695	7 口	先主・浴槽	479 亂らぬみ	(2.5)	1/30以下	外・内・ナダ			相	良	N4/灰	外周に黒斑。	
696	7 口	先主・浴槽	479 亂らぬみ	(13.9)	5.1	1/30以下	外・内・ナダ		相	平良	2.5Y7/2灰黃		
697	7 口	先主・浴槽	479 亂らぬみ	(15.6)	3.2	1/30以下	外・内・ナダ		相	平良	10YR8/2灰黃斑		
698	7 口	先主・浴槽裏か	479 亂らぬみ	(18.8)	16.1	1/30以下	内・外・ナダ		相	平良	5YR8/2灰暗		
699	7 口	先主・浴槽	479 亂らぬみ	(2.0)	1/30以下	外・内・ナダ			相	良	5Y7/2灰白		
700	7 口	先主・浴槽裏か	479 亂らぬみ	(1.4)	1/30以下	外・内・横方向ナダ			相	良	2.5Y7/3灰白		
701	7 口	乱れ	479 亂らぬみ	(3.1)	1/30以下	外・内・ナダ			相	良	5YR8/4灰暗		
702	7 口	先主・浴槽	479 亂らぬみ	(15.8)	3.3	1/30以下	外・内・横方向ナダ		相	良	10YR8/1灰白		
703	7 口	先主・浴槽	479 亂らぬみ	(2.0)	1/30以下	外・内・ナダ			相	良	2.5YR8/4灰暗斑		
704	7 口	先主・浴槽	479 亂らぬみ	(1.9)	4/5	外・内・摩滅			相	良	7.5YR8/4灰暗斑		
705	7 口	先主・浴槽	479 亂らぬみ	(2.3)	1/30以下	外・内・ナダ			相	良	10YR8/1灰白		
706	2 口	死王・浴槽	479 亂らぬみ	(2.7)	1/30以下	外・内・摩滅			相	良	10YR8/1に近い黄褐		
707	2 口	死王・浴槽	479 亂らぬみ	(4.6)	1/30以下	外・内・ナダ			相	良	10YR8/1灰白		
708	2 口	跡跡	479 亂らぬみ	(3.1)	2/5以下	外・内・横方向ナダ			相	平良	5Y7/2灰白		
709	2 口	死王・浴槽	479 上坑	(4.4)	1/30以下	外・内・ナダ			相	良	2.5Y7/2灰黃		
710	2 口	死王・浴槽裏か	479 上坑	(16.6)	1.5	1/30以下	外・内・ナダ		相	良	10YR8/2に近い黄褐		
711	7 口	先主・浴槽	479 亂らぬみ	(2.1)	1/30以下	外・内・ナダ			相	良	N5/灰	外周に黒斑。	
712	7 口	先主・浴槽	479 亂らぬみ	(2.0)	1/30以下	外・内・ナダ			相	良	10YR8/2灰黃斑	外周に煤付着。	
713	7 口	先主・浴槽	第4-1a 烧	(13.0)	1.9	1/30以下	外・内・ナダ		相	平良	10YR8/1灰白		
714	2 口	先主・浴槽	第4-1a 烧	(1.7)	1/30以下	外・内・摩滅			相	平良	2.5Y6/3灰黃		
715	2 口	先主・浴槽	第4-1a 烧	(1.7)	1/30以下	外・内・ナダ			相	良	2.5YR8/4灰暗斑		
716	7 口	先主・浴槽	壁面硝化	(3.0)	1/30以下	外・内・ナダ			相	良	2.5Y7/2灰黃		
717	7 口	先主・浴槽	第4-1a 烧	(5.0)	1/30以下	外・内・ナダ			相	良	10YR8/1に近い黄褐	外周に煤付着。	
718	7 口	先主・浴槽	第4-1a 烧	(17.6)	2.9	3/5	外・内・ナダ		相	良	2.5Y7/2灰暗斑		
719	7 口	先主・浴槽	第4-1a 烧	(2.9)	1/30以下	外・内・摩滅			相	良	10YR8/1灰白		
720	7 口	先主・浴槽裏か	第4-1a 烧	(2.1)	1/30以下	外・内・ナダ			相	良	10YR8/1灰白		
721	7 口	負王・浴槽	第4-1a 烧	(3.2)	4/5	外・内・ナダ			相	良	10YR8/3に近い黄褐		
722	7 口	死王・浴槽	第4-1a 烧	(1.9)	1/10以下	外・内・摩滅			相	良	2.5Y7/3灰暗	外周に煤付着。	
723	7 口	死王・浴槽	第4-1a 烧	(1.9)	1/10以下	外・内・ナダ			相	良	10YR8/1に近い黄褐	外周に煤付着。	
724	14	死王・浴槽裏か	484 潜	(5.0)	1/4	外・内・ナダ			相	良	10YR8/1灰白		
725	11 口	死王・浴槽	484 潜	(10.8)	10.1	1/4	外・内・ナダ		相	良	2.5YR8/3に近い黄褐	有孔。	
726	11 口	死王・浴槽	484 潜	(2.3)	1/30以下	外・内・ナダ			相	良	2.5YR8/2灰黃		
727	11 口	死王・浴槽	486 沖洗	(2.9)	1/30以下	外・内・ナダ			相	良	10YR8/4に近い黄褐		
728	11 口	死王・浴槽	485 亂らぬみ	(4.9)	1/30以下	外・内・摩滅			相	平良	5YR8/6暗		
729	11 口	死王・浴槽	第4-2b 烧	(12.9)	3.0	1/5	外・内・横方向ナダ		相	良	10YR8/2灰黃斑	外周に煤付着。	
730	11 口	死王・浴槽	第4-2b 烧	(3.0)	1/30以下	外・内・ナダ			相	良	2.5YR8/4灰暗		
731	11 口	死王・浴槽	第4-2b 烧	(3.0)	1/30以下	外・内・ナダ			相	良	10YR8/1に近い黄褐		
732	11 口	死王・浴槽	第4-2b 烧	(2.0)	1/30以下	外・内・ナダ			相	良	10YR8/2灰白		
733	11 口	死王・浴槽裏か	第4-2b 烧	(2.1)	2.1	1/30以下	外・内・ナダ		相	良	10YR8/4灰暗斑	手筋帯上部の可塑性あり。	
734	1 口	死王・浴槽	47 潜	(16.6)	(4.1)	1/30以下	外・内・ナダ		相	良	2.5Y7/2灰黃		
735	1 口	死王・浴槽	47 潜	(3.4)	1/30以下	外・内・ナダ			相	良	10YR8/2灰黃斑		
736	1 口	剥片	47 潜	4.8	3.3	1.0	1/30以下		相	良	10YR8/4灰暗斑		
737	1 口	死王・浴槽	49 潜	(24.0)	(2.3)	1/30以下	外・内・摩滅		相	平良	10YR8/4灰暗斑		
738	1 口	死王・浴槽	57 潜	(2.8)	1/2	外・内・摩滅			相	良	2.5YR8/3灰白		
739	1 口	死王・浴槽裏か	53 潜	(2.7)	1/30以下	外・内・ナダ			相	良	10YR8/2灰白	施工は死王裏に載る。	
740	1 口	闇文上部跡	54 潜	(2.4)	1/10以下	外・内・摩滅			相	良	10YR8/2灰黃斑		
741	1 口	死王・浴槽	第5a 烧	(7.8)	3/10	外・内・摩滅			相	良	10YR8/1に近い黄褐		
742	3 口	死王・浴槽	第4-2b 烧	(15.0)	(3.0)	1/5	外・内・ナダ		相	良	2.5YR8/4灰暗	口縁部に煤付着。	
743	2 口	死王・浴槽	397 潜	(2.9)	1/30以下	外・内・摩滅			相	良	2.5Y8/2灰黃		
744	2 口	死王・浴槽	395 潜	(6.4)	1/30以下	外・内・ナダ			相	良	2.5Y8/2灰黃斑		
745	2 口	死王・浴槽	397 上坑	(7.0)	1/30以下	外・内・ナダ			相	良	10YR8/1灰白		

報告番号	採取箇所	調査区	種別	生長地・地質	口徑・深	断面・幅	層	保存状況	形態	地土	地成	色色調	備考
746	7 区	拘生上苔群	297 上灰	(9.5)	1/10 以下	A : 植物直接又、或枝又 内 : ナメコテラ	相	良	2.5V8/3 黄黄				
747	7 区	拘生上苔群	297 上灰	(9.5)	1/10 以下	B : ナメコテラ	相	良	10V8/2 黄黄				
748	7 区	拘生上苔群	297 上灰	(16.2)	6.30		1/2		相	良	2.5V8/3 黄灰		
749	7 区	拘生上苔群	396 上灰	(22.4)	8.7		1/2		相	良	10V10/3 に 2.5-黄		
750	7 区	拘生上苔群	第 5a 層	(4.3)	1/10 以下	A : 植物直接又、或枝又 内 : ナメコテラ	相	良	10V8/2 黄灰				
751	7 区	拘生上苔群	第 5a 層	(3.8)	1/10 以下	B : ナメコテラ	相	良	10V8/2 黄白				
752	7 区	拘生上苔群	第 5a 層	(2.8)	1/10 以下	A : ナメコテラ	相	良	2.5V8/4 に 2.5-白				
753	7 区	拘生上苔群	第 5a 層	(4.3)	1/10 以下	B : ナメコテラ	相	良	10V8/2 黄灰				
754	11 区	拘生上苔群	521 深	(2.7)	1/10 以下	A : 植物直接又、或枝又 内 : ナメコテラ	相	良	2.5V8/2 に 2.5-白				
755	1 区	獨立上苔群	59 上灰	(1.9)	1/10 以下	A : 植物直接又、或枝又 内 : ナメコテラ	相	良	10V8/3 黄灰				外側に腐付着。
756	1 区	拘生上苔群	59 上灰	(7.8)	1/10 以下	A : 植物直接又、或枝又 内 : ナメコテラ	相	良	10V8/3 黄灰				内側に腐付着。
757	14	獨立上苔群	60 深	(4.2)	1/10 以下	A : 内 : ナメコ	相	不良	10V8/4 黄灰				外側に腐付着。
758	1 区	獨立上苔群	第 6a 層	(3.3)	1/10 以下	A : ナメコテラ	相	不良	10V8/2 黄灰				
759	1 区	獨立上苔群	第 6a 層	(2.8)	1/10 以下	A : ナメコテラ	相	不良	2.5V8/2 黄灰				外側に腐付着。
760	1 区	獨立上苔群	第 6a 層	(2.5)	1/10 以下	A : ナメコテラ	相	不良	2.5V8/1 黄白				
761	1 区	獨立上苔群	第 6a 层	(2.4)	1/10 以下	A : ナメコテラ	相	良	2.5V8/3 黄灰				
762	1 区	獨立上苔群	第 6a 层	(1.6)	1/10 以下	A : ナメコテラ	相	不良	3V3/1 4 リーフ黒				
763	1 区	拘生上苔群	第 6a 层	(1.2)	1/10 以下	A : ナメコテラ	相	良	N4/1 黑				
764	1 区	拘生上苔群	第 6a 层	(15.9)	3.5	1/10 以下	A : ナメコテラ	相	良	10V8/2 黄灰			
765	1 区	拘生上苔群	第 6a 层	(15.2)	1.89	1/10 以下	A : 内 : ナメコテラ	相	良	2.5V7/3 黄白			
766	1 区	石	第 6a 层	(2.3)	1.89	0.4	9/10	無葉				表 3.1.3 表 ナメコテラ	
767	2 区	獨立上苔群	第 6a 层	(3.0)	1/10 以下	A : 内 : 植物向ナメコテラ	相	良	2.5V7/1 黄白				
768	2 区	獨立上苔群	第 6a 层	(5.8)	1/10 以下	A : 内 : ナメコテラ	相	不良	10V8/2 黄灰				
769	2 区	獨立上苔群	第 6a 层	(6.2)	1/10 以下	A : 内 : ナメコテラ	相	不良	2.5V5/3 黄灰				外側に腐付着。
770	2 区	獨立上苔群	第 6a 层	(2.5)	1/10 以下	A : ナメコテラ	相	良	N3/1 單葉				
771	2 区	獨立上苔群	第 6a 层	(4.8)	1/10 以下	A : ナメコテラ	相	良	N3/1 單葉				
772	2 区	獨立上苔群	第 6a 层	(5.0)	1/10 以下	A : ナメコテラ	相	良	10V8/4 黄灰				
773	14	獨立上苔群	第 6a 层	(26.8)	0.7	1/10 以下	A : ナメコテラ	相	良	2.5V8/3 黄白			外側に腐付着。
774	2 区	[独立] 植 [獨立] 植	第 6a 层	(3.1)	1/10 以下	A : ナメコテラ	相	良	10V8/3 黄白				
775	14	獨立上苔群	第 6a 层	(9.6)	1/10 以下	A : ナメコテラ	相	良	10V7/0 に 2.5-黄				
776	4 区	獨立上苔群	第 6a 层	(2.6)	1/10 以下	A : ナメコテラ	相	不良	10V8/3 黄灰				
777	4 区	獨立上苔群	第 6a 层	(4.3)	1/10 以下	A : ナメコテラ	相	良	10V6/1 黑				
778	4 区	獨立上苔群	第 6a 层	(2.8)	1/10 以下	A : 内 : 植物向ナメコテラ	相	不良	2.5V8/2 黄白				
779	4 区	獨立上苔群	第 6a 层	(7.6)	1/10 以下	A : ナメコテラ	相	良	2.5V8/1 黄灰				
780	4 区	獨立上苔群	第 6a 层	(3.6)	1/10 以下	A : ナメコテラ	相	良	10V8/1 黑				
781	7 区	拘生上苔群	第 6a 层	(20.8)	3.6	1/10 以下	A : 内 : ナメコテラ	相	良	2.5V8/2 黄白			
782	7 区	拘生上苔群	第 6a 层	(5.7)	1/10 以下	A : 内 : ナメコテラ	相	良	10V8/2 黄白				
783	14	獨立上苔群	第 6a 层	(49.4)	(28.7)	1/2			外 : ナメコテラ	相	良	2.5V7/3 黄白	
784	7 区	拘生上苔群	388 深	(7.8)	1/10 以下	A : ナメコテラ	相	良	10V8/3 黄白				外側に腐付着。
785	8 区	拘生上苔群	第 6a 层	(3.2)	1/10 以下	A : ナメコテラ	相	良	10V8/2 黄白				
786	8 区	獨立上苔群	第 6a 层	(3.2)	1/10 以下	A : ナメコテラ	相	良	10V8/3 黄白				
787	7 区	獨立上苔群	464 百地形	(2.1)	1/2				外 : ナメコテラ	相	良	2.5V8/4 に 2.5-白	
788	7 区	獨立上苔群	464 百地形	(2.5)	1/10 以下	A : ナメコテラ	相	良	10V8/2 黄白				深入資料公司總社表 示。
789	7 区	獨立上苔群	464 百地形	(3.0)	1/10 以下	A : 細胞壁のある菌類(菌絲體又)、植物	相	良	10V8/2 黄白				
790	14	獨立上苔群	464 百地形	(22.4)	8.2	1/10 以下	A : ナメコテラ	相	良	10V8/2 黄白			
791	14	2 DC	獨立上苔群	(3.8)	1/10 以下	A : ナメコテラ	相	不良	2.5V8/8 黄白相				表 1.1.2 表 ナメコテラ

# 写 真 図 版



調査前全景（北東から）





1. 2区 167 池泉第1面検出状況（北西から）



2. 2区 167 池泉第1面検出状況（南西から）

原色図版2 遺構



1. 2区 167 池泉検出状況（南東から）



5. 2区 167 池泉の段断面（南東から）



2. 2区 167 池泉第2面直上砂礫堆積状況（北西から）



6. 2区 167 池泉湧水地点検出状況（南東から）



3. 2区 167 池泉土留め用の板材検出状況（南から）



7. 2区 167 池泉湧水地点検出状況（南東から）



4. 2区 167 池泉土留め用の板材検出状況（南西から）



8. 2区 167 池泉湧水地点断面（南西から）



1.2区 190 土坑検出状況（北東から）



2.2区 167 池泉第2面検出状況（北から）



1.2区 167 池泉第2面検出状況（南東から）



1.2区 167 池泉 260 土坑検出状況（南西から）



5.2区 167 池泉断面（南東から）



2.2区 167 池泉第2面石垣検出状況（南西から）



6.2区 167 池泉底面検出状況（南西から）



3.2区 167 池泉第2面石垣断面（北東から）



7.2区 167 池泉断面（南西から）



4.2区 167 池泉断面（南東から）



8.2区 167 池泉完掘状況（南西から）

原色図版6 遺構



1. 11区498～500 土坑検出状況（南東から）



2. 11区498～500 土坑検出状況（南から）



1. 11区498 土坑断面（南から）



3. 11区498～500 土坑検出状況（南西から）



2. 11区500 土坑断面（南から）



4. 11区51 トレンチ断面（南東から）



5. 11区469 溝検出状況（南から）

原色図版8 遺構



1. 11区第1号窯第1面検出状況（南西から）



2. 11区第1号窯断面（西から）



4. 11区軒丸瓦出土状況（南西から）



3. 11区522溝断面（西から）



5. 11区522溝断面（北東から）



1. 11区第1号窯断面（西から）



2. 11区第1号窯断面（南から）



3. 11区第1号窯断面（東から）



4. 11区第1号窯530土坑周辺検出状況（南から）



5. 11区第1号窯前庭部土坑断面（西から）

原色図版 10 遺構



1. 11区第1号窯燃焼部検出状況（南から）



5. 11区第1号窯左袖検出状況（南西から）



2. 11区第1号窯燃焼部検出状況（南西から）



6. 11区第1号窯左袖軒平瓦検出状況（南から）



3. 11区第1号窯前庭部土坑検出状況（北東から）



7. 11区第1号窯左袖断面（南から）



4. 11区第1号窯右袖断面（南西から）



8. 11区第1号窯焚口床面断面（南から）



1. 11区第1号窯第3面検出状況（南から）



2. 11区第1号窯第3面焚口検出状況（南西から）



4. 11区第1号窯燃焼部奥壁検出状況（南から）



3. 11区第1号窯燃焼部右侧壁検出状況（東から）



5. 11区第1号窯燃焼部右侧壁検出状況（西から）

原色図版 12 遺構



1. 11区第1号窯第4面焚口検出状況（西から）



3. 11区第1号窯 544 土坑直上の泥層断面（南西から）



2. 11区第1号窯焚口 544 土坑検出状況（南西から）



4. 11区第1号窯 550 石検出状況（南から）



5. 11区第1号窯第4面検出状況（南から）



1. 11区焚口周辺第4面検出状況（東から）



5. 11区第1号窯整地層断面（南から）



2. 544土坑断面（南西から）



6. 11区焚口・焼成室完掘状況（南東から）



3. 11区燃焼部断面（南から）



7. 11区第1号窯第5面（南から）



4. 11区燃焼部奥壁断面（西から）



8. 11区第1号窯基盤層断面（南西から）



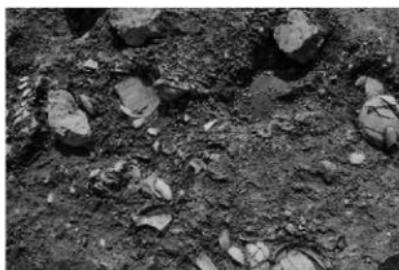
586



587



1.2区第3-1 b面検出状況（南東から）



2.2区211平坦面遺物出土状況（南西から）



4.2区150溝他検出状況（北から）



3.2区211平坦面遺物出土状況（南西から）



5.3区271土坑検出状況（南西から）

図版2 遺構



1.2区 131 井戸検出状況（北西から）



4.2区 132 井戸検出状況（西から）



2.2区 131 井戸断面（西から）



5.2区 132 井戸検出状況（西から）



6.2区 132 井戸底部検出状況（南西から）

図版3 遺構



1.2区掘立柱建物1検出状況（北東から）



4.7区446落ち込み検出状況（南東から）



2.7区453溝検出状況（南から）



5.7区446落ち込み検出状況（南西から）



3.8区357井戸断面（南東から）



6.7区446落ち込み遺物出土状況（北東から）



7.7区第3-2a面水田検出状況（北東から）

図版4 遺構



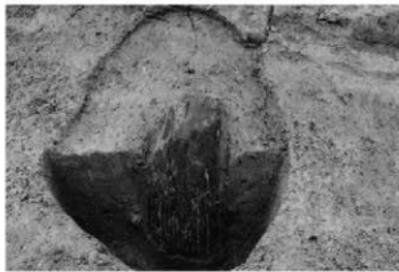
1. 2区 241 土坑検出状況（北西から）



2. 2区掘立柱建物 3 棚出状況（北西から）



4. 2区 242 土坑他検出状況（北東から）



3. 2区 187 柱穴断面（南から）



5. 2区 242・259 土坑検出状況（南西から）

図版5 遺構



1. 1区第4-1a面畦畔検出状況（南から）



5. 4区 303 高まり検出状況（南東から）



2. 3区第4-1a面畦畔検出状況（南西から）



6. 4区 307 流路断面（南西から）



3. 4区 295 流路検出状況（南西から）



7. 5区第4-1a面水田検出状況（南西から）



4. 4区 295 流路検出状況（南西から）



8. 10区 412 溝検出状況（南西から）

図版6 遺構



1. 2区 127 溝検出状況（北東から）



2. 6区 322 溝検出状況（北東から）



4. 6区 164 土坑遺物出土状況（南東から）



3. 6区 311 溝検出状況（南西から）



5. 7区 474 土坑他検出状況（南西から）



1.5区第5a面畦畔検出状況（北西から）



5.8区第5a面水田検出状況（東から）



2.5区第5a面全景（南西から）



6.1区44溝検出状況（東から）



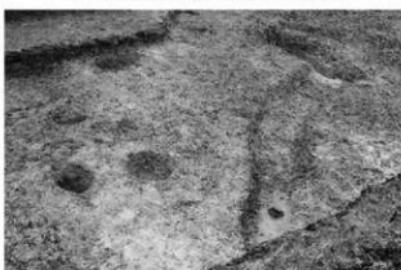
3.4区第5a面水田検出状況（南東から）



7.11区第5b面検出状況（北西から）



4.8区第5a面水田検出状況（北から）



8.7区第5b面検出状況（北西から）

図版8 遺構



1.1区 59 土坑検出状況（南から）



5.11区 51 トレンチ断面（南東から）



2.1区 60 溝検出状況（北から）



6.1区 71 土坑断面（北西から）



3.2区第6a面検出状況（北東から）



7.1区 71 土坑完掘状況（南西から）

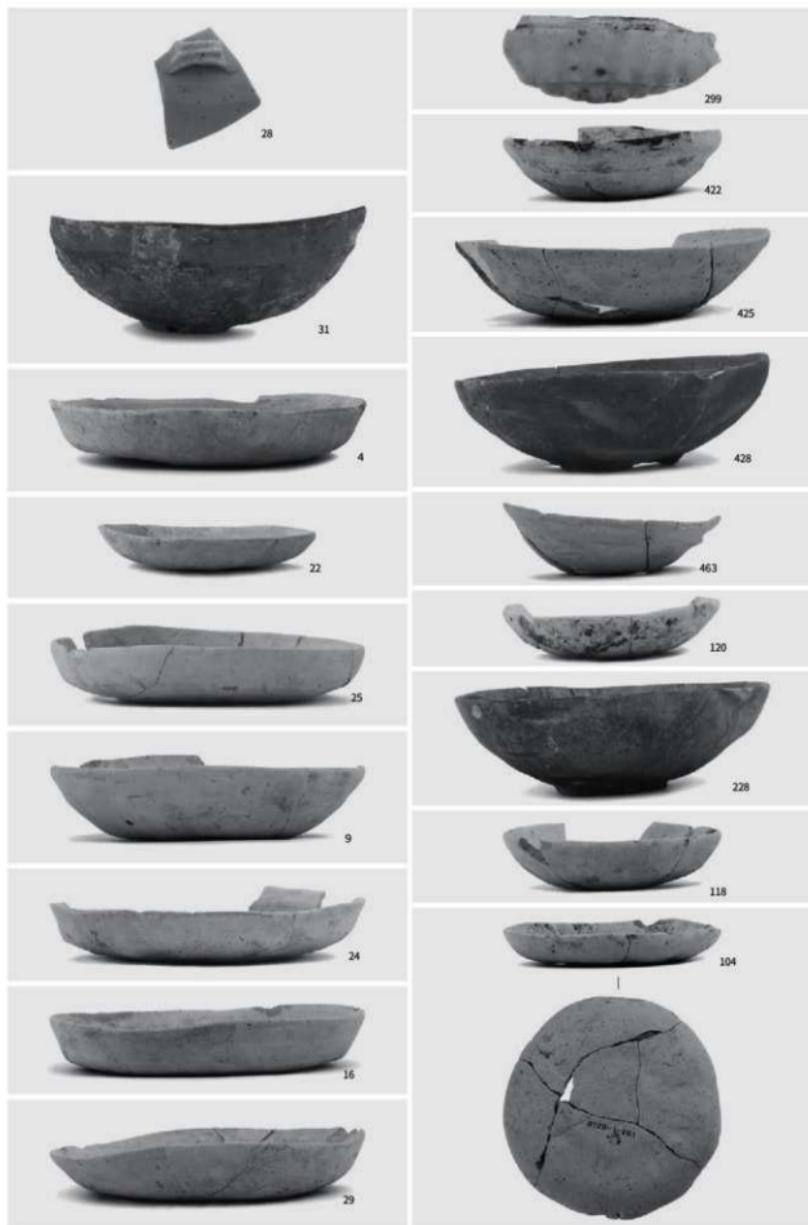


4.2区第6a面遺物出土状況（真上から）

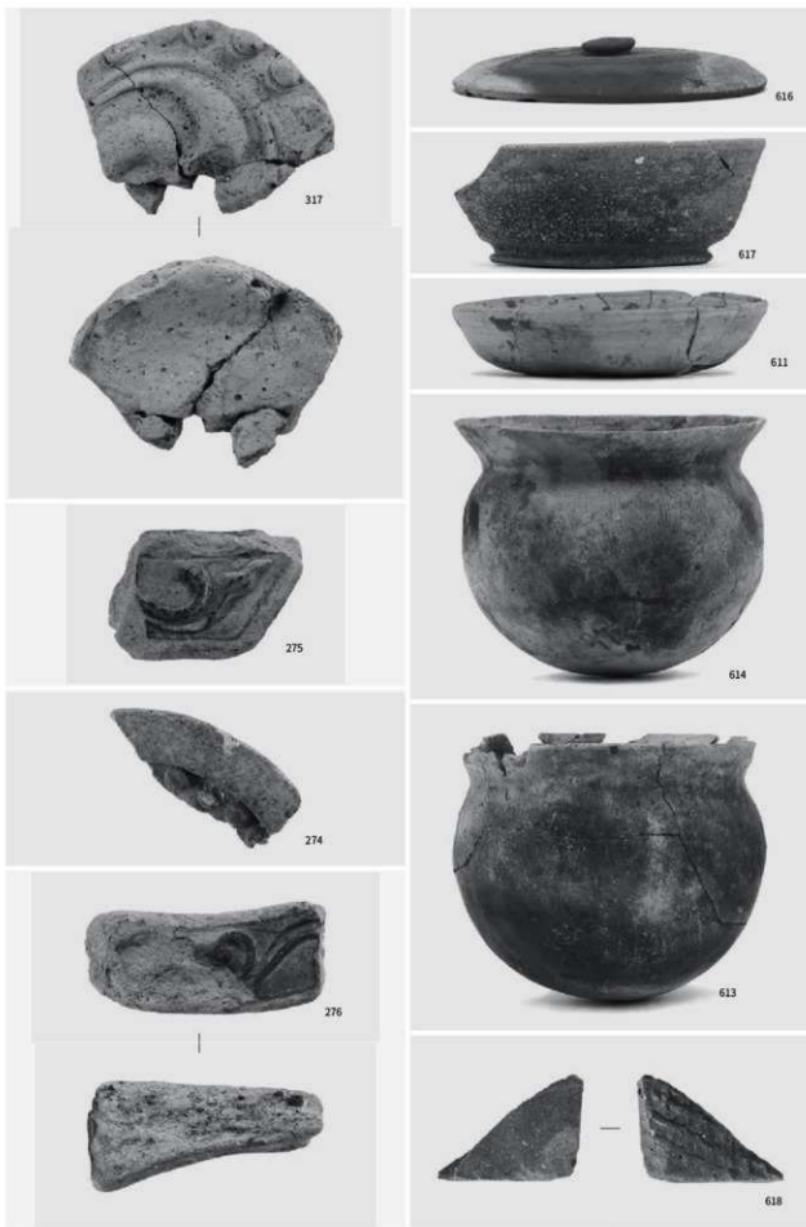


8.7区 464 谷地形検出状況（北西から）

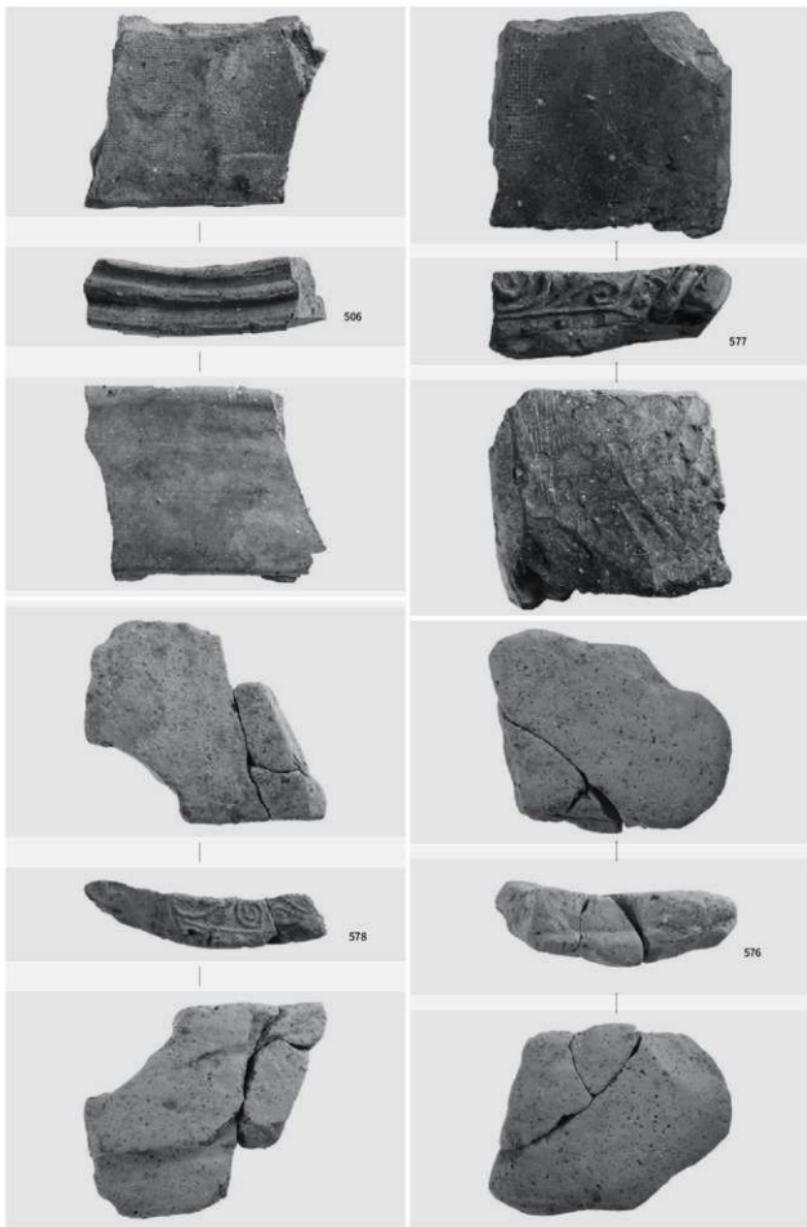
図版9 遺物



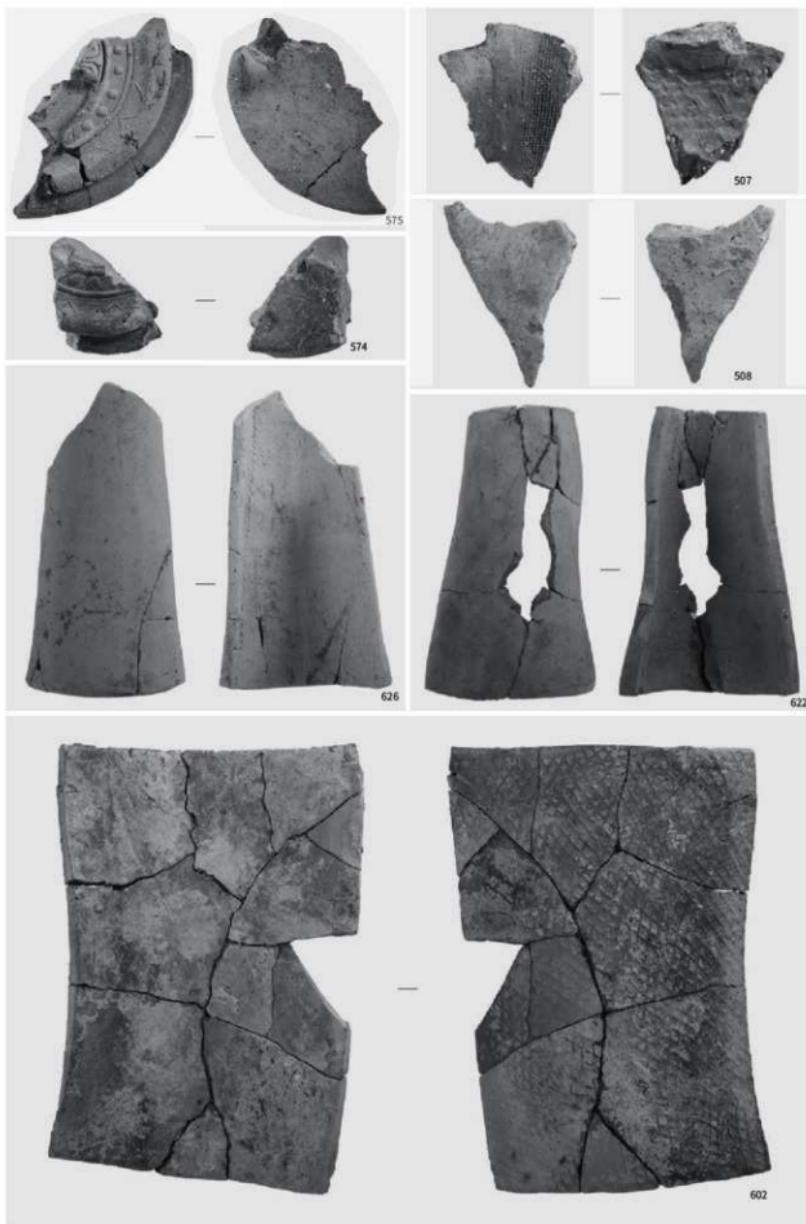
図版10 遺物



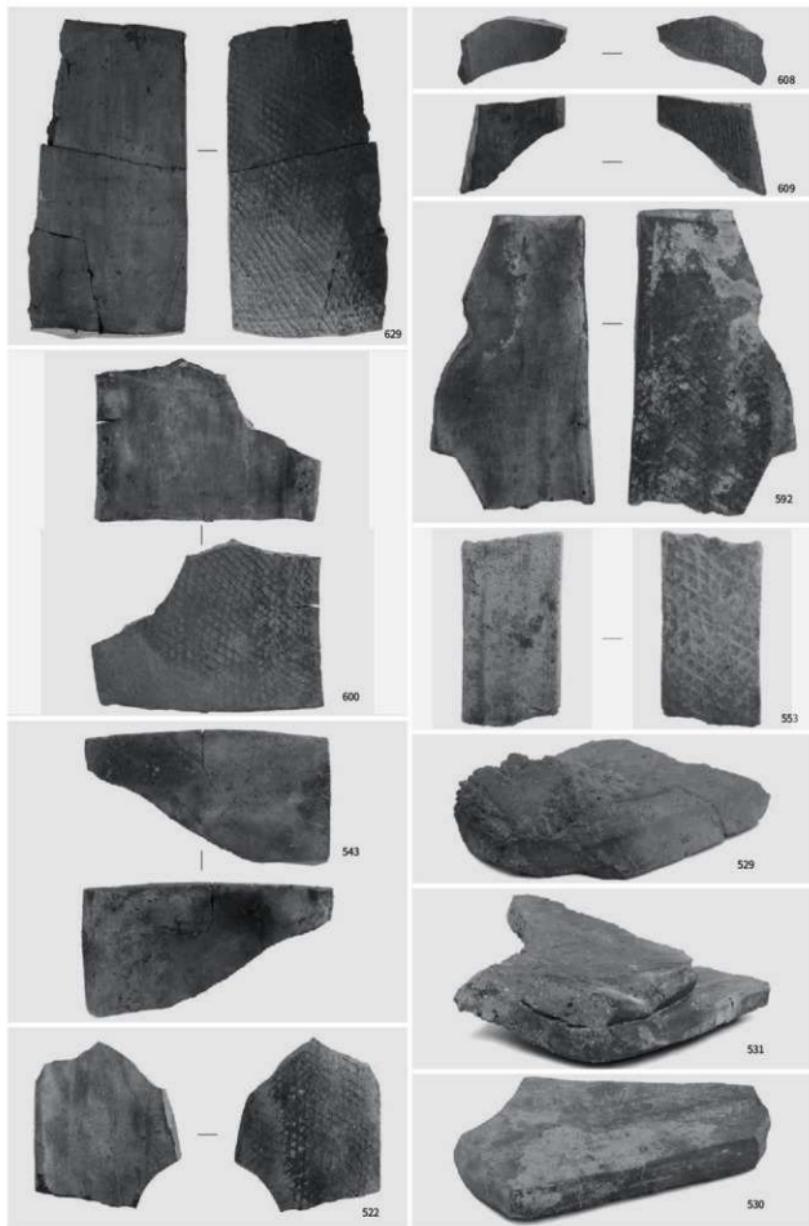
图版 11 遗物



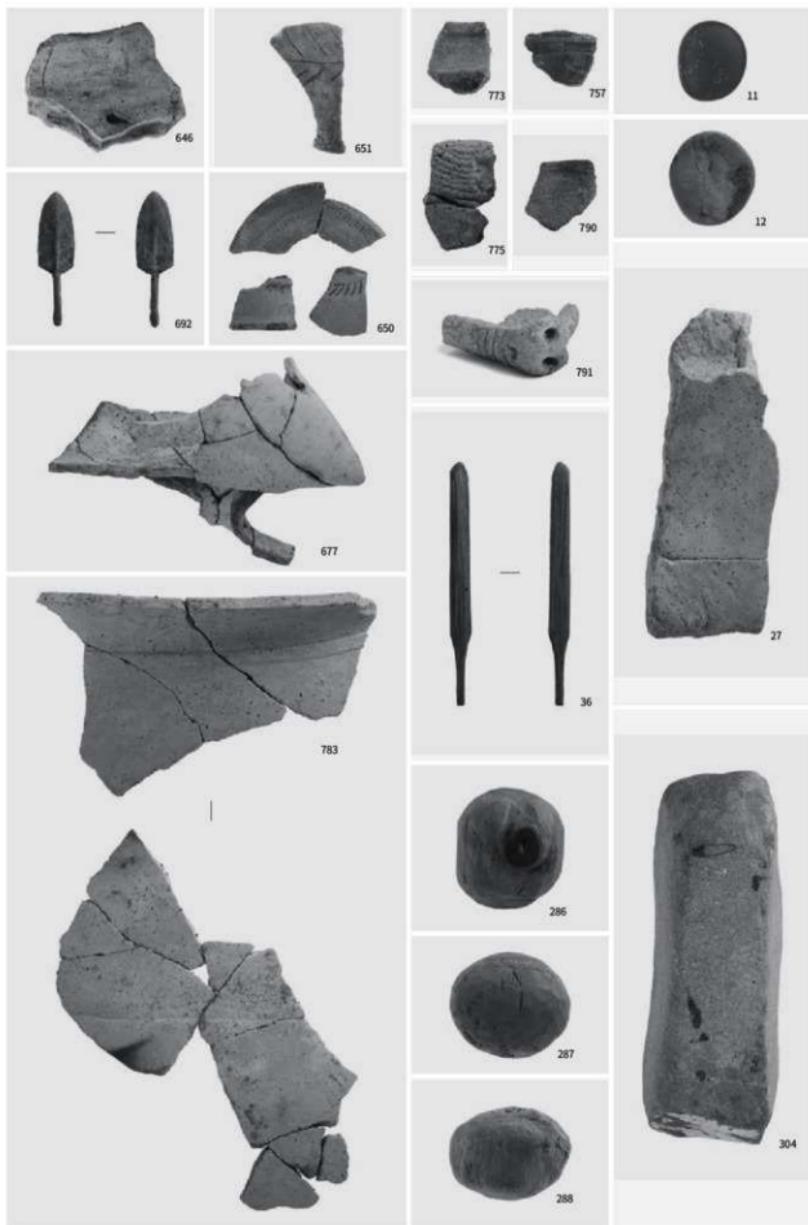
図版 12 遺物



圖版 13 遺物



図版14 遺物



## 報 告 書 抄 錄

ふりがな	おやまいせき・ごしょがいけがようせき					
書名	尾山遺跡・御所池瓦窯跡					
副書名	北部大阪都市計画事業 J R島本駅西土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書					
シリーズ名	島本町文化財調査報告書					
シリーズ番号	第43集					
シリーズ名	公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書					
シリーズ番号	第316集					
編著者名	後川恵太郎(編)					
編集機関	公益財団法人 大阪府文化財センター					
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 TEL072-299-8791					
発行機関	島本町教育委員会					
所在地	〒618-8570 大阪府三島郡島本町桜井二丁目1番1号 TEL075-961-5151					
発行機関	公益財団法人 大阪府文化財センター					
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 TEL072-299-8791					
発行年月日	2022年(令和4年)5月31日					
所収遺跡名	所在地	コード		緯度・経度	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>
	市町村	遺跡番号				調査原因
尾山遺跡・ 御所池瓦窯跡	三島郡島本町桜井 2・3丁目	27301	28	北緯 37°07'11" 東経 136°20'57"	2020.06.01 ~ 2021.04.16	7535 m <sup>2</sup> 土地区画整理事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項
尾山遺跡・ 御所池瓦窯跡	集落・ 生産	中世	池泉・井戸・土坑・ピット・水田	土師器・須恵器・陶磁器・瓦・金属製品	池泉	
	集落・ 生産	古代	瓦窯・井戸・土坑	土師器・須恵器・瓦	古代の瓦窯	
	集落・ 生産	弥生時代後期～古墳 時代前期	水田・土坑・ピット	土師器・弥生土器・石製品・金属製品	小区画水田	
	集落・ 生産	弥生時代中期	水田・土坑・ピット	弥生土器	小区画水田	
	集落	縄文時代後期～ 弥生時代前期	溝	縄文土器・弥生土器・石器		
	集落	縄文時代後期	土坑・ピット	縄文土器		
要約	縄文時代後期から中世の複合遺跡。中世の池泉は庭園遺構ないし儀礼の場と考えられ、景石を池泉内に据える。古代の瓦窯は飛鳥時代後期から奈良時代前期にかけて採業する。入唐僧の道昭が開基した飛鳥寺東南禪院。飛鳥寺東南禪院に瓦を供給した飛鳥池瓦窯、撫津桜原寺跡に瓦を供給した蛭原瓦窯と同范の複弁蓮華文軒丸瓦が出土している。					

島本町文化財調査報告書 第43集  
公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第316集

## 尾山遺跡・御所池瓦窯跡

JR島本駅西土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 2022年5月31日

編 集 公益財団法人 大阪府文化財センター

発 行 島本町教育委員会

大阪府三島郡島本町桜井二丁目1番1号

公益財団法人 大阪府文化財センター

大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号

印刷・製本 アインズ株式会社

大阪市中央区久太郎町2-5-31